
ンフィニット・ストラトス 黒き聖騎士の物語(ブラック・パラディンズ・ストーリー)

暁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフィニット・ストラトス

黒き聖騎士の物語
ブラック・バレイインズ・ストーリー

【Nコード】

N3531Y

【作者名】

暁

【あらすじ】

二体の騎士 インフィニット・ストラトスがこの世に姿を現わしてから数年後、偶然ISを駆る事となった少年、織斑一夏は、IS学園のとある教師、金寺龍輔と出会う。白の少年と黒き青年。相反する二人が出会ったとき、彼らを取り巻く世界が動き始める。

その先にあるのは、光か、闇か、それとも混沌か。
【白式】と【黒き聖騎士^{ブラック・パラディン}】が、その行方を問う。

0・騎士の覚醒（アウェイニング）（前書き）

始めまして。暁です。

自身初投稿です。

まだなれない部分も多いですが、書き続けて行きたいと思います。

まず序章。

物語の動き始めた時。

0・騎士の覚醒（アウェイニング）

世界というのは、常に止まらず動き続けているものである。

そして人の運命も、絶えず動き続けている。

そしてそれは、時に遅く、時に急激である。

数年前、全世界の弾道ミサイル発射装置がハッキングされ、制御不能となったそれらが日本へ向かっていた。

その数、およそ2000。 と思われていた。

後に判明した事 各国政府の元で嚴重に隠蔽された
だが、実際に日本へ向かったミサイルは、そのうちの約68パーセントだった。

そして残りの32パーセントは、あるうことが、EU圏内の複数の市町村へ向かっていた。

都市部に近いヨーロッパのとある田舎町。

その日、まだ幼い少女は逃げていた。

少女だけではない。その華奢な腕を掴んでいる母親も、その町の全員も逃げていた。

何故か？

生き延びるためだ。

…最も、少女は母親のされるがままになっているだけなのだが。

町ではひっきりなしにサイレンが響き、後にくるであろう危機を知らせている。

少女は、母親に華奢な腕を掴まれつつ、分けもわからないまま同じように全力で逃げていた。

「ミサイルだ！！」

不意に誰かが叫んだ声に、その場に居合わせた全員が空を見上げる。

みさいる？

なんだろう、それ？

少女にはわからなかった。

自分の目に映っている空に見える無数の黒い点が、人々の命を奪い、人々が作り上げてきたものをいとも簡単に壊す兵器である事を。

「！！」

自分の名を母親が叫ぶ。

阿鼻叫喚。

人々はパニックに陥り、そこは地獄絵図ともいえる光景となる。

やがて、その黒い点が徐々に近づいてくる。

それを思わずぼけつと眺めてしまう少女。

母親が、自分の娘である少女を抱きしめる。

そして、その黒い点は炸裂した。

彼女等のはるか上空で。

それも、突如飛来した光線によって。

「…え？」

ミサイルが自分たちの近くで炸裂すると思い、自分の娘をきつく抱きしめていた母親は、思わず間抜けな声を出してしまった。

彼女だけではない。

自分たちへの脅威が一時消え去った事に驚きを隠せず、町の住民からは困惑の声が出る。

上空では、どこから飛来する薄いピンク色の光線が、的確にミサイルを打ち抜いていた。

それはミサイルだけでなく、そのミサイルを投下した戦闘機も的確に打ち抜き、爆炎と煙に変える。

一分もしない間に、町の住民に迫っていた脅威は全て消え去る。

そして、それは現れた。

一見すると、それはヒトガタに見える。

だが、確かにそうだ。そのシルエットは紛れも無く人間。まるで、人が何かのパワードスーツを着ているようだった。

そして、その背中から両肩に配置されている、特徴的な翼状のラスターのようなもの。

そこから放出されている淡い白銀の光子が、少女にとって印象に残った。

「きれい…」

思わずそんな声が出る。

それは町の住民たちも同じようで、次々と感嘆の声を漏らしていた。

暫くしないうちにその場に停滞していたヒトガタは飛び去り、都市部の方へと向かっていった。

「き…救世主だ…」

誰かが、そんな声を出す。

「あれは…あの聖騎士は…我々の救世主だ…!!」

パラディン

そして、大歓声。

届かないであろう事は承知している。だがそれでも、住民たちは自分たちを救った「救世主」という名の聖騎士パラディンに対する賞賛だった。

その中で、少女は呟く。

「わたしもああんりたいなあ……」

誰かのために戦う救世主。

このとき少女は、先ほど現れた聖騎士パラディンに対して微かな憧れを抱いた。

「そうね……」

自分の娘を後ろから軽く抱きしめ、母親は言う。

「もし……あなたが人の……誰かのために行動したいと思えば……きっと……」

少女の視線は、いつまでも聖騎士パラディンが飛び去った方向へ向いていた。

2017年5月24日。

後に「白騎士事件」と呼ばれるようになる日本近海での一件。

第二次北欧戦争終戦。

二体の騎士は、世界の運命を加速させる事となる。

0・騎士の覚醒（アウェイニング）（後書き）

明確な年月、月日を設定してしまいました。
不評ならば少し考えます。なにぶんこつこつ細かい設定にこだわってしまふ性質なので…

聖騎士に助けられた一人の少女とは誰か？
ヒントは、欧州です。
ここまで言えば大体分かりますと思いますけど。

指摘、感想お願いします。

世界観設定・用語集（前書き）

ここでは、世界観等の設定紹介をしたいと思います。

世界観設定・用語集

世界観設定

- ・西暦2025年。
- ・再生可能エネルギー、電気自動車などが完全に普及、量子コンピュータ、ゴツタルドベーストンネル、リニアモーターカーの完全実現、宇宙旅行が本格的に始まるなど、科学技術の発展が著しい。
- ・地球温暖化、森林破壊などの環境問題深刻化を食い止めるため、全世界が一丸となってその問題に取り組んでいる。
- ・時を同じくして世界各国で軍事開発が目覚ましい発展を遂げており、それ故第二次冷戦状態になりつつある。ちなみに、核兵器及び原子力エネルギーは全て封印されている。
- ・ISが登場して以降、軍隊の重役にはISを操縦できるという事で女性が優遇される傾向となり、それに乘じて女性優位を掲げる政党が増えている。一部では女尊男卑を唱える者もあり、それらに関する男女差別が社会問題となっている。
- ・ISは表面上、スポーツ用のパワースーツ及び宇宙服となっているが、現存するISの六割が軍事転用されている。女性優位の風潮は、軍内では当たり前で、一部の社会にも浸透しかけている。

インフィニット・ストラトス

- ・宇宙空間での活動を想定し、開発されたマルチフォーム・スーツ。開発当初は注目されなかったが、「白騎士事件」に加えて北歐戦争を強引に終了させた事もあり、従来の兵器を凌駕する圧倒的な性能が世界中に知れ渡り、宇宙進出を兼ねて飛行パワード・スーツとして軍事転用が始まり、各国の抑止力の要がISに移っていった。
- ・開発者は宇宙進出を第一にして造ったのだが、それは一向に進ま

ず開発者が第一に危惧していた軍事転用が主になってしまおうという、皮肉な事態となっている。

・ ISは核となるコア（正式名称インフィニティ・コア。）と、特殊カーボンによって形成される腕や脚などの部分的な装甲であるISAーマーから形成されている。

・ コアが最終的に埋め込まれる場所は機体によって違う。場所によってコアエネルギーの伝達力が変わる事は特別な細工を施さない限り無い。

・ コアによって各装甲に伝達されたエネルギーによって、絶対防御とシールドバリアが構成される。

・ 初期設定と最適化処理を終えて、特定の人物の専用機となったISのコアは、実質的にその人物の肉体と一体化する。

・ 武装を量子化させて保存できる特殊なデータ領域がある。更に、量子コンピュータの搭載に成功している。機体のOSなどのシステムは、この量子コンピュータによって構築される。

・ 搭乗者の戦闘経験蓄積や、精神の成長などの要素が絡む事で、それにコアが反応して形状や性能を大きく変える形態移行が行われる。

・ 現在、全世界に467のコアが存在し、ISそのものは464機が存在（封印された白騎士を含めて）。

パッシブ・イナーシャル・キャンセラ―

・ 通称PIC。日本語表記は「受動的な慣性制御装置」。シールドバリアによって発生する空間干渉システム。これを量子コンピュータで制御する事で、浮遊・加減速などを行うことができる。

ハイパーセンサー

・ ISに搭載されている量子コンピュータによって構成される高性能センサー。

シールドバリア・絶対防衛

- ・全てのISに備わっている特殊防衛能力。
- ・コアから各装甲に伝達されたエネルギーを強固な膜として展開し、あらゆる衝撃などを緩和する特殊システム。

北欧戦争

- ・2017年5月23日に開戦したイギリス・スペイン側陣営対ドイツ・フランス側陣営による大規模になると思われた戦争。

IS操縦者育成特殊国立高等学校

- ・アラスカ協定に基づいて日本に設置された通称、IS学園。2019年10月10日創立。
- ・所在地は、日本の神奈川県藤沢市沿岸部に設立された人工島。
- ・学科は、普通科（一学年）、操縦科、整備科、宇宙専攻科（二、三年）がある。学年は一クラス30人で4クラス。一学年全体120人、二学年は全体で119人、三学年は全体で125人。2025年4月6日現在、生徒総数364人。通常の高等学校の平均と比べると、やや少ない。これは学園が所持しているISの数（50機の訓練機が存在）に関係している。
- ・生徒総数364人の内、363人が女子。男子は織斑一夏一人となっている。当初は男女共学だったものの、元からISに関わろうとする男子も少なく、初期に入学した男子も全員中退したため、実質的な女子高となっていた。ゆえに、洗面所などの施設の七割は女性用のものとなっている

・校舎以外の主な施設に、訓練・試合用のアリーナが第一から第六まであり、二人一部屋の学生寮、大食堂、大浴場、ウェイトルーム

などがある。

・学園の土地はあらゆる国家機関に属さず、いかなる国家や組織であるかと学園の関係者に対して一切の干渉許されないという国際規約が存在し、それ故新技術の稼動試験などに適している。

・制服は白を基調とした特殊なデザインになっている。個人のカスタムが自由で、上着のスタイルから下履きまで生徒の個が現れる。

胸元のリボン（女子のみ）の色は学年ごとに違い、一年は青、二年は黄、三年は赤となっている。

・職員は、幾度にわたる面接や試験を経て決められる。IS学園の教師である以上、その選考は極めて厳重。

倉持技研

・山梨県甲府市の山間にある、日本最大のIS開発社。世界シェアは第一位。

・【打鉄】、【白式】などがここで開発された。IS学園卒業生の最も多い就職先である。

・社名の由来は社長の苗字に由来する。

バッキンガム・ファクトリー

・イギリス国最大手のIS開発社。一年前に国内の二強であったウエルズ・ファクトリーとリヴァプールが合併した企業。世界シェアは第四位。

・名の由来は、新しく作られたファクトリーがバッキンガム宮殿の近くであることから。

世界観設定・用語集（後書き）

物語が進み次第、随時更新して行きたいと思います。

世界観やISの設定ですが、原作を軸に足りなかったり大雑把なところを更に付け足したりしてみた結果です。
色々めちゃくちゃに見えるかもしれませんが、自分なりに考えた結果です。

ちなみに、何故IS学園の所在地に神奈川県藤沢市を選んだかというところ、沿岸部にあるというところ、首都・東京からのアクセスなどを考慮した結果です。

東京湾沿いにあるのはいくらなんでもおかしいですね。

ずっと「IS学園ってどこにあるんだろう?」と黙っていて、この二次創作を書く際に、

「どうせだから自分で決めちゃえ!」

はい単純ですな俺。

そんな自分が嫌になります。

でも、こういうところまでこだわりなくなる性分なんです。お許しを。

こういうのが嫌いな人、拒絶したい人には、まことに申し訳ございません。

既存のコアの数を踏まえると全世界に存在するISの数がおかしいですが、それにはしっかり理由があります。

後に作中に出てくる単語で「これなんだ？」というのがありましたら感想を経て聞いてください。
確認次第載せていきます。

何か指摘があればお願いします。

ISデータベース（前書き）

ここでは、本作品に登場する主なISについて記述していきます。原作とほとんど変わらないものから一部変更されたものまで、色々です。

現在、最新話までに記述したISのデータを全て掲載しています。ネタバレの要素も含まみますので、その点を踏まえたくうえで閲覧お願いします。

ISデータベース

第一世代型

- ・その全てが試作型、所謂プロトタイプである。
- ・初期に作られた二機は性能が桁外れのものとなってしまうため、現行の機体と基本性能を比較するのは邪道である。

【白騎士シロキリ】

- ・待機形態：???????
 - ・搭乗者：?????
 - ・コア搭載位置：???????????
- 日本製第一世代試作型。

【黒ブラック聖騎士パラディン】

- ・待機形態：???????
 - ・搭乗者：?????
 - ・コア搭載位置：???????????
- 日本製第一世代試作型。

【暮桜トクサキ】

- ・待機形態：不明
- ・搭乗者：織斑千冬
- ・コア搭載位置：右腕装甲内に一基

日本製第一世代型。白兵戦のみを想定された超特化型である。前述したとおり近接格闘戦に特化しており、機動力も通常のもの

とは桁外れ。

それゆえか、防御面はさほど優秀でなく、燃費も良くない。一撃必殺に特化した機体の先駆けである。

名前の由来は不明だが、「夕暮れに舞う桜の花びら」のように相手を美しく華麗に薙ぎ倒す千冬の姿から名付けられたものと思われる。

ワンオフ・アビリティ
単一使用能力：《零落白夜》

・コアによるエネルギー性質のもの全てを無効化する【暮桜】の必殺技。通称「バリア無効化攻撃」。

無論シールドバリアも削り取れるため、この一撃だけでも相手のシールドエネルギーを大幅に削る事が出来る。

しかし、発動時には自身のシールドエネルギーを消費するため、諸刃の剣である。

第一回の世界大会で千冬は、瞬時加速で接近し零落白夜で瞬殺するというシンプルかつ強力な戦法で、見事に優勝して見せた。

「零落」とは草木の枯れ落ちること。「白夜」とは、高緯度地方で薄明が長時間続く現象のこと。

基本武装

・近接特化ブレード《雪片》

零落白夜用にカスタマイズされたオリジナルの近接特化ブレード。バリア無効化攻撃発動時には、刃が実体剣でなくビームブレード状に変わる。

ちなみに、「雪片」という字を「ゆきひら」ではなく「せつぺん」と読むと、雪の結晶体が互いにいくつか付着して、ある大きさになったもの、つまり雪のひとひらという意味となる。

恐らく、零落白夜発動時の《雪片》の刃が、雪のように美しい白色である事から命名されたと思われる。

この名前の刀は、後に【白式】に継がれることとなる。

第二世代型

・各国で軍事転用が主となったのを受け、兵器として開発されたモデル。現在世界で一番出回っている。
後付武装イコライザによる戦闘用途の多様化に主眼が置かれている。

【打鉄つちがね】

- ・主な搭乗者：篠ノ之箒、その他IS学園生徒など
- ・コア搭載位置：左脚装甲内に一基

日本製第二世代型。防御面を重視されており、初心者でも扱いやすいモデル。

IS学園でも生徒用訓練機として配備されている。黒色の外見は武者鎧のようになっており、お国柄が表れている。

機体名は、打撃の「打」と、日本刀の原料である「鉄」を合わせたものと思われる。

基本武装

- ・近接ブレード

本機の基本武装。日本刀のような形状をしている。

その他、様々な武装を装備する事が出来る。

一例：五六口径アサルトライフル

：五九口径ロングライフル

：近接ショートブレード

【ラファール・リヴァイヴ】

- ・主な搭乗者：IS学園教師陣など
- ・コア搭載位置：右脚装甲内に一基

フランスのデュノア社が製造したフランス製第二世代型。通称「アイルツイ R-V」。

外見上の特徴は、シールドを兼ねたネイビーカラーをした四枚のマルチスラスタ多方向加速推進翼。

【打鉄】と同じく、操縦しやすく汎用性が高い。後付武装が豊富イコライザなため、武器の換装次第で全ての距離に対応出来る。

第二世代型としては比較的最期に開発されたモデルだが、性能自体は高く各国からの総合的な評価は高い。

現在、世界第三位のシェアを誇り、七カ国でライセンス生産され、12カ国で制式採用されているなど、日本の【打鉄】と並ぶ、第二世代型屈指の名機である。

機体名のラファールはフランス語で「突風」の意。リヴァイヴはフランス語で「生き返る」の意。

すなわちフランス語で「突風（疾風）の再誕」という意味になる。

基本武装

- ・五一口径アサルトライフル《レッドバレット》

全ての【ラファール・リヴァイヴ】共通の基本武装。アメリカのクラウス会製の実弾兵装。実用性と信頼性が高く、多くの国で使われている。

「レッドバレット」を直訳すると、「赤い弾丸」という意味になる。

その他、様々な武装を装備する事が出来る。

【ラファール・リヴァイヴ Type-MY】

- ・搭乗者：山田真耶
- ・コア搭載位置：右脚装甲内に一基

フランス製第二世代型【ラファール・リヴァイヴ】のカスタム機。Type - MYとは、搭乗者のイニシャルに由来する。基本的な性能はさほど変わっておらず、性能、武装ともに射撃戦を主にした中距離戦専用になっている。

かつて織斑千冬と互角以上の激闘を繰り広げた真耶の技術もあり、戦闘での力ははかなり強力である。

基本武装

- ・五〇口径アサルトライフル《レッドバレット》
全ての【ラファール・リヴァイヴ】共通の基本武装。
アメリカのクラウス社製の実弾兵装。実用性と信頼性が高く、多くの国で使われている。
- 「レッドバレット」を直訳すると、「赤い弾丸」という意味になる。
射撃戦が主な真耶の主武装である。

【アラクネ】

- ・コア搭載位置：右肩装甲内部に一基
アメリカ製第二世代型。
「アラクネ（アラクネー）」とは、ギリシア神話に登場する女性で、優れた織り手といわれている。
機織りを司る神アテーナーとのある事件によって自縊死を遂げた後に、彼女によって蜘蛛に転生されたという。

第三世代型

・「操縦者の意思による操作装置」（イメージ・インターフェイス）を用いた「第三世代型兵器」の搭載を目標としている。
未だに試作型の域を出ておらず、一部を除いた機体は、燃費が悪く重要な課題となっている。

【ブルー・ティアーズ】

- ・待機形態：左耳の青いイヤークラス
- ・搭乗者：セシリア・オルコット
- ・コア搭載位置：右脚装甲内に一基

アイルランド製第三世代型。ビーム兵器の実働データのサンプリングを目的とした試作機。

最大稼動時はビーム自体も自在に操るBT偏向制御射撃が可能。
フレキシブル

「ブルー・ティアーズ」は、直訳すると「蒼い雫」という意味になる。

武装

- ・六七口径高エネルギーレーザーライフル《スターライトmk?》
- 【ブルー・ティアーズ】専用の長身スナイパーライフル。

・近接ショートブレード《インターセプター》
防御用の近接武装。未だにセシリアはこれを上手く活用できていないのが現状。

ちなみに「インターセプト」というのは、アメリカンフットボールなどの球技で相手のパスの隙を突きボールを奪うこと。
よって名は「妨害するもの」という意になると思われる。

・第三世代型・無線式自立機動ライフルビット《ブルー・ティアーズ》×六
四基の射撃型特殊レーザービット+二基の弾道型ミサイルビットから成り立つ。

【甲龍】シエンロン

- ・待機形態：マゼンタのブレスレット
- ・搭乗者：凰鈴音
- ・コア搭載位置：左腕装甲内に一基

中国製第三世代型。近接格闘戦型で、燃費効率のよさと戦闘に置ける安定性を第一に設計された実戦モデル。

肩の非固定浮遊部位アンロックユニットに特徴的な棘付き装甲スパイク・アーマーを持ち、スライドした中に衝撃砲二門を両肩に装備している。

「シエンロン（神龍）」とは、八世紀初めに唐で用いられた元号である。「甲」の字は、装甲の「甲」から取ったものと思われる。

武装

・青龍刀《双天牙月》そうてんかげつ ×二
斬るのではなく重さで叩き割るための大型近接武装。片刃で湾曲した片手刀で、日本刀などに比べ刃の幅が非常に広い。重量と遠心力をつけ斬りつけることにより威力を発揮する。連結することで投擲武器としても使用可能。

・第三世代型・空間圧作用兵器・衝撃砲《龍咆》りゅうほう ×二
空間自体に圧力をかけて砲身を生成、余剰で生じる衝撃それ自体を

砲弾化して撃ち出す。
砲身も砲弾も眼に見えないのが特徴。その上、砲身斜角がほぼ制限なしで撃てる。文字通り「死角が無い」。
装備を換装する事により、拡散衝撃砲や貫通衝撃砲などに切り替える事も可能。

ミステリアス・レイディ
【霧纏の淑女】

- ・待機形態：右手薬指の指輪
- ・搭乗者：更識楯無
- ・コア搭載位置：左腰部リアスカート内に一基

更識楯無専用ロシア製第三世代型。

元々【モスクワの深い霧】と呼ばれていた機体を楯無自身が独力で開発した代物。

装甲は比較的少なく、それをカバーするように透明の液体のようなヴェールをまとっており、水のドレスのように見える。

「アクア・クリスタル」というパーツからISのエネルギーを伝達するナノマシン制御によって水を自在に操ることが可能。

・《蒼流旋》

特殊ナノマシンによって超高周波振動する水を螺旋状に纏ったランス。四連装のガトリングガンも装備されている。
先端部分がドリルのように回転する。

クリア・パッション
・《清き熱情》

アクア・ナノマシンの製造プラント。左右一对の状態で浮遊しているクリスタルのようなパーツ。
そこから水のヴェールを展開し、マントのように操縦者の体を包み

込むことで射撃武器を無効化する。
更にナノマシンで構成された水を霧状にして攻撃対象物へ散布し、ナノマシンを発熱させることで水を瞬時に気化させ、その衝撃や熱で相手を破壊することも出来る。拡散範囲は限られているが、非常に有用性が高い。

第四世代型

・装備の換装無しでの全領域・全局面展開運用能力の獲得を目指した世代。

現在はまだ机上の空論である。

【白式】びやくしき

- ・待機形態：右腕の白いガントレット
- ・搭乗者：織斑一夏
- ・コア搭載位置：両翼のウイングスラスターに二基

日本製第四世代型（展開装甲が雪片式型に搭載されている）。倉持技研製。元は欠陥機として放置されていたが、それに束が手を加えた。

ツインインフィニティシステム搭載機。だが、本機に搭載されているコアは同調を前提とされていないため、同調率の不安定さが永遠の課題となっている。

ツインインフィニティシステム

・一つの機体にコアを二つ搭載し、エネルギーの出力を二倍ではなく二乗化するというシステム。

完全に稼動するにはコア同士の同調が不可欠であり、これが一定の値を超えないと正常に稼動しない。

二つのコアは同調専用には造られたオリジナルではないので、同調率が安定しない。

武装

・近接特化ブレード《雪片ゆきひら式型しきがた》

【暮桜】の主武装であった《雪片》の発展型。第四世代技術である「展開装甲」が使われている本機唯一の武装。

バリア無効化攻撃発動時にはビームソードを形成し、通常は実体剣である。

ワンオフ・アビリティー
単一使用能力：《零落れいらく白夜びやく》

・コアによるエネルギー性質のもの全てを無効化する【白式】の必殺技。通称「バリア無効化攻撃」。

無論シールドバリアも削り取れるため、この一撃だけでも相手のシールドエネルギーを大幅に削る事が出来る。

しかし、発動時には自身のシールドエネルギーを消費するため、諸刃の剣である。

本来は【暮桜】の単一使用能力。

1 出会い（前書き）

織斑一夏と金寺龍輔が、邂逅する。

1・出会い

日本の神奈川県藤沢市沿岸部にある人工島に存在する、IS学園

正式名称、IS操縦者育成特殊国立高等学校。

世界初の、ISに関する人材 主に操縦者の育成を目的とされた、高等学校である。

運営及び資金調達は日本国が行い、得られた技術は協定参加国の共有財産として公開する義務があり、黙秘権は一切無い。

何故そのような事になったかということ、数年前の国連理事総会にて、EUサイドが言い放った一言が原因である。

『貴殿の国の者が開発したISによって、今までの様々な常識が打ち破られ軍事バランスすら壊してしまった。日本国は責任を持って、それらの管理などを行い、得られた技術を他国に提供せよ』。

簡潔に言えば、このようなものである。

一部では、ISによって軍隊の大半をつぶされかけたEUサイドの報復といわれていたが、定かではない。

これに各国は賛同。日本政府は受け入れざるを得なくなってしまう。何せ、これを拒否すれば外交に多大なる影響が出る可能性があるのだ。

さて置き、この学園に入学した一年生は、まずISの基本事項や通常の高校の学習要領などを習う『普通科』に入る。

二年生時から学科が別れ、国家代表を目指す操縦者の育成に重点

を置いた『操縦科』、ISの開発・研究・整備を専攻する『整備科』、本格的に宇宙進出を目指した学習を行う『宇宙専攻科』の三つに分かれる。

一見、そんなIS学園はそんな点以外普通の高校と変わらないように見えるが、一つ特徴がある。

全校生徒が女子なのだ。

きっかけは、白騎士事件 北欧戦争終結 から二日後に
発覚した、ISの致命的欠陥である。

その欠陥とは、『女性にしか反応しない』。

ISは、機体装甲に触れ、そこから流れ込んでくるISの情報を
読み取る事で、初めて搭乗できるようになる。

だが、どういいうわけか、北欧戦争終結後、ISが男性に反応せず、
女性にしか反応しなくなってしまったのだ。

原因 不明。

この事態には、生みの親である篠ノ之東も頭を抱えざるを得なくな
ったといわれている。

その原因が、ISの中枢を担う動力源『インフィニティ・コア』
主な呼び名は「コア」 にある事は容易に想像できたら
しいが、何をしても原因の解明には至らなかつたという。

結果、新世代のパワードスーツであるISは、『女性専用』のレ
ッテルを貼られることとなったのだ。

それゆえ、自然と 必然的に、ISに関する事業、団体には、女性が多く関わるようになる。

この学園も当初は男子がいたが、それも極僅か。その極僅かの男子も中退し、結果的にIS学園は実質的な女子高になってしまった。そのIS学園に、このたび数年ぶりに男子学生が入学する事になった。

名前は織斑一夏。

入学式一ヶ月前の入試で、偶発的な要素によってISを動かしてしまった、『世界初の男性IS操縦者』だ。

そのせいか、今年度の入学式はやけに盛り上がっていた。

このめでたい式典の日に、一人だけ出席していない教師がいた。

その教師は諸事情により、学生寮の1026室に自分の住まいを置いている。

“彼”は、本来は備え付けコンピュータしか置いていない机の上に無理やり設置した二つの大型空間投影モニターと四つの小型モニターに目を通し、手元のキーを一定のリズムで叩いている。

今モニターに表示されているのは、日本製の第二世代型IS、【打鉄】の機体スペックなどである。

六つのモニターに表示されている情報を亜音速で一気に読み取るのは常人にとつて至難の業だが、それを実行しているその青年
そもそも彼は常人ではない にとつては、何の苦にもならない事だ。

「しかし…日本人は式典が好きなんだな…」

先ほど少しだけ覗いてきた入学式の光景を思い出し、キーを叩く手を止めながら青年は呟く。

もつとも、表面上日本人である彼が言うにはいささか違和感があるが。

とはいえ、このIS学園の教師になったのはつい三か月前だ。それも突然。

ここ数年ISの技術者として世界を飛び回っていた彼に正式な要請が来たのはその半月前。数年契約で、学生寮の一室を私設研究所として使用してもよいというおまけ付きだった。

彼は少し悩んだが、結局OKの返事を返した。何より施設が軒並み整っているこのIS学園なら研究に没頭できるだろうし、各国から怒涛の如く来るオファーにも辟易していたところだった。全世界のISに関する技術の48パーセントが集うこの場所は、彼のような研究者にとつて最高の環境と言っても過言ではない。

椅子の背もたれに体重を預け、脳裏に浮かぶこれまで世界を飛び続けた日々の記憶に、彼が意識を集中させていると。

コンコン。
部屋のドアをノックする音が耳に入ってきた。

「…誰だ」

「私だ」

女性にしては鋭い、凜とした声を聞いて、彼はゆっくりと立ち上がった。一応、彼女はこの学園において自分の上司のようなものである。

「何か用で？」

「馬鹿者、今日は入学式だろう。一年一組の副担任になったお前に用が無いわけではない」

「…それもそうか…」

女性 織斑千冬の言葉に嘆息すると、彼はベッドの近くにある洋服掛けにある黒のスーツを着る。

彼の服装は黒のスーツ上下に、上は中に紺色のYシャツを着込んでいる。黒は彼のパーソナルカラーのようなもので、何色にも染まらずに自分らしさを貫く彼に合う色だ。

右拳で胸元を数回軽く小突き、大きく息を吸い、吐くと、彼はドアへ歩んでいく。

ドアを開けると目の前に千冬の姿があった。彼女は一年一組担任である。

「悪いがこちらは職員会議があつてな…それまで金寺、クラスを頼む」

「オーライ。行ってくるぜ」

千冬に一言だけ言って、金寺龍輔は、一年一組の教室へ向かう。

世界は、急速に動き出す。

この学園内では、男性というのはまさに希少生物で、好奇の目で見られることが多い。

一年一組の教室内、真ん中の一番前の席に座る少年 織斑一夏は、まさに今そんな視線を真に受けていた。

何せ、一年一組30人中、彼以外の生徒29人は女子なのだ。声を掛けられているわけではないが、視線が身に突き刺さる。ヒソヒソ話している声も聞こえるが、十中八九一夏のことを話しているのだろう。

とにかく、居心地が悪く、つらかった。

女子だらけの学園 親友曰く、『楽園』に一夏が行く事になると知ったとき、彼の友人たちは揃いも揃って一夏のことを『羨ましい』と言ってきたのだが、今の一夏は彼らに『これが現実だ！』と吼えてやりたかった。

そんな中で彼の左側、窓際の席にいるポニーテールの少女の名前

を彼は知っている。

篠ノ之箒。小学一年生から四年生まで時を共にした剣道のライバルで、その苗字の通り、ISの基礎理論を提唱した篠ノ之束博士の妹である。

……のだが、どうも彼女は先ほどから、近寄りがたいオーラを放っている。一度視線が合ったが、何故か箒はすぐに視線を逸らしてしまった。

これから先の学園生活を想像し、一夏が本格的に心配し始めたとき、教室のドアが開いて一人の青年が入ってきた。

大半の女子生徒から、黄色い声があがる。それもそのはず、青年は一般的にイケメンと呼ばれるような顔立ちをしている。

一夏はそれ以上に青年の醸し出す雰囲気思わず声をあげそうになった。

整った顔立ちに、鋭い眼、若干ウェーブがかかった黒い髪。

だがそれ以上に一夏の目に焼きついたのは、色が違う眼　　オ
ツドアイだった。

左眼が漆黒なのに対し、右眼は禍々しい鮮血のような赤色。
それがあまりにも、印象に残った。

生徒の歓声に溜息をついた青年は、一同を黙らせつつ教壇に向かうと、やや面倒くさそうに手元のコンソールパネルを操作する。

程なくして、教室前方の電子黒板に『金寺龍輔』という文字が浮かび上がった。

「今からS H Rだが…手短に終わらせる。俺は一組副担任の金寺だ。担当は主にI Sの基礎理論、世界史、整備技術。…以上だ、何か言いたいことあるか？」

言葉を切った途端、およそ三分の二の生徒が挙手。無論、金寺に對する質問だろう。

その光景に、一夏は少なからず恐怖を覚えた。

一人目、出席番号一のショートヘアの子。

「誕生日はいつですか？」

「二月十八日」

二人目、同じくショートヘア。

「趣味はなんですか？」

「研究、一人旅」

三人目、ロングヘアの…以下全省略。

こんな感じで金寺に対する質問が飛び終えたところで、金寺は一息つくつと教室を一瞥した。

一夏はというと、

「…なんか凄いやこの人」

怒涛の質問攻めにも一切動揺することなく、素っ気無く答えるその姿は彼にとってある種の勇者にも見えた。

「…そういうわけだ。それで　　「金寺先生、もう一つだけよろしいですか？」

改めて口を開きかけた金寺に、再び質問が投げかけられる。

ほぼ全員の視線が、音源に向かう。声の主は、縦ロールのある長い金髪の少女だった。

「何だ、言ってみる」

「…“男性の”金寺先生は、どのようにISに関わってきたのですか？」

『男性の』という部分を強調した少女に、一夏はやや違和感を抱いた。まるで、『何故男性のあなたがISに関わっているのか』とでも言っているような感じだ。

当人の金寺は意に介する事も無く、簡潔に答えた。

「俺は数年前まで一匹狼の研究者だった。最近はいろんな国で技術開発に携わってきたが…ああ、みんな知らねえよな。まあビーム兵器に関する基礎理論をくみ上げたり、非限定情報共有を証明したり、適当になんやかんやしてたんだ」

非限定情報共有 シェアリングとは、コア同士が行う情報の共有のこと。これを各自が進化の糧にしており、それにより形態移行などが行われるといわれている。

これはビーム兵器と同様、近年の研究によって現実的な理論が築かれたばかり。そしてそれらの理論を最終的に確立したのが、この金寺龍輔なのだ。

だが、それを“適当に”と言っただけのけた金寺の神経が、一夏には今ひとつ理解できなかつた。

「終わりか？」

「はい、…無礼な質問をして申し訳ありませんでした」

「気にするな、俺は気にしない」

それを聞き、少女は納得したようで納得していないような様子で
咳くように言った。

彼女にしてみれば、やはりISに男性が関わっている、というの
に違和感を覚えていたのだろうか。

一夏がそんな事を考えていると、再び教室のドアが開き、今度は
スーツを着た女性が入ってくる。

その女性の名は、

「げえっ！？千冬姉!？」

自分の姉、織斑千冬だった。

一夏が座りながら大声をあげた直後、彼の頭で炸裂音が響く。千
冬の持つ出席簿による殴打攻撃 通称、「出席簿アタック」
の音だった。

「…学校では織斑先生と呼べ」

「りよ、了解…」

出席簿の一撃とは思えない、尋常でない鈍痛に頭を抱える一夏を
よそに、千冬は教壇にいる金寺に話し掛けた。

「すまない、遅れた。ご苦勞だったな、金寺」

「苦勞に値しない」

ぶつきらぼうに短く言って教壇から離れる金寺を見て、千冬は苦
笑を浮べた。

「全く…お前は本当に変わらないな」

「そう言うお前も前に再開した時と変わってなかったけどな」

「時々言われる」

再度苦笑を浮かべ、千冬は金寺に変わって教壇に立つ。

自分の姉が教壇にいる。この状況が読めない一夏をよそに、千冬は口を開く。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが私の仕事だ。これから機動兵器を扱っていく身として私の言う事はよく聞きよく理解しろ。これは絶対だ。反逆するのは勝手だがな」

悪い言い方をすれば、横暴とも取れる物言い。一夏は絶句したが、

「キヤーーー!!!」

「千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！北九州から!!!」

「私は稚内から!!!」

「あの千冬様にご指導いただけると嬉しいですよ！」

「私、お姉様のためなら死ねます！」

女子生徒の大半はこの通り。

それもそのはず、一夏の唯一の肉親である彼女は第一回IS世界大会『モンド・グロツソ』の格闘部門及び総合優勝者で、公式戦負け知らず。事実上の、世界最強である。

それはすなわち、この世の女性の憧れなのだ。

「……毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

たぶんそうだろうな。

くしくも、一夏と金寺の考えた事は全く同じだった。
それを証明するように、数人の女子が再度黄色い声をあげる。

「きゃあああああっ！！お姉様！もつと叱って！もつと罵って！
でも時には優しくして！」

「そしてつけあがらないように躡をして〜！」

最早危ない領域に達しているのも何人かいたが、一夏は意図的にそれを聞き流し、自分の姉に質問をした。

「千…じゃなくて、お、織斑先生はいつからここの教師に…？」
「それは後だ、いずれ説明する。今は、SHRを終わらせるぞ」

千冬の言葉に一夏が軽く頷くと、これらのやり取りを聞いた数人の生徒が気づいたように声をあげた。

「え……？織斑君って、千冬様と知り合い……？」
「親戚とかなのかな？同じ名字だし」

それを聞いて一夏は少なからず驚きを露にする。
てつきり一夏は、自分と千冬が姉弟であることが知られていると思っていた。織斑という苗字は、それほど多くいるものではないはずだ。

「それじゃあ世界で唯一男でISを扱えるっていうのもそれが関係して……？」

それは無い。

別に確信があるわけではないが、本人は直感的にそう思った。いくらなんでも、それが関与しているとは思えない。確か国際IS連盟のお偉いさんもそう言っていた。だとしたら、それ以外に何か理由が

そんな思考を遮断するように、チャイムが鳴り響く。

「朝のSHRはこれで終わりだ。諸君らにはこれからISの基礎知識を半年で覚えてもらう。その後、実習だが基本動作は半月で体に染み込ませる。これは絶対だ。いいな？」

直後、一糸乱れぬように生徒たちの返事が響く。

呆れるように軽く息を吐いた一夏は、先ほどとは別の考えに没頭した。

(機動兵器、ねえ…)

いまや、ISが各国軍の要である事は、当然一夏も知っている。それを、世界最強の弟である自分が操る事になったというのは、正直運命のいたずらのようなものを感じさせた。

そもそも、一夏はIS学園ではなく、生活面で姉 千冬を困らせないためにも、学費が安く就職率が高い私立愛越学園を受験する予定だった。

だが、彼にとって不幸だったのは、その愛越学園の試験会場が市立の多目的ホールであり、IS学園の試験会場もそこにあったことだ。生憎、当時中学三年生だった一夏はホール内で迷ってしまい、係員に聞いてもよく分からず八方塞の状態だった。

そんな中、迷い込んだ部屋　実は立ち入り禁止区域なのだが、一夏は知らなかった　にあった格納状態のISを発見。興味本位で触れた一夏だったが、どういう訳かISが起動してしまい、その場に駆けつけた試験官に目を付けられたのだ。

その後の展開も急激なもので、一時期国際IS連盟に身柄を保護された後、『在学中はありとあらゆる機関、団体からの干渉を受けない』IS学園に半ば無理やり入学させられたのだ。

正直、望んでこの学園に来たわけではないが、こうなった以上仕方が無い。

これから自分は、今世紀最強と謳われる機動兵器を扱う事になるのだ。気の緩みなど許されない。

(まあ、とにかく真面目にやっていきますか…)

大して深く考えず、軽く背伸びをした一夏は、一限目のIS基礎理論の準備をする事にした。

ISの基礎理論。

その名の通りとしか表現しようが無いこの授業は、ISに関する基礎を徹底していく意味合いで行う。

この授業を行うのは、基本的に金寺だ。

ちなみに、金寺が授業を行うのはこれが初めてではない。彼が赴任したのは昨年二月。それから終業式までの一ヶ月ほどの間に、金寺は教育実習生のように教務について学び、今年度から本格的に教師となったのだ。

授業の具体的内容だが、まず最初はISの詳細な概要が主だ。中には、ジュニアスクールなどで数年前から学び始めているのもいるが、大半の生徒はそこまで深入りしていない。

よって、まずは基礎を徹底する事から始めるのだ。

授業の進め方としては、生徒たちが入学前に配布されたISに関する参考書、という名の『電話帳もどき』にある程度目を通して、いる事を前提としている。

一応IS学園は進学校に値するので、当然といえば当然であった。

金寺が最初に担当したのは一年三組。これまた生徒たちから随分な歓迎をもらったが、当人は気にしていないため特別困る事は無い。さしたる障害も無く、金寺は授業を終えた。

難なく初陣を終え、書類整理のために一旦職員室に来た金寺に、一人の女性が声を掛けた。

「お疲れ様です。初めての授業、どうでした？」

彼女の名は山田真耶。今年度から一学年の学年主任になった人で

ある。

「まあ、特に楽も苦も無く、って感じた。千冬のクラス、なかなか楽しそうな面子じゃないか？」

金寺がそう返すと、真耶は少しがっかりした様子だった。どうやら、先輩面をしたかつたらしい。

「ああ、でももし分からない事があれば何でも聞いてくださいね！」

他の女性と比べて豊満な胸をはり、堂々とした様子で真耶は言う。最も、短く髪を切りそろえ眼鏡を掛けている童顔の彼女には、威厳などという言葉が全く似合わないのだが。

「…で、アンタはこの学園何年目なんだっけ？」

「あ、そういえば言ってますでしたね。私は今年度で三年目です」

「…そうか。じゃあま、何かあったら宜しくな」

「はい！改めて！」

喜びを露にする真耶が、何かの小動物に見えた金寺だった。

無論、真耶が金寺のことを職場の同僚としてでなく、一人の男性として見始めていることを彼は知らない。

1・出会い（後書き）

山田先生は、一学年主任になっています。

決して彼女の出番が無いわけではありません。主に本業で活躍します。

色々謎が多そうな金寺、これから彼はどっなくなっていくのか。

2・その場にいること(前書き)

入学してから間もなく、一夏の身に様々なことが起こる…。

2・その場にいること

続いて、二限目。金寺は引き続き基礎理論の授業を行う。

今回の担当は、自分が副担任を受け持っている一年一組なのだが。

「……………」

授業開始から十五分後、異変を感じた金寺は視線を下に落とした。

その眼に映ったのは、なにやら顔が青ざめている一夏。

机に乗せている教科書を適当にめくっては冷や汗をたらし、挙動不審に周りを見ていた。

「……………」どうしたお前

「あ……いや、その………なんというか……………」

様子が気になったので尋ねてみると、当人はなにやらはぐらかすような表情になった。

どうやら、あまり悟られなくなかったらしい。

「お前が何考えてるかは知らんけどさ、わかんねえのがあんなら今のうちに聞いておいたほうがいいぞ?」

金寺がそう言うと、一夏は一瞬うつむき、その後、何かを決意したように拳手する。

「先生！ほとんど全部わかりません」

……予想通り。

何となく予測できていたが、いざ実際そう言われると、頭が痛くなるような感覚になった。

「お前さあ…あの『電話帳もどき』読んだのか？一応俺はお前らがあれに目を通した事前提にやってんだけど」

彼の言う『電話帳もどき』とは、前述したとおり入学前に新入生徒全員に配布されるISに関する参考書の事だ。

そのページ総数はなんと894ページ。金寺ですら、“暗記に三時間もかかった”代物だ。

「…古い電話帳と間違えて捨てました」

金寺の眼が、信じられないものを見たように見開かれた。

ISの参考書、それはすなわち兵器及び最新の爆弾の取扱説明書といっても過言ではない。

それを“古い電話帳と間違えて捨てた”という一夏の神経が、金寺にとって間違いなく万死に値するものであった。

「…とりあえずあとで再発行を申請しておく。最低でも来週の月曜
までには全部頭の中に詰め込め」

「来週の月曜って…そんな無茶」

金寺の一言にそう反論しかけた一夏だったが、直後、頭部に金寺
の手刀が襲いかかってきた。

「痛っ!?!」

「何が無茶、だ。お前が捨てなきゃある程度は授業についていけた
ものを…何も考えずに捨てた自分を恨め」

「うっう…」

手刀を喰らった場所を押さえる一夏は何も反論できなかった。

当たり前だ。ISの参考書を捨てたのも、ひいては予習すらしな
かったもの自分。完全に自業自得である。

「お前はIS学園の生徒なんだからよ、ちょっとは学ぼうって意識
持てよな？」

「…はい」

しぶしぶ納得する一夏に若干呆れつつ、金寺は授業を再開した。

その後、休み時間。

「ちよつとよろしくて？」

一夏に声をかけたのは、先のSHRにて最後に金寺に質問した少女だった。

近くで見れば、金髪碧眼に引き締まっているプロポーションの持ち主。文句なしに美人といえるだろう。

「俺に何か用か？」

「その言い方：まあ今はいいですわ。ところで貴方、イギリス代表候補生のわたくしセシリア・オルコットのことを知っておられますか？」

反射的にそう返した一夏に若干呆れながらも、セシリア・オルコットは彼にそう質問した。

だが、一夏にはそれ以前の問題があった。

「えつと：代表候補生、って何だ？」

一夏がそう言った途端、教室の空気が二重三重の意味で凍りついた。

誰もが、代表候補生、という単語を知らない一夏に啞然としている。セシリアも、愕然としてしばらく言葉を発する事が出来なかった。

「貴方：それすらも知りませんか？」

「？ああ：生憎今までISとはほとんど無縁だったからな」

当然だろ、といわんばかりにそう言い切る一夏に対して、セシリアはある種の失望感を覚えた。

ISとはほとんど無縁だった。

男性の彼はそうかもしれない。だが、

「確かに、貴方今までISと無縁だった事は事実かもしれませんが…それでも貴方は今こうして、その『無縁だった』ISに関わる事になりましたのよ」

「う…けどさ、俺だって好きでここに来たわけじゃないんだぜ？だからこういう事もよく分からないし、仕方ないだろ」

反骨心が垣間見えるその言葉が、セシリアにとってはくだらない言い訳に聞こえた。

恐らく、彼が好きでここに来たのではない事は事実だろう。だが彼女にしてみれば、まるで数年前の自分を見ているような気分になるのだ。

「…無知は罪、とはいいません。しかし、そこから知ろうとしないことこそ本当の意味で罪だと、わたくしは思いますの」

セシリアはそれだけ言い切ると、何とか反論しようとする一夏に背を向けて自分の席へ戻ってしまった。

チャイムが鳴ったのは、丁度その時である。

一日の授業と帰りのSHRを終え、放課後。

職員室から金寺が一年一組の教室に戻ると、要件がある人物を発見した。

「ああ、いたか、織斑一夏」

「…？金寺先生？」

金寺に反応してムクリと体を起こした一夏を確認すると、金寺は彼の机に「1025」と刻印が入っているキーホルダーがつけられたキーを落とした。

「これは…？」

「見りゃ分かるだろ、お前の寮部屋のキーだ。そこが今日からお前の居住地となる」

それを聞きつつキーホルダーの刻印を見ていた一夏は、ふと思いついたように言った。

「あれ？でも俺って確か一週間は自宅通学じゃなかったんですか？」

IS学園は全寮制。IS操縦者を守るため、というのが基本的な理由だ。

とはいえ、全校生徒が女子つまり寮に住んでいるのも全員女子なため、男子の一夏をいきなりそういうところに放り込むわけにもい

かず、彼には入学一週間後まで自宅からの通学を言い渡されていた。

「それはさつきまでな。日本政府からの特命で、端的に言えばお前の保護が第一目的だ。一ヶ月もすれば何とかなるだろう」

「保護って…ああ、そうか、そうだよな」

「どうやら一夏も合点がついたようだ。」

彼自身、ISを動かしてしまつてからこのIS学園に今日入学するまで、波乱が無かつたわけではない。

マスメディアの取材にはじまり研究所などからの勧誘が押し寄せ、拳句の果てに誘拐されそうになつてしまつた事もある。

その一方で、IS学園は基本的に特別な例を除き外部機関からの干渉を受けない事になっている。簡単に言えば治外法権だ。

日本政府としては、貴重な人材が厄介事にあつのをどうしても避けたいらしい。そこで、今回の特命なのだ。

「事情はわかりました。けど俺の荷物は」

「心配するな、私が手配した。まあ生活必需品だけだがな。着替えと、携帯端末の充電器があればいいだろう」

それに関して金寺が説明しようとした途端に、千冬の声。
当人は顔を引きつらせていた。

「え、じゃあ漫画とかその他もろもろは…」

「必要ないだろう」

今度こそ一夏はがっくりと肩を落とした。確かに、いくらなんでも最低限すぎる。

「いや、日々の娯楽も必要だと思っけどよ……」

そんな金寺の声は千冬に聞いてもらえず宙に消えていく。その横で、千冬は薄い冊子を一夏に手渡した。

「これは寮の心得だ。起床時間や食事時間、寮則が記載されている。大浴場はあるが…基本お前、いやお前らは使えないからな」

「え？何ですか？」

「…お前、女子と一緒に風呂入りたいのか？」

「そうか…」

金寺からのまともな指摘を受け、一夏は再び肩を落とした。この少年、かなりの風呂好きなのである。

「あ、あと金寺先生、一ついいですか？」

「？何だ？」

千冬が教室を後にしたのを確認した一夏に聞かれ、金寺はそちらへ顔を向ける。

このとき、一夏の脳裏に、数時間前に言われた言葉がフラッシュバックしていた。

『…無知は罪、とはいいません。しかし、そこから知ろうとしないことこそ、本当の意味で罪だと、わたくしは思いますの』

それこそ、セシリア・オルコットに言われた言葉である。

「その…授業に関して正直まだよく分からないところがあるんですよ。このままじゃついていけなくなりそうで…だからその、空いている時間とかでいいですから補習が何かお願いできませんか？」

「…了解した。俺のほうで都合のいい時間帯を探しておく。明日辺りなら何とかできるだろ」

一応、金寺龍輔は教師だ。教え子にそのような申請をされて断るわけがない。

最も、彼が教える事が出来るのはIS基礎理論程度だが、数ヶ月前までISに関しては右も左も分からなかった一夏にとっては少なからずともプラスになるだろう。

「そんじゃ、そういう事だ。とりあえず自分の部屋行って荷物の確認しとけよ」

そう言い残し、職員会議のために金寺もまた教室を後にする。

一夏も再度キーホルダーの刻印を見ると、教室を後にしてその部屋に向かう事にした。

「どこか…」

それから数十分後、一夏は指定された部屋へたどり着いた。ポツリと独語し、ドアを開けて部屋の中に入っていく。

部屋に入った一夏の目に付いたのは、大きな二つのベッド。元々二人用の部屋らしい。

「すげえなあ…」

感嘆の声を漏らし、一夏は早速ベッドに横になる。高級ホテルにありそうなそれは素材が良いらしく、横になるとなんともいえない気持ちよさが伝わってきた。

すると、

「誰がいるのか？」

聞き覚えのある声が耳に入り、一夏は自分の体が凍りつくのを感じる。

聞き間違えるはずが無い。今日約六年ぶりに再開した、幼馴染兼ライバルの声。

しかも、どういっわけか声はシャワールームから聞こえてきた。

恐る恐るそちらへ顔を向けると、バスタオルを体に巻いただけの、幼馴染兼ライバルが現れた。

「こんな格好ですまないな。シャワーを使っていた。私は篠ノ之

」

両者想定外の事態に、お互いに顔を見合わせ、硬直。

シャワー後の熱気で上気した頬に、濡れた髪、タオルを押さえる手が近いせいか肌に張り付いて、その曲線を忠実に表している豊満な胸。

六年間で成長した、年相応でない幼馴染兼ライバル　篠ノ之 箒の姿に、一夏は硬直すると同時に、思わず見とれてしまった。

一方、当の箒はというと、幼馴染でありかつて剣道のライバルであった少年が、自身の目の前にいること。

そして何より、シャワー上りの自分の年相応でない　本人にとっては若干コンプレックスになっている体を見られていることに、完全に言葉を失っていた。

目の前の事態に唾然としていた一夏は、箒が肩を震わせているのを目にする。

更に、彼の脳が、彼自身に訴えている。

ここから逃げろ、と。

だが、残念ながら、その猶予は一夏に与えられなかった。

「きやあああああああああつ!!??」

悲鳴と同時、箒はそばに立てかけてあった竹刀を手に取り、一夏へ向かって振り下ろす。

その寸前で我に帰った一夏は、身を翻してかわし、ドアへ向けて疾走。その部屋から脱出した。

疾風の如きスピードで部屋から脱出した一夏は、思わずドアに背中を預けて座り込む。

周りから、

「……なにになに?」

「あつ、織斑くんだ」

「えー、あそこって織斑くんの部屋なんだ! いい情報ゲット」

と、騒ぎを聞きつけてきた女子生徒の声が耳に入ったが、そんな事を気にしていられなかった。

その全員がラフなルームウェアで、かなり男の目を気にしていない格好ばかりなのだが、最早今の一夏には気にならない。

深く深呼吸し、何とか落ち着こうとした一夏は、集まっている野次馬の中に見覚えのある顔を見つけた。

「…金寺先生？」

「お前は何をやっているんだ」

呆れてものが言えない、といわんばかりの口調で彼は言う。

周りの女子生徒と比べると背がずば抜けて高い金寺は、自然と目立つのだ。

女子生徒の一人が当然ともいえる質問をした。

「先生なんでここに？」

「諸事情でこの寮使っててな、1026号室だが。…つつか変な騒ぎ起こすなよ。下手すりゃ寮監様が駆けつけてくるぞ？」

「…寮監様？」

「ああ。お前の姉貴な」

瞬間、一夏の背中が凍りつく。

もしもこの騒ぎで千冬が駆けつけてきたら、自分の身がどうなるか分からない。

意を決した一夏は、金寺に一つお願い事をした。

「か、金寺先生…ほとぼりが冷めるまで匿ってもらってもいいですか？」

「…匿っつ？」

「あ、いやその…色々事情がありまして…」

ルームメイトの風呂上りの姿を見てしまい殺されそうになったなど、この場で言えるわけが無い。

数人の女子生徒たちは総じて首を傾げていたものの、同じ男である金寺は何となく推測できたようだ。

「…まあ断る理由も無いし、一時的な」

そう言って、金寺は1026号室のドアを開け、自室に入っている。

やや戸惑いながらも、一夏は金寺の後をついていくことにした。

「うわあ〜…」

金寺龍輔の部屋に入って開口一番、一夏は思わずそんな声を出していた。

隣の部屋という事から、部屋の構造自体は同じだろう。だがしかし、彼の部屋はもとの学生寮の面影を保っていなかった。

「ここ、研究室か何かですか？」

「確かに寝室兼研究室だな。俺が独断で改造した」

そう言いながらルームチェアに座った金寺は、一夏に「そこに座っていい」と目線で話し掛ける。

それに気づき、一夏は軽く頭を下げてベッドに腰掛けると、驚き

を隠せぬまま部屋全体を見渡した。

「……………」

確かに、この部屋を始めてみるものはその景色に呆気に取られるかもしれない。

本来は勉強机であるはずの机は、二つの大型空間投影モニターと四つの小型モニター、それを操作するキーボードによって原形をとどめておらず、増設された本棚には多くの資料が整理されて置かれている。

部屋そのものはきっちり整っていないながらも多くの精密機器がある様は、まるで地下にある秘密基地を思わせるようだった。

そんな中で、元々備え付けられていた小型テーブルに置いてあるコーヒーサイフォンが何故かよく目立つ。よく見れば、その近くのレトロな木製の小棚にはコーヒーカップやコーヒー豆のパックが入っていた。

それを見れば、彼がコーヒーの愛好家である事は容易に想像できる。

「でさ、さっき何があった？俺の部屋に逃げ込むぐらいなんだから結構な事態なんじゃねえの？」

「まあ…そう言われればそうでした…」

言いにくそうにしながらも、一夏は事の経緯を話し始めた。

部屋に入った途端、ルームメイトである幼馴染の風呂上りの姿を偶然見てしまったこと、そして直後殺されかけたので全力で避難した事。

全て金寺の予想通りだった。

(…失敗したか)

正直、金寺は自分の迂闊さを呪った。

このIS学園は実質的な女子高。その寮のルームメイトとなれば当然女子。そしてこのような事態が起きる事も予測できたはずだ。

「…悪い、お前のルームメイトが篠ノ之箒である事を把握してなかった。俺のミスだ」

「金寺先生のせいじゃないです。俺が不注意だっただけで…でもこの後どうすれば…」

「一応、謝るしかないと思うけどな。篠ノ之箒に『俺は悪くない』という言い分が受け入れられるとは思えないし…」

「…ですよねー…」

これから先のことを予測し少なからず不安を覚え、肩を落とす一夏。

女の集団の中で男一人というのは相当なものだが、この少年は入学一日目にして、既に苦労しているようだった。

「…何だかんだでお前は苦労してんだな」

金寺の一言は棒読みと捉えられてもおかしくない口調だったが、一夏は同情してくれたのが少し嬉しかったようで、なおも愚痴に似た言葉を続ける。

「そりゃそうですよ。ここ俺以外の生徒女子しかないじゃないですか。そんな中で苦勞するなつてのが…つて、金寺先生はいつからこの学校にいるんですか？」

「厳密には今年の二月から。正式に教員になったのは今年度からなんだよ」

「はあ…じゃあ、千冬姉がいつからいたかつて知ってます？」

「…確か去年からだつたつて聞いてるが。お前知らなかったのか？」

やや驚きつつ金寺が振り向くと、一夏は軽く首肯した。

「いや、教えてくれなかつたんですよ。第一俺も去年は受験勉強とアルバイトであまり余裕が無くて。まさかIS関係の職業をしていたとは…」

「…なるほどな」

彼女の存在を気に食わないほんの一部の連中から『ブラコン』と揶揄される千冬の事だ。恐らく弟がISに触れる事を避けていたのだろう。

それがこのような形になってしまつとは、なんと皮肉な事が。

「なんとというか、最近は色々と激動で…」

「…まあ、割り切れよ。こうなつた以上仕方が無いだろ？」

金寺のその一言を聞いて顔を上げる一夏に対し、金寺は彼の顔を見つつ話した。

「俺がもしお前の立場だつたら、うだうだ愚痴るより今自分が何をすべきなのかを第一に考えるな。…まあお前はISに関しちゃうド素人だし、この環境にも慣れてないだろうから今すぐには言わねえ

よ。けどな、 『人間考える事をやめたら人間じゃない』、これは俺の持論だ」

人類がここまで発達してきた理由 それは間違いなく、高度な知能を持っていたからだろう。

人は何かに対して考えて、考えて、その“応え”を見つけ、未来へ進んでいく。

それが、金寺龍輔の持つ持論だった。

無論、彼はそれがこの世のこの理と思っ込んでいるわけではないが。

あれから数分後、1025室にて。

「本つ当に申し訳ございませんでした！わざとじゃないんです！！」

金寺の部屋を後にし、何とか筭に部屋へ入れてくれる許しをもらった一夏は、金寺に言われたとおり全力で謝罪を行っている最中だった。

IS学園の寮は、部屋の構図からもなるとおり、基本的に二人部

屋となる。当然、箒も自分にルームメイトがいるのは承知済みだったのだが、

(まさか一夏とは…！)

実を言うと、箒は今まで、一夏を男として意識した事が無かった。

幼馴染であり、同じ剣道場 実家の篠ノ之道場で切磋琢磨しあつた仲とはいえ、元々出会つたばかりの頃は険悪だったため、一人の異性ではなく、一人のライバルとしてみていた。

だが、今こうして風呂上りの姿を見られた、という状況に、自らの心拍数が上り、頬が真っ赤になっているのがまじまじと分かった。

これは、ただ知り合いに見られたから、というだけなのか？

それとも……

「……やはりお前が私の同居人だということのか？」

「あ、ああ、そうみたいだな……」

「どういうつもりだ？男女七歳にして同衾せず。常識だ」

「いやあ、俺も十五の男女が同居……いや、同棲するのは問題があると思うのだが……」

同棲。

その単語を聞き、箒は喉が渴いていくのが分かる。

同棲とは、正しく説明すると正式の婚姻関係に無い男女と一緒に暮らす事だ。

一夏の言っている事は間違っではないのだが、同棲となると、箒はどうしても付き合っている男女と一緒に暮らす、というふうに解釈してしまう。

「そ、それで……この部屋割りはお前が、選んだのか？」

ふと思った事が自然と口に出る。

もしも、これが

「いや、何か日本政府からの特命みたいで、出来るだけ俺を早く寮に入れたかったそうなんだ。まあ一ヶ月も経てば　　って、箒、どうしたんだ？」

淡々と事実を話していた一夏だったが、何故か肩をがっくり落とした箒を見て、心配そうに聞いた。

その箒は、一夏から告げられた事実と、自身が描いていた荒唐無稽な妄想に全身の力が抜けていた。

一夏が自分の同居人と確認して、思わず“一夏が自分との同室を望んだ”、と思ってしまうのだ。

「…けど、正直言つと、同室が箒で良かったよ。見知らぬ誰かと一

緒になるよりかはずっと良かった」

「ほ、本当か!？」

一夏の短い言葉を聞いて、反射的に箒は彼に食いつく。

同室が箒で良かった、というのが、自分を肯定してくれたみたいで何より嬉しかった。

実際、一夏にとっても見知らぬ人物と同じ部屋になるよりははるかに良かったので、本心ではある。

一方で、箒は、「そうか：良かったか：」と、表情を和らげ、とても嬉しそうだった。

その後、シャワーの使用時間を決め、着替える際の注意事項の確認など、同じ部屋で暮らしていく上での線引きの確認をした。

始めはいくら幼馴染兼ライバルと言えど、女子と同室なんてどんなことになるのかと身構えた一夏だったが、難なく進んでいったので本当に安心した。

その一方で、箒にとってこの日の夜は最悪だった。

一夏の部屋の場所が判明した事で、一部の女子が殺到。多くは顔見せという事で自己紹介も兼ねて軽く話している程度だったが、一年生で八名、二年生で十五名、三年生で二十四名。

上級生になる程、一夏と知り合おうと必死になっているのが分かってしまう。

何故、一夏が他の女子と会話していると変な気分になるのだろう。

自分でもわからない。第一、篤は一夏のことを異性としてみていなかったはずだ。

いや、それは本人がそう思っているだけなのかもしれない。実際、篤は諸事情で転校してからというもの、一時も一夏のことを考えない事は無かった。

最も、本人はその感情を、切磋琢磨しあうライバルがいなくなったことによる物足りなさ、と解釈してきたのだが、もしかすればそれは違ったのかもしれない。

その後、時間が時間という事もあり一夏と篤は就寝することにしたのだが、結局、篤は自分の気持ちに整理がついていなかった。

2・その場にいること（後書き）

設定破壊〓セシリアがかなりまとも・篤がまだ一夏に惚れていない（と思っている）。

前者はよく考えてください。

イギリスの名門貴族のお嬢様ですよ？

たとえ両親が他界したとはいえ、何らかの教育を施してくれるような人物がいてもおかしくないと思います。

というかいるのが普通なような。

という訳で、本作品でのセシリアは、名門貴族の後継ぎとしての自覚はある程度あります。

原作でのあの物言い、完全にオルコット家の恥さらしですよね。それぐらい理解していないといけないのでは。

後者の篤に関しては、ただ単純に本人に自覚症状が無かっただけです。

今は本人が、一夏へ対する気持ちを恋心だと思っていない段階です。

ただ安心してください。

一夏がフラグを建てないような事はありません。

彼の特殊能力「瞬間的に女子を落とす」は本作品では発動しないだけです。

特別な場合を除いて、人が他の異性を好きになるのはそれなりの経緯があると思うので。

ただ、どうしても金寺と一夏中心の物語なので、書くのがおろそかになってしまいそうなの…

後、金寺が妙に悟ってるみたいですが、それにもしっかり理由があります。

それが明かされるのはかなり後の事件にて。

とりあえず、これからも頑張っていきます。

3・自覚(前書き)

クラス対抗戦に出る代表者を決めることになった一組。
多くの生徒から推薦された一夏は…？

3・自覚

次の日。

「授業の前に、再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決める。クラス代表者とは、対抗戦だけでなく生徒会の会議や委員会への出席など、まあクラス長と考えてもらっていい。自薦・他薦は問わない。誰か居ないか？」

一限目の前、千冬の話を受けて、自然と静まり返る教室。誰がどう出るか、皆が牽制し合う中、一人の女子が堂々と手を上げる。

「はいっ！織斑くんを推薦します！」

それを聞いた当人は、内心表情を渋める。

恐らくは、自分が珍しい存在だから、程度の軽い理由なのだろう。一夏にしてみれば、面倒の一言だった。

「私もそれがいいと思います」

もう一人、賛同する女子生徒。人の連帯感とは、こう言うときはかなり強くなっていけない。

結局、四人ほどの生徒が一夏を推薦してきた。

「他にはいないのか？いないなら無投票当選だぞ」

確認をとる千冬。

流石にそれはまずい、と、一夏は必死に思考回路をフル回転させた。

この状況をどう打開すればいいかと考えに考えに考えて、彼が出した策は、

「はいつ！」

「何だ？織斑」

「俺はセシリア・オルコットを推薦します！」

またしても教室が静まり返った。

一夏に対して驚きの視線を浴びせるクラスメート 特にセシリア・オルコットをよそに、千冬は眉をほんの少し吊り上げると、一夏にその理由を聞く。

「ほう、推薦理由は？」

「第一に彼女はイギリス代表候補生、すなわちエリートであるはず。それに俺は彼女に対してとても責任感が強く、クラスを引っ張ってくれる存在だという印象を受けました。それが推薦理由です」

自分でも驚くほどすらすらと言葉が出てきたが、それはおそらく自分が本当にそう思っているからなのだろう。

それには、昨日彼女に掛けられた言葉が、一夏にIS学園の生徒としての自覚を植え付けたというのもあるかもしれない。

「なるほど、一理ある。さて、そうなると代表者候補が二人いることになるが…折角だ。二人で決闘を試みたらどうだ？」

「決闘？」

一夏とセシリアを含めた何人かが声をあげる中、千冬はやや楽し

そうに言った。

「ここはIS学園。物事を決めるとなればISを用いるのがベストだろう。双方の実力を測る意味合いも兼ねればいい。どうだ？」

「確かにそうですね。それならばわたくしも納得が付きませう」

いつの間にか立ち上がっていたセシリアが、一夏に向かって声を掛けた。

当の本人も、こうなった以上それに挑むべきなのは分かっているのだが、

「あの…決闘云々はそれでOKなんですけど、ISはどうするんですか？」

ISでの決闘となれば、無論ISが無ければ意味が無い。

一夏がその質問をしたのと同じタイミングで、金寺が教室に入ってきた。

「セシリア・オルコットにはBT兵器のサンプリングの意味合いで、昨年イギリスのバッキンガム・ファクトリーから専用機が受理されている。織斑一夏、お前にもデータ採取の意味合いで学園側から直々に専用機が受理される事になったそうだ」

教壇の横に向かって歩みながらの金寺の説明を聞き、生徒たちが騒然とする。

全世界に存在するコアは全部で467機。その限られた中の一つが一夏専用となるのだ。代表候補生クラスになって初めて受理される専用機の価値は、言わずもがなである。

「これで対等ですわね。貴方の実力、この眼で見極めさせてもらいますわよ」

自信満々な様子で自分を指差すセシリアを見て、自然と一夏も気持ちが昂ぶってきた。

少なくとも、手抜きは許されない。

「ああ、分かった。手加減はいらないからな」

きつぱりと言い放つ一夏には、「ハンデがあったほうがいいんじゃない?」「流石に無理があるよ」といった女子生徒たちの声は一切聞こえず、またその近くで金寺が考え込んでいるのも見えなかった。

「今日はこの程度でいいか。一応復習しとけよ」
「…はい…分かりました…」

二時間にわたる補講を終え、思わず机に倒れこむ一夏を見ながら、金寺は軽く嘆息した。

この日の放課後から、金寺による一夏の補講が始まった。

やはり一夏のISに関する知識の欠如は著しく、普通の生徒が中学二年生までに理解するであろうところをほとんど理解していなかった。

本人曰く、「千冬姉からISに関する事は一切聞いていない」らしい。これでは、ISに関する知識が欠如しているのは当然ともいえる。

ただ金寺は、何故千冬が弟に対してISのことを一切言わなかったのか理解できなかった。

一番考えられるのは、ネームバリューの事だろうか。

初代IS世界王者の弟となれば、様々な意味合いで知名度が出てくる。そうなれば、ISに関する何らかの厄介事は避けられないだろうし、それを未然に防ぐ意味合いとしては良い策のうちの一つかもしれない。

しかしその一夏がIS学園の生徒となった今、それは完全に凶と出ていた。

「…分りにくい…何でこんな…」

「仕方が無いだろ。端的に言えばお前の知識が乏しいだけだ」

あまりにもストレートすぎる金寺の一言に、一夏は完全に気落ちしてしまったようだ。

だが、それが事実。

自分のせいだろうが他人のせいだろうが、彼の知識が欠如している現実是不変である。

そしてここはIS学園。この環境に来た以上、否応無しにその知識を吸収し、自分のものにしていかなければならない。

ここでそれを拒否するのは簡単だ。

だがそうなれば、恥をかくのはほかでもない自分自身。

「無能な男」「劣等生」のレッテルを貼られるのがオチだ。努力を怠ればその報いが刃となって自分の身に返ってくる。

そのような旨の話を一夏にしたところ、本人はしぶしぶと納得していた。

「…割り切れよ。今のお前はこの学園の生徒なんだから」

それだけ言うと、明日の補講の時間を伝え、金寺は教室を後にしていった。

ほとんど誰もいない薄暗い廊下を歩く最中、ふと両腕の黒いブレズバンドに目線が落ちる。

一見真つ黒で飾り気の無いそれだったが、金寺にとっては自身への“戒め”を意味する大切なものであった。

(…何偉そうな口叩いてんだ俺は…)

自分に対して少々呆れ返りつつ、そんな事を心中で呟く。

脳裏に浮かんだのは、13年前の出来事。自分が感情的に行動してしまったせいで、結果的に最悪の事態を招いてしまったとある事件。

あの時、思い知らされた。

自分の勝手な行動が、下手すれば数多くの人たちを傷つけてしまう事。

そして、その後例えどのような行動をとろうと、その人たちの傷を癒す事はできず、それを払拭する事はできないこと。

今でもそれは金寺にとって耐えがたいトラウマであり、同時に彼の生きる原動力となっている。

過去の事だけはどうしようもない。今教師となった自分ができるのは、自分が犯した過ちを教え子たちにさせない事だ。

おそらくそれが自分の生きる意味なのではないかと、このとき金寺は思い当たった。

(…贖罪っていつのか? こういつの。けど、俺には…その道しかないのも事実だ)

自分が死んでも何も変わらない。

強いて変わることがあるとすれば、人の心の闇ぐらい。

これも、金寺が24年間生きてきた中で思い知らされた事実だ。

彼にとって生まれてからの24年間は、彼からたくさんものを奪い、たくさん戒めを得させたのだ。

今まで金寺が“経験したもの”は、常人の比にならない。
その大半がつらく、後悔したくなるような、トラウマのようなもの
のといっても差し控えないものだ。

だから、願う。

未来のために。

自分の教え子には、自分のようになってほしくない、と。

次の日、学園の外れにある剣道場。

「ダメだ…全然かなわねえ…」

久しぶりに剣道で箒と手合わせした一夏だったが、全然かなわず
に完敗を喫してしまった。

剣道場の隅にいるギャラリーの、

「織斑くんてさあ」

「もしかして弱い？」

「本当にIS使えるのかな？」

といった声も、今の彼にはかなり痛く響く言葉である。

「…お前は今まで何をしていたんだ」

地べたに座り込む一夏に対し、呆れるような視線を浴びせながら
箒が咳く。

「いや、あれ以降バイトとか色々やってみて…中学三年間は帰宅
部だったからな…」

それを聞いた箒の眉がピクリと跳ね上がったが、一夏の話した事
は事実だ。

別に一夏は、箒が転校してからも剣道を止めたわけではなかった。
暫くは続けていたのだが、自分と張り合えるライバルがいなくな
ってしまっただせいかやる気があまり出ず、中学生になってからは国
家IS操縦者となった姉の千冬を困らせないためにもアルバイトに
励み続けた結果、すっかり腕は鈍ってしまった。

「なら丁度いい。これからは私がお前の特訓に付き合う」

「ちょ、ちよつと待てよ。俺はISに関する事を教えてくれって言
ったんだぜ？何で剣道なんか」

箒の一言に納得がいかず思わず反論した一夏だったが、直後「剣
道なんか」という事が箒の逆鱗に触れてしまった事を思い知り、激
しく後悔した。

「『剣道なんか』？なるほど、一夏。お前にとって剣道とは既にあるような」
「ち、違っただ筈！その、なんて言うか…だ、だから言ったろ。何で剣道を…」

額に青筋を浮べて自分を睨みつける筈の怒気に気おされながらも何とか自分の意見を言おうとする一夏。

それを見た筈は一息ついて落ち着くと、一夏の目をまっすぐ見つめ生真面目な表情で話し始めた。

「これは私の個人的な考えだが、ISの決闘 すなわち戦いとなれば、それなりに武器も使うのではないか？私の記憶が確かなら千冬さんも第一回のIS世界大会では刀型の武器を使用していたはずだ。それに、どうやらお前は総合的に体が鈍っているようだ。その点でも剣道を特訓内容に組み込んで損は無いと思うのだが、どうだ？」

真剣な筈の言葉を黙って聞く一夏。

確かに、筈の言っている事は全て筋が通っている。

ISを扱うにはそれ相応の運動神経が必要であり、千冬も第一回IS世界大会「モンド・グロツソ」ではIS用の刀を武器にして戦っていたし、剣道をやっていた頃に比べて明らかに体が鈍っているのは当人も承知している。

それに、再来週のクラス代表決定戦で無様な姿を見せ付けるわけには行かない。たとえ「男でISを操縦できる」という特性があっても

も、操縦者として優秀でなければその価値はほぼゼロに等しくなってしまう。

「ISは扱えるものの、操縦者としては優秀ではない」。

そんな評価をつけられたら自分の身はどうなるか、想像できない事はない。

「分かったよ」

それだけいい、一夏は自分に気合を入れなおすと立ち上がる。

『…割り切れよ。今のお前はこの学園の生徒なんだから』

脳裏に響く、昨日の補講後に金寺に言われた一言。

その通り。今の一夏はただの男子高校生ではない。一人のIS

世界最強と謳われる機動兵器を扱っていく人間だ。

そうなった以上、弱いままで立ち止まる事は許せない。

「それでこそ私のよきライバルだ、一夏」

正面で竹刀を構える筈が、にやりと笑みを浮べる。

「一人の少年」から「一人の戦士」へなるべく、一夏は右手の竹刀を強く握り締めた。

3・自覚（後書き）

金寺と関わっていく事により、一夏はかなり人間として成長していきます。

原作でも、一夏を導くような男キャラがいれば一夏も立派に成長するんじゃないかと思って…

実際それが、金寺龍輔というキャラの誕生理由でもあります。

金寺のトラウマは、後々明らかにします。

次章では、【白式】を中心に進みます。

【白式】をかなり改造していますので、その点はご了承ください。

ヒントは、動力源です。

指摘、感想お願いします。

1・封印されし(前書き)

日本最大のIS事業会社、倉持技研から、金寺はとある依頼を受ける。

1・封印されし

数日後、一日の教務の後、手短に一夏の補講を終わらせた金寺が携帯端末を確認すると、一件のメールが入っていた。

送り主は、日本最大手のIS開発事業、「倉持技研」にいる知人の女性からだった。

From・前川麻美

お久しぶりです。

先日聞きました。IS学園の教師に正式になられたそうですね。おめでとございます。

つきましては、そちらの学園に在籍する織斑一夏専用ISに関して説明したい事があるので連絡しました。

出来れば、明日か明後日までに技研の第八研究室まで来ていただければ幸いです。

どうやら、倉持技研で開発中である織斑一夏専用機に関して、何か説明したい事があるようだ。

ちなみに前川麻美とは、二年前に金寺が倉持技研に臨時技術顧問として三ヶ月間在籍していたときに知り合った同年代の女性だ。

何かと関わる機会が多かったが、彼女から ひいては倉持技研から連絡がくるとなれば、それ相応のことだろうか。

そう判断した金寺は早速学園に外出許可をもらい、山梨県にある倉持技研へ向かう事にした。

山梨県甲府市の山間の一角。

そこに、倉持技研の本社兼ファクトリーは存在する。

中央本線などを乗り継ぎ金寺が本社に訪れたのは、日が沈みかけ、後二時間ほどで夜の帳が下りようとしている頃であった。

以前一時的に所属していた事もあってか、受付の人物に名前と用件を言うとすぐに通してくれる。こう見えて、金寺龍輔の人付き合いはかなり多いほうだった。

社内にある応接室に通され少しの間待機していると、そこへ紺色のスーツを着たセミロングの黒髪の若い女性が入ってきた。

「金寺さん！お久しぶりです、本当に来てくれたんですね」

嬉しそくに声を上げ、軽く頭を下げた彼女が前川麻美。ちなみに彼女、IS学園の第一期卒業生である。

「アンタが来てほしい、ってメールしたんだろ。特別用事も無かつたし、今日にしようと思ってな」

ぶっきらぼうにそれだけ言って、金寺は麻美へ対して手を差し出す。それに答えるように麻美は握手に応じた。

「それで、俺を呼んだ理由は？」

彼女が向かいのソファアに座つたのを確認し自分も反対側のソファアに座りながら、金寺は本題を切り出した。

途端に、麻美の表情は技術士としての真剣なものになる。

「実は：本社で開発する事になった織斑一夏専用機ですが、数週間前に「自分に機体の開発の一部を任せてほしい」と篠ノ之束から連絡がきまして」

「何？束から？」

予想外の名前が出てきた事に驚く金寺に対し、麻美もやや驚いたような顔になる。

「…お知り合いで？」

「一応な。で、続けてくれるか？」

「あ、分かりました。それで、その篠ノ之束が一時期機体を直に引き取り開発し、先日本社に届いたのですけど…その基本システムがとてつもなく複雑なもので…正直、私たちの手におえないんです」

「…束から何か説明は？」

「新システムを組み込んだ、って。それだけで…」

麻美からの説明を一通り聞き終え、金寺は視線を落として考え込むような動作をする。

新システム。その単語がやけに心の隅に引っかかる。

世界最大手の倉持技研の社員ですら手におえない新システム。未知なる物なのか、それともブラックボックス化しているものなのか、金寺ですら想像は難しい。

それ以前に、何故「世界初の男性IS操縦者」のデータ採取にわざわざ新システムを搭載した機体を選んだのだろうか？

そこには篠ノ之束の思考が関わっているのだろうか？

考えれば考えるほど謎が出てくるが、今自分がやるべき事はくだらない謎解きではない。

「…謎は放置しておこう。その機体はどこにある？」

「今から案内します」

金寺の要請を受けた麻美が、彼を機体のあるファクトリーに案内しようとして立ち上がる。

脳内の隅で思考を働かせつつ金寺は彼女の後についていった。

倉持技研は、本社であるオフィスのおすぐ隣にある大型のファクトリーの中に、多くの技術室が存在する。

織斑一夏専用機がある技術室は、ファクトリー内第八ブロックの28番室。第八ブロックの中の一番奥にあり、人の気配はほとんど無かった。

「実はその織斑一夏専用機、元は本社の欠陥機だったんです」

「どういう事だ？」

「言葉の通りですよ。…作ったはいいけど使い道が無い、といった類のだったんです」

それ以外にも近況報告など軽い雑談をし、金寺は麻美に先導されて分厚い鉄の扉の前へたどり着いた。

「暗証番号を入力しますので、少しよろしいですか？」

そう一声掛け、金寺が後ろを向いたのを確認し首に下げているカードをスキャン。そのあとに指紋印象と網膜認証を行い、セキュリティを一時的に解除する。

程なくして、重たい音とともに鉄の扉が重々しく開き始めた。

完全に開く前に二人は中へ入る。

部屋の中は、真っ暗といってもいいような暗さだった。麻美が先

立って数歩歩くと、生命認証が反応して薄暗い明かりが付く。

そして、“それ”が部屋の一番奥に鎮座していた。

「これが…」

「はい、そうです」

金寺が声を上げるのを聞き、隣についた麻美がにっこり微笑む。

「これが、織斑一夏専用機…純国製第四世代型、【白式】です」

白。

そんな言葉が、まず金寺の頭に浮かんだ。

彼の目の前で眠っている白式は、その白い体を跪かせ、主に忠誠を誓う騎士のようだった。

だがそれよりも、金寺の興味を引くものがある。

「第四世代型、ねえ…」

最近になって世界では第三世代型ISの開発、研究が進んできた。そんな中で机上の理論といわれている第四世代型ISが、いま目の前にあるのだ。

「それですが…第四世代型技術の展開装甲は、この機体の場合、武装にのみ使われていますので、完全な第四世代型ではないんです。正直、ネーミングは無理があると思っています」

苦笑気味に事実を話す麻美。

「なるほどな…そんじゃ、その『新システム』とやらを見せてもらいませんか？」

「ふふっ、かしこまりました」

自分の知る限りさほど敬語を使わない金寺の、変わった一言に思わず笑みをこぼした麻美は、【白式】の近くに備え付けられているモニターを操作。【白式】のOS及び基本性能を映す。

そこに表示される数々の文字。次から次へと情報が表示され、金寺がそれを一つ一つの確に読み取り、理解していくと、

「…ん？」

数秒後、金寺の眉がピクリと上がった。

「あ、気づきました？」

金寺の顔色をうかがいつつ、麻美は再度モニターを操作し、金寺が反応したであろう部分を表示する。

そこに表記されている一つの文字に、金寺は絶句した。

始めて見たものではない。見覚えがあるというレベルでもなかった。

むしろ、彼の記憶にこびりついていると言っても過言ではない。

“それ”は、ひときわ目立つ文字でモニターにこう記されている。

Twin Infinity System .

1・封印されし(後書き)

早速白式の動力魔改造。

この機体は、物語においてかなり重要なものになります。

2・姉（前書き）

織斑一夏専用機に搭載されている、驚きのシステムとは…？

2・姉

ツイン・インフィニティシステム。

ISの中核である動力源、インフィニティ・コアを二基搭載しそれらを同調させることで、その機体の出力を、コアを一基搭載している機体の二乗にするというもの。

だが、世界で“それ”を知るものは、僅か三人しかいない。

そして、金寺龍輔はそのうちの一人である。

その理由に関しては、ここでは割愛させてもらうが。

ともかく、ファクトリーの責任者 面識あり の許可をもらった金寺は、早速【白式】の調整を開始する。

機体の基本スペックを確認していくと、ある事に気づく。

「近接格闘戦に超特化している…【暮桜】と同じ類か…」

【暮桜】。

織斑千冬が第一回IS世界大会「モンド・グロツソ」にて搭乗し

た第一世代型ISである。

一瞬、心の中に懐かしい気持ちと複雑な気持ちが混ざり合ったが、金寺はそれを意図的に無視する。

よく見てみると、外見がかの有名な【白騎士】にも似ている気がしたが、どうせ機体の設計をチューンした人物の趣味だと思い、その考えも放置する事にした。

さて置き、倉持技研の面子と比べて、金寺はツイン・インフィニティシステムの扱いに慣れており、その特徴なども熟知している。そんな中で、一つの問題点が見つかった。

(同調率が低い…これでは機体性能を最大限に発揮する事は…)

このシステムで重要なのは、コア同士の同調率だ。

コアには一つ一つ個性のようなものがあり、そのものが意識を持っているといわれている。

そしてツイン・インフィニティシステムの力を最大限に発揮するには、そのコア同士が同調し、同調率が一定の値を超えなければ十分に性能を生かしきれない。

この、「コアの同調させる」というのが製作者曰く「実に苦勞に値するもの」らしく、篠ノ之束は同調を前提としていないコア同士

で試したが、全くと言っていいほど同調しなかったらしい。

実際、【白式】の場合はそれらと比べれば安定しているのだが、いかんせん不安定で性能を完全に発揮しきれない状態ではない。

明らかに欠陥機の域を出ておらず、そんな機体で大丈夫か、と思ってしまう。

しかし、こつも思つ。

ツイン・インフィニティシステムの力は、ある程度閉じ込めたほうが良いのでは、と。

二つのコア　　ツインコアによって発揮される【白式】の真の力　　もとい戦闘能力は、現行のISと比べても相当なものになるだろう。

そうなれば、【白式】及び一夏が何らかの危険にさらされる事は目に見えている。

篠ノ之束がそれを考慮しないと金寺は思えない。

…だが、生憎彼女へ連絡をとる手段は無い。

よって、この思考も一時的に脳内から放置する事にした。

思考回路を切り替えた金寺は、今やるべき事　　【白式】の最終完成へ向けての作業を開始した。

「出張？金寺先生が？」

「その通りだ」

次の日の朝、HR終了後に千冬から「金寺は出張でない」という旨の説明を受けた一夏は、思わず反射的に聞き返した。

正直、一夏にとっては困る。あれから少しずつISの勉強をしてきたものの、未だに一夏一人では分からない点が多く、そのため金寺による補講の時間はとても意義のあるものだった。

だが、金寺が短期の出張に出たという事は、その意義ある時間が当分なくなってしまう。

「別に悪い事ばかりではないぞ。私との特訓の時間が多く取れる」

一夏の横で箒がそんな事を言っているが、実際一夏のISに関する知識がまだ生半可なのは彼女にも若干原因がある。

箒のレクチャーは、大半が剣道の特訓。今後に控えるクラス代表決定戦に向けてはいいものかもしれないが、知識の面ではあまり良いものではない。

最も、一夏はそのクラス代表決定戦へ焦点をあわせているので文句を言っていないが。

「でも、どうして今…」

「お前のためだ、織斑。アイツは倉持技研の依頼を受けて、お前の機体の最終調整を行っているらしい」

「俺の、機体のために…?」

驚いたような一夏の一言に首肯し、千冬は軽く息を吐くと話を続けた。

「どうやら、お前の機体は向こう（倉持技研）でもてこずるほどの代物らしくてな。…まあ金寺のことだ、すぐに帰ってくるだろう。お前は来週の決定戦へ向けて自分なりに頑張る事だ」

それだけ言うと、千冬は身を翻しその場から去っていく。

その後ろ姿を、一夏は羨望のようなまなざしで見つめていた。

「…一夏?」

「ん?どうしたんだ?」

「…お前は変わっていないのかな」

呆れ半分羨ましさ半分、といった様子で呟く筈に対して首を傾げた一夏だったが、直後彼女の思考をある程度理解した。

それは十中八九、「姉」に関する事なのだろう、と一夏は推測する。

一夏も箒も、姉が一人いる。
互いの姉は二人と同じ様に幼馴染なのだが、その弟或いは妹が抱いている感情はかなり違った。

一夏が姉 「織斑千冬」に抱いている感情は、「尊敬」である。

物心ついたときから、一夏にとって姉の千冬は絶対無敵の存在であり、常にその背中に追いつきたいと思っていた。

最も、傍から見ている箒にとっては、彼が『将来は姉と結婚したい』と本気で言い出しそうで正直不安なのだが。

箒が姉 「篠ノ之束」に抱いている感情は、「複雑」と表現したほうがいいだろう。

この世にISを生み出した束は、間接的に箒 篠ノ之家が一夏と離れる原因となった。

理由は、日本政府による「重要人物保護」という、極めて真つ当で当然のものだったが、当時小学4年生だった箒はいかんせん納得できなかった。

よって箒は、少なくとも姉の束に良い感情は持っていない。

だがそれは「憎悪」や「嫌悪」と言えるものでもないため、「複雑」なのである。

最も、姉を引き合いに出される事を極端に嫌がることを考慮すれば、それは十分「嫌悪」に近いのかもしれないが…。

「…まあそうだな。それより、今日も特訓やるんだろ？ やつと感覚戻ってきたからさ、早く行こうぜ」

「…っ！ わ、分かった…」

さわやかな笑顔で箒の手を握り剣道場へ向かおうとする一夏と、それに思わず顔を紅くする箒。

姉に対する感情は全く持って違うが、それに二人の仲は関係ないようである。

2・姉（後書き）

最近、評価が上がっていたりすると、何だかとても嬉しくなります。初めて感想をもらったときは、本当に嬉しかったです。

それ以降、読んだ小説には出来るだけ評価をしたり感想を書いたりするようになりました。

小説を書く身の気持ちがかかったとでも言うべきなんでしょうかね。

指摘、感想お願いします。

3・戦闘円舞曲（前書き）

ついに、クラス代表決定戦の日になる。
だが、一夏の専用機が到着しておらず…

3・戦鬪円舞曲

日が経つのは意外と早いものであり、ついに一年一組クラス代表決定戦の日が訪れた。

それにあたって、現在一夏は特注のISスーツを身にまとい、許可をえた筈、千冬とともに第二アリーナの第一カタパルト内にいるのだが…。

「…あの…織斑先生…？」

「…なんだ」

「俺の機体は…」

「…私に聞くな」

一体どういうわけか、一夏の専用機が到着していないのだ。おまけに金寺からも連絡は一切無い。すなわち、彼らは現状を全く把握できておらずどうしてよいかも分からないのである。

訓練機である【打鉄】を準備すべきか。

千冬の脳裏にそんな考えがよぎったその時

『お、織斑先生！』

第一カタパルト内に、第二アリーナ総合管制室にいる真耶の声がスピーカー越しに響いた。

『来ましたよ、織斑君のISが！』

「本当か！？」

待ちに待った知らせを聞き、思わず千冬は声を張り上げる。

それと同時に、カタパルトの重い扉が開き、そこから一つの大きめなコンテナとそれを引く一人の青年が姿をあらわした。

「悪い、待たせたな」

一夏たちの目に映った“片手でコンテナを引っ張っている”その青年こそ、金寺龍輔である。

「せ、先生……？」

「馬鹿者、連絡もせず一体今まで何をしていたんだ？」

その光景に呆然としている一夏と箒を尻目に、焦燥からか、千冬は思わず苛立ちを含んだ声を出してしまう。

「黙れ。俺だって油を売ってたわけじゃねえ。…それはともかく、時間は無いようだな」

千冬の言葉を一蹴し、金寺は大型モニターへと視線を向ける。

そこには、既に自身の専用機を身にまといアリーナ上空にいるセ

シリア・オルコットの姿があった。

「…仕方がねえ。フォーマット 初期化と最適化ファイティング処理は戦闘中にやるか。…さて、こいつがお前の相棒だ」

そう結論付けた金寺はコンテナのハッチを開くためにコンテナ備え付けのコンソールパネルを操作する。

コンテナが重々しい音を立てながら開き、中にあるISが姿を晒す。

「これが…」

奇しくも、それを初めて目に収めた瞬間に出た声は、金寺と同じだった。

「ああ、こいつがお前のIS…【白式】だ」

コンテナが完全に開き、主に忠誠を誓うような白き機体が、三人の目に入る。

機体を司る飽くなき白は、彼らから言葉を失わせるのには十分だった。

「よし、一夏、時間が無い。早急に装着を済ませるぞ」
「分かった」

若干せかすような千冬の言葉を聞き、静かに【白式】へ触れた一夏は、

頭蓋内に、半瞬鋭い痛みを感じた。

「っ!?!」

コンマ0.1秒。前触れ無しに襲い掛かってきた痛覚に、一夏は思わず頭を押さえてその場にうずくまりそうになる。

「どっした一夏!?!」

「いや、なんでもない」

それを見た筈が心配そうに尋ねたが、一夏は極力表情を崩さず、

【白式】から手を離さないまま答えた。

「もしかしたら、一瞬脳が情報量に耐えられなかったんじゃない

のか？」

この一部始終を見ていた金寺が、そんなことを呟く。

「こいつは、今までのISとは一線を越えてるからな」

「どづいつ事だ？」

千冬の質問に答えず、金寺は一夏に一つ質問をした。

「一夏。…初めてISに触れたときに、今みたいな痛みは来たか？」

「…いや、なんとも…」

それを聞いた金寺は満足そうに話題を切り上げた。

一方、一夏は不思議な感覚にとらわれていた。

先ほど一瞬感じた、脳内に剣を突き刺すような痛みは消え、今は膨大な情報が頭の中に流れてきた。

それも、試験場で成り行きで触れたときは全然違う。その時は比べ物にならない情報量が頭の中に流れ込んでいるのにもかかわらず、何故か“それ”を自分は全部理解できていた。

それだけではない。

一夏の頭の中に、何かのビジョンが流れ込んできた。

「何…だ…？」

目が回りそうになる一方で、ビジョンが鮮明になっていく。

蒼い空に浮いている自分、数えるのもバカバカしいほど多い“何か”が向かってくる…

競技場か？前方にISがいる。“それ”に自分が猛スピードで迫っていく…

ここで、ビジョンと情報の奔流が終わった。

「…大丈夫か？」

千冬の声に、小さくコケリと頷く事しか一夏は出来ない。

猛烈な違和感が、彼の意識を支配していた。

「だったらいい。とっとと装着を済ませるぞ」

金寺が言つと【白式】の装甲が開き、搭乗者を認めたように受け入れる姿勢をとった。

ぎこちない動作で装着を行うと、彼を受け入れるかのように開いていた装甲が閉じ、一夏はまるで自分の体と【白式】が融合していくような感覚にとらわれた。

「背中を預ける。そうだ、座る感じでいい」

指示を受けながら、一夏は準備を進めていく。

A c c e s s .

「後はシステムが最適化する」

S e t u p S t a r t .

人口音声と共に、セットアップがオートで進行。

そして、一夏は前方のモニターに提示される情報に目を通し、そ

の名を見つけた。

白式・

表示される空間投影モニターが無数に表示されては、消えていく。その空間投影モニター越しに、総合管制室にいる真耶が一夏に確認を取る。

『ISには絶対防御と言う機能があつて、どんな攻撃を受けても、最低限、操縦者の命は守られるようになっていきます。ただその場合、シールドエネルギーは極端に消耗します。わかっていますよね？』

114

絶対防御。

ISには、どれほど追い込まれても、パイロットの生命は維持できる装置がある。

最も、金寺はそのようなものを信じ込んでいないが。

(相手は……)

画面左上に表示された、敵方の情報。

名称 【ブルー・ティアーズ】。

『セシリアさんの機体は、【ブルー・ティアーズ】。遠距離射撃型のISです』

真耶の説明を聞いている最中に、【白式】が一夏に同調し、一夏を理解していく。

「これが……俺のISになったのか……」

体に馴染んでいく様を感じながら、一夏はふと呟く。

「一夏、いけるか？」

千冬のかけた言葉に一夏は首肯し、カタパルトの足場に乗る。

「それと、戦闘中は常に戦況を把握している。焦らず、慌てず、自分の勝負に持ち込め。私がお前に言えるのはこれぐらいだ、一夏」

姉の頼もしい言葉に、一夏は思わず笑みをこぼした。

目の前で開いていくカタパルトハッチを見つめると、その先には、青空が広がっていた。

これから自分があそこへ向かって飛び出して戦闘を行うと思うと、よく分からない緊張感が伝わってくる。

「篤……行ってくる」

「ああ……勝って来い」

横にいる篝との短い会話を終え、そして、意識を前方に広がる快晴の青空に向ける。

「…よし、行きます！」

一夏がそう言うと、足場が大きく前方へ滑走。スラスターを噴かせた【白式】をカタパルトから射出する。

いよいよ、実戦だ。

背中の中の四つの噴射口で姿勢制御を行い、既に空中で待機していた敵　セシリア・オルコットと向き合う。

「あら、一応来ましたのね」

「来ないとも思ってたか？」

自身満々と言った風で言葉を紡ぐセシリア。
その瞳は、確実に自身の勝利を確信している目だった。

「さて置き、先日貴方は『手加減は要らない』とおっしゃいました。…発言を撤回しようとは思いませんか？」

「…今更前言撤回するわけ無いだろ」

真正面から反抗の姿勢を表した一夏を、セシリアは鼻で笑う。

第一、セシリアは右手の主武装のセーフティを既に解除している。最初からやる気満々のようだった。

「そう……それはそれでよい心掛けですわ。それなら……」

その言葉と同時に、セシリアは右手に携えている大型のスナイパーライフルを構える。

一瞬遅れて、ディスプレイに赤い枠の警告文が現れた。

警告 敵IS、射撃体勢に移行。
トリガー確認、初弾
エネルギー装填

(敵IS、射撃体勢に移行……来るか！)

「遠慮なくいかせてもらいます！」

全体のサイズに反して、長い銃身を持ったその兵器 六七
口径高エネルギーレーザーライフル《スターライトmk?》から、
青白い閃光が飛び出した。

まさに間一髪。

一夏が彼女の奇襲攻撃を予測していた事もあり、直撃という無様な事態だけは避けられた。

しかし、僅かながら光条は【白式】の装甲をかすり、シールドエネルギーを削る。

流石の一夏もその場にとどまるような真似はせず、更に光線が放たれるのを確認した後加速して回避行動に移った。

「さあ、踊りなさい。わたくしセシリア・オルコットと【ブルー・ティアーズ】が奏でる円舞曲で！」

間髪おかずにそのようなことを言いつつ、セシリアは《スターライトmk?》による狙撃で一夏を翻弄していく。

一夏もそれを避けようとアリーナを飛び回っているのだが、操縦者の技量の差ゆえか直撃ないしかする事が多かった。

しかし、このままでは埒が開かない。遠方から来る敵弾を避け続けたところで、そこに一切のチャンスはなく、それは出来の悪い曲芸にすらなり得ない。

「クソツ…！何か武器は…！」

回避行動の最中ながらも、何とか反撃に転じようと一夏は【白式】^{プリセット}の基本武装を確認したが、

「ってこれだけかよ！」

一夏が素っ頓狂な声を上げたのも無理は無い。

【白式】に搭載されている基本武装は、近接特化ブレード一本のみだった。

(…でも、やるしかないな。…来い！)

そう念じた一秒後、一夏の右手の中で淡い光がはじけ、近接特化ブレードへと姿を変える。

柄から刃まで薄い灰色なそれは、形状が日本刀に似ているような気がした。

ともかく、その刀を片手に、一夏は狙撃をかくぐってセシリアに接近しようとする。

「遠距離射撃型の私に、近距離格闘型の装備で挑もうとは……笑止ですわっ！」

そんな事は一夏も百も承知だ。

いまだに降り注ぐ青白い光条からは完全に逃れられず、シールドエネルギーもかなり減少してきているが、戦闘開始直後と比べれば彼が操縦にやや慣れたという事もあり被弾数は減少している。

だが、それでもシールドエネルギーは既に四割近く削られている。

一夏としては懐に飛び込んで早めに決着をつけたいところだ。

少々焦り始めた彼の脳裏に、戦闘前の千冬の言葉が響く。

『常に戦況を把握している。焦らず、慌てず、自分の勝負に持ち込め』

…危なかった。

もしこの言葉を思い出さずに無理にでも彼女の懐に飛び込んで行っていたら、自分は間違いなく落ちていただろう。

その証拠に、

「この【ブルー・ティアーズ】を前にして初見でここまで耐えたのは貴方が初めてですわね。でも……そろそろファイナーレと参りましょう！」

【ブルー・ティアーズ】の腰背部のサイドバインダーが四つに分離し、その先端から《スターライトmk?》と同じように青白い光条が飛び出していた。

これが、【ブルー・ティアーズ】の機体名にもなっている兵装
第三世代型・自立機動ライフルビット《ブルー・ティアーズ》。
操縦者の思考制御によって、オールレンジ攻撃を行う無線機動兵装だ。

それらが一夏の周囲を自由自在に飛び回り、彼の死角からビームを放つ。

一夏は何とか見極め避けようとするが、四方向から迫ってくる光条に早々対応できるわけも無く。

背後から、ビームによる奇襲を受けた。

「ぐうっ……!?!」

苦悶の声を漏らしながら、一夏は後退。シールドエネルギーも大幅に削られる。

「あら、耐えましたのね。中々頑丈なようですね、何よりですわ」

意外そうな声をあげるセシリアの声も、余裕が一切無い一夏の耳には入らない。
しかし、

(……………ん?)

何かが、一夏の心に引つかかった。

四方八方から来る光条をよけるのに精一杯なのに、何か「違和感」を覚えた。

そして彼の視線が《ブルー・ティアーズ》を操っているセシリアに向けたとき、「違和感」は明確な「疑問」へと変わる。

(…………… どうしてライフルで撃つてこない？今なら俺を確実に狙い撃てるはずなのに……)

《ブルー・ティアーズ》がアリーナ上空を駆け巡っている間、セシリアはほとんどその場から動いていない。

そして、不意に《ブルー・ティアーズ》による射撃が止む。セシリアが《スターライトmk?》で狙撃を開始したのは丁度そのときだった。

当然回避。

直撃コースから外れ、再び思考を開始する。千冬の言葉が脳裏に残っていることも幸いし、冷静に一夏はそれについて考えてみる事が出来た。

少々の思考の末、たどり着いた一つの結論。

(…まさか)

それを確認するため、一夏は意を決し、彼女の懐へ飛び込む機会をうかがう。

飛来する光条を避けて、避けて、避けて。

そして、そのときが来た。

ほんの一瞬、《ブルー・ティアーズ》による射撃が、ピタリと止んだのだ。

今だ！

キツとセシリアを見据え、一夏は今の【白式】が出せる最高のスピードで彼女へ向かっていった。

それを見たセシリアの表情が、青くなっている。

「ティアーズ！！」

プライドをかなぐり捨てたような素っ頓狂な声をあげながら、セシリアは狙撃体制に移るのを止め、再び《ブルー・ティアーズ》に指示を出す。

その青白い光条に阻まれ、結果的に一夏の奇襲攻撃は失敗したものの、彼の「疑問」は「確信」へと変わっていた。

（やっぱりな。彼女はあのビット兵器と狙撃を同時に行えない！）

実際のところ、一夏の確信は見事に的をいっている。

ビットの思考制御にはかなりの集中力が求められる。イギリス国内でBT兵器の適正が一番高いセシリア・オルコット。それが、彼女がこの学園に来た理由である。ですら、ビットを操作する

際には思考制御に集中してしまい他の動作が一切出来なくなる。

一見無いようで、あった僅かな隙は、それだけではない。

一夏の動きを見たセシリアは、咄嗟に四基の《ブルー・ティアーズ》で弾幕を張り、一夏の接近を阻もうとする。

「一つ覚えですわね！」

先ほどと同じように、蒼白いビームが網のように張り巡らされ、一夏に襲いかかる。

四方八方からの接射に、一夏はなす術もなく散る。

はず、だった。

「そこだっ！」

刹那、《ブルー・ティアーズ》の内の一基が、爆煙と金属片へ姿を変えた。

横に振るった近接特化ブレードの一閃が、的確に一基の《ブルー・ティアーズ》を捉えたのだ。

予想だにしない事態に、セシリアの目が驚愕に開かれる。

「見切ったぞ！《ブルー・ティアーズ》！」

一夏は気付いた。

自由自在に動き回るレーザービットが、常に一夏の“死角だけ”を狙っている事を、見切ったのだ。

《ブルー・ティアーズ》の射線は、一夏の反応が一番遅くなるところから放たれている。

それは、気付かなければ死角だが、気付けば死角でも何でもない。ただの動き回るのだ。

一瞬であれ硬直をさらしたセシリアを、一夏は見逃さない。

完全に《スターライトmk?》と《ブルー・ティアーズ》の射線が止まった一瞬の隙を突き勢いよく接近。

自分の距離に持ち込み押し切るべく、刀の斬撃をセシリアに向け

て振るおつとして

「かかりましたわね！」

【ブルー・ティアーズ】の腰部に装着されている銃口が、一夏を捉えた。

背後に、悪寒が走る。

「《ブルー・ティアーズ》は六基ありましてよ！」

そう。

《ブルー・ティアーズ》は、四基のレーザービットだけでなく、二基の弾道ミサイルビットも兼ね備えているのだ。

彼は完全に油断していた。

放たれた弾道ミサイルから簡単に逃れる事が出来るわけが無い。

そして。

【白式】が。

一夏が。

白銀の光に包まれた。

4・ツインインフィニティシステム(前書き)

爆発と光に包まれた【白式】。

その時起きた変化とは

？

4・ツインインフィニティシステム

「一夏あつー!!」

第二アリーナ総合管制室にて。

モニターに映る一夏を包み込む爆発に、箒が悲鳴に近い声をあげていた。

この光景を見れば、一夏が撃墜されたと思うだろう。

だが、

「…全く、タイミングが良すぎじゃねえの?」

「確かにそうだな。まあそれも、勝負師としての実力の内だろう」

あろうことか、金寺と千冬はのんきにそんな事を呟いていた。

だがそれは、まだ一夏が健在である事を確信しているからに他ならない。

「
終わったぜ、フォーマット初期化と最適化処理。フィッティング“封印解除”の時間
だ」

爆煙が晴れた場所に、それはいた。

それは先ほどまでの【白式】とは少々違う。

各部装甲が全体的にスリムな形状となり、両腕並びに脚部の装甲にブレード状の突起が付く。

背部の二基の大型ウイングスラスタは、大型の噴射口が一つと、補助の小型の噴射口が一つ付き、全体で四つの噴射口が露になる。

先ほど【白式】を包み込んでいた白銀の光が細かな粒子となり、その全身を覆っている。

そして、その空間投影モニターに映る、フォーマット初期化と最適化処理の終了を告げる文。

ツイン・インフィニティシステム搭載機、【白式】が、本当の姿を見せたのだ。

「まさか、一次移行！？今まで貴方、初期設定だけの機体で戦っていたというの？」

上空のセシリアが驚愕をあらわにしていたが、一夏は大して気にとめなかった。

試しに腕を動かし、近接特化ブレードを少々振ってみる。なるほど、どうやら完全に【白式】が一夏のものになったという事もあり、先ほどよりは反応速度が早くなっている気がした。

空間投影モニターに目を通すと、ある事に気づいた。表示されている【白式】の唯一の基本武装。それは先ほどまでは

ただの「近接特化ブレード」だったのだが、その名称が変わっていた。

刀の名は

《雪片ゆきひら弐に式しき型がた》。

(今まで守られてるだけだった…けど、もうそれも終わりだ)
はあ？貴方、何を言って

心中でそう独語した時、何故か頭蓋内にセシリアの声が響いたが、今の一夏の意識はそちらへは向いていなかった。

正直、自分は千冬姉に頼りすぎた気がする。

揃って親に捨てられたにもかかわらず、自分ひとりで養おうとしてくれた。

食費、学校費、生活費。全て姉が稼いでくれた。

いつしか姉に頼ってばかりの自分が嫌になり「迷惑を掛けすぎている」と引け目をとるようになってしまった。

最も、当の本人は迷惑などこれっぽっちも思っていない、それが当然と言わんばかりなのだ。

だからこそ、中学校三年間はほぼ一年中アルバイトに励み、少しでも姉の負担を軽くしようとしたのに

もう自分は、受身だけの人間ではない。

「これからは俺が 俺が千冬姉を、家族を、守ってみせる！」

自身の決意を如実に表した言葉。

それが、一夏の「理想」であり、「願い」であった。

実体剣だった《雪片式型》が、眩い光を放つビームソードを展開する。

先ほどと比べても段違いな速度を出し、一夏は【ブルー・ティアーズ】へ向け突進していく。

（【白式】が俺に伝えてくれたんだ…！俺が【白式】に応えないでどうする！）

それにセシリアも反応。遠距離戦からの弾幕展開を試みようとする残った三基の《ブルー・ティアーズ》を自身の周辺に停滞させ、援護を受けながら一心不乱に連射する。

【白式】も、そこまでエネルギー残量があるわけではない。

塵が積もれば山となるように、シールドエネルギーは戦闘開始直後から減り続けていて、既に半分以下になっていた。

例えかすっただけでも、今の【白式】にとっては致命傷になるか

もしれない。猛突進するのを止め、丁寧かつ大胆にスラスターを噴かし、ビームの射線を避け、接近する機会を狙う。

ここまで撃ち続けていれば、やがて疲弊する瞬間が訪れる。狙うは、秒にも満たぬその好機。

そして。

《ブルー・ティアーズ》の一機が、不意に射撃を止めた。

同時、【白式】が淡い白銀の粒子につつまれる。

ワンオフ・アビリティ
単一使用能力《れいらくびやく零落白夜・発動・

一夏は再び、ビームによる猛攻の中へ身を沈める。道を塞ぐ光弾を避け、襲い来る弾丸にかすり、一夏はついに、セシリアの眼前へ躍り出た。

この距離ならば、《雪片式型》の一薙ぎが届く。逃してはならない、千載一遇の機会。

しかし。

「忘れたとは言わせませんわよ！」

再び、腰背部のミサイルビットの銃口が、目前の一夏を捉らえた。
再び放たれる、計四発の弾道ミサイル。

それに対し、一夏は。

「くっ……うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！」

急上昇。

決着をつける機会を得てもなお、一夏が打ったのは逃げの一手だった。こうなることを予想していたかのように。

「　　　っ！？」

そして、一夏は急降下。体にかかる慣性をものともせず即座に下降したのだ。

セシリアはそれを見て迎撃態勢に入るが、上方を見上げた瞬間、太陽光が目に入る。

光に目が眩み、またしても彼女に生じた、一瞬の隙。

既に一夏は、必殺の態勢に入っていた。

警告 インフィニティ・コア臨界点突破

が。

無機質かつ不吉なアラート音が、一夏、セシリア、金寺、千冬、
箒、真耶の耳に響いた。

『…なんだ？』

間の抜けたような一夏の声が総合管制室に響いた次の瞬間、何の前触れもなしに【白式】の左翼ウイングスラスタが小爆発を起こした。

「織斑君?!」

「一夏っ!」

真耶と箒が悲鳴を上げる。

左翼部から煙を上げた【白式】は、機体制御ができないらしく徐々に落下していった。

このままでは、何か嫌な事が起きる。

それはこの場にいる全員

特に金寺が思っていた。

「試合中断！セシリア・オルコット、一夏を救出しろ！」

即座に通信回線を開き、金寺がセシリアに対して声を飛ばす。

彼女は一瞬驚きを露にしたが、軽く頷くとスピードをあげて降下高度を下げていく【白式】の腕を掴み、何とか落下を阻止する。

『…大丈夫ですか？』

『俺はな…でも機体が無理みたいだ。…ありがとう』

『いいえ、どう致しまして』

現在、管制室のモニターには、【白式】の空間投影モニターと同じ事が表示されている。

そこには依然、《警告 インフィニティ・コア臨界点突破》という紅い文字が表示されていた。

「臨界点突破：オーバードロード？一体どういう意味だ？」

口元に手を当てて、考え込む千冬。

その横で、盛大に金寺が溜息をついていた。

実際のところ、金寺はこの事態をある程度予測できていた。

それゆえ、代表決定戦のギリギリまで技研で調整を行っていたのだがしかし、起きてほしくないという彼の切実な願いは完全に空回りしてしまったのだ。

「アイツは……」

金寺の呆れにも近い怒りは、この場にはいない。そもそも所在不明のある人物に向いていた。

結局、今日の試合は無効試合となり、【白式】の修復が終了次第

また試合を行う、という事になった。

そしてその日の夕刻、第二アリーナの第一カタパルト内にて、金寺が一夏と千冬に対してさまざまな説明を行っていた。

「そもそも何故、【白式】のコアがオーバーロードを起こしたんだ？」

至極真つ当な千冬の質問を聞き、金寺は【白式】の基本スペックをカタパルト内の大型モニターに表示する。

「問題の根源は、【白式】の稼動システムにある。…「ツインコア」、これを聞けば大体分かるだろ？」

「ツインコア？…まさか!？」

千冬の眼が、驚愕に見開かれ、金寺が静かに頷く。

対する一夏は話についていけず、新たに質問をした。

「あの…ツインコア、ってなんですか？」

一夏の質問に答えるために、金寺はモニターを切り替える。

表示されたのは、【白式】の図面の翼部に円状のメーターが現れているもの。

その両翼部分に表示されている丸型メーターを、金寺が指差す。

「言葉の通りだ。【白式】は二つのコアを一つのISに搭載している。俺たちはそう言うのをツインコアと呼んでいるが…その二つのコアを制御しているのが『ツイン・インフィニティシステム』だ」

「…『ツイン・インフィニティシステム』…？」

よく理解できない、といった表情の一夏を見つつ金寺は説明を続ける。

「『ツイン・インフィニティシステム』がツインコアを制御・同調する事により、生成されるエネルギーは二倍ではなく二乗になる」

いまだに首を傾げる一夏に、嘆息しつつ千冬が具体的に説明する。

「例えば、一つのコアの生成するエネルギー量を10とする。これが単純に二倍だ、と生成されるエネルギーは20だ。しかし、『ツイン・インフィニティシステム』によってツインコアが同調すると生成量は二乗化つまり…生成されるエネルギーが100になる」

「ひゃ、100!?!? って事は、機体性能がすごい事になるんじゃない?」

この例えで一夏も大体理解したらしく、思わず声を上ずらせていた。

それに頷いた金寺だったが、「だが問題点がある」と言いつつモーターを切り替える。

「この機体の場合、過剰に生成されたエネルギーの大半は、機動力と攻撃力に回っている。シールドエネルギーに関してはあまり効力は無いな。それに、『ツイン・インフィニティシステム』を完全に稼働させるには、ツインコアの同調率が大事になるんだ」

「同調?」

「ああ。コアは個別に個性みたいなものがあって、それぞれに意識があるといわれている。まあ現実そうなんだろうが、だからこそ同調させるのは至難の技なんだ。最初から同調を前提にしてコアを作れば問題ないが……今【白式】に搭載されているツインコアは、こいつを改造した野朗曰く『既存のコアの中では一番良い組み合わせ』らしい」

「こいつを改造した野朗……？」

「【白式】は元々、倉持技研内で放置されてた欠陥機だったらしい。それを篠ノ之束が引き取って魔改造。そもそもって今ここにあるわけだ。ちなみに俺が出張していた理由は、こいつの最終調整のためだ。何とか同調を安定させようとしたんだが……上手く出来なかった」

一夏が溜息をつく金寺の顔をよく見ると、僅かながら目の下にくまが出来ていた。

金寺が出張に行ったのは一週間前。となると、ほぼ一週間通してほとんど睡眠もとらず【白式】のツインコアの調整を続けたのだからか。

そう思うと、とてもありがたいし、とても申し訳ない。

「気にすんな、機械弄りは趣味の一つだからよ」

一夏の思った事が表情に表れていたらしく、表情を変えずに金寺が彼にしか聞こえないようにぼそりと呟く。

「そうすると……先の戦闘でのオーバーロードは、このツインコアが原因、という事になるな」

モニターを眺めつつ、千冬が小爆発の原因を推測する。
金寺はそれに首肯すると、モニターに戦闘のVTRを映す。

その下には、ツインコアの同調率が表示されていた。
戦闘開始直後は、52パーセント。

「…完全安定領域は大体65パーセント以上だ」

その後も同調率は不安定で、53から58パーセントを前後する。
この間に一夏が《ブルー・ティアーズ》の内の一基を叩き斬った
が、そのときの同調率は58パーセントだった。

そして弾道ミサイルが命中する直前、突如同調率が跳ね上がった。
同時に、【白式】の周囲に淡い白銀の粒子が舞う。

このときのツインコアの同調率は、

「68パーセント!?!」

フォーマット フィットینگ
「初期化と最適化処理終了したのと同時だな…」

どうやら、完全に【白式】が一夏のものとなったのと同時に、同
調も安定するようになったらしい。

場面は変わり、一瞬の間を見つけた一夏が、セシリアの懐に飛び
込んでいく。

セシリアは弾道ミサイルを放ち迎撃したが、一夏は急上昇する事
で即座にそれをよけ、即座に急降下して必殺の一撃を食らわそうと
する。

そして、ツインコアがオーバーロードを起こし、【白式】の左翼
が小爆発を起こす。

コアの同調率が完全安定領域に到達して以降の戦闘の様子を見た千冬は、こう分析した。

「機体の機動力もツインコアの同調率と正比例するようだな。一夏が急上昇と急降下を行ったときは同調率が70を超えている…」

あの瞬間、ツインコアの同調率は右肩上がりになっていき、最終的にこの戦闘での最高同調率は、73パーセントだった。

その最高同調率を記録したのは一夏が急上昇から急降下に転じた直後であり、次の瞬間ツインコアが負荷に耐えられずオーバーロード起こし、同調率は恐ろしい勢いで下がっていったのだが。

「…結局いまだに欠陥機なんじゃ…」

一通り事を理解した一夏は、現在右手首にて待機形態　ガン
トレットとなっている【白式】を見つつ呟いた。

一夏の述べた事実には、カタパルト内を嫌な沈黙が支配する。

それを壊すように盛大に嘆息した金寺が、メモリースティックに【白式】の全スペックをコピーした。

「一応、安定させるための後付装備でも造ってみるわ。それまでちよっくら辛抱してくれよ」

「わかりました」

どうやら、金寺龍輔の悩みの種は尽きそうに無い。

それから数時間後、セシリアは自室でシャワーを浴びていた。

白く透き通った肌と、整ったプロポーションは、年相応でない大人の女性の色気を感じさせるには十分である。

先の戦闘からすぐシャワールームに入ったのは、戦闘でかいた汗以外に、自分の中でうずめく不思議な感情を洗い落としたかったからなのだろうか。

正直、本人にも分からない。

(……………何故、こんな気持ちになるのかしら)

それはとてもめぐるしくて、訳が分からず、だからといって簡単に放置していいようなものではなかった。

(……………私が、負けそうになるだなんて)

勝者は、織斑一夏。

セシリアはそう認識していた。

もし、彼のISが不具合を起こしていなければ、確実にあの太刀筋で敗北していた。

手加減はいらないからな。

…今更前言撤回するわけ無いだろ。

セシリアは、一夏の言葉を真に受けていた。

手加減せずに、力の差を見せてやる、といわんばかりに全ての力を出し切って、策略を立て、駆け引きを行い、負けそうになった。

納得できるわけが無い。

勝とうが、負けようが、白黒はつきりしたいと思う。

それに、

これからは俺が

俺が千冬姉を、家族を、守ってみせる！

彼のISが白銀の粒子を帯びていたときに、聞こえてきた決意。それが彼の本心である事は、何故かすぐに分かった。

彼 織斑一夏の瞳に宿っていた信念の光は、自分の父親と正反対だった。

セシリア・オルコットは、イギリス国内でも有名な名門貴族のお嬢様だ。

その母は、尊敬に値する人物だった。

ISが発表される以前から、名門家の主として、様々な会社を経営し、数多の成功を収めてきた。

厳しくも、凛々しいその姿は、幼かった少女が憧れを抱く対象だった。

逆に、父は尊敬に値しなかった。

簡単に言えば、セシリアの父親は、婿入りした男だった。

常に母の機嫌を気にし、常に媚びるような真似をしてきた父親を見ていた少女が、『将来、情けない男とは結婚しない』といった感情を抱くようになったのは、ある種当然の成り行きだったのかもしれない。

だが、それも全て過去の話。

三年前、イギリス国内で、大規模な列車横転事故が起きた。

この、未曾有の事故の死亡者は400人以上にのぼり、その中にオルコット夫婦はいた。

一部では、無差別テロなのではないかといわれているが、事件現場が悲惨すぎるゆえ捜査もそれほど行われず、事故として処理された。

最も、何故その日に限って別居状態だった両親が一緒にいたのか不思議だったが。

それ以降、セシリア・オルコットの日常は大きく変わった。両親を亡くし、残ったのは、莫大な財産のみ。

当然の如く、それにつられた者たちが、彼女に群がってくる。それを避けるため、勉強に勉強を重ね、汚い大人たちから遺産を守ってきた。

ISの適性検査でAが出たのは、その中での偶然の産物だった。

結果的にそれが功を奏し、財産・国籍保持を条件に、彼女は国家代表候補生になったのだが。

そして、BT兵器のデータサンプリングのために日本に来た彼女は、彼と出会った。

最初は、いくら成り行きで入学する事になったとはいえ、ろくに学ぼうともしない彼に失望していた。

しかし最近は積極的に学ぼうとする姿勢が現れて、自分の元に勉強を教わりにくることもあった。

(……織斑一夏は、違うのかもしれない)

そして、今日。

セシリアは、一夏の決意を聞いた。

強き志を持つ一夏の中に、セシリアは、自身が求める何かを見つけたような気がした。

(……知らなければ)

もっと、彼のことを。

4・ツインインフィニティシステム（後書き）

さて、第二章終了です。

セシリアにまだフラグは立ちません。本作の一夏は、じっくり時間を立ててフラグを建築していきます。

それゆえ無効化される人物も出てくるわけですが、それはまた後の話。

次章では、セシリアとの再戦と【白式】関連を中心にしていきます。

指摘・感想があれば、宜しくお願いします。

1・関係（前書き）

代表決定戦が延期になった後の、とある一日。

1・関係

「 というわけで、クラス代表決定戦は一週間後にまた行う」

三日後のSHRにて、千冬はクラスの面々にその旨を伝え、帰りの号令を済ませた後一夏を呼び出した。

「一応、金寺がお前 もとい【白式】の専属整備士に付く事になった。何かIS関連で分からない事があれば遠慮なくあいつに聞け。金寺は、頭脳の面に関しては私をはるかに超越しているからな」

それを聞いて頷いた一夏の元に、一人の生徒がやってきた。

「一夏さん、少しいいですか？」

「オルコットさん……」

その生徒は、先日戦った相手、セシリア・オルコットだった。

「機体の方は大丈夫ですか？」

「ああ、それをこれから確認しに行こうと思って。なんか俺のISは特別みたいでさ。それより、オルコットさんのほうは……」

その続きを言おうとして、一夏はセシリアに制された。

「わたくしなら万全ですわ。後、わたくしの事は名前で呼んでも構

いませんわ。それと、」

そう言つと、セシリアはまっすぐと一夏を見据え、はっきりと言
う。

「次こそは、白黒つけましょう。お互いに全力を出して、一
夏さん」

それは、戦士としての正々堂々とした宣誓だった。
これが、彼女があのかい以降ずっと思っていた事。

織斑一夏と勝負のけりをつきたい。

セシリアは一夏を見据えつつ、手を差し伸べる。
その意思が、一夏にもまっすぐ伝わったよう。

「ああ、分かってるさ。今度こそ勝負をつけよう！セシリア！」

快く、握手に応じた。

この光景を見て、一部の生徒が二人に拍手をしていたが、それは

また別の話。

一週間後。

グラウンドに集合した一年一組は、五列隊形で並んでいた。
“休め”の姿勢で待機している中、男子は一夏だけである。

この状況、正直一夏はきつい。
今、一夏を含めた一組の面子は、全員ISスーツを着ていた。

スクール水着、と例えられても不思議ではないISスーツの主な役割は、操縦者の微弱かつ繊細な体内電気信号を読み取って、それをリアルタイムにISの各部位にダイレクトに伝達する事だ。

それ故、余計な装飾はいらないので、しっかりと体のラインが忠実に現れるのである。

つまり。

織斑一夏は現在、水着少女の集団の中に、男一人放り込まれているような状態だった。

「では、これよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらおう」

五列隊形の先頭にいる千冬が、ざっとメンバーを見渡す。

「織斑、オルコット。試しに飛んでみせろ」

「わかりましたわ」

その声と同時に、列から一歩前に出たセシリアの耳につけた青いイヤークラスが淡く発光する。

周囲一帯が光に包まれた瞬間には、彼女は【ブルー・ティアーズ】の装備を終えていた。

先日ライフルビットを一基失った【ブルー・ティアーズ】だが、金寺の早業によって数十分で元通りになったらしい。

「織斑、お前もだ」

思わずセシリアに見入っていた一夏は、千冬の声で我に帰り、自分もISを装着しようとして一歩前が出る

ちなみに、【白式】を装備するのは、今回で三度目である。

（行くぞ、相棒）

目を瞑り、意識を右手首のガントレットに集中する。

反射的に構えた右手首のガントレットにある白金の半球から、二つの光のリングが出現し、一夏の体を包み込む。

その過程まで0.8秒。一夏は【白式】の装着を終える。

と。

） うっ！？（

頭蓋内に、何かのビジョンが浮かび上がった。

先日のように痛みや目が回りそうな感覚は無く、またしても一夏はそれを読み取る事が出来た。

手元から飛び出す粒子ビームが、次々と迫り来る黒い物体を打ち落としていく。

自らの振るった剣の太刀筋が、至近距離にいるISに命中している。

「……で、ビジョンが終わった。」

ちなみに【白式】のほうも、修復などは某専属整備士の早業によって完全に完了している。

二人が無事成功したことを確認してから、千冬が声を張った。どうやら、一夏が若干ふらついたのは気づかなかったらしい。

「よし。……飛べ！」

それを聞き、両者同時に飛翔。

先んじたのは、セシリア。目標高度に達した時点で、一夏から二メートルほどの距離を開けていた。

まだ一夏は、空を飛ぶ、という行為に慣れていないのが現状であった。

『織斑、遅いぞ。スペック上では【白式】の方が上なはずだ。…お

前は“特別なもの”を手にしただろうか？その程度では済まないはずだ」

「すいません…俺のミスです…」

一応、急上昇と急降下は先日習い、実行したのだが、いかんせん慣れない部分が多すぎる。

もっとも、今回のセシリアは《スターライトmk?》を展開してないので、先の戦闘より機動力が向上していると言っ点もあるだろうが。

先日の戦闘で、危なげなくこなして見せた自分が不思議すぎる。

ちなみに、現在のツインコア同調率は63パーセント。先日金寺が細工を加えたため、以前よりはだいぶましになったようだ。

「自分の前方に角錐を展開するイメージ……教本にはそう書いてありますが、イメージは所詮イメージ。自分のやりやすい方法を模索する方が建設的ですよ？」

先を行っていたセシリアが、速度を落として一夏に並ぶ。その心遣いに、一夏は感謝せざるを得なかった。

「セシリア……」

「差し出がましいようですけども……どうやら、あまり慣れていないように見えましたので」

「まあ、否定できないな」

数日前のクラス代表決定戦以降、セシリアの一夏に対する態度は変わっていた。

細かく言えば、接し方が柔らかくなってきたのだ。

正直、当初の態度があれだっただけに、最初はかなり違和感を覚えたのだが。

「その……よろしければ、放課後に指導して差し上げますわよ？」

「指導？」

「その時は、二人きりで……」

『織斑、オルコット。急降下と完全停止をやってみせる』

セシリアの言葉を遮って、千冬から通信が入る。

表情を引き締めると、セシリアは【ブルー・ティアーズ】のスピードを上げた。

「では、お先に」

そのままの勢いでいくらか進むと、九十度に近い角度で地面に降下。

ギリギリまで待ってからスピードを落とし、激突を避け、着地する。

(やっぱり上手いな…この前は何か互角に戦えたけど、彼女のいるところを見習っていかない)

改めてセシリアに尊敬の念を抱きつつ、一夏もセシリアの後を追おうとして。

刃が純白に煌めく刀を連想し、右掌に意識を注ぐ。

淡い白銀の光がはじけ、灰色の近接特化ブレード《雪片式型》が展開された。

「初心者にしては、まあまあだな。もっと早く展開できるようになれ。実際の戦場では、0.5秒が命取りになるぞ」

ツインコア搭載の【白式】の補助もあり、初心者にしては早いスピードで展開ができた。

これも、金寺が施した細工の一つである。

「次にオルコット、主武装を展開してみる」
「はい」

指示を受けセシリアが返答すると同時、ほんの一瞬青白い粒子が煌めく。

刹那、彼女の両手には六七口径高エネルギーレーザーライフル《スターライトmk?》が展開されていた。

…銃口を真横に向けて。

「速さは合格点だ。だが、一体どこに向けて銃口を構えている？」
「で、ですがこれはわたくしのイメージを固めるのに重要なこととして…」

「それで、味方を撃つつもりか？第一それでは早撃ちできないぞ」

「……………直します」

筋が通った千冬の言葉に何も言い返せず、セシリアは受け入れるしかなかった。

確かに、これでは速攻ができない。

「よし、次は近接武装の展開だ」

「えっ…あつ、は、はい」

続いて近接武装の展開を指示されたが、セシリアは何やら焦っていた。

《スターライトmk?》を収納し、【ブルー・ティアーズ】の基本装備である近接ショートブレード《インターセプター》を展開しようとしているが、セシリアの右手に青白い粒子自体は現れるものの、形にならない。

この武装の量子変換は、必然的に操縦者のイメージというものが重要になってくる。それゆえ、近接武装を展開するのに慣れないらしいセシリアはいかんせん戸惑っているようだった。

「…どうした?」

「す、すぐです…ああもうっ! 《インターセプター》!」

半ばやけくそ気味にセシリアが声を張り上げると、やっと刃渡りの短いショートブレード《インターセプター》が展開された。

武器の名を言いながら展開するのは基本中の基本であることから、セシリアが《インターセプター》を使い慣れていないのは一目瞭然

だった

そもそもこの武装はあくまで非常時のためにあるもので、セシリア本人もろくに展開したことがない。

「いくらなんでも遅すぎだ。もっと早く展開できるようにするんだな」

「じ、実戦では接近されないので問題ありませんわ!」

「ほう。先日の戦闘のダイジェストを今ここで語ったとしてもか?」
「…そ、それは…」

先の戦闘、 対【白式】戦 敵機の急上昇と急降下によってセシリアはもの見事に懐を取られてしまっている。

無論、何も言い返せない。

そしてセシリアの苛立ちおよび怒りの矛先は、その戦闘の相手に回り、

『貴方のせいですわ!』

『それはねえだろ!』

IS同士の通信で八つ当たりが来たが、予測していたので即座の突っ込みも問題なくこなせた。

1・関係（後書き）

新章開始。

若干金寺が空気ですが、今はまだ裏で一夏をサポートする役割なので仕方ないです。

2・白式(前書き)

【白式】を介して一夏が見た、謎のビジョンの正体は…？

2・白式

その日の放課後、一夏は金寺立ち会いの下で、【白式】の試験運転をしていった。

本来この時間は補講を行うはずだったが、だいぶ一夏が授業にもついていけるようになってきたため、折角なのでこの時間を【白式】のために使おう、ということになったのだ。

現在、第三アリーナを貸し切った状態で、【白式】を駆る一夏はアリーナ内壁に沿って航空している。

金寺の目的は、高速機動時でのツインコア同調率のデータ採取だ。一夏はすでに彼から「とりあえず飛ぶことだけに意識を注ぐように」と言われているため、言われた通り内壁にぶつからないよう、注意して航空している。

航空開始から数分後、金寺からの通信が入った。

『そろそろOKだ。降りてきてもいいぞ』
「了解しました」

その言葉を聞き、慎重に機体制御をおこないつつアリーナの地面に着地。すると、空間投影モニターに航空時のツインコア同調率が示される。

『だいがマシになってきたな。本来の力には程遠いだろうが、少なくとも前みたいにオーバーロードを起こす心配はない』

金寺の報告に一夏は一安心した。

また戦闘中にあのようなことがあつてはたまつたものではない。

『でも、いろいろと不可解な点もあるみてえだな』
『不可解な点？』

そのワードに疑問を感じ一夏が聞き返すと、空間投影モニターに【白式】の基本データが表示された。

一夏にしてみれば理解に苦労するような文字と数字の羅列だが、金寺はこの中からいささか不可解な点を見つけたらしい。

「えっと…何をどう見ていいやら……」
『まずここだ。ここは形態移行に関するデータその他が羅列してある』

彼の言葉と同時、データの羅列の一部が拡大表示される。

そこにはとあるパーセンテージがいくつかが表示されている。

『そいつらは一次移行ファースト・シフト後の稼働データなんだが…どうも本来の稼働値に到達していない。それどころか…よくよく見てみると一次移行したかも分からん状態なんだ』

「…はい？一次移行したのに一次移行してないのな？」

『そう理解してもいい。最もな表現をするなら「まだ完全に一次移行を終えていない」って感じだ』

「完全に終えてない…」

『まあ形態移行は時間がものを言うからな。こればかりは気長に待つかねえ』

通信を通して、溜息が混じった金寺のぼやきが聞こえてくる。

そういえば、この人には【白式】のロールアウト前からいろいろ助けてもらったな、と一夏は思う。

正直、自分関係の事に関してこんなに苦労してもらってよいのかと申し訳なく思う一夏の心境を知ってか知らずか、引き続き金寺はこれまで調べた【白式】に関する事の報告を続けた。

『あと、【白式】の拡張領域バースロットだが、単一使用能力ワンオフ・アビリティの《零落白夜》れいらくびやくに完全に使い果たされている』

「じゃあ、他の装備ができないって事ですか？」

『その通り。これからは刀一本で戦い抜くんだな』

悲しい現実を思い知らされた上ばっさりと斬り捨てられ、一夏は思わず肩を落とした。

『とはいえ、この《零落白夜》もたいした曲者だ。発動中の《雪片式型》は、コアによるエネルギー性質のもの全てを無効化する。

通称『バリア無効化攻撃』。』

流石の一夏も、この金寺の言いたい事は分かった。

簡潔明瞭に言い表せば、「一撃必殺」。

一太刀でもまともに命中すれば、恐ろしい威力を發揮するだろう。何せ、ISの防御の肝であるシールドバリアを削り取ってしまうのだから。

そんな事を考えていた一夏は、アリーナの入り口に灰色のIS
訓練機の【打鉄】うちがねを装備している人物を【白式】のハイパーセ
ンサーで補促した。

「…箒？どうして…」
『俺が呼んだ』

【打鉄】をまとっている黒髪ポニーテールの彼女は、紛れも無く篠ノ之箒その人だった。
どうやら、金寺がじきじきに呼び出したらしい。

「箒、訓練機の使用許可下りたのか？あれって結構大変で待ちも多
いはずじゃ…」
『いや、金寺先生が特別に許可をくれた』

ISの開放回線で聞くと、意外な返事が返ってきた。

『さて、これから二人で模擬戦を行ってもらおう。どっちかのシール
ドエネルギーが尽きるまでな。いいか？』
「わ、分かりました。箒は…」
『問題ない。そのためにここへ来たようなものだ』

そう言う箒の右腕には、【打鉄】の基本装備である日本刀型の近
接ブレードが展開されていた。

向こうはやる気満々だ。ならばこっちもそれ相応に相手しなければ。

「そうか、宜しく頼むぜ」

『ああ、こちらこそ』

軽く言葉を交わしつつ一夏と筈はアリーナ中央部に移動。ある程度距離をとり、互いの武器を構える。

『忘れてた一夏。単一使用能力の《零落白夜》は俺が良いと言つまで発動禁止な』

「…分かりました」

金寺のよく分からない指示に軽く返事をしつつ、対戦相手を見据える。

二人がIS同士で戦うのは、今回が初めてだ。剣道では筈が常に優勢だったが、IS同士となればどう転ぶか分からない。

よって二人とも、とてもワクワクしていた。

一瞬の静寂のあと、

『そんじゃ…模擬戦はじめ!』

金寺の声を皮切りに、近接ブレード片手に同士に激突。

一回目の激突は、鏝迫り合いによる甲高い金属音を生み出しただけだった。

『くっ…!』

つながったままの開放回線から、苦しそうな箒の呻き声が聞こえてくる。

生身の戦闘とISでの戦闘という事で、幾分とその違いを実感しているのだろう。

操縦者としては僅かながら一日の長がある一夏と、操縦するのも戦闘をするのもほぼ初めての箒。

その差は、歴然と現れてくる。

だが、刀を扱うものとしては、長年剣道をたしなんできた箒に軍配が上がる。

その剣術もISの操縦に自然と反映されるため、若干押されながらも箒はほぼ対等に戦っていた。

『いささかなれないが…なかなか楽しいものだな!』

『そりゃよかったぜ!』

一合、二合、三合、四合。

刃同士のぶつかる音が立て続けに響き、両者のシールドエネルギーも徐々に降下していく。

『よし一夏、《零落白夜》の使用を許可する』

「分かった。惜しみなく行くぜ!」

『零落白夜?』

金寺のどこか無機質な声。一夏の気合十分といった感じの声。箒の不思議そうな声。

それらを引き金とし、【白式】の空間投影モニターに一つのウィンドウが浮かび上がる。

ワソフ・アビリティ
単一使用能力《零落白夜》発動可能。

迷い無く一夏は発動した。

その瞬間、灰色の実体剣だった《雪片弑型》の刃が、眩い純白の煌めきを放った。

敵のシールドエネルギーを削り取る、絶対無敵の刃。それを手にした一夏は、不思議と猛烈な自信がわいてきた。

もう何も怖くない。恐れる必要は無い。

そう耳元で囁かれているような感じた。

「　　うおおおおっ！！」

力強く雄たけびを上げながら、一夏は箒に向かって猛突。

箒も一夏の気迫を感じ取ったのか、近接ブレードを構えると口元を引き締めて迎え撃つ。

鏑同士がぶつかり合い、その間に箒に生じた一瞬の隙を、一夏は見逃さない。

狙い済ましたように、そこへ向かって《雪片式型》を振り下ろす。箒は避けきれないと判断したのか、腕の装甲を掲げてダメージを最小限にしようとしたが、

『 なあっ!?!? 』

箒の両目が驚愕に見開かれる。

エネルギー性質のもの 無論シールドバリアも例外ではない
を全て無効化する最強の剣をまともに喰らっているのだ。

恐らく、今【打鉄】のシールドエネルギーがすさまじい勢いで削られているのだろう。

勝利を確信し、このまま押し切ろうとして一夏は、

『 模擬戦終了。箒の勝ち 』

『「……………え？」』

水をさすように届いた金寺の鶴の一声によって、箒と共に思わず間抜けな声を出していた。

このとき、【白式】のシールドエネルギーはゼロを表示していた。

「俺…どうして負けたんですか？」

すっかり日が沈んだ第三アリーナ。
あれから箒との操縦訓練などを終え、アリーナのカタパルト内で一夏は金寺に質問をした。

その金寺は、現在備え付けのモニターで先ほどの戦闘データに目を通してている。

「それだが、《零落白夜》が原因だ」
「どうして…？」

一夏が戸惑うような声をあげると、金寺は一息ついて一夏に向き

直る。

「確かに、《零落白夜》もとい《雪片式型》は、現存するI Sの武装の中でも最強クラスの武器だ。しかし、それには決定的なデメリットが存在する」

「デメリット？」

「《零落白夜》は、自分自身のシールドエネルギーを糧にして発動する。つまり、発動中は【白式】のシールドエネルギーが《零落白夜》に比例して大幅に削られるんだ」

「それじゃあ…諸刃の剣って事に…」

なんとという事だろうか、機体だけでなく、武器も欠陥があった。先ほど自分が抱いた絶対的な自信が、霧のように消えていきそうになる。

「…正確な表現だな。ようは使いどころに気をつける、って事だ。後先考えないで発動すると、自分の身を滅ぼしかねないぞ」

「は、はあ…」

どうやら自分は、ある種とんでもない機体を授かってしまったらしい。

一夏も金寺同様に、悩みの種は尽きないらしい。

と、とある悩みが、一夏の脳裏によぎった。

「あの…先生」

「ん、何だ？」

実は、と言い始めようとして、一夏は躊躇してしまった。

【白式】に触れて以降、時々、脳裏に何かのビジョンが浮かぶ。

そんなこと、話したところで信じてもらえるだろうか。

「…どうした？IS関連だったら、多分答えてやれると思うけどよ」
聞きようによっては、無機質な声かもしれないが、その中にもどこか包み込むような優しさが垣間見えるのを、一夏は感じ取っていた。

よって、言うだけ言ってみる事にする。

「実は…最初に【白式】に触れて以降、時々、脳裏に何かのビジョンが浮かぶんです。なんか戦闘だったり宙に浮いていたり…」
「ビジョン、ねえ…」

一笑に介されないと思っていたが、腕を組みながら真面目に金寺は考えていた。

「それってさ、具体的にどんなのだったりする訳？」
「えっと…さっき言ったとおり戦闘の様子だったり、あとは宙に浮いていてなんか変な物体を打ち落としていたり…でもそれ、傍から見ているんじゃないかって、まるで自分がやっているようなもので…でも、どれも二秒も見えないんです」

少なくとも、あれは第三者の目線ではなく、それを実行している者の目線だったと思う。

そうでなければ、あの不気味なりアルさは表現しようが無い。

暫し考え込んでいた金寺は、一つの可能性に思い当たり、ふと顔を上げる。

「多分、お前が見たそのビジョンとやらは、【白式】のツインコアが関係しているな……」

「やっぱり、理由は【白式】に？」

「それ以外に可能性がねえ。一応、お前には伝えておくが……」

そこで金寺は言葉を区切り、ふうと一息はいてから、一夏の目を見据える。

一夏も金寺が重要な事を言おうとしていることを理解し、真剣な面持ちで聞くことにした。

「
【白式】に搭載されている二つのコアは、【白騎士】と
【暮桜】のものだ」

「…え？」

一瞬、金寺が何を言っているのかわからなかった。

【白騎士】と【暮桜】。

ISを動かせるようになるまでそういった事柄に疎かった一夏ですら、その機体名は知っている。

【白騎士】。

八年前、世界中のミサイルがハッキングされその中の一部が日本に向かっていったが、その全てを撃ち落とした一機の純白のIS。

ちなみに、この一件は「白騎士事件」として語り継がれ、北欧に現れて戦争を数十分で鎮圧した黒いISと共に、ISの性能を全世界に知らしめた存在になっている。

【暮桜】。

第一回、IS世界選手権「モンド・グロツソ」にて姉 織斑 千冬が駆り、見事格闘部門及び総合部門で優勝を果たした機体であ

る。

それらのコアが、今現在一夏の機体である【白式】に搭載されているというのだ。

驚くほか無い。

「でも、どうして…」

「俺が知るか。篠ノ之束がこいつを改造したから、あいつに聞き出すしかない」

「先生、束さんのこと知ってるんですか？」

少々気になって一夏が聞いてみると、「一応な」とだけ短い返事が返ってきた。

どうやら、あまり話したくなかったらしい。

「話を戻すぞ。恐らくお前が見たそのビジョンは、【白騎士】と【暮桜】が実際に経験した事なんじゃねえか？お前の頭ん中に流れ込んできたのは良く分らんが、コアがそれらを覚えてたのかも知れん」

金寺の話を黙って聞く一夏は、いまだに彼の言ったことが信じられないようだった。

何より、実感がわかない。

【白騎士】と【暮桜】という、ISの歴史上においての英雄とも呼べる存在のコアが搭載されている機体を自分が駆るといのがいまいち実感に欠けた。

そんな一夏の心境を理解したようで、金寺はそっけなく言う。

「まあ、これが事実だ。…束が何考えてんのかは知らねえが、お前はそいつらを託された、という事になるかもな」

ツインコア。

【白騎士】と【暮桜】の系譜。

ISを超越するであろうIS。

未知なる、力。

俺は、託された。

その現実が、一夏の身に重々しくのしかかってくる。

果たして、その力をしっかり使いこなせるのだろうか。

そんな不安が、心の内を瞬く間に占めていく。

「まあ、今は大げさに気負う必要は無いさ。安心しろ。

もしお前が力の使い道を間違えるような事があれば、強引に直してやるからよ」

やけに重みがある金寺の一言に、一夏はその不安が少しかき消されたような気がした。

この人なら、絶対に力の使い方を履き違えない。

何故か、そう確信がもてたからだ。

会ったときから、金寺が内に秘めているであろう強さを一夏は感じ取っていた。

それは、姉の千冬とは違いながらも、それと同等な“何か”を持っていた。

自分の中で最強の存在である姉の千冬が、彼を認めるような発言をしていたのを思い出す。

今までは、千冬以外に尊敬できる人物が見当たらなかったが、どうやら見つけたりそうだった。

ふと、金寺が携帯端末に目を通す。

それにつられて一夏がカタパルト内の時計を見てみると、「6:39」と表示されていた。

もう夕食の時間らしい。

「…どうする、飯食いに行くか？」

「じゃあ、お供させていただきます」

そんな会話をしつつ、二人はカタパルトを後にし、カタパルト内の照明がおちる。

二人の間には、確実に信頼関係が結ばれつつあった。

2・白式（後書き）

さて、【白式】のツインコアですが…

分かっているとは思いますが、「機動戦士ガンダム00」の【ダブルオーガンダム】の「ツインドライヴシステム」が元ネタです。

どうしてこのようなものを取り入れたかという点、度々エネルギー切れを起こす【白式】を見て、

コア二つ搭載すりゃいくね？

そう思ったからです。

極めて単純な思考かもしれませんが、そのような事から本作品オリジナルの【白式】は生まれました。

ちなみに、今の所外見は原作とほとんど変わっていません。しいて言えば、両翼にコアが内蔵されていて、そこにGNコンデンサーのようなものがくっついていてるような感じですよ。

ちなみに、今日東京MXでガンダム00の再放送がありました。セカンドシーズン24話、ダブルオーライザーのトランザムバースト発動回です。

改めて、人の作り出したものに感動しました。

次回は、セシリア対一夏の再戦です。

3・全力(前書き)

一夏VSセシリア、決着の時。

3・全力

二日後、第二アリーナで、ついに一年一組クラス代表決定戦の再戦が行われる事になった。

両者とも万全であり、現在アリーナ上空にて自身のISを身にまとい向かい合っている状況である。

「どうやらそっちも準備万端みたいだな」

「そちらも同様みたいですね…あえてもう一度聞きますが、手加減は無しでいいのですか？」

「何度聞かれようと答えは同じだぜ」

「そうでしょうね。わたくしもその答えを期待していましたわ」

ふふつと、大人びているいつもと比べて幼さがある笑みを浮かべたセシリア。

対して一夏は、既に右拳に意識を注ぎ、試合開始後のビジョンを思い浮かべている。

そして、

『それでは両者、試合を始めてください』

アナウンスと同時に、セシリア、一夏ともに自分の主武装

《スターライトmk?》と《雪片式型》を展開。

「先制攻撃を」

「こちらが仕掛けますわ!!」

刀の刃を純白に煌めかせ、真正面から飛び込もうとした一夏を、セシリアの《スターライトmk?》による早撃ちが妨げた。

「くそっ!」

「わたくしもずいぶん舐められたものですわね…!」

軽く舌打ちした一夏は、立て続けに飛来する青白い光条から直撃を避けるため、回避行動に専念する事にした。

やはり、無理だったか。

そんな考えが脳裏によぎる。

一夏は試合開始後、速攻でセシリアの懐に飛び込んで先制攻撃を食らわそうとしたのだが、敵の早撃ちの方がすばやかだったため失敗に終わった。

やはり、代表候補生の実力は伊達ではなかったという事だろうか。

即座に気持ちを切り替え、一夏はセシリアとあまり距離をとらないように迫り来る射線を避けつつ、攻撃の機会を見つけようとした。

一夏が先制攻撃を仕掛けようとした事は、セシリアにとって想定内だった。

【白式】が近接特化ブレード《雪片弐型》を主武装にする以上、それを投擲でもしない限り近づかなければダメージを与える事はできない。

よって、隙あらば一夏が自らの懐へ飛び込んでくる事は容易に想定できたのである。

そしてそのために、セシリアは先の戦闘からの空白間のほとんどを、対一夏戦へ向けた特訓を単独で行っていた。

第一に、《スターライトmk?》の展開である。

先日の授業で千冬にも指摘されたとおり、どうも自分はイメージ付けのために《スターライトmk?》を横に構えつつ展開する事が多かった。

しかしそれでは、速攻で懐に飛び込まれた際に対処する事ができない。

よって、まずセシリアは《スターライトmk?》の展開を、以前より早くかつ前方にできるようしようと特訓を重ねてきた。

これに関しては、特訓の成果がしっかりと現れたようである。

こうして【白式】の先制攻撃を防いだセシリアは、現在一定の距

離を置きつつ回避に専念している　様に見える一夏へ向けて《
スターライトmk?》による狙撃を行っていた。

実際のところ、セシリアは一夏が回避に専念しているとは思えな
かった。

その証拠に、セシリアが距離を取ろうと動くと、それにあわせて
【白式】も動き、距離を離されないようにしている。

これは、一夏が回避しつつ隙を突いて攻撃しようと思っている
そうセシリアは分析していた。

以前のように、自身の奏でる円舞曲で踊らせようとしたが、どう
やら彼はそれを拒否しているらしい。

ならば、強引にでも躍らせるべきだ。

「　　行きなさい、ティアーズ！」

その掛け声とともに、腰背部のバインダーが四つに分離。

遠隔操作可能の無線式自立機動ビット 《ブルー・ティアーズ》をいっせいに展開する。

困むようにビットを配置し射撃を行ったが、一夏は即座に反応して、見事に直撃を回避した。

内心セシリアは舌打ちをする。

どうもこのビットの思考制御は、難しくてなかなかものできない。

この《ブルー・ティアーズ》は、操縦者の意思による操作装置

通称、イメージ・インターフェイスによって制御される。

それゆえ、かなりの集中力が必要となるので、先の戦闘で一夏に動きを読まれたようにどうも操作が単調なものになってしまっ

ビットの制御に全神経を注げばそのような事もなくなるだろうが、ビットの操作に集中しすぎれば、かえって敵の格好の的になってしまっ。

だが、

(もうそうするしかありませんわ…！)

意を決したセシリアは、狙撃の機会を狙う事をやめ、ビットの操作だけに全神経を注ぐことにした。

体からやや力を抜き、目をつぶって意識をビットに注ぐ。

それにあわせて、ビットの動きも先ほどと比べて複雑になってきた。

死角だけを狙うのではなく、あえて真正面から撃つたり、または撃たずに移動したり。

動きを不規則かつ複雑にして、一夏をかく乱していく。

何故か頭の中に、必死になって《ブルー・ティアーズ》の射線をかいくぐる一夏が浮かぶ。

それが今現在の状況で、【ブルー・ティアーズ】がそれを伝えてくれていると、何故かセシリアはそう断言できた。

そしてセシリアは、一夏を「狙う」のではなく、一夏を「誘い出す」方に転換する。

あえて彼の進路に光条を放ち、一夏の動きを制限していく。

その間のセシリアの集中力は、すさまじいものであり。

まるで静寂を保つ水面のように、透き通っていた。

狙うのは、彼が自らの距離に入った一瞬。

意識を集中という名の思考のうねりに静めて、永遠とも、一瞬ともとれる時間がすぎる。

そして。

“それ”は、水面に一滴の雫が落ちたように、突然訪れた。

「そこですわっ！！」

即座に、射撃体勢に移行。

半瞬にも満たない速さで、《スターライトmk?》を構え、トリガーを引く。

その銃口から放たれた青白い一条のビームは、寸分狂わず【白式】の右脚に命中した。

『ぐあああつ！！』

シールドバリアのおかげで【白式】の装甲が爆発するような事は無かったが、直撃したせいか確実に衝撃を与えたようで、一夏は叫び声をあげながらやや後ろに吹き飛ばされた。

その隙を見逃さない。

立て続けに《スターライトmk?》のトリガーを引き、一夏めがけてビームを放っていく。

一夏も何とか体制を立て直したようで、いくつかの光条は直撃を避けたものの、完全によけきれぬ事はできなかったようだった。

このまま押し切るべく、セシリアは連続でトリガーを引いていく。すると、一夏は何か意を決したようにこちらへ表情を向けると、【白式】の出せるであろう最大スピードで突撃してきた。

彼が何を考えているのか見当もつかなかったが、明らかにその動きは直線的だ。

これなら確実に自分の狙撃が命中する。

そう結論付けてセシリアは狙撃を続行する事にした。

銃口から迸る青白い光条は、一夏に狙いを定めてまっすぐ向かっていく。

一夏は避けようとしていない。

完全に直撃コースだ。

しかし次の瞬間、セシリアは信じられないものを見たかのように目を見開いた。

一夏は、ビームを斬っていた。

ありえない光景だったが、確かに一夏はその右手に持つ“刃が純白に煌めいた刀”で、ビームの射線を正面から斬り裂いていた。

明らかに常識から逸脱している事態に、驚きを禁じえない。

そのせいで、完全に空白が生まれてしまった。

気づけば、一夏は今にも自分の目前へ迫ろうとしている。
ビットで迎撃しようとしたが、それでは遅い。

「くっ…《インターセプター》…！」

とっさに近接ショートブレード《インターセプター》を展開しようとしたが、既に一夏はセシリアの懐に飛び込んでいた。

残念ながら、《インターセプター》の展開速度だけではどうにも速くならなかった。

「ここは俺の距離だっ…！」

そう叫びつつ、一夏は【ブルー・ティアーズ】の胸へ純白の刃を密着させる。そのまま、セシリアの背後へ斬り抜けた。

シールドエネルギーを無効化してしまう刃の斬撃をまともに受け、思わず苦痛の声をあげてしまう。

それと同時に、ほぼ満タンに近かったシールドエネルギーが半分以下になってしまった。

驚愕に目を見開きつつも、一夏が背後から二撃目を加えようとしているのを確認したセシリアは、何とか《インターセプター》を展開し、その刃を辛うじて受け止める。

同時にビットを操作し、一夏へ向けてその射線を定める。

それに集中したせいで、刀で弾かれてしまったものの、《ブルー・ティアーズ》の光条の一つが一夏に命中した事もあり、三撃目を喰らう事は無かった。

とりあえず距離をおき、敵と向かい合う。

「ビームの射線を、斬る、だなんて……無茶苦茶、します、わねっ……！」

息絶え絶えになりつつも、自然とそんな言葉が出てきた。それが呆れているからなのか、あるいは彼に対する賞賛なのか。

今のセシリアは、そこまで判断できなかった。

『ビームの射線を、斬る、だなんて……無茶苦茶、します、わねっ……！』

息絶え絶えのセシリアにそう言われ、当の一夏は苦笑を浮べた。

そりゃそうだろうな、と本人も思う。

あの発想は、ビームの射線をよけつつどう反撃に転ずるかを考えたときに、思いついたものだ。

【白式】の単一使用能力《零落白夜》は、エネルギー性質のものを全て無効化する。

ともすればその対象はシールドバリアに行きがちだが、無論ビームもエネルギー性質のもので、打ち消す事が可能である。

それに一夏は着眼し、《雪片式型》でビームの射線を斬り裂きつつ接近し、自分の距離へ持ち込もうとした。

結果、まだ敵は健在で、シールドエネルギーを全て削り取ることではできなかったようだが、それでもかなりのダメージは与えられたはずだ。

しかし、一回実行した以上、セシリアはそれを警戒してくるだろう。

おまけに、【白式】もシールドエネルギーが残り少なく、《零落白夜》は後一回ぐらいしか発動できない。

恐らくは、次が最後のチャンス。

このとき、一夏の手元に残っているカード　手段は、かなり限られていた。

そのまま飛び込むか、スピードを生かしつつかく乱してから飛び込むか、敵の動きにあわせつつ機会をうかがうか。

一夏が選んだのは、最後。

セシリアの動きを伺いつつ、隙あらばその懐へ飛び込む。
そのために、次のセシリアの動きを待った。

当然、いまだ健在である四基の《ブルー・ティアーズ》にも、その警戒の目は行き届いている。

そして、セシリア ではなく、《ブルー・ティアーズ》
《》が動いた。

先ほどまでは二人を囲むように空中で停滞していたが、それらが一夏を狙って青白い光条を迸らせる。

直撃を避けながら慎重に回避し、徐々にセシリアに向けて距離を近づけていく。

どうやら彼女も一夏の意図に気づいたらしく、スラスターを噴かして後退しようとした。

そこへ、一夏は飛び込む。

まさかこの状況で懐に飛び込んでこようとは思ってはいなかったらしく、セシリアは驚愕を露にしていた。

これが、もう一つ一夏が引いたカード「意外性」。

何を言おうと彼女と自分の力の差は歴然だ。最早、形などこだわってられない。

それに

「これがっ…俺の全力だあっ!!」

《零落白夜》を発動し、迫り来る光条を斬り裂き、セシリアに肉薄。

純白に煌めいた刃を、再び押し込もうとして、

「
させませんわ!!」

腰部アーマーから放たれた二基の弾道ミサイルが目に入る。

しかし、それをかわすつもりは毛頭無かった。

かわす事ができないわけではなかったが、そうすれば確実に、彼女のもとへたどり着く前に《零落白夜》のデメリットによってシールドエネルギーが底を尽く。

言ってしまうえば、どの道負ける可能性が高い。

ならば、たとえ愚直にでも立ち向かって、己の全力を出し切るべきだ。

乱暴に《雪片式型》を振るい、ミサイルを打ち落とす。

そして、一気に距離がつまり、ついに《雪片式型》の切っ先が、【ブルー・ティアーズ】をとらえる。

同時、互いの懐で爆発が起きた。

原因は、セシリアが最後の最後に放った二基の弾道ミサイルだった。

自分に及ぶ危険を踏まえていても、最後に放った一撃。これが、セシリアの全力だったのだ。

その一撃が両者に与えたダメージは大きく、セシリアの【ブルー・ティアーズ】は、僅かながら《雪片式型》の切っ先が触れた事も重くなって、エネルギー残量が風前の灯火となる。

そして一夏はとらうと。

「くっ……そ……やっぱり……無理だった……か……」

《零落白夜》によってシールドエネルギーが底を尽きたのと同様に、弾道ミサイルの一撃を喰らったため絶対防御が発動せず、そのダメージが生身にも及んでいた。

ダメージに耐えられなかった【白式】が光子となって消滅し、自分の体が重力にしたがって落下していくのが分かる。

遠ざかる意識の中で、一夏はある事を考えていた。

（まだまだだなあ、俺……でも、これから訓練していけば、きっと強くなれる。千冬姉も、金寺先生もいるし……）

気づけば、自分は先の 未来のことばかり考えていた。

それは、自身の未来に希望を持っているからに他ならない。

千冬、篤、セシリア、そして 金寺。

幸いにも、一夏の周りには自身の手本になりそうな人物が結構い

る。

ならば、彼ら彼女らに負けられないように強くなって。

(絶対……超えてやる……)

心の中でそう呟いたとき、一夏の意識は闇に消えた。

3・全力（後書き）

この【白式】ですが、どちらかというと燃費は悪いほうです。

ツインコアでも、零落白夜の使用はエネルギーを著しく消費してしまうので。

それに、完全に（以下ネタバレなので自重）

4・理想と願い(前書き)

一夏の口から語られるのは、理想か、それとも願いか。

4・理想と願い

目が覚めた一夏の目の前にあったのは、白い天井だった。なんとなく感覚を取り戻し、体を起こしてみると、そこは保健室だった。

どうやらその後、自分は保健室に運ばれたらしい。ベッドから体を起こした時に痛みなどがなかったことから、きっと自分はミサイルが爆破した衝撃で気を失っていただけなのだと、一夏は推測してみる。

次の瞬間。

「一夏！！無事か！？」

すさまじい勢いでドアを開けた箒が、一夏のもとへ駆け寄ってきた。

吃驚してベッドから飛び上がりそうになってしまったが、それが自分を心配していたからこそだと思つと、少し嬉しくなるし、申し訳なくも思う。

「箒…悪いな、心配掛けちまって」

思わず苦笑を浮かべると、箒は少々ムツとした表情になった。

「心配など…まったくお前はあのような状況で…」

「ははは…で、あの後俺とセシリア、どうなったんだ？」

とりあえずあの後の出来事を聞いてみた一夏だったが、その内容は驚嘆に値するものだった。

なんでも、突如としてどこからか現れた金寺が、先に落下してきた一夏を受け止めて地面に下ろした後、同じようにISが解かれて落下してきたセシリアを、しっかり受け止めたというのだ。

そしてその間にかかった時間は、五秒にも満たなかったらしい。

その場にいた者全員が驚きを隠せず啞然としたと、箒は説明した。

「あの人が…もしかして人外だったり？」

「私も一瞬そう思った…何食わぬ顔で実行していたからな」

二人そろって苦笑。

もしかしたら自分たちは、ある種とんでもない人物に会ったのではないかと思う。

するとドアが開き、別の訪問者を招きいれた。

入ってきたのは千冬と、彼女に同伴しているセシリアだった。

「目が覚めたか…まったく、冷や冷やさせおって」

「一時どうなるかと思いましたが…」

二人とも、一夏のあの特攻に呆れていたようだった。

実際あれしか効果的な攻撃手段は無かったのだが、特に言い訳等をする気にはならなかったので、ばつが悪そうな笑みを浮べるだけにとどめた。

「でも…貴方の今の全力、しっかりと受け止めましたわ」

「そうか。…サンキューな。セシリアの全力も、しっかりと受け取ったぜ」

あれが、紛れも無い今の一夏の全力だった。

だがそれも、“今”の話。

いつか今の自分の全力も、彼女等の全力も、全て超えてみせる。

一夏には、その決心がついていた。

「一応、今日一日安静にしておけ。試合の結果などについては後日、な」

それだけ言うと、千冬は背を向けて保健室を後にする。

セシリアも、一夏と箒に深くお辞儀をして、同じように保健室を後にしていった。

ドアが閉まったのを確認した一夏は再びベッドに横になり、箒はベッドの近くにある椅子に座った。

二人きりの保健室に、静寂が訪れる。

「…一夏」

「ん？」

「その………二人きり、だな」

「…ああ、そうだな」

一夏にやや赤くなった頬がばれないように、若干顔をそむける篤。

これは、最近になって一夏を一人の異性として意識し始めたからこそなのだが、当の本人は考え事をしているようで、たいして気にも止めなかった。

静寂のあと、暫くしてから一夏はおもむろに口を開く。

「…篤」

「んっ…なんだ？」

「…俺…超えてみせる」

無意識にそう出た一夏の一言に、篤は思わず首を傾げた。それに構わず、一夏は言葉を紡ぐ。

「今の俺も、今の篤も、今のセシリアも、今の千冬姉も…絶対に越えて、もっともっと強くなってみせる」

「…で、その理由は？」

一夏の言葉に続くように、保健室に新しい来訪者が現れた。

金寺龍輔である。

「金寺先生……」

「細かい話は後。で、何で強くなりたいんだ？」

先ほどの言葉を聞いたものなら至極真つ当な質問をしつつ、金寺は一夏のベッドに近づく。

一夏はうつむき、少し考え、自然とその理由を口にした。

「今のままじゃ、俺自身が満足できないし……それに、もしも俺らの身の回りに何か一大事があったとき、それからみんなを守るようになりたいんだ。…昔千冬姉が、俺を守ってくれたように」

実際のところ、一夏はそこまで深く考えていなかった。

それでも、自然とそのような事が口から出てきたという事は、本当にそう思っているからなのだろう。

強く、誇り高く、何かを守れる存在。

それを、一夏は求めていた。

金寺は暫しいつも通りの無表情だったが、口元を僅かに吊り上げ、くるりと回れ右して、ドアの方向へ歩んでいく。

「そうか、だったらそれでいいんじゃないの？」

いつも無表情な彼が、このときばかりは笑みを浮べたような気がした。

悠然とその場を去っていく金寺を見ていた一夏はドアが閉まるのと同じ時、ふと呟く。

「…助けてもらった御礼するの忘れてた…」

その日、すっかり夕日が沈んでいても、一年一組副担任金寺龍輔先生の仕事は、終わっていなかった。

といっても、その大半が最早彼にとって趣味と変化しているのだが。

最初に済ますのは、自分が行った授業についての提出レポートのまとめ、宿題の整理、管理など、主に授業に関すること。

これに関しては、特別面白味を見つけることができなかつたため、早目に済ますことにするのだ。

『面倒臭いことは早く終わらせるに限る』、これが金寺の持論の一つである。

ちなみに、クラスに関することは、ほぼ千冬が一括して担当している。

そうして余計な教務を終わらせた金寺が始めたのは、【白式】や【ブルー・ティアーズ】の戦闘データ採取。

金寺にとって、これほど奥が深いものはない。

自分が知ったところから、ISは発展していつている。彼の興味が尽きることはないのだ。

【白式】のツインコアの同調率及び両機の稼働率をみている最中、先ほど保健室で一夏が口にした言葉が脳裏によぎった。

『今のままじゃ、俺自身が満足できないし……それに、もしも俺らの身の回りに何か一大事があったとき、それからみんなを守れるようになりたいんだ』

純粹に、羨ましいと思う。

そう金寺が思うのは、とくに後者だ。

彼にとって、守るべき存在がいる、というのが自分と大きく違い、そして羨ましかった。

何らかに羨望の意を向けるのは自分らしくないとは思うものの、自分には無いものを持っている彼に対し、そういう感情を持ったことは確かだ。

自分にも、そういう存在がそのうち現れるのだろうか。

現れたとしたら、彼のように決意する事が出来るのだろうか。

柄にも無い事を考えながら、金寺は背もたれに体重を預けた。

4・理想と願い（後書き）

只でさえ普通にしているもフラグメーカーの一夏が、こんな強い意志を持つようになったらどうなるのやら…

姉公認のフラグメーカー、恐るべし

1・再会前（前書き）

IS学園に訪れた、とある一人の少女とは……？

1・再会前

入学式から約三週間後の、四月下旬。

日が沈みかけ、空が夕日のオレンジ色一色に染まっている頃、金寺は一夏と肩を並べてロビーへ向かう渡り廊下を歩いていた。

この日は二日ぶりに、【白式】のデータ採取、ツインコアの安定稼動調査などを終えたところだった。

ちなみに、この日はセシリアが入ってきたりして結構ギャラリィに騒がれたりしている。

「でも、どうしてこうなるかなあ…」

「んな事言ったって仕方ないだろ？こうなった以上さ」

「いや、分かってますけどね？筋も通ってますけどね？けど…」

朝からずっとこのような調子で愚痴を吐く一夏に、金寺は苦笑するほか無かった。

この日は、彼にとって今後の学園生活を左右するような事が起きた以上、仕方が無いと思う。

「それに、なんか夕食が終わったらパーティやるとか言い出す始末ですよ？」

「それぐらいはいいだろ、一応お前の事祝おうとしているんだし。」

…ほどほどにしておけよ？」

「ほどほどにする前に俺が持たないと思うんで大丈夫ですよ」

「なんだそりゃ」

互いに苦笑。

この二人だが、最近になってかなり親密な間柄になってきた。

金寺が一夏のクラスの副担任であり、彼のISの専属整備士であることから当然といえば当然だが、学園内で数少ない たった二人の若い男であることも、その理由だろう。

この状況に、一部の俗に言う“腐女子”がよからぬ妄想を脳内で繰り広げたりしていたが、決してそのような関係ではない。

むしろ、気心知れた友人関係のようなものだ。

「そんじゃ、戦場のほう行ってきます」

「表現が大袈裟すぎだろ…もう一回言うけど、ほどほどにしておけよ」

そう言葉を交わしつつ、金寺は職員室へ、一夏は食堂へと向かう。

同時刻、IS学園正面ゲート前。

「IS学園…ふうーん、ここがそうなんだ…」

そこには、ポストンバックを片手に持った一人の少女がいた。栗色の髪をツインテールにしており、体格は小柄。パツチリした眼も相まって、どこか幼さを感じさせる。

「えーと、受付ってどこにあるんだっけ？」

歩を進めつつ、彼女は上着のポケットに突っ込んでくしゃくしゃになったメモを取り出す。

そこには校舎の見取り図が書いてあるのだが、いかんせん大雑把すぎて分かりにくかった。

「本校舎一階総合事務受付…って、どこにあんのよ」

思わずメモに向けて愚痴を吐いた転入生であるこの少女だが、そうしたところでこの状況を打開できるわけではない。

結局、学園の関係者に会えたら僥倖だと思いつつ、自力で探す事にした。昔から考えるよりも行動を優先する、彼女らしい選択である。

そもそも、彼女が転入生なのは理由があった。

中学二年時まで日本にいた彼女は、両親の事情で祖国　　中
国に帰り、その後IS適正が高い事が判明して軍隊に入り、持ち前
のセンスで国家代表候補生にまで上り詰めた。

今年で15歳　　高校一年生になる少女は、今年からIS学
園に正式に入学するのだが、諸事情により、それが遅れてしまっ
たのだ。

平たく言えば、軍上層部の不祥事と、一ヶ月前まで国内の一部で
起きていた反政府デモが原因である。

とはいえ、少女もそこまでこのIS学園に入学を望んでいたわけ
ではなく、とりあえず退屈だった日常から抜け出したかったし、何
より数ヶ月前に突如ニュースで流れた『世界初のISを扱える男子』
である幼馴染にも会えるだろうから、と、そんな軽い気分だった。

アイツ、女だらけの環境に放り込まれてどうしてるだ
ろうなあ。

案外、もう女の一人や二人作ったりして。

そんな、半ばどうでもいいことを考えていると。

「ん？」

離れたところに、不思議な二つの人影を見つけた。
夕日のせい、影はやけに大きく見える。

だが、彼女の心何かが引っかかっていた。
その影は、どう見ても女性のものとは思えない。

「誰だろう…この学園の人かな？」

そうならばありがたい。何せ自分はこの学園内で本格的に迷い始めている。

そう思いつつ、その人影に近づこうとすると。

「 仕方ないだろ？こっとなった以上 」

！

心臓が、止まった。

一瞬、本気でそう思った。

当たり前だ。
聞こえてきたのは。

低く、重く、それでもどこか人を惹きつけるような声。

二度と聞くことが無いと思っていた声。

また会いたいと、心の底から思っていた青年の声。

その声の主は

「金寺…龍輔…？」

一人の生徒と肩を並べて歩いていた青年
ファン・リンイン 金寺龍輔を、
少女 鳳鈴音は、ただ見ていることしか出来なかった。

1・再会前（後書き）

金寺はいつの間にならぶを建築していたみたいです。
おかげで鈴の出番多くなるかもしれません。よかったね、鈴ちゃん。

2・それぞれの夜（前書き）

一夏、金寺、鈴音の、それぞれの一夜。

2・それぞれの夜

金寺の姿をその眼で確認してから数分後。
目的地の総合事務受付は、その直後に見つかった。

先ほどの衝撃を忘れられないまま、鈴音は受付を済ませます。

「ええと、それじゃ手続きは以上で終わりです。IS学園によつて
そ。鳳鈴音さん」

極普通の営業スマイルを浮べる事務員の言葉も、今の鈴音には届かない。

「えっと…ひとついいですか？」

「どうぞ、どのような事柄を？」

「あの…」

その名前を口に出そうとした瞬間、喉元が詰まりそうになる。

恐らく、ずっと会いたいと思っていた青年に会って、様々な感情がごちゃ混ぜになっているのだろう。

それを一旦、鈴音は飲み込む。

「…金寺龍輔、って人…この学園に、います…か？」

その問いに事務員は少なからず驚いたようだったが、笑みを浮かべつつ返答する。

「ええ、いますよ。今年から学園所属になっています。…もしかして、お知り合いですか？」

「あ…まあ、そんな感じで…」

得体の知れない恥ずかしさを抑え込みながら、何とか鈴音は言葉を搾り出す事が出来た。

こうして、編入手続きを終えた鈴音は、ただ今指定された学生寮の自室に向かっているのだが、昂揚感を抑えきる事が出来ず、軽い足取りで移動していた。

「会えた…のかな？でも同じ場所にいるんだからきつといつでも会えるよね…！」

感情の奔流が、ものすごい勢いで流れているのが分かる。

本当に、この昂揚感は抑える事が難しそうだ。

一年近く想い続けてきた自分の中の“彼”に対する想いが、一段と大きくなってきているのを感じる。

「龍輔…」

鳳鈴音、15歳。

人生の中で一度きりの、初恋を自覚した一夜であった。

同じ頃、夕食後の自由時間。

寮のロビーにて、とあるパーティが催されていた。

「織斑君、クラス代表決定おめでと〜！」

その名も、「織斑一夏クラス代表就任記念パーティ」。

クラッカーの音が鳴り響き、ぱらぱらと拍手が上がる。

一体何故、先の戦闘でセシリアに敗れた彼がクラス代表になってしまったのか。

その理由は、この日の朝のSHRにある。

「クラス代表の件だが、織斑一夏に決定した」。

突如、教壇に立っている金寺がそんな事を言い放ったのだ。

どうせ代表はセシリアに決まっただろうから、自分には関係ないことだ、と聞き流そうとしていた一夏は吃驚仰天。

どうして俺なのか、と問い詰めたところ、セシリア本人が「わたくしが辞退したからですわ」と言った。

おまけに、「いいんじゃない？ 実戦経験をつむにはぴつたりだし、悪い事ばかりじゃない」と金寺が言い出す始末。

まあ確かに、クラス代表となれば実戦経験も増えるだろうが、金寺の一言は、明らかに先日保健室で言った自分の言葉が反映されていた。

そんな訳で、今現在一夏は多くの生徒 全員女子に囲まれている状況の元、テーブルを二つほど独占している小さいパーティー会場を中心にいた。

本来、そのテーブルの周りのいすに座れる人数は限られているのだが、あちらこちらから人が集まっているため、端から見れば一夏

が女子に囲まれているように見えるのだ。

とはいえ。

(どうしてこうなった…?)

そう思わずにはられない。

確かに、戦闘中はそういうのも忘れてかなりヒートアップしたりしてしまっただが、まさかそれらがこのようなことになるとは。

色々理不尽な気もしなくないが、こうしてなってしまった以上仕方が無い、と思いつつ、右手に持っている、レモンとビタミンCをテーマとしている某炭酸飲料の入った紙コップを、口につけて傾けた。

「いやー、これでクラス対抗戦も盛り上がるねえ」

「ほんとほんと」

「ラッキーだったよねー。同じクラスになれて」

「ほんとほんと」

満足そうに言う一組の女子に対して、何故か他クラスの女子が相槌を打っていた。

「人気者だな、一夏」

横に座っている筈が、そんな事を言ってくる。

「ん？まあクラス代表なら、そんなもんじゃないか？」

若干不機嫌そうな彼女に対し、何気なくそう返した一夏だが、この場に副担任の青年がいれば確実に「無自覚すぎだろうが」と言っているだろう。

そんな一夏たちを、ふと閃いた光が覆い尽くした。

「はいはい、新聞部です。話題の新入生、織斑一夏君に特別インタビューをしに来ました〜！」

光の発生源は、そう名乗る生徒の持つ、一眼レフカメラだった。右腕に『新聞部』とかいてある紋章をつけている事からも、眼鏡を掛けている二年生の彼女が新聞部員である事は一目でわかる。

その彼女が、一夏に懐から取り出した名刺を渡した。

そこには丁寧な、『新聞部長 薫薫子』とかいてある。

「ではではぜひ織斑君！クラス代表になった感想を、どうぞ〜！」

眼をキラキラ輝かせ、ヴォイスレコーダーを一夏に向けながら、薫子はそう聞いてくる。

正直、こう言うのは苦手だ。

何か面白味があることでも言うべきなのだろうが、生憎一夏はそう言うのが得意でないので、

「う〜ん…まあ、代表として精一杯頑張ります」

このような、極めてスタンダードな一言にとどまった。

対して、薫子は若干その答えに不満があったようで、つまらなそうな顔をしてくる。

「えー、世界で初めての男性IS操縦者なんだから、もつといいコメントちょうだいよ。世界中の女は俺の雌奴隷にしてやる、とか」

「すみませんね、そういう肉食キャラじゃないんで」

荒唐無稽な冗談、としか言いようが無い薫子の一言に、極めてぶっきらぼうに一夏は返した。

なのに、

「一夏さんっ！？まさか、本気でそのような野望を…！？」

「お前はいつの間に…ふっ、ふしみだらだっ！！」

「何故そこのお二方は真に受けていらっしやるのでしょうか！？」

セシリアと箒は冗談だと思っていならしく、若干顔を紅くしつつそんな事を言い始めた。

一体どうしたらあれをまともに受けるのか。それ以前に、箒は自分がそういうキャラクターではない事を知っているはずではないのか。

一夏にしてみれば、日頃の授業以上に理解が及ばない。

これは、二人の心境が年頃の少女特有のものへと徐々に動いているからこそなのだが、誰一人気づいてはいないようだ。

「まあ、今のは冗談だから面白おかしく捏造しておくね」

「やめてください。俺の社会的立場が危ないんですけど！」

嫌な予感しかしなかったので、冗談抜きで止めにかかった。

「世の中のジャーナリズムなんて、そんなものよ。一夏君」

「いやいや例えそうだとしても、それを肯定しちゃダメでしょう！」

「どこかの国には、政府からの圧力を受けて捏造をしつつも人気を誇る某予言者新聞とか」

「そういう他作品関連のネタ禁止！」

「とにかく奇麗事なんて、この世には存在しないの！」

「この世の真理にまで踏み込まないでください！せめてジャーナリズムだけに！」

なんとというか、割と本気で突っ込みだけは上手くなりそうな気がしてきた。

「じよ、冗談だったのか…でも、本当でも良かったような…」

隣で筈がそんな事を呟いていたもの、聞かなかった事にした。

続いて、薫子はセシリアにもインタビューする。

「よかつたらイギリスの代表候補生でもあるセシリアちゃんのコメントもちょうだい」

「わたくし、こういったコメントはあまり好きではありませんが、仕方ないですね」

そうは言うものの、セシリアは満更でもないようで、よく見ればいつも以上に髪型が整っている。

コホンと軽く咳払いをし、姿勢を整えた後、セシリアは口を開く。

「では先ず、イギリス代表候補生でもあるわたくしがどうしてクラス代表を辞退したかというところ」
「ああ、ごめん。長くなりそうだからいいや。理由は織斑君に惚れたからってことにしよう」

さつきからよくよく聞いていれば、この人はジャーナリズムの欠片もない気がする。

何故このような人が新聞部の部長なのか、こちらも一夏は理解が及ばなかった。

「なっ、な、ななっ!?!……………でも、そのような理由でもいいような……………」

顔を赤らめ、両手を両頬に当てて恥ずかしそうにするセシリア。
正直なところ、こちらに至っても満更でもないらしい。

幸か不幸か、最後のほうの言葉は一夏の耳に入らなかった。

「それじゃ、最後に写真撮ろうか。ああ、セシリアちゃんも一緒に、写真いいかな?」

薫子が一夏に加え、セシリアにも写真撮影を要求すると、当人は喜びを顔全体にあらわしつつ問う。

「え……………二人で、ですか?」

「注目の専用機持ちだからねえ。そうだ、握手とかしてるもいいかもねえ」

「そつ、そうですか……あの、撮った写真は当然いただけますよね？」

「そりゃもちろん。ささ、立って立って！」

ジェスチャーで二人に指示する新聞部員に、一夏は素直に従った。こうして記念撮影されるのは、若干恥ずかしいとはいえ、なんだか悪い気もしない。

このとき筈が少し不機嫌そうな顔をしていたが、それを見る者は誰もいなかった。

「じゃ、握手してもらえるかな？」

そう言われ、一応一夏はセシリアへ右手を差し出した。

セシリアもそれに答え、同じように右手を差し出す。

思えば、数日前にもセシリアと握手をしたような気がした。

そのときはその場の空気的な感じでしたが、今このような形式的な感じとなると、少し恥ずかしい気がする。

それに、若干セシリアの頬が赤いのは気のせいだろうか？

ともかく、薫子が首に掛けている一眼レフカメラを構えたのを確認し、二人はそちらへ向く。

「あ〜ん、もうちょい笑顔で寄って寄ってえ。はあい、緊張しないでえ。それじゃ、撮るよお？」

指示をこなし、最もよいであろう構図を作った二人を、一眼レフカメラのレンズが捉える。

「それじゃあ撮るよ」

再びカメラのフラッシュが瞬き、撮影を終えた時には、何故かクラスメンバー殆どが写真に写っていた。

おまけに、箒に至っては腕にくっついてきている。

「何故全員入ってますの！」

「まあまあ」

「セシリアだけ抜け駆けはないでしょ」

「これもクラスの思い出という事で」

怒気を露にするセシリアと、それをなだめる女子生徒。

この状況、どう対応したものか、と一夏は頭を悩ませた。

というわけで、このパーティは十時過ぎまで続き、通りすがりに警鐘を鳴らした金寺によってその幕を下ろしたのだった。

ロビーで騒いでいた生徒たちに警鐘を鳴らした後、部屋に戻った金寺は、あるデータを見ることにした。

一夏と分かれたあと、職員室にて千冬より渡されたものだ。

何でも、二日後に中国から一年二組に転入する生徒がいるらしい。それも、書類上中国軍に所属する代表候補生。おまけに専用機持ちだ。

ちなみに、この金寺も昨年一時的に中国の軍事施設に臨時技術顧問としていた経験がある。

当時、中国が第三世代型兵器の開発に着手していたため、それに伴い金寺龍輔にオファーが来たのだ。

(まさかな……)

同じ頃中国軍では、国内のIS適正が高い少女を集めており、彼女等の世話焼き係も言い渡されていた。

向こうに言わせれば、厄介な事柄を押し付けた形だろう。幸いにも特に困る事も無く、軍が第三世代型兵器のプロトタイプを完成させた事によって金寺の役目も終わり、その九カ月後に中国から去っていった。

そんな中で、一人だけ印象に残っている少女がいる。

ツインテールで、小柄で、いつもは無駄に元気が良くて、でも少しさびしがりやなところがあって。

とにもかくにも、中国人で一番最初に思い浮かべるのは彼女だ。
そう思いつつ、データに目を通すと、

(そのまさか、か。本当に来るとはな…)

データに記されていたのは、その少女のものだった。
あの、少し騒がしかった日々が、脳裏によぎる。

(退屈しねえなあ、俺)

本日何度目かも分からない苦笑を浮かべつつ、金寺は就寝の準備を
する事にした。

3・再会(前書き)

噂に聞いた転校生、その正体は…？

3・再会

二日後、HR前の一年一組の教室では一夏とセシリアを中心にとある会話が繰り返し広げられていた。内容は、再来週のクラス対抗戦についてである。

ちなみに、このクラス対抗戦で優勝すると、『学食のスイーツ年間食べ放題』という景品がかかっているという。

そのせいか、女子は全体的に士気が上がっていた。

最も、実際に戦う一夏は、そのような類のものに興味がなかったりする。

「もうすぐクラス対抗戦だね」

「そうだ、二組のクラス代表が変更になったって聞いている？」

「ああ、何とかって転校生に代わったのよね」

「転校生？この時期に？」

転校生、という単語に一夏は思わず耳を傾ける。今は四月下旬、この時期に新しい生徒が転入してくるといふのはいささか珍しい。

「うん。中国から来た子だって」

中華人民共和国。

その国の名前を聞いた一夏の脳裏に、一人の少女の姿が映る。

小学五年生の始めに自分のいる学校に転校してきて、中学二年生の終わりに両親の離婚のため中国に帰国した“セカンド幼馴染”。

彼女は今どうしているだろうか、と思わず考えてしまう。

「ふん。私の存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら」

相も変わらず、隣に来たセシリアは尊大な態度を見せている。

「このクラスに転入してくるわけではないのだろうか？騒ぐほどの事でもあるまい」

窓側の席にいた箒も、一夏のところに来ていた。

「どんな子だろ。強いのかな……」

「今のところ、専用機を持つてるのって一組と四組だけだから余裕だよ」

そんなクラスメートの言葉を、突如飛んできた言葉が妨げる。

「その情報、古いよ！」

クラスのほぼ全員の視線が、音源の方向へ向く。そこにいたのは一人の少女。

「二組もクラス代表が専用機持ちになったの。そう簡単には優勝できないから！」

まるで勝気な性格を全面的に表現するような一言が教室に響く。ある種挑発的ともいえる態度に、感化させられたセシリアが体を向けた。

「貴方が、噂の転入生なのかしら？」

「そうよ！中国代表候補生、ファン・リンイン鳳鈴音！」

鳳鈴音、中国代表候補生。

この二つのワードに、一夏は驚愕し、目を見開く。

「今日は宣戦布告に来たってわけ！」

正々堂々すぎる敵対宣言に、一組の教室でざわめきが起きる。

「専用機があるからって、いつまでも舐めてると痛い目」

そんな意気揚々とした鈴音の声は、彼女の頭の上で鳴り響いたスパンツ、という音と共に途切れた。

「いったあ……、何すんのっ！」

頭を抑えつつ、鈴音が後ろを振り向くと、そこにいたのは、

「もうSHRの時間だぞ」

一年一組の担任、織斑千冬その人だった。

「ち、千冬さん……」

彼女の姿をその目に納めた鈴音は、明らかに「しまった」という表情をしていた。その場に先生が来たからどうこうという訳ではなく、どうやらかなり苦手意識があるようだった。

「学校では織斑先生と呼べ。さっさと戻れ、邪魔だ」

「すつ、すみません……」

そう言いながら追い払うように鈴音をあしらい、何事もないように教壇に向かう千冬。

一方、当の鈴音は先ほどの勢いが完全に相殺されながらも、

「あんまり油断してると、すぐ負けちゃうんだから！覚悟してなさいよ、一夏！」

捨て台詞を残しながら颯爽とその場を去っていった。

「…なんですか！？あの方…？」

先ほどの鈴音の言動に、セシリアや筭ら数人のクラスメートは僅

かながらも不快感を露にし、

「あいつが…中国代表候補生…？」

一夏は未だに驚きを隠せない様子であった。

「ねえねえ鳳さん、織斑くんに宣戦布告してきたんだって？」

一年二組、朝のSHR終了後、早速鈴音の元に、何人かのクラスメイトが声を掛けてきた。

「うん、まあね。アイツ、あたしの顔見て本当に驚いてたよ」

先ほどの行動がすぐさま級友の間で広まっている事に驚きつつも、得意げに鈴音は答えて見せた。

この一年二組に男子は無論いないので、完全に女子高状態である。もっともな事を言えば、隣の一組が特別なだけなのだが。

さて置き、中国代表候補生である鈴音だが、クラスの面子に紹介されたのが昨日にもかかわらず、元々の性格もあってか早速、クラス内で人気者になっていた。

本当にありがたい。

このクラスに来てよかった、と心から思う。

正直、鈴音は、あまり良い目では見られないだろうと思っていた。当然といえば当然かもしれない。彼女の所属する中国国防軍は、上層部が不祥事を起こし何人もの幹部たちが辞職に追い込まれたのだ。

そういうわけで、中国　　中国人への風当たりは良いわけではない。

しかし、そんな事気にせず、クラスの女子たちは明るく接してくれた。

曰く、「別に鳳さん自体はその不祥事と関係ないんだし、変に接する必要は無い」との事。

それを聞いたとき、本気で泣きそうになった。

「で、鳳さんと織斑くんって、どんな関係？」

何人かのクラスメイトが、至って真剣な眼差しで聞いてくる。その姿勢にややたじろぎつつも、鈴音は一応答える事にした。

「前日本にいたときの友達みたいなものよ。小五から中二の時まで日本にいたからね」

そう答えると、クラスメイトたちは、感心するような、少しがっ

かりするようになりアクションをとった。

大方、鈴音と織斑一夏が深い関係なのでは、と思ったのだろうか。

確かに彼とは日本にいたときの親友だが、生憎彼に恋愛感情を持った事は無い。

むしろ、共通の親友の妹に勝手にライバル意識を持たれて、一時期本当に困り果てたぐらいだ。

「でもかなり仲良しなんだよね？いいなあ〜」

そう言う一人のクラスメートは、本当に羨ましそうだった。

「織斑さんと仲良くなれる方法って何かある？」

直後、級友の一人が発した質問に、ほとんどのクラスメートが注目してきた。

これほど一夏の話題に皆が皆食いつくのかと思うと、今度こそ鈴音は驚きを禁じえない。

苦笑を浮かべつつ、鈴音は真面目に答える事にした。

「まあ…『世界初のISを扱える男』といっても、元は極普通の男子だから、大して心得る事はないと思うけど…」

と、まで言い終えた後、鈴音はある事を思い出して、口元を僅かに吊り上げる。

「アイツにそっち方向で近づきたいんなら、本気出さないとダメよ。ああ見えて結構色々な娘に好意持たれてたから」

その一言に、クラスメートたちの驚嘆の声がもれる。どうやら、本気で狙っている人もいるようだった。

それにしても、と思う。

前に日本にいた頃、鈴音が知っているだけでも、一夏に好意を抱いていた女子は多い。少なくとも、その共通の親友の妹を含め、五人以上はいた。

確かに、ああ見えて意外といい男だとは思う。

ルックスも悪くないし、正義感も強い。家事に関しては万能で、優しさに境界線が無い。いつもは飄々として間抜けなだけに、そんな彼の一面を見て好意を抱く女子は少なくなかった。

そして、前に日本にいたときも、「織斑君を私に紹介して」と、何人の友人に言われた事か。

その女子たちは大体、一夏の恋愛に対する異常な鈍感さの前に儂く散っていったというのは、別の話。

(まあ…結果論言っと、アイツは何も変わってない訳ね)

一限目開始のチャイムを耳にし、IS基礎理論の授業の準備をし

ながら、鈴音は心の中でごちる。

(なーんで今更こんな事習うのかしら)

正直、国家代表候補生である鈴音にしてみれば、何故今になってこのような授業を受ける必要があるのか分からない。

最も、これが一学年共通のカリキュラムの一つなので、どんなに愚痴っても仕方が無いのだが。

適当に復習感覚で受け流しますが、と思いつつ、前方の教壇に目をやると、

(え?)

いた。

若干ウェーブがかかった、手入れしていないような黒い髪。決して端正とは言えないが、力強さが印象的な顔立ち。赤い右眼と、漆黒の左眼。

金寺龍輔、鳳鈴音の初恋の相手。

「嘘…マジで…!?!」

思わず声が出たが、驚愕のあまり思うように口から出ず、独り言のようになっちゃった。

(え…!?!ちょっと…え?こんなトコで…!?!)

必死にショートしている思考回路を修復しようとするも、全然上手くいかず逆に焦る有様。

昔、『思考回路がショートする』という表現を鼻で笑っていた自分が馬鹿馬鹿しく思える。

とりあえず、鈴音にしてみれば思考回路はとんだ不良品だったらしい。

そんな彼女を見て心配そうに声をかけるクラスメートの言葉も耳に入らない。

「おい、そのツインテール大丈夫か?」

次に耳にまともに入ってきた声は、怪訝そうな表情の龍輔のものだった。

予想外の事態に、鈴音は本気で飛び上がりそうになる。

「は、はいっ!大丈夫です問題ないです元気100%です!」

矢継ぎ早に口から出た意味不明な単語の羅列に、鈴音は恥ずかしくて頭が沸騰しそうになる。

「…そうか、ならいいが。最低限教員連中の話ぐらいいは聞いといた方がいいと思うぞ」

「わ、分かりました…」

恥ずかしさのあまり、小動物のようにしゅんとしてしまう鈴音。

結局、金寺龍輔の事で頭がいっぱいになってしまった鈴音は、授業をまともに聞くことが出来なかった。

やっぱいた。

それが、鈴音を見た龍輔が抱いた第一感想だった。

見たところ、何も変わっていないように見える。自分に対して過剰に反応していたのは気のせいではないように見えたが。

教室の前の扉から出ると、後ろの扉からその少女が出てきた。

「龍輔！」

自分の名を呼びつつ、駆け足で近づいてくる。

瞬く間に自分の目の前に接近してきた彼女に対し、龍輔は、軽く

彼女の脳天に手刀を振り下ろした。

「うっ！？」

「今の俺は先生だアホ。その呼び方は控えなさい」

「うっっ…再会した女の子に向かっていきなり手刀を浴びせるなんて…」

脳天を押さえつつ軽く涙目になる鈴音に、龍輔は適当に溜息をついた。

「おい待て、そこまで俺とお前の中は特別じゃないだろ」

「いいのいいの！あたしにとっては特別なんだし、また龍輔に会えて嬉しいんだもん！」

極めて一方通行な言葉が返ってきたが、それは受け流す事にした。それより、彼女がここまで自分を特別な目で見てきたのか、それが疑問だ。

「にしても、約半年ぶりか？相変わらず元気そうじゃねえか」

「えへへー、やっぱりそう？龍輔も相変わらずだね」

表情を緩ませながら楽しそうに話す鈴音を見た龍輔は、少し嬉しさを覚えた。

自分との再会を、こんなにも喜んでもらったのは、今までの人生の中で初めてのことだ。

「…で、どうよ、あれ以降。なんか専用機もらったらしいじゃねえか」

「そうそう！ホントあたし頑張ったんだよ！」

ウサギのようにピョンピョン跳ねながら、全身を用いて喜びを露にする鈴音に苦笑しつつ、携帯端末で時間を確認すると、次の授業まで後四分となっていた。

「…悪い、そろそろいいか？次の授業の準備しなきゃなんねえからよ」

「んー…分かった。で…あ、あのさ…今日昼空いてる？出来れば…一緒にお昼…食べたいなあって…」

最後の方の声が完全に細くなっていたが、龍輔はそれをしっかりと聞き取ると、思考を少し働かせた後答える。

「…悪い、昼休みは少々立て込んでんだ」

「そう…」

「でも、放課後だったらその気になれば空いてるが」

「本当!？」

どういふ偶然かは知らないが、本当にこの日の放課後は空いていた。

流石に毎日はずらいだろうと思い、【白式】の稼動調査やツインコア同調率調整は、三日に一回にすることにしていたのだ。

一瞬、昼休みNGを聞き表情が暗くなった鈴音だが、龍輔が放課後OKを伝えると、一気に表情が明るくなる。

「じゃ、じゃあ…放課後第四アリーナね!」

それだけ言い残し、まだ嬉しさを全開にしながら鈴音は教室に戻っていった。

周りの生徒が怪訝そうな表情で彼女を見ていたが、どうやら気にしていないらしい。

(…なんか、相変わらず表情がコロコロ変わる奴だなあ…)

適当にそう思いながら、次の授業のために龍輔は職員室に戻っていった。

午前中の授業を終えて昼休み。

一夏と鈴音は食堂前で偶然鉢合わせていた。

丸々一年間、顔を見ていなかった二人は、昔の仲もあり自然と話し始める。

「びつくりしたぜ。おまえが二組の転校生だったとはな。連絡くれりゃよかったのに」

「そんなことしたら、劇的な再会が台無しになっちゃうでしょ」

「なあ…お前って、まだ千冬姉のこと苦手なのか？」

千冬の話になると、鈴音はしかめ面を浮べる。

「そ、そんなことないわよ…。ただ…その、得意じゃないだけよ」

嘘である。

日本に滞在していたときから双方は家族ぐるみで縁があったが、そんな中で厳格な千冬は本当に苦手であった。

カウンターで鈴音が中華蕎麦を受け取るのを見て、一夏が率直な感想を言う。

「相変わらずラーメン好きなんだな。…丁度丸一年ぶりになるのか、元気にしてたか？」

「まあね。色々あったけど、本っ当アンタは何も変わってないみたいね。根幹的なところから」

「何だよそれ…」

そんな光景を、一夏の後ろに並んでいる一組の生徒たちは、複雑そうな、不思議そうな表情で見っていた。

「で、いつ代表候補生になったんだ？」

「去年。アンタこそ、ニュースで見た時吃驚したじゃない」

「俺だって、まさかこんな所に入るとは思わなかったからな」

「入試の時にISを動かしたって？どうしてそんな事になったのよ」

「何でって言われてもなあ…」

頭を掻きつつ、一夏はその時の経緯を話し始めた。

「で、その後色々あって、ここに入学させられたわけだ」
「ふーん、変な話ね」

鈴音が一夏の話に同調した時、隣のテーブルに陣取っていた筈とセシリアが、堪忍袋の緒が切れたように立ち上がり、一夏に肉薄してきた。そして二人そろってテーブルをバンと叩く。

「一夏、そろそろ説明してほしいのだが！」
「そうですね、一夏さん！まさかこちらの方と付き合っているしやるの!？」

そんな二人を見て、

(随分必死ね…もしかしてこの二人…)

心の中で独り言を呟きつつ、一夏の方へ視線を向けると、

「違うぞ、ただの幼馴染だよ」

直球的な返事を返した事により、前方の二人が安心していているとこゝろだった。

(さすが一夏。この辺の安定感は抜群)

「鈴、どうした？」

どうやら人の本質というものは早々変わらないらしく、一夏の朴念仁ぶりも健在のようである。

最早、呆れるどころか軽い尊敬の意を示す鈴音を見て、一夏がきよとんとした様子で尋ねる。

「なんでもないわよ。やっぱりアンタって何も変わってないな、って彼女に言わせて見れば、それを聞いて頭の上に『？』を浮べるところも含めて、だ。」

彼は昔から、気配りはある程度きく男なのだが、どうも恋愛事情となると、異様な鈍感さを見せ付けるようだ。

一方、『幼馴染』というワードに、篤は首を傾げる。

「で、一夏。この人は？」

「ああ…まず、こっちは篠ノ之箒、前に話しただろ。篤は“ファースト幼馴染”で、お前は“セカンド幼馴染”、ってとこだ」

前方の二人が深い仲でない事を確認したせいか、篤は安心したように表情を緩めた。

「“ファースト”…」

「ふーん、そうなんだ。はじめまして、これからよろしくね」

「ああ、こちらこそ」

探るような視線を箒に向けつつ、鈴音は笑顔で挨拶する。

それを見て若干疎外感を感じたのか、蚊帳の外だったセシリアが自分の存在を誇示するように咳払いをする。

「わたくしの存在を忘れてもらっては困りますわ。わたくしはセシリア・オルコット。イギリスの代表候補生ですわ。一夏さんとは先日クラス代表の座をかけて　「そういえば一夏、クラス代表になっただって？」

自分自身のことを尊大に語りだしたセシリアの存在を無視するように鈴音が話を一夏に振る。

「ああ、成り行きでな」

「まさか自分から立候補したとか？」

「まさか、まあ色々あって　「　　って、ちょっと聞いてらっしゃるの!？」

ここで、先ほどから独り語り状態だったセシリアが二人の会話に介入した。

「ん？大丈夫よ、あなたの事は知ってるし。　　セシリア・オ

ルコット。イギリス代表候補生で、英国内B T兵装適正者の中で唯一A。あってる？」

「え、ええもちろん！分かってくださっていればいいのですわ!」

鈴音の口調はかなりぶっきらぼうだったが、自分のことを分かってもらって安心して安心したのか、セシリアらしい態度が復活した。

「なあ、B T兵装、って何だ？」

一夏の疑問に、鈴音が端的に答える。

「簡単に言えばビーム兵器よ。彼女はイギリス国内でその適正が一番高いって事」

「そうなのか…代表候補生ってやっぱすごいんだな」

一夏から賞賛の言葉を掛けられたセシリアは、頬を赤らめながらもとても嬉しそうだった。

その一方、箒は不機嫌そうな表情を浮かべている。

二人の様子を見て、先ほどから抱いてきた疑念が具現化してきた鈴音は、話題を切り替える事にした。

「じゃあさ、あたしが練習見てあげよつか？ISの操縦も」

「おっ、そりゃ助かる　一夏に教えるのは私の役目だ！」

鈴音の提案を聞いた一夏が嬉しそうなる表情をするのを見て、箒が二人の会話に介入した。

それにセシリアも続く。

「それはわたくしの役目ですわ！　第一あなたは二組でしょう？“敵”の施しは受けませんわ！」

セシリアの言葉は的を射ていた。クラス対抗戦となれば、一夏と鈴音は敵同士だ。

だがそれ以前に、鈴音はセシリアが言った最初の言葉の方に、力

が入っているように思えた。

しばらく、鈴音の試すような視線が箒とセシリアに向けられる。

「…なんだ？」

「な、なんですか？」

そんな二人の様子を見て、嘆息した鈴音は、

「まあ、確かにクラス対抗戦となれば一夏とは敵同士だしね…分かったわ、やるからにはちゃんと教えなさいよ」

それを聞き、虚を突かれたような表情になる箒とセシリアを尻目に、鈴音は中華蕎麦のスープを飲み干す。

「じゃあ、また後でね。練習しっかりやりなさいよ、一夏」

この件をボーツと見ていた一夏にそう言つと、鈴音はそそくさと食堂を去っていった。

色々大変な事になりそうだなあ、と、心の中で呟きつつ。

3・再会（後書き）

鈴音が金寺にベタ惚れ。

金寺龍輔というキャラクターが明確に確立した段階で、鈴とのカッ
プリングが思い浮かびました。

だって出番増やしてあげたいんだもん。

4・龍の記憶（前書き）

再開後に語られる、双龍の記憶。

4・龍の記憶

放課後。

自分の職務を、大してやる気が無かったので適当かつ大雑把かつ投げやりに終わらせた龍輔は、言われたとおりに第四アリーナに来ていた。

客席からは、訓練機で練習を行う生徒たちが何人か見える。恐らくは、専用機を所持していないクラス代表も含まれているだろう。

「龍輔！」

そんな風に思考を働かせていると、鈴音が龍輔の元に駆け寄ってきたところだった。

ニコニコ笑顔で、龍輔の隣の席に座る。

「なんか嬉しそうだな」

「えへへ…そう見える？」

龍輔が鈴音の顔を覗き込んでみると、今まで彼が見てきた鈴音の表情で、一番の笑顔だった。

そして鈴音は、手にもっていた缶コーヒーを金寺に渡す。

龍輔が大のコーヒー好きである事は、もちろん鈴音は把握済みである。

「はいこれ。確か龍輔コーヒーがお気に入りでしょ？」

「ほお、よく覚えてるもんだな」

鈴音が渡してきたそれは、有名ブランドの微糖ものだった。そう言いながら、缶のタブを開け、そこからあふれ出る香りを少々楽しむと、軽く喉に注ぎ込む。

嗅覚と味覚を研ぎ澄ました後、口を離して瞑っていた目を開くと、

「まあ、香りが少し薄いが、味は及第点だな…こりゃエスプレッソか」

意外と細かいのね、と呟きつつ、鈴音も自分用に買った赤色の缶ジュースを喉に流し込む。

「まあな。俺が拘りを持つ数少ないモンだから…」
「で、その数少ないうちの一つはISなんでしょ？」
「…名答」

それだけ言うと、金寺は手元のコーヒーに集中する事にした。一度も飲んだ事が無かったが、意外と口に合いそうだな、と、龍輔が思考を働かせていると、

「……………何だ？」

鈴音の視線が、先ほどからずっと自分に向いている事に気付いた。

「なっ、なんでもない!」

指摘された鈴音は、慌てて龍輔から視線を逸らした。

その後、変な沈黙が二人の間に流れる。龍輔が缶コーヒーを飲み終えてから、アリーナで訓練を行う二、三年生を見ているのに対し、鈴音は気が気でない様子で、龍輔の顔とアリーナの光景を交互に見ていた。

意を決した鈴音は、思い切つてある質問を龍輔にぶつける事にした。

「ねえ、龍輔……」

「ん？何だ？」

「龍輔があたしを慰めてくれた時の事……覚えてる？」

上目遣いで金寺に問う鈴音に、龍輔は当然の如く、とでも言うように答えた。

「ああ、覚えてるぞ。一年前のこの時期だったよな」

それを聞き、鈴音の表情が、花が咲いたように明るくなる。

「本当！？覚えててくれたんだ！」

「お前……そんなに喜ぶ事か？」

やや呆れ気味の龍輔に対し、満面の笑みで鈴音は何度も何度も頷く。

それは、丁度一年前の出来事であった。

一年前、中国軍の軍事施設にて。

「会いたいな…パパ…ママ…一夏…弾…みんな…」

当時、入隊させられたばかりの鈴音は、塞ぎこんでいた。

友人たちの下を離れ突然の帰国、直後に両親の離婚、軍への入隊。激動の数ヶ月に、まだ精神的に幼い少女が心を閉ざしかけるのも、ある種当然だった。

その時の鈴音は、ろくに人と関わらず、食事なども最低限で、引きこもり寸前ともいえる状態であった。

「凰鈴音か？ 何故塞ぎこんでいる？」

そんなある日、部屋で引きこもっていた鈴音の元に、一人の青年
金寺が来た。

当時、金寺は臨時的に中国軍のIS開発に携わっており、その途中、一人の代表候補生の候補生が塞ぎこんでいる、と聞いて、彼女

とコンタクトを取ろうとしていた。

正直、最初はウザイと思った。

何も言わずに人の部屋に入ってきて、何様のつもり？

アンタには関係ない、と鈴音は一時拒絶した。

軍にいるのが嫌なのか？、と金寺は聞く。

仕方なく、鈴音は理由を話した。これで、この男が去ってくれば、と思ったのだが。

「何故離れ離れになつたぐらいで泣いている」

帰ってきたのは、意外な言葉だった。

驚きのあまり、「え？」と裏返った声を出した少女に、金寺は淡々と言った。

「何も、二度と会えない訳じゃないだろう？ お前がその気になれば、いつでも会いに行く事が出来る……お前もその連中も、生きているんだから」

これを聞き終えた瞬間、鈴音は理解した。

もしかしたら、目の前にいるこの男は、両親や知り合
いを亡くしてしまったのではないかと。

彼の淡々とした言葉からはいささか読み取りづらかったが、表情
に僅かな悲壮感が宿っているのを見て、そう感じたのだ。

今思えば、彼に惹かれていったのは、この時からかもしれない。

「ねえ…アンタ、誰？」

「俺は…金寺龍輔だ」

それが、二人の最初の“会話”だった。

「龍輔にしてみれば些細な事だったかもしれないけど…あの言葉のおかげで、あたしは立ち直れたんだよ」

「そっか…まあ、だったらそれでいいけど」

あくまで淡々と話す金寺を見て、鈴音は思わず笑ってしまふ。

「何だお前、いきなり笑い出して」

「ふふっ…だって龍輔、全然変わらないもん。そういう素っ気無さとか」

「あっそ」

これまた、感情というものが感じられない素っ気無い返事だったが、鈴音は初恋の相手の本質が変わっていかない事が嬉しかった。

「…まあ、そういう事だとお前もそうだろう。人の本質なんて、よっぽど劇的なことが無い限りかわるモンじゃねえし」

その通りだ、と思った。

龍輔も、一夏も、人間の本质という面ではほとんど変わっていない。

約一年ぶりに日本へ来た彼女にとってはそれが嬉しく、今こうして自然体でいられることが出来るのだ。

「そっぴやよ、お前の国、最近大変だった見たいだな」

ここで、金寺の話が自国の問題へと移行した。

正直この話はあまりしなくなかったが、溜息混じりながらも重々

しく口を開く。

「……一応あたし中国軍所属だけど、何も知らないわ。事態は全部あたしたちの知らないところでしか動かないから、どうしたらいいかも分からなかったし……」

軍上層部のとある不祥事に、一部の都市でおきた中国共産党に対する反政府デモ。

始まりから終わりまで、それらは全て鈴音たちの知らないところで動いていた。

発覚、鎮圧、事後処理に至るまで、国家代表候補生と言えども所詮軍の少尉である鈴音を含めた、同じ代表候補生の少女たちが踏み込めない領域。

言い方を変えれば、『暗部』とも表現できるようなものだ。

その点を踏まえると、ある種、鈴音は被害者なのかもしれない。これらの事態が、結果的に鈴音が四月にIS学園に入学できなくなった間接的な原因となったのだから。

「…大変だったろうけど、別に俺は気にしねえからさ。んなつまんねえ事考えんな」

「……そうだね」

安易に踏み込めるような事態でない事は分かっているも、どうも気にしてしまう。

だから、龍輔がそう言ってくれて、少し肩の荷が降りたような気もした。

ここで、鈴音の頭の中に、一つの考えがよぎる。

流れで告白しちゃえば？

すぐさま、顔が熱くなるのがわかる。

いやいやいや！まだ早いでしょ！

そう自分に言い聞かせているものの、“告白”という単語に、頬が紅潮していくのが分かる。

ひょっとしてこんな自分を見られたのではないかと思い、鈴音は横を向いて見ると、

「お前本当に今日変だぞ。何か変なモン食ったか？」

「っ！い、いや…その…」

怪訝そうな龍輔の視線を受けて、思わず視線が下に向いてしまう。僅かな逡巡の末、

「龍輔…って、あたしの事…どう思ってるかなあ…って」

辛うじて言い切り、視線を上げると、それを聞いた龍輔が、口元に手を当てて真剣に考えていた。

そんな金寺の様子に、鈴音は思わずドキツとしてしまう。

いつもカッコイイのに、こつやつて更にカッコイイしぐさ

本人は無意識だが、
コよく見える。
をしているから、いつもの数倍増しでカッ

うが。
…それが、彼女自身の思い込みである事は、書くまでも無いだろうが。

鈴音の心中が期待と不安でいっぱいになる中、

「まあ、そつだな…」

暫しの思考の末、龍輔が答えを出す。

「話が逸れるけどよ、お前にまた会えて嬉しかったからさ…まあ、どうでもいい奴じゃねえな。」

「『会えて嬉しかった』…？本当に…？」

期待していた答えとは違ったものの、予想外だった一言に思わず聞き返してしまう。

それに首肯すると、少し視線を下げながら龍輔は話し始めた。

「俺にとって、また会えて嬉しい、って言われたのはほとんど無か

ったからな……さつきああやってお前が全身に喜び露にしながら話してきたときは、……本当に嬉しかった」

そう言う龍輔の顔には、普段めつたに見せないような、優しげな笑みが浮かんでいる。

嬉しさを感じつつも、龍輔の心の闇の一端に若干触れてしまったような気がして、鈴音は少し複雑な気持ちになってしまった。

結局、自分は一人の女として見られていなかった、という事実を目の当たりにしたのだが、その一方で、龍輔に「会えてよかった」と言われて満足している自分がいるのも確かだった。

(…ま、今はこれでいいのかな…?)

何となくだが、鈴音はそう思えた。

ずっと会いたいと思っていた青年と、この日本の地で会えたのだ。今はそれでいいと思う。

今も、彼がほとんど見せた事の無い笑顔が見れたことだし。

最も、この青年の女になる努力を怠るつもりは毛頭無いが。

本能的に、鈴音は体重を横の龍輔に預けた。

「…鈴？」

「なんでもない。…このままいさせて」

「…了解」

その後、中国時代の思い出を、二人は飽きることなく話し続けた。気付けば、既に日没前である。

その数刻前。

「篠ノ之さん、…どういうことですか？」

放課後、第二アリーナにて、なんとも不満げな視線を向けるセシリアの先には、一夏の【白式】に対峙する筈の灰色のISがあった。「訓練機の使用許可が下りた。今日からこれで訓練を行う」

そう言いながら、筈は灰色のIS 【打鉄】^{うちがね}の近接ブレードを構える。

【打鉄】は日本国産の、第二世代型ISである。フランス製第二世代型の【ラファール・リヴァイヴ】をもとに、防御性と扱いやすさを重点的に開発されたモデルだ。基本武装は日本刀に形状が似た近接ブレード。見た目が鎧武者に似ていることもあり、妙にマッチしている。

そのことから、多くの企業並びに国家などで訓練用として使われ

ており、IS学園も例外ではない。IS学園では訓練の際には許可申請をとる必要があるのだが、筈はその許可を取り、今ここにいる。

「ではいくぞ、一夏」

「わ、分かった」

互いにそれぞれの剣を構え、向き合う。

「お待ちなさい！一夏さんのお相手はこの私ですわよ！」

その光景に憤慨したセシリアが、左のイヤークラスから蒼い光に包まれる。次の瞬間、そこには【ブルー・ティアーズ】がいた。

さすがに身の危険を感じたのか、一夏がセシリアを諭す。

「…セシリア、悪いけど、後にしてくれないかな？さすがに二対一だときついからさ…後で頼むよ」

「……分かりましたわ。一夏さんが言うのなら……」

いかにも不平をもらしそうなセシリアだったが、これ以上の文句は言わないことにした。

この日は、一夏は主にISを扱う上で接近戦の間合いの取り方、銃撃回避の練習、飛行時の機体制御の練習などを。筈は一夏と同じような基本動作、近接ブレードの扱いの練習。セシリアは銃撃の精度の向上やライフルビットの扱いの練習などを重ねに重ね、濃密な三時間半となった。

途中、一夏が最初に警鐘を鳴らしておいたにもかかわらず、最終的に二対一となり、おまけに箒とセシリアが一触即発のムードになったりして、二重三重の意味で疲れ果てた一夏は訓練後に大の字になって地面に倒れてしまった。本人曰く「しばらく動けない」らしく、箒とセシリアは後の会合を約束して第二アリーナを後にしていった。

「……………」

すっかり日が落ちた第二アリーナの中心で、一夏は仰向けになりながら、右手首のガントレットを、じっと見つめていた。

最初はいささか違和感があったが、今ではもう自分の体の一部になっている気がしてきた。

「ツインコア、か…」

自分の相棒 【白式】が、他のISと比べて特別なものである事は分かっている。

インフィニット・スクエアシステム 本来一機に一つだったコアを二つ搭載し、二つのコアを同調させる事で、従来のISを超

越した力を生み出すシステムを、一夏は託されたのだ。

彼は、自分の技量などをしっかり把握している。だからこそ、特別な存在とはいえ、経験も知識も素人レベルの自分に、このような強大な力を託した連中の真意が、一夏は良くわからなかった。

それでも、一つだけ、確かな事がある。

「俺は…変わらなきゃいけないのかもな」

変わる。

それは、力を手にした人間としてだ。

強大な力は、それを手にした人間によって、時に全てを破壊するものとなり、時に自分の信念を具現化するものになる。

だからこそ、その力の使い道を間違えないために。

自分が願ひ続けた、「誰かを守る人間」になるために。

守られているだけの自分から、脱却するために。

「俺は…変わる。俺の想いを、具現化するために」

力強く自分に言い聞かせる。

一夏の右手首にあるガントレットでは、二つの白金の半球体が、雲から姿をあらわした月の光を浴びて神秘的な輝きを帯びていた。

1・開戦（前書き）

ついにクラス対抗戦が開幕。一回戦、一夏の対戦相手は……？

1・開戦

そこからの二週間はあつという間だった。

一夏の訓練も次第に熱が入るようになり、箒との居合いの確認や練習、セシリアとの模擬戦、千冬と金寺による座学などで、充実した日々を過ごしていった。

本人も一切マイナスな事を言わなくなり、対抗戦に向けて気合が入っているようだった。

鈴音も鈴音で独自に調整をしているらしく、対抗戦へ向けて彼らの準備は万全のようである。

ちなみに、この期間中に三年生数名が、アリーナの席を裏で転売していたのが千冬に発覚して処分を喰らったというのは、また別の話。

そして、いよいよ一学年クラス間対抗戦当日。

競技場である第二アリーナの入り口では今朝発表されたばかりのトーナメント表が掲示されており、生徒たちが集まっていた。

このクラス対抗戦は、トーナメント形式で行われる。一学年は全部で四クラスあり、そのため三位決定戦を含めて、全部で四試合が行われる事になる。

現在、一学年で専用機をもっているのは一夏、セシリア、鈴音の三人。その中でも一夏と鈴音はなおかつクラス代表という事もあって生徒たちから注目を浴びていた。

今、トーナメント表の前ではざわめきが起きている。生徒たちにとって、ある種衝撃的だったのは、第一試合の組み合わせだった。

「まさか本当に鈴と当たるとはな…」

第一カタパルト内にて、【白式】をまとっている一夏は未だに驚きを隠せなかった。

今日の第一試合の組み合わせは、一組対二組。

つまり、一夏 vs 鈴という組み合わせだった。

もちろん、一夏もこのような事態を想定していなかったわけではない。だが、それが現実になると、得体の知れない奇妙なものを感じていた。

『鈴のISは【甲龍^{シヘンロン}】。中国製の第三世代型だ』

【白式】のモニターに、総合管制室にいる金寺の顔が映る。

第三世代型、すなわち【ブルー・ティアーズ】とコンセプトの根底は同様のものだ。だが実際は全く違う。

『【甲龍】はお前の【白式】と同じ近接格闘戦型』

『わたくしの時とは勝手が違います…油断してはなりませんわ』

金寺に加え、同じ総合管制室にいるセシリアからも声を聞き、一夏は静かに頷く。

近接格闘戦となれば、一夏のフィールドでもある。しかし、それは相手も同じ。あらゆる技量で鈴音が勝っているのが現状であり、一夏にとつてはある種不利でもあった。

金寺の言葉は続く。

『相手は代表候補生だ。お前とは経験も技量も比べ物にならない。けど…』

そこで、言葉を切った金寺はモニター越しに不敵な笑みを浮かべる。

『今まで培った事を忘れるな。自分のしてきた事を信じるよ』

「分かってます」

『コアの同調率は…若干不安定だが、許容範囲内だ。気にする必要は無い』

軽く頷いて一夏は通信を切り、これまで重ねてきた訓練の様子を頭に思い浮かべる。

俺は緊張しているのだろうか？

多分そうだろう。心拍数が少し上がっている気がするし、唇が乾いている気もする。

だが、これまで彼女たちと数多くの訓練をこなしてきたのだ。その結果が一回戦敗退など、笑い事ではない。

反射的に、一夏は大きく息を吸い込んだ。

所変わって、反対側の第二カタパルト内。

こちらでは、一夏同様に鈴音が自身の専用機である【甲龍】を展開させて、射出体制に映っている。

IS学園に来てから、本格的な実戦は、今日がはじめてだ。とはいえ感覚に問題はないし、コンディションもいい。絶好の戦闘日だ。

『鈴、調子はどうだ？』

目をつぶって感情を整えていると、龍輔から通信が入ってきた。昂揚感を抑さえられず、返した言葉が上ずりそうになる。

「準備OK！いつでもいいわよ！」

気持ちは緩むどころか、気合が更に入っている。

好きな人の目の前で、いいところを見せられるのかもしれないのだ。少なくとも、空回りする事は無いだろう。

ちなみに、鈴音の恋愛事情だが、あれ以降特別進展があるわけではない。

『そうか。一夏のほうも大丈夫みたいだし……』

通信が切れる。

同時、カタパルト内で、射出シークエンスが始まった。

『リニアボルテージ、第一、第二カタパルト、750を突破』

光が点り、ブースターランゲージがあがっていく。

第一、第二カタパルトハッチが開き、はるか前方に見える相手のカタパルトに、二人は相手の姿を見た気がした。

『全システム接続、双方オールグリーン 射出タイミング

を鳳鈴音、織斑一夏に譲渡する』

「了解！鳳鈴音出るわよ！」

気合をみなぎらせつつ宣言し、カタパルトから勢いよく飛翔する。

『 織斑一夏、行きます！』

同時に、一夏の【白式】も、カタパルトから打ち出された。

操縦者に強烈なGを与えながら、【白式】と【甲龍】がカタパルトからアリーナ上空へと飛翔した。

鈴音は難なく、一夏はセシリアと百回以上練習してやっと身に着けた空中制御をし、互いに向き合う。

『まさか本当にアンタとあたるとはね』

「こっちこそ」

『一応言っておくけど、絶対防御も完璧じゃないのよ。シールドを突破する攻撃力があれば、殺さない程度にいたぶることが可能なの』

「お前はそうしたいのか？」

『……いや、やりたいわけじゃないけど……』

ならばいい、とでも言いたげに一夏が口を閉じると。

『両者、試合開始！』

タイミングを見計らったように、金寺の声が響いた。

鈴音が、背負った青龍刀

《双天牙月》を右手に携えた。

機体の全長ほどはあろうかと言う巨大な刃物は、いくら絶対防御があれば直撃すれば大惨事になりかねない。

対する一夏も、《雪片式型》を構え、鈴音と対峙する。

両者同時に、相手へ向かって加速、突進。

クラス対抗戦の火蓋が、きって落とされた。

一夏の斬撃を悠々かわした鈴音は一定の距離を取った後、一夏よ

り上にあがってから重力に合わせて《双天牙月》を振りおろす。真正面から《双天牙月》と《雪片式型》がぶつかり合い、激しい火花と金属音が起きた。

しばしばぶつかり合った両者は距離を取り直し、再び向き合う。苦悶ともいえる表情の一夏に対し、鈴音は余裕そうな顔を浮べていた。

（単純な馬力じゃ向こうが上…！）

最初のぶつかり合いで本能的にそう感じた一夏は舌打ちをした。

近接格闘戦に重点を置いた【甲龍】は機動力をある程度捨てている代わりにパワーを強化されている。一方、【白式】は近接格闘戦以外に機動力も重視されているため、単純な正面からの激突では【甲龍】が上回る。

まともにぶつかりあうのは危険と判断した一夏だが、

『ふうん、初撃を防ぐなんてやるじゃない。けど』

そう言う鈴音の左手の手のひらが一瞬発光する。

光が消えるとそこに、二刀目の《双天牙月》が現れていた。

まるでバトンのようにくると弄ぶと、間髪いれずに再び一夏に向かって突進し、右手の《双天牙月》を乱暴にたたきつける。

それに対し一夏は《雪片式型》を横に構えて防御。だがそれに合わせて鈴音は左手の《双天牙月》を横殴りに振るい、一夏の横腹を狙う。

一夏は《雪片式型》を縦に構えなおしてそれも防いだ。

それでも尚、鈴音は余裕の表情を保ち、力でねじ伏せようとする。

再び距離をとり、両者は三度自分の剣を構えて激突する。一夏は鈴音の破壊力抜群の《双天牙月》の斬撃を強引に体を捻ってかわし、鈴音は一夏の《雪片式型》の斬撃を自らの剣で無理やり跳ね返す。

回り込めばその長い《双天牙月》の扱いが難しいのではないかと踏んだ一夏だったが、代表候補生たる鈴音の技量がそれを補っており、期待外れに終わった。

互いに一閃、二閃、三閃と激突し、戦いは緊迫していった。

(これじゃあ消耗戦だ……このままじゃ……)

額に汗をかきながら、一夏は迫りくる《双天牙月》の斬撃を宙返りでかわす。

そして、鈴音から距離を取ろうとめまぐるしく動きながら上空からアリーナの地上へと降下していく。

ひとまず、距離をとることはできた。後は、どこから立て直すか。

『甘い…』

そんな考えを強引に断ち切ったのは、後ろから響き渡った鈴音の声と、警告を示すモニター音だった。

何か　その正体は分からないが　が来る。

根拠はなかったが、確信した一夏は降下を止めないまま、【白式】の軌道を逸らす。

次の瞬間

(やべえっ!!)

一夏がさっきまでいた所を、“何か”が通り過ぎて行った。空間を引き裂き、進路上の全てを溶かそうとする、見えない砲撃が貫いたのだ。

それは一度では終わらない。まるで雨のように先ほどの見えない砲撃が一夏を襲う。

その内の一つが、【白式】の左側のウイングスラスタをかすった。うめきながら一夏が慌てて機体制御を行った瞬間、一夏と鈴音を結ぶ線の延長線上にあったアリーナ客席の天井の一部が、何の前触れもなく破壊された。

「な…!!?今のは一体…!!?’

想像もしていなかった事態に驚愕する一夏の前方で、鈴音は楽しそうな表情を浮べている。

『 今のはジャブだからね』

短いその一言が引き金となった。

一瞬、【甲龍】の両肩上部にある二つの非固定浮遊部位アンロックユニットが光った気がした。

本能的にかわすこともできず、目に見えない砲弾をまともに食らい、一夏は地面に叩きつけられた。

その衝撃は金寺、セシリア、箒、千冬、真耶のいる総合管制室にも伝わった。

「何ですのあれは!?!」

「空気砲…か? 目に見えなかったぞ…」

驚きを隠せない様子の二人に、横にいる金寺が説明する。

「……第三世代型・空間圧作用兵器・衝撃砲《龍砲》リオンキャノン。アイツは空間自体に圧力をかけて砲身を生成、余剰で生じる衝撃それ自体を砲弾化して撃ち出す代物だ」

「わたくしの《ブルー・ティアーズ》と同じ第三世代型兵器ですの…?」

セシリアの問いに、金寺は首肯した。

ちなみに、第三世代型兵器とは、搭乗者の意思による操作装置をイメージ・インターフェース内蔵している兵装。インフィニティ・コアの能力を、誰でも自在に使用できるようにするという構想の元から開発された。

「おまけにこいつは砲身も砲弾も眼に見えないし、その上砲身斜角がほぼ制限なしで撃てる。読んで字の如く『死角がない』」

強いて弱点を上げるとするならば、空気が薄い所では威力が弱わるること、真空状態では無用の長物になる点だろう。だが、基本的に大気圏内での戦闘では全く問題はない。

安定性を求められた【甲龍】らしく、安定した力を発揮できる特殊兵装だ。

地面に叩きつけられ、【白式】は砂埃を上げて地面を滑りながらろろつじて体勢を立て直す。

正面から食らったせいも、衝撃で体の節々が悲鳴を上げている。まともに直撃したせいで、シールドエネルギーも大幅に消費してしまった。

余裕を取り戻す時間がほしかった一夏だが、そんな暇を与えるほ

ど、鈴音は甘い性格ではない事は知っている。

間髪いれず響いた轟音に、自分のいる数メートル手前に大きな穴が開いたのをすっかり確認した一夏は、歯を食いしばって地上を滑るように移動しながら必死にその砲撃をよけていく。

その強大な威力からして連射が難しいのではないがという一夏の予測を裏切り、《龍咆》は立て続けに一夏めがけて正確に撃つてくる。

地上には一夏がいた所に、数多の穴が開いていた。

『はああああああっ!!!』

一夏が一瞬動きを止めた隙を見て、上空から《双天牙月》を振りかぶった鈴音が一夏に襲いかかる。

その一閃は確実に一夏を仕留めるために地面に向かって振りおろされたが、一夏は間一髪で後ろに下がり、再び飛翔した。その顔に余裕の笑みを保ちつつ、鈴音は一夏を追って同じように飛翔する。

『よくかわすわね。この《龍咆》は砲身も砲弾も見えないのに』

一夏の技量を称賛しつつ、止めることなく鈴音は《龍咆》を撃ちつづけた。

彼が目に見えない衝撃砲の一撃をかわせるのは単純な技量だけではない。

一夏はISのハイパーセンサーに《龍咆》が射出する瞬間に、空間の歪みと大気の流れを探らせることによって紙一重で砲弾をかわしていた。

だが、これでは攻撃に転化することが出来ず、逃げ回る事しか出来ない。

(…冷静になれ！俺は……千冬姉と同じ武器を持っている！)

自身の右手に握られている、近接特化ブレード《雪片式型》を強めに握りなおしつつ、背後から来る《龍咆》の無尽蔵な射撃をかわす一夏の脳裏に、クラス代表決定戦直後のアリーナでの千冬との会話がよぎった。

『金寺先生も言ってたけど……【白式】の武器って、この《雪片式型》だけなのか？』

『私も、それだけで優勝した。その一振りで十分だ』

『世界大会優勝者と一緒にされても困るんだけどなあ……』

直後、【白式】を纏った一夏が飛び上がる。千冬がその手に持っている竹刀で地面を強く叩いたのだ。

『大体、お前のようなド素人に射撃戦ができるものか。……反動制御、弾道予測から距離の取り方、一零停止、特殊無反動旋回アフソリユート・ターン、それ以外にも弾丸の特性、大気の状態、相手武装による相互影響を考えた思考戦闘　射撃戦闘に関する用語はまだあるぞ。出来るのか？お前に』

『うつうつうつ……ゴメンなさい……』

千冬 of 言葉を聞いて頭が痛くなった一夏は、頭を抱えながら謝る。彼の感情に比例してか、【白式】のウィングスラスターが縮こま

っているように見えた。

『ひとつの事を極めるほうがお前には向いている。何せ、“私の弟”だからな』

(バリア無効化攻撃…そして“あれ”が出来れば…)

一夏の中で勝利への回路が出来上がった。

でも、という自然と湧き上がってきた弱気な感情を振り払い、一夏は決心する。

「行くぞ………織斑一夏!!」

自らを鼓舞するように大声を張り上げると、《龍咆》を避けつつ大きく旋回し、ハイスピードで鈴音に向かっていった。

しめた!

急旋回して自分の方向へハイスピードで向かってくる一夏を見て、内心鈴音はほくそえんだ。

ついさっきまで【甲龍】の放つ《龍咆》はことごとく回避され、彼女は戦略を立て直そうかと考えていたところだったのだ。

近接格闘戦は【甲龍】のフィールドであり、【白式】のフィールドでもある。だが、一夏が考えたとおり単純なぶつかり合いでは、軍配が上がるのは【甲龍】だ。

今、一夏はその“フィールド”に入っただけとしようとしている。

鈴音には近接戦闘で一夏を圧倒して見せるだけの自信を持っていた。仮に拮抗したとしても、そのときはゼロ距離で《龍咆》をぶっ放せばいい。自身にも少なからずダメージはくるだろうが、それ以上に相手に与えられるダメージも大きいのだ。

前方から向かってくる【白式】は、鈴音にとってまるで蜘蛛が張り巡らした網という罠に何も知らずにやってきた純白のモンシロチヨウに見えた。

無邪気ともいえる邪悪な笑みを浮かべ、鈴音は接近してくる一夏に向かって《龍咆》を拡散する。

案の定ほとんどかわされて致命傷を与える事は出来なかったが、それで十分。

もつすぐ目と鼻の先まで近づいてこようとすると一夏を振り返りにするために、《双天牙月》を

ように降ってくる《龍咆》の砲撃を難なくかわしながら鈴音のはるか後方に飛翔する。

再び鈴音が後ろを向いて一夏の姿を確認したとき、一夏は鈴音に話し掛けた。

『鈴!』

「…何よ」

『本気出すからな』

鈴音の頭の中で、何かが爆発した。

“本気出すからな”。

その台詞は、まるで遠まわしに「今までは手加減だった」と言われているようだった。

何より、まだESの操縦経験が浅い一夏に言われると、国家代表候補生としてのプライドがズタズタに切り裂かれた感じがしたのだ。それ以前に、鈴音自身の性格が元々やや荒いという事もあった。

「何よ!そんなの当たり前じゃない!!
とにかく、格の違い
つてもものを見せてあげるわ!」

乱暴に言葉を吐き捨てると、鈴音は二刀の《蒼天牙月》を連結さ

せ、一夏めがけて思いっきり投擲する。

苦も無くそれをかわした一夏は、再びハイスピードで旋回する。
右へ、左へ、上へ、下へ、無秩序な動きで縦横無尽にアリーナを
駆け巡る。

《龍咆》の砲撃をはかすり傷程度のダメージしか与えず、自身に
接近してきてもほんの少しの接触だけですぐに離れていく。

その姿は、先ほどのようなモンシロチョウではなかった。
むしろ、自分の周りを飛び回る鬱陶しいハエのように見えた。

ささくれ立った神経を気にすることも出来ず、先ほどからイライ
ラしているのを自覚しながら鈴音は一夏に向かって《龍咆》を放ち
続けた。

一夏の戦術が目に見えて変化している事は、総合管制室にいる面
々にも分かった。

「織斑君…何か秘策があるのでしょうか…？」

未だに逃げとも取れる動きを続ける一夏をモニター越しに見なが
ら、真耶がポツリと呟く。

一方、この時点で、千冬と一夏の練習光景を見ていた金寺は、あ
る程度の察しがついていた。

「一夏に残された、事実上の“切り札”：そしてその発動への策略……」

おもむろに口を開いた金寺に篤、セシリア、真耶が顔を向ける。

「その切り札の名前は

“イグニッション・ブースト瞬時加速”、だ」

「イグニッション……」

「ブースト……？」

聞きなれない単語を耳にした篤とセシリアはよく分からないといった感じに首を傾げる。

金寺が確認を取るように千冬を向くと、彼女は頷き、説明を始めた。

「その通り。私が教えた。一瞬でトップスピードを出し、相手に接近する奇襲方法だ。出どころさえ間違わなければ、あいつでも代表候補生と渡り合える。しかし」

そこで千冬は一旦言葉を区切り、目をつぶってから再び鋭い表情を構築し、短く言う。

「この奇襲攻撃が使えるのは、おおよそ一度だけだ」

そこで金寺が千冬の説明を引き継ぐ。

「原理としては、ウイングスラスタから全面放出したエネルギーを一度取り込んで圧縮、そしてまた全面開放をする。そのときの慣性エネルギーを爆発的推進力に利用する、と言ったところだ」

瞬時加速による爆発的加速力と、【白式】の単一使用能力、《零落白夜》。

この二つが上手く重なり合えば、一撃必殺の強力な戦術になる。

それがまるで、【白式】の真骨頂とでも言うように。

事実、先ほど一夏が考えていた“あれ”はまさにその瞬時加速だった。

丁度一週間前から、一夏は従来の訓練時間にあわせて千冬から二人きりで瞬時加速の特訓を続けてきたのだ。

そして今行っている行動は、鈴音をかく乱し、死角を見つけ、そこへ瞬時加速で思い切り飛び込もうというものだった。

現在も、一夏は縦横無尽にアリーナ上空を駆け巡り、鈴音の一瞬の間を見つけようとしている。

鈴音をかく乱するにあたって、これまでの訓練が全て生きてくる形となった。

基本的な旋回や航空に関しては、日頃から繰り返してきた事によりもうすっかり慣れている。《龍咆》に対しては、セシリアの【ブルー・ティアーズ】との何十回という模擬戦で慣れてきた回避運動で難なくかわす。《双天牙月》に対しては、箒との剣道の練習や模擬戦で感覚を思い出した間合いの取り方で自分のペースに持ち込み、金寺からアドバイスされた、【白式】の機動力を最大に生かせる一撃離脱戦法ですぐさま離れて、鈴音にペースを渡さない。

そして千冬直伝の瞬時加速で、勝負を決めるチャンスをつかがう。

今の一夏は、決して愚かに畏へ向かうモンシロチヨウでもなく、鈴音の周りを飛び回る鬱陶しいハエでもない。

むしろ、茂みの中から虎視眈眈に獲物を狙い今仕留めようといわんばかりの猛虎だ。

そして何より、もう一つ、目に見えて分かる鈴音の変化がある。

さっきより攻撃が雑になってんじゃねえの!?

実際、そうだった。

一夏がかく乱作戦を開始して以降、確かに鈴音の一つ一つの攻撃が明らかに雑になっていた。

例えば、《双天牙月》。

先ほどまではただ単に力押しするだけでなく、的確にパワーを刀

に加えて一夏を押し切るうとしていた。それが、今となってはただ力任せにぶつけようとしているだけである。

さつき鈴音に向かって言い放った「本気出すからな」という台詞は、作戦の一つだった。

鈴音がやや気性の荒い性格という事を知っている一夏だからこそ、あのような挑発めいた台詞をわざわざ吐いたのである。

そして、今一夏がやるうとしている事は。

自分の姉の十八番だった、必殺技。

瞬時加速で相手の懐に潜り込み、《零落白夜》を発動した《雪片式型》で相手を一刀両断。

こうして考えてみると、このためだけに【白式】というISが存在するような気もしないことも無い。

そして そのときが来た。

一夏が上空にいる鈴音の死角を狙って彼女の下方を横切ったとき、不意に鈴音が一夏を見失ったのだ。

先ほどから虎視眈々とチャンスを狙っていた一夏が、これを逃す

わけが無い。

(《零落白夜》 起動！瞬時加速！！！)

心の中で強く叫んだと同時に、《雪片式型》の刃が眩い煌きを放つビームブレードへと姿を変える。

背後の二基のウイングスラスターがコアエネルギーを全面解放し、一旦内部に取り込んで圧縮。

次の瞬間、再び圧縮されたインフィニティ・エネルギーが全面解放され、【白式】の背中に神々しい光の翼が宿った。

そして、一夏は狙いを上空にいる【甲龍】に定める。

「うおおおおおおっ！！！」

一夏が雄たけびを上げた瞬間、《零落白夜》と瞬時加速によって爆発的推進力を得た【白式】が、先ほどとは比べ物にならない猛スピードで鈴音に向かっていく。

一瞬、回避行動をとろうとしている彼女が顔面蒼白になっているのが見えた。

だが、気にしない。

これが、一度きりのチャンス。これが、最後の一撃。

一夏と鈴音の間に直線が結ばれ

紅い一筋の光が駆け抜けた。

一夏と鈴音を結んでいた直線の真横を。

2・強襲（前書き）

クラス対抗戦に突如飛来した光。強襲者が、その姿を現す。

2・強襲

それは、アリーナ上空から来た。

突如迸った赤い光は、爆炎と轟音を上げ、地面に着弾する。

反射的に、一夏も鈴音も動きを止める。

一瞬、一夏は【甲龍】の奇襲攻撃かと思ったが、

『何……!!?』

ただ驚いている様子からして、その可能性は無くなった。

モニターで自機の様子を確認したが、何か異常が起きたわけではなく、瞬時加速が暴走した形跡も無い。

『システム破損！何かのアリーナの遮断シールドを、貫通してきたみたいですよ！』

総合管制室から、二人の耳に焦せった様子の真耶の声が飛び込んできた。

それが示す事実は一つ。

完全な、緊急事態。

『試合中止！織斑、凰！直ちに退避しろ！』

この千冬のアナウンスがアリーナに響き渡った瞬間、一気に客席から動揺が生まれた。

客席用のシエルターが下がり、それらの声が遮られる。

「何が起きたんだ…!?!」

紅い光が迸ったのが分かったただけで、それ以外は全く分からない。今も、光が着弾したところからは黒煙が上がっていて、何が起きているか見当もつかない状態だ。

『聞こえた!? 試合は中止よ、すぐピットに戻って!』

鈴音からの通信が入ると同時、モニター右に赤枠の警告文がポップアップされた。

ステージ中央に熱源
所属不明のISと断定
ロックされています

LOCKED

「ロックされている…? 俺が…!?!」

『聞こえてるの！？早くピットへ！』

状況に追いつけていない一夏の元に、鈴音から通信が入った。

「お前はどつするんだ！？」

『あたしが時間を稼ぐから、その間に逃げなさいよ！』

「何言ってるんだ！お前をおいてのこのこ引けるかよ！」

『って言ったって、アンタISに触ってからそう時間が経ってないでしょ！？あたしの方が経験あるんだからしょうがないでしょ！』

真正面から正論を言われ、一夏は返す言葉を失う。

確かにISの操縦者としての経験、実績は、完全に一夏より鈴音の方が上だった。

『別にあたしも最後までやりあつつもりはないわよ。こんな異常事態、すぐに学園の先生がやってきて収拾』

鈴音が言い終えるよりも早く、一夏の勘が彼の体を突き動かした。

同時、黒煙の中から再び紅い光が迸り、それが【甲龍】に襲い掛かる。

すばやく動いた一夏は、突如迸った光に怯んだ鈴音の腕を強引に掴み、光条から彼女を遠ざける。なるべくバランスをとりやすいようにするため、支点を背中と膝裏へ移した。

「セシリアの【ブルー・ティアーズ】と同じビーム兵装か……！」

それにビーム砲が高出力である事は、これらに詳しくない一夏にもすぐ判った。

第一アリーナ上空には遮断シールドが施されており、そう簡単には突破できないはずだ。

にもかかわらず、今のビーム砲はその遮断シールドを軽々突き破ってきたのだ。あたればその被害はとんでもない事になるだろう。

『……あ、ちよつ、ちよつとバカ、離しなさいよ!』

「……ってうわあっ!? そんなトコで暴れんな!」

『一夏にお姫様抱っこをされている』という予想外の状況に、暫し呆気を取られていた鈴音だが、その事実を把握すると慌てて一夏から
恥ずかしいので、離れようと暴れ出した。

それに吃驚した一夏は、自身に及ぶ被害を防ぐため、素直に彼女を離す事にした。

「大丈夫か?」

『あ…う、うん。ありがとう』

鈴音が言葉を切った直後、二人の耳に電子警告音が入ってくる。即座に反応した一夏と鈴音が回避行動をとると、再びビーム砲が襲い掛かる。

その直後、黒煙が消えて、敵機が姿をあらわした。

巨大な腕と足に反して華奢な胴体と言う歪なフォルム、通常のI Sの二倍はあるつかと言う寸胴なその巨体、無機質さを感じさせる、

ビームと同じ紅に光る人の目のような穴。

そして何より特徴的なのが、フルスキン全身装甲。

通常、ISはシ

ールドバリアによって操縦者が守られるため、基本的に装甲は、胴体、脚部、腕などの最低限の部分にしか存在しない。

物理シールドを兵装として搭載している機体もあるのだが、前方にいるISは、人間の肌ともいえる部分が、1ミリも露出していないのだ。

まるでこの世のものではないような感じを、その機体　巨人は醸し出していた。

その姿はまるで、【ゴーレム】と呼ぶのにふさわしい。

「こいつは…これでもISなのか…?」

一夏がそう思つのも無理は無い。黒煙の中にある【ゴーレム】は、彼の知っているISとは全然違った。

その【ゴーレム】は、じつところこちらを見つめていた。動く気配が無い。

「お前は何者だ！答えろっ!」

通信回線を全領域に開き、一夏は【ゴーレム】に向かって声を張り上げた。

だが、返事は無い。

表情をしかめる一夏の元に、総合管制室から通信が来る。

『織斑君、鳳さん！今すぐアリーナから脱出してください！先生達が、すぐにISで制圧に行きます！』

『残念ながら、そんな暇ないぞ』

真耶の声が響いた直後、別の声が入る。女性のものではない、低く鋭い声。

金寺龍輔だった。

「どつという事ですか？」

『今、あの寸胴野朗の放ったビーム砲の大体の威力と射程距離を計算した。……その結果だが、通常のISでは再現しようの無い出力と射程距離が確認できた』

ビーム砲がアリーナを貫いたとき、金寺はその場にいた誰よりも早く行動を取った。

学園の外部にある監視カメラの映像を、全て自分の手元にあったモニターに移し、ビーム砲によって地面にあいた風穴から威力、射程距離のある程度の予測数値を出したのだ。

これは、金寺にしかできない芸当である。

『……分かりやすく言えば、あれを二、三発ぶっ放せばアリーナのシエルターも危ない……!』

つまり、ここで一夏たちが引けば、無防備な一般生徒に被害が及ぶ可能性がある。最悪、死人が出る可能性もあるのだ。

『嘘でしょ……!』

愕然とする鈴音の声を聞きながらも、金寺は一夏と鈴音に向かって話す。

『あのクソ野郎をぶっ潰せとは言わない……先生たちが来るまでの時間稼ぎだ。お前ら二人、出来るな?』

金寺から来た予想外の問いに、一夏も鈴音も一瞬驚いた。だが、二人は顔を見合わせ、

「分かりました」

『……やってやるうじゃない』

決然と、意志を決める。

これは、生徒を守るための戦いだ。一步も引けない。

『そつ……それは、そうですね……でもいけません!』

『一夏さん……!』

『一夏……!』

真耶の後に立て続けに聞こえてくるセシリアと篝の声を聞いても尚、一夏の決意が揺ぐことはない。

しかし、確か管制室はアリーナに直通の通路があったはずだ。

「……セシリア、頼みがある」

一夏の揺るがない決意は、鈴音も同様だった。

「いけるな？」

『…誰に向かって言ってるのよ』

一夏の問いに、鈴音から不敵な返事が返ってくる。

それを見た一夏は思わず笑みをこぼす。それを見て鈴音も微かに笑みを浮べた。

そして、前方の所属不明機 仮称、【ゴーレム】に向き合う。

直後、敵機はその巨大な足で地面を蹴り上げ、空中へと飛ぶ。

「来るぞ！」

そう一夏が言い切る前に、鈴音は動いており、一夏もそれに続く。巨体に似合わぬ俊敏さだが、二人は難なくその攻撃をよけきる。

歪な拳は空を切るも、散開した両者に向け、【ゴーレム】はビーム砲で攻撃。最初の一撃とは違い、殺傷力を弱めての拡散形式だ。

それをかわし、《龍咆》の援護射撃を受けながら一夏は《雪片式型》をかざして接近しようとするが、【ゴーレム】の張るビームの弾幕に遮られて近づけない。

『私が援護するからアンタは突っ込みなさい！武器それしかないんでしょ！』

「ああ…よし、それでいくぞ！」

再び一夏は気合を入れなおし、【ゴーレム】に向き合う。

敵のスピードは依然速く、腕の収束ビーム砲を撃ちながら、《龍咆》を拡散し放つ鈴音の真横を凄まじいスピードで通り過ぎる。

一夏は再度接近しようとするが、【ゴーレム】はビーム砲を拡散し、またしても一夏が近づけないように弾幕を張り、遠ざかる。

「くそっ！速すぎる！」

その動きには一切の無駄がなく、巨体のイメージに合わせスピードを発揮している。

戦いの雲行きが、怪しくなってきた。

「第二アリーナ遮断シールドレベル4…？」

総合管制室にて。

真耶に代わり、管制システムの操作を行っていた金寺は、目の前に現れたウィンドウを見て啞然とした。

「これでは、非難も救援もままならない…！」

彼の後ろで、悔しさを押し殺すように千冬がうめき声を上げる。これによって、教員がアリーナ内部に突入することも、客席にいた生徒がアリーナ外部に出ることも不可能となったのだ。

「あのISの仕業……」

横で考え込むセシリアに金寺が同調する。

「そう考えるのが妥当だな……突如強襲し、アリーナの緊急シーケインスを強制操作…一体何が狙いなんだ？」

「でしたら…！緊急事態として政府に救援を！」

行き着く気配がない問いに金寺が頭を抱えていると、セシリアは後ろを向いて千冬に向かって言った。

「やっている。現在」

「そんなモン今終わるぞ」

金寺が千冬の声を守るように言うのを聞いて、全員の視線が彼の操作するモニターに集まった。

「システムク拉克コード00334…通達シーケインス081、2Bから6Eに移行……。これでOKだ」

そして、セシリアに向き直り、

「一夏からの依頼、忘れてないだろ？」

「行ってこい」

一方、戦場では情勢に変化が起きていた。

「第二アリーナがロックされた…!？」

突如飛び込んできた情報に、【ゴーレム】を追いながら一夏は目を丸める。

『嘘でしょ!?!本当に!?!』

「ああ、さつき金寺先生が言ってた…!」

鈴音の驚愕の声に返事をしつつ、一夏は【ゴーレム】の懐に飛び込む機会を窺う。

そして 依然、地上を高速で動きまわる巨人の動きが、一瞬硬直した。

「そこだあつ!!!」

この機会を逃さないと言わんばかりに、一夏は【ゴーレム】の左側から一機に胴体めがけて突進する。

だが、【ゴーレム】は再び動き出す。
その左腕を、横薙ぎに振るってきたのだ。

まともに当たれば、大ダメージは避けられない。すでにその巨体に肉薄していた一夏は反射的に右方向に体をねじって回転し、その攻撃を何とかかわした。

それに合わせて、右腕のビームソードモードの《雪片弐型》が真上に振り上がる。

剣の一太刀が向かう先は【ゴーレム】の左脇。このままいけばどうなるか、それは一夏にも分かる。

だが、慣性に従った右腕の動きは止められない。

一夏が、鈴音が、金寺が何かを言う前に、《雪片弐型》の一閃が、【ゴーレム】の左腕を肩口から吹き飛ばした。

一夏が振り返った直後、【ゴーレム】の肩口から盛大に爆発が起きる。

赤い液体が、洪水のように切断された場所から吹き出た。

『ば…バカ…っ！何…や、ってんの…っ…！？』
「俺だつてそんな…！！」

あまりの事態に顔を真つ青にする鈴音と一夏。

だが次の瞬間、今度こそ二人が絶句する。

左腕を肩口から切断されている【ゴーレム】が、再び突進してきたのだ。

呆然としつつ二人は危なげなく回避。左腕を失っているせいか、やや機体のバランスが取れていなかったが、それでも圧倒的なスピードは変わらない。不思議な事に、一刀両断された左腕を気にしている様子は一切なかった。

「何で…？腕を切られたのに…！」
『これを見る』

驚愕する鈴音と一夏の元に、金寺から光学カメラの詳細データが送られてくる。

そこに映っていたのはアップされた【ゴーレム】の左肩の付け根の画像。

このISを人間が操縦しているのならば、そこから人の骨なり、血液なり、人肉が見えているだろう。

だが、それが無い。

本来それらがあるであろうところにあつたのは、電子配線や人間のものとは違う骨組みのようなものが存在していた。

つまり。

それが意味する答えは、一つ。

「あれは……無人機だ……！」

鈴音は信じられなかった。

ISは、人が動かさなければ動かない。

その事は彼女の頭の中に常識として、普段から居座り続けてきたのだ。

だが、一夏と金寺は、【ゴーレム】がもしかしたら無人機なのではないかと、予測がついていた。

アリーナの遮断システムをロックし、学園の情報網をもってしても所属不明扱い。おまけに、先ほどのように【ゴーレム】が動きを止めるときは、一夏たちが何らかの会話をしているときだった。

単純に、奇妙な点多すぎるのだ。

それもあの巨人が無人機だという事実を知れば、当然といえば当然であったようにも感じる。

「ってことは……これでやれる……！」

「何か策があるわけ……？」

「ああ」

相変わらず地上から無尽蔵にビームを浴びせてくる【ゴーレム】
に対峙しながら一夏は自信を持った表情で答える。

鈴音が息を飲んだのがわかった。

「【白式】の単一使用能力…《零落白夜》は、相手のシールドエネルギーを削り取る事が出来る……それは操縦者にダメージを直接与えるから、あまり模擬戦だと力を出し切れないんだ」

一夏が鈴音に話し掛けている間、先ほどのように【ゴーレム】はその動きを止める。

「だから相手が無人なら…本気を出せる」

そう確信している一夏だが、一つ問題があった。

先ほどのように、【ゴーレム】に肉薄するには瞬時加速を兼ねて《零落白夜》を発動しなければならぬ。

それを実現するためのエネルギー残量を、今の【白式】は持ち合わせていなかった。

それ知ってたか、金寺から再び通信が入る。

『織斑一夏に問題』

「？」

『瞬時加速の原理はなんでしょ？』

いきなり出された問題に一夏は思わず頭を抱える。それによって会話が遮断されたため、【ゴーレム】が再び収束ビーム砲を撃ってきた。

「ええ！？ええつと確か……ウイングユニットから全面放出したエネルギーを一度取り込んで圧縮してからまた全面開放をしてそのときの慣性エネルギーを加速に利用する、でしたっけ！？」

『大正解。ちなみに、【甲龍】の《龍咆》も、見えないとはいえ立派なエネルギー砲弾だ。　　ここまで言えば……分かるよな？』

「??????」

にやりとモニター越しに笑う金寺を見て、一夏は自分の頭が混乱していくのを感じた。

(何なんだ？全く分かんねえ！………待てよ、瞬時加速は一旦放出したエネルギーをまた取り込んでから放出する………そしてあの衝撃砲もエネルギー砲弾………

まさか！！)

この瞬間、一夏の脳内で完全な勝利の方程式が浮かんだ。金寺との会話の真意をやっと理解したのである。

ビーム砲をかわしつつ、一夏は口元をぎゅっと締めた後、少し離れたところにいる鈴音に向かって通信回線で叫ぶ。

「鈴！俺が合図したらアイツに向かって最大出力で衝撃砲を撃ってくれ！！」

『いいけど……当たらないわよ！？』

「問題ないさ！」

自信満々に答える一夏を一瞥して、了解したのか鈴音は頷き、一

夏とともに再び回避運動に専念する。

地上を滑空しながら二機に向かってビーム砲を放つ【ゴーレム】から目を離さず、一夏は千載一遇のチャンスをつかがう。

そして、死角に回り込んだ鈴音を捉えようと巨体が体の向きを変えた瞬間

『一夏あっ！』

何故か、アリーナのスピーカーから、箒の聲が飛び込んできた。

『男なら……男なら、そのぐらいの敵に勝てなくてなんとする！』

どうやら、管制室を抜け出して激励してきたようだったが、それが最悪の事態を生み出していた。

『何やってんのよ、あの娘！！』

【ゴーレム】の残った右腕が、箒に向く。

このままでは、すさまじい破壊力を持った光条が、箒に襲い掛か

る。

猶予は、無い。

「今だ！！鈴、撃て！！」

「分かった

！？」

そう言っつて、鈴音が《龍咆》の射出エネルギーをチャージする。だがその直後、彼女の目が驚きに見開かれた。

《龍咆》と【ゴーレム】の射線上に、一夏が入り込んだのだ。

これでは、衝撃砲の一撃が自分のに命中する。

しかし、それも策の内。

『何やってんのよ！！それじゃあ当たるじゃない！！』

「いいから早く！！」

自分の行動の真意がつかめず、啞然とした鈴音だったが、最早やるしかないと腹をくくったようだ。

『ああもうっ！！』

どうなっても知らないわ、よ

っ！！！！』

半ばやけくそ気味に割り切ると、鈴音は言われたとおりに最大出力で《龍咆》を放つ。

そしてそれは、【白式】の背部に命中し

た。
衝撃砲の生み出したエネルギーが、【白式】に取り込まれ

何が起きているのか全くもって分かっていない鈴音を尻目に、一夏は背後からの衝撃に耐えつつ、目の前のモニターを確認する。

I n f i n i t y - E n e r g y …… 7 2 0 .

R e s o n a n c e - P r o p o r t i o n …… 7 8 P e r c e
n t .

C o r e - B y p a s s …… T h e e n t i r e s u r f a
c e L i b e r a t i o n

ワンオフ・アビリティー
単一使用能力《零落白夜》れいらくひやくちや・発動可能

再び《雪片式型》が神々しい眩い煌きを放つ。
同時に、彼の後方で、爆発のような光の翼が発生した。

そんな事には目もくれず、一夏は【ゴーレム】に向かって凄まじい速度で迫っていく。

【ゴーレム】もはじき返そうと腕の収束ビーム砲を構えるが、遅い。ビーム砲を相手が放つ前に、一夏は巨人の懐へともぐりこむ。

そしてついに、《雪片式型》の一閃が、【ゴーレム】の胴体を真横に切り裂いた。

だが、次の瞬間、ビーム砲では遅いと判断したのか、【ゴーレム】は余った右腕を横殴りに振るった。

その衝撃に、自然と一夏は吹き飛ばされる。

「があっ……………!?!」
『一夏!—!—』

鈴音の悲鳴に大丈夫、と答えようとした一夏は、自分の体が動かない事に気付く。

見ると、巨人がその豪腕で、一夏を【白式】ごと握りつぶそうと

していた。

鈴音は、先の衝撃砲で消耗している。そう簡単には救援に來られないだろう。

だが。

「今だ……撃て！セシリア！」

『ええ……照準は完璧』

通信機越しに響く、少女の声。

『狙い撃ちます！』

狙撃手の声が響いた瞬間、青白い光が、【ゴーレム】の胴体を一直線に貫いた。

遅れて、爆発。

派手に火の粉があがり、一夏を拘束する力が緩む。

だが、【ゴーレム】は腹部のビーム砲を、一夏に向けようとして

いる。

『まだまだ！止めを刺せ！』

総合管制室から届いた千冬の声を聞き、一夏は少し巨人から距離を置く。

と。

その時だった。

アリーナの物陰から飛来した、一条の淡いピンク色の光が、【ゴ
ーレム】を撃ち抜いた。

「……………え？」

止めを刺そうとした一夏は、思わず間抜けな声を上げていた。

同時、目の前では、動力源を撃ち抜かれたと思われる【ゴーレム】が、ひときわ激しいスパークを機体のあらゆる場所から上げていた。

『 その場から離れる！！ 』

耳に響く、千冬の声。

言われるまでも無い。一夏だけでなく、鈴音とセシリアもバックブースト。

そして、すさまじい爆発音を上げ、すさまじい衝撃を生み出した【ゴーレム】は、爆煙と、用を成さない鉄塊に成り果てていた。

2・強襲（後書き）

さて、一夏ですが、鈴音とのゴダゴダが無かったのと、セシリアと
篤が節度を持って訓練に付き合ってくれたので、ここまで善戦する
事が出来ました。

最後に放たれた一条のビーム。
ある程度、予想がつくと思いますがいかがでしょう？

3・闇の始動（ダークネス・イグニッション）（前書き）

全てが終わった今回の騒動。

だが、闇は目覚めの時を迎える。

3・闇の始動（ダークネス・イグニッション）

「……本当に良かったのか？」

【ゴーレム】が大爆発を起こした直後、管制室に戻ってきた金寺に千冬はそう言った。

その一言には、呆れや心配の感情が入っているように、真耶は思えた。

「いいんだよ、結果オーライだ」

短くそれだけ言うと、金寺はアリーナ中央にいる三人に通信を送るために、機器を操作する。

その途中に、真耶は気づいた。

黒のスーツを着ている彼の手首に、まるでリストカットの後のような切り傷があったのだ。

それはまだ血がにじんでいて、かなり新しい傷らしい。

「全員、総合管制室にくるように」

「…分かったわ」

「…了解です」

「承知しましたわ」

各自から、しびしびといった感じの返事が帰ってくる。

自分を含め、結果的に彼らはこの事件に関わってしまった。学園上層部から口止めのような何かしらと言われるだろう。

そう考えると若干気が重くなるのだが、金寺はそれとは同じように違う表情を浮べていた。

「箒がどこにいるか、わかるか？」

「篠ノ之さんですか？さつき第三音響室に行つて…」

「そうか…ありがとな」

溜息混じりにそう言うと、金寺は再び管制室を後にしていく。先ほどの箒の行動は、真耶に冷や汗をかかせるには十分すぎた。

迂闊だったのは、先の全身装甲によるハッキングが金寺によって解除され、その事後処理を行うために手元の作業に集中してしまつた事だった。

結果、セシリアがISスーツに着替えに行つた直後、千冬の間を見計らつて管制室を抜け出し、アリーナの第三音響室へ突入。一夏に檄を飛ばしたことによって、一瞬全身装甲にロックされてしまつたのだ。

正直、あれは酷かつたと思う。

ISを前にして生身をさらすというのは、最早論ずるに値しない。彼女のあの行動が、一夏のことと考えが行き過ぎていてそちらへ思考が向いていなかつたのかどうかは、分からない。

けどあれは、二度としてはならない行為だろう。千冬はもちろん、スピーカーから箒の声が響いた瞬間、金寺が悪態をつきながら管制室を飛び出していった事から、それは金寺も分かっているはずだ。

いずれにせよ、今日は気が重くなる事が多すぎた。

職員室で日本茶をのんびりするという、日々のリラックスタイムが恋しいと思いつつ、真耶は軽く溜息をついた。

「…そこにいたか」

「金寺先生…」

金寺が箒を見つけたのは、アリーナの出入り口だった。

自分の姿を確認した箒は、怯えているかのような眼でこちらを見
てくる。

という事は、自分の先ほどの行為が愚かなことだったと、自覚し
ているのだろう。

「いくつか聞きたいことがあるだけだ。説教する気は無い」

軽く息を吐くと、金寺は前方の箒へ向けて歩を進めていく。

箒は視線を下に落としていて、金寺の目を見ようとしていなかった。
た。

「…どうしてさっき、あのような行動に出た」

「それは…」

金寺が聞いただと、箒は答えに詰まったように再び視線を落と
した。

「大方、一夏を叱咤激励しようとも思っただら？」

「そう…です…」

やっと帰ってきた筈の声は、注意しなければ聞き取れないほど細かった。

「で、その結果どうなった？」

「……………あの機体に……………狙いをつけられて……………」

どうやら、筈は自身の行動がどのような事態を招いたか、しっかりとわかっているようだった。

「分かってるなら今はそれでいい。この後どうしたらいいか、…それは自分で考える。…そうだ、教頭からお前らにお呼出がかかってるぞ」

くるりと体の向きを変えた金寺は、それ以上何も言わずに彼女の元を去っていく。

あえて説教をしなかったのは、今の状態でまともに聞ける状態ではなかっただろうし、何よりこの先彼女自身がどのように考えていくか、自分で判断させたかったからだ。

教師というのは、答えを“教える”のが仕事ではない。答えを“導かせる”のが仕事。

この学園に来たとき、千冬がそう言っていたのを思い出す。まさにその通りだと思った。

これから先、筈がどのようになりたいのか、何を指したいのかは、金寺は分からない。その上で、そこへたどり着くためには自分で考え、自分で実行しなければならない。

言葉にはしなかったが、金寺はそう伝えたかった。

だったら最初からそう言えよ、と思わなくも無いが、箒の姉のことを考えると、その選択肢がベターだと思ったのだ。

(東……お前は今、何をしている?)

心の中でそう呟きつつ、千冬に呼び出しを喰らっていた事を思い出した金寺は、学園の校舎へ歩いていった。

学園の教頭先生から緘口令をしかれた一夏、箒、セシリア、鈴音の四人は、人気が無い第二アリーナのロッカールームにいた。

緘口令を言い渡された直後、箒から一夏たちに対し謝罪があった。その内容は、先の事件にて、自らの身を危険にさらした上に、結果的に一夏たちを危険にさらしてしまった事に関してである。

本人はとても申し訳なさそうだったが、一夏たちは普通に許した。一夏は、「結果的に俺らは無事なんだからそれでいいじゃないか」と言い、鈴音は、「無謀なまねはしないほうがいい、って教訓が出来たんだからいいでしょ」と気楽に言った。

その後、一夏と鈴音は制服に着替え、あの一件のことを語ろうとしたのだが、生憎寮のロビーは人が多かったため、わざわざこの場所を選んだのだ。

何せ、そうまで話したい事がある。

「……あのビーム砲は一体なんだったんだ？」

先の戦闘にて、アリーナの物陰から突如入り、【ゴーレム】を一撃で沈めた淡いピンク色の粒子ビーム砲。

千冬曰く「教師陣による迎撃」らしいのだが、どうも彼らは納得がいかなかった。

「弾道速度、威力、命中精度…どれも、現存するISのどれよりも上回ってましたわ…」

【ブルー・ティアーズ】に記録されているその映像を見ながら、セシリアが若干悔しそうに呟く。

やはり、ビーム兵器を扱う身として、目の前で自身をはるかに上回るビーム砲による狙撃を見せ付けられては、悔しいだろう。

そんな彼女に同情しつつ、ロッカーに寄りかかっている鈴音が、セシリアに確認を取る。

「…確か、BT兵器って、イギリス以外で公表されて無いわよね？」

「わたくしの知っている限りでは…」

「…って事は、イギリスが…？」

「それは無いですわ」

一夏が出した一つの可能性を、セシリアはきっぱりと否定する。

「何故言い切れる？」

「わたくしの【ブルー・ティアーズ】は、イングランドで初めて実用化されたBT兵器搭載型ですの。それ以外では、わたくしと【ブルー・ティアーズ】のデータを参考に現在開発が進んでいるBT二号機以外、存在しませんわ」

「じゃあ……………あれは何なんだ？」

セシリアの説明の後に発した箒の一言が、この場の四人の心境を物語っていた。

何もかも説明しようが無い。あの粒子ビーム砲を何が放ったのか、どういう意図があったのか、果たして自分たちを助けようとしたが故のことだったのか。

一学生である自分たちが入り込めるような領域ではない事は分かっているもの、それが自分たちの危険を救った以上、どうしても知りたくなってしまふ。

だが、今は八方塞だ。先に進む事も、あがく事もできない。

「…仕方が無いわ。保留するしかないわよ」

「それもそうだな…このまま考えても答えが見つかるとは思えん…」
「今のわたくしたちではどうにもする事が出来ませんわね…」

鈴音、箒、セシリアが、諦めにも似た言葉を言う。

だが、一夏はいまだに納得がいかなかった。

「…でもよ、やっぱり知りたいよ、俺は」

あきらめない、絶対突き止めてやる、といった感情を滲み出しつ

っ、一夏は喘ぐように言った。

彼がここまで執着するには、れっきとした理由がある。

あの時、【白式】が感じたのだ。

何かの、昂揚感に近いものを。

その存在に、歓喜するかのように。

IS学園、地下施設。

病院の診療台を思わせるベッドには、先ほど一条のビーム砲の
撃で散った【ゴーレム】が眠っていた。

それは、中身がからっぽの、ISと呼べるかどうかすらわからな
い代物だが。

天井からは機械の溶接などに使うだろう機器が吊るされていて、
どうやら、ISの解体作業に従事しているようだった。

その後、騒ぎにまぎれて教員は、学園上層部からの指令を受けて
秘密裏にこの所属不明機を回収していた。

ビーム砲に胴体を穿たれて爆散した【ゴーレム】は、何とか原型
をとどめている状態だった。

幸いにも、その巨人に搭載されていたインフィニティ・コアには損傷は見られなかった。

だが、そのインフィニティ・コアに、問題があった。

「結果は出たか？」

「はい、それが……」

研究成果を千冬に問われ、別室にいる真耶がキーボードを叩きつつ、答えようとして、言いよどむ。

「確かにこれはコアですが……正確に言うと、コアじゃないんです」「どういうことだ？」

予想だにしない真耶の答えに、千冬が思わず声をあげる。
金寺が地下施設に入ってきたのは、丁度その時だった。

「……本来コアにあるべき機能が無かった、とでも言うべきか？」

そう言う金寺に千冬は怪訝な視線を向けたが、真耶はそれに肯定した。

「そうなんです。……これ、コア・ネットワークが一切確認できなかつたんです。それに、他にも細かい所ですけど、金寺先生が言った通り本来コアにあるべき機能が無いというか……」

それを聞き、考え込む千冬に対し、金寺はある程度の考察が既に出来ていた。

「……海賊版」

千冬と真耶の視線を受けつつ、金寺は持論を口にする。

「こいつは…疑似コア、とでも言うべき代物かもな…」

「疑似コア？」

真耶が首を傾げるのを確認しつつ、金寺は言葉を続ける。

「要は、戦闘のみ重視したコア…本来の用途であるはずの、宇宙進出を無視した、純粋な軍事用のもの…」

「それって…」

「…かなりまずい事になるな」

重苦しい様子で、真耶と千冬が口を開く。

「現在ISのほとんどが軍事転用されている…もしこれが流出する事があれば…」

そこから先は、言わずもがなだ。

核兵器と同等の力を持つといわれているIS。中枢のコアの数制限されているからこそ、今の世界は均衡がとれているようなものだ。

そこに、純粋な兵器用かつ、量産可能なコアが登場すればどうなるか。おそらく各国の軍備増強が進み、下手すれば第三次世界大戦が起こりかねない。

「…山田先生、このデータは完全にブラックボックス化しておくように。絶対流出するような事があっては…」

「…分かっていきます」

千冬の言葉を聞き、事の重大さをかみしめた真耶は、重く頷いた。それを確認し、今度は金寺の方を向く。

「…金寺、この“疑似コア”とやらの解析を進めてくれないか？ともかく、今のままではデータが足りない」

「…やれるところまでやってみる」

そう言いながらも、金寺は千冬からデータ保存のメモリースティックをもらい、“疑似無限炉”のデータを取り込む。

各々が、迫りくる大波乱を予感していた。

中東、ドバイに存在する、高級ホテルの最上階の部屋。

そこには、二人の女性がいた。

一人は、黒髪の少女で、見た感じは15歳ほどに見える。
もう一人は、薄い金髪の美しい女性。

薄暗い部屋で二人は、モニターに移されているデータと映像に目を通していた。

「あれは撃破されちゃったみたいだけど、ミッションは成功ね」

一通りデータ IS学園から盗んだ を確認した金

髪の女性は、満足そうにそう言うと、別室へと戻っていく。

一方で少女は、ソファーに座りつつ、映像のほうを凝視していた。
その中では、白いISとマゼンタのISが、全身装甲のISに向かって攻撃を行っていた。

(つまらないな...)

ふと、少女は心の中で呟いた。

生ぬるい、と思う。

今モニターに映っている戦闘が、彼女にしてみればとても生ぬるいものに見えた。

自分なら、この全身装甲を、一分もかからず鎮圧する事が出来る。

なのに、今モニターに映っている、白いISをまとっている少年と、マゼンタのISをまとっている少女は、かなり苦戦しているよ

うだ。

つまらない。

もう一度、その言葉を口に出さずに呟く。

だが次の瞬間、予想外の事態が起きた。

突如、どこからか来た淡いピンク色のビーム砲が、寸分狂わず全身装甲の動力源を撃ち抜き、爆煙と用を成さない鉄塊に姿を変えしめたのだ。

驚きを禁じえない。

あのような威力が高く、精度もよく、弾道速度も速いビーム兵器の一撃は、見たことが無い。

少なくとも、そのそばに停滞している青いIS アイルラ
ンド製のBT兵器サンプリング一号機 の一撃ではないよう
だ。

だが、少女はそれすらも一蹴する。

唯一考えているのは、自身の復讐の対象である少年のことだ。

「織斑一夏…苦戦したようだな…」

自分の存在意義をかき消している、憎むべき少年。

両目の虹彩を銀色に輝かせ、呪詛を込めつつ、言う。

「少しは楽しませろ……それほどの事を、貴様はしたのだからな」

幕は、まだ開いていない。

3・闇の始動（ダークネス・イグニッション）（後書き）

現在、五人のヒロインズでそれぞれが誰に惚れるかはある程度決めているのですが、ラウラだけが決まっていないという事態に…！

そこで、アンケートをとりたいと思います。

ラウラが惚れるのは金寺か、一夏か。

どちらか希望を書いて、感想欄に書いてください。

今後の物語の展開を大きく左右するアンケートなので、是非投票をお願いします！

後、一言でもいいので感想をいただければ幸いです。
くれるとモチベーションあがるので。

1・生徒会長（前書き）

金寺の前に姿を現した、青髪の少女の名は……？

1・生徒会長

結局、一学年のクラス対抗戦は、別の一回戦をやっただけで終了した。

あの襲撃事件が理由なのは言うまでも無い。

事実、事件にかかわった一夏、箒、鈴音、セシリアには緘口令が敷かれ、金寺、千冬、真耶といった直接かかわった教師たちにも、口止めがかかったのだから。

だが、二学年と三学年のクラス対抗戦は、別のアリーナで滞りなく行われる事となった。

そんな中、夕食を食べ終え、あくびを噛み殺しながら金寺は自室へと向かっていた。

この日は三学年のクラス対抗戦が行われ、三年二組が優勝した日だった。

一学年の基礎理論、二、三年生の整備学、全学年の世界史に携わっている彼は、この日も職務が残っていた。

別に忘れていた訳ではないのだが、この日は自分の担当の授業が

無かったばかりに研究 主に【白式】関連の に没頭
してしまい、夕食前に千冬の姿を見て思い出したのだ。

面倒くさいモンは早めに終わらせるに限るな、と思った金寺は、

(…………やはり、つけられている?)

食堂を後にしてしばらくだったが、先ほどから何者かの気配を感じていた。

何度か気付かれぬように振り返って見たが、人影は見当たらない。

察知力は人並み以上に優れている金寺ですら察知しにくい追跡力。少なくとも、一般人の行えることではない。

さて、どうするか。とりあえず、放置しておくわけにもいかない。

金寺は自室への道はずし、階段の方向へ向かう。そして階段の陰に隠れ、追跡者がどう出てくるか、息を殺して窺う。

もしもの時の迎撃用に、金寺の右手には漆塗りの万年筆が握られている。

そして 追跡者が、階段の陰から姿を現した。

即座に金寺は追跡者の背後を取り、その腕をとろうとしたが

追跡者は目にもとまらぬ速さで動き、金寺の束縛を逃れる。

それだけでなく、追跡者の手に持っている扇子が、金寺の即頭部を襲う。

「っ!？」

突然の事態だったが、金寺は持ち前の動体視力で鋭く反応。それをかわし、手に持っていた万年筆で攻勢に出る。

そして。

追跡者 青髪の少女の持っている扇子が。

金寺が手にしている万年筆が。

それぞれ相手の喉仏を、捉えていた。

「も〜いきなり女の子に攻撃しようだなんて、普通の男の人のやる事じゃないよ?」

「……相手による、と訂正しておこうか」

飄々とした青髪の少女の声とは裏腹に、金寺の口調は重々しいものだった。

数分後、両者は1026号室

金寺の自室兼研究所にいた。

「で、その生徒会長様が俺に何の用だ」

「だ・か・ら、そんな堅い表情しないで？いい男が台無しよ」
「……………」

デスク前の椅子に座り、ベッドの一つに腰掛けている青髪の少女を一瞥した金寺は、盛大に嘆息した。

結局、場所を移そうという事で金寺と少女は彼の部屋に移動したのだが、金寺はこの少女の意図が全く分からなかった。

「ま、とりあえず君に接触したかったただけなんだけど、ああいう手段に出られちゃね、お姉さん困っちゃうのよ」

ベッドにちょこんと腰をかけ、金寺に向けて不敵な笑みを浮かべている青髪の少女の名は、更識楯無。二年生なのだが、この学園の生徒会長だという。

「で、俺に接触する理由は何だ？」

「この前君達関わった事に関して」

金寺の眉が、ピクリと動く。

この前金寺たちが関わった事といえば、あの全身装甲襲撃事件以

外に思い当たる筋が無い。

「……お前らはお前らで、動いていたのか？」

「そうね。……まあ、そっちが知っていること以外に特別目くじらを立てるような発見は無かったけど、そっちはどう？」

楯無の家

更識家は、世界の闇を影から駆逐する、対暗部用暗部なのだ。ちなみに、楯無という名前は、代々更識家に継承される女の名前で、目の前にいる楯無は第17代目にあたる。

それゆえ、世界の裏事情に関してはとても詳しいので、そのネットワークを利用して楯無は今回の全身装甲襲撃事件を調査していたのだ。

恐らくは、金寺に接触を図ったのも、その情報収集の一環なのだろう。

「……けどよ、俺が口を割るとでも思ってたのか？」

「んー？おねーさんたち、君の秘密知ってるけどなあー？」

明らかに、何かを含んだ、脅迫とも言える一言。

しかし、金寺が顔色を変えることは無かった。

「……だったらどうした？」

「あらつまんない。あまり動じないのね」

ややふてくされたような顔をする楯無だったが、当人の金寺はそれを気にせず、淡々と言った。

「別に隠す気もないし、おおっぴらに言いふらそうとも思わないからな。それに、最初から教えねえつもりは無いから安心しろ」

「それは良かった。で？」

僅かに身を乗り出して聞いてくる楯無に対し、脚を組みつつ金寺は低い声を出した。

「あの寸胴、一時的に学園のメインコンピュータのデータベースにハッキングした事は知ってるか？」

「ええ、それは把握済みよ」

「その中にある、一学年全員の個人データが盗み取られてたそうだがあとは、一時的にアーリーナの備え付けカメラもその中の映像が流出したらしい」

事件後、上層部の許可を得て学園のデータベースを調べた金寺だったが、何者かが進入した形跡が見られたのだ。

流石に学園の機密事項だったため、たかが一教師の金寺がそれを目にする事はできなかったが。

「：明らかに情報収集ね。襲撃に関しては二の次って感じだわ…」

「だろ？俺の推測だと、どっかの組織が学園の情報収集のためにあの機体で襲撃してきた、って思うんだが」

「奇遇ね。私もよ。でも、こんな大胆なやり口、そんじょそこらの組織ができる事じゃないわ」

「…という事は」

嫌な何かが、金寺の背中を滑り落ちる。
どうやらそれは、楯無も同様だったらしい。

「そうね……亡国機業、の可能性が高いわ」
「亡国機業……」

二人揃って苦々しく、その名を口にする。

亡国機業。

その起源すら分からない 第二次世界大戦以降の歴史のうねりから生まれたとされている 上に、その活動目的も、組織の規模もわかっていない。

現在唯一把握しているのは、起こす行動の対象が、ISに向いている事だ。

一口に行動といっても、それは様々だ。略奪、破壊、関係企業への襲撃。少なくとも、ISに関わる人々にとっては、邪魔以外の何でもない存在である。

「くだらねえよ。本当に……」

「そうかもしれないけど……こればかりはどうしようも、ね」

得体の知れない怒りを無理やり吐き出すように、二人は小さく言った。

金寺と楯無が憤りを感じているのは、その事件及び行動によって

浮き彫りになる人々の思想だ。

亡国機業に関する事件となると、被害者側も加害側も、ISを兵器として扱っているようにしか見えない。

「亡国機業含む敵対勢力に対抗するためには、更にISを兵器として強化していかなければならない」。

そんな、亡国機業の被害にあつた国の政府重役のいう事が、この二人にしてみればあまりにも馬鹿馬鹿しいものだった。

それつまり、ISを無機質な機械、という眼でしか見ていないという事だ。

実際、そのような眼でISをみていない二人だからこそ感じる憤りである。

それに、これらの事件は気付かぬうちに鎮火されている事が多く、一部のマスコミが、「政府の官僚に、亡国機業のメンバーが潜んでいるのではないか」と騒ぎ立てるほどだ。

これらの事件がこうして処理される理由は、やはりISを肯定する側と否定する側のバランスが拮抗している事が第一だろう。

一連の亡国機業の行動は、ISの存在を快く思っていない人間からすれば、賞賛に値するものである。

各国の政府内でも、実際には亡国機業の存在を肯定するものがわずかにいるため、それらによってもみ消されたりする事もあるといわれているが、定かではない。

こうして、思想の統一が図られていないため、事態はますます複雑なものに展開していくのだ。

実際、これほど滑稽なものはないだろう。

「ま、私もこういう事態は想定してたけどね…」

楯無が不覚、と言わんばかりに言葉を吐き出す。

そしてこのたび、その矛先がついに、IS学園に向いてしまったのだ。

いつかはそうなるだろうと踏んでいた楯無は、こうして金寺に接触を図ったのだろうか。

「…そんで、これからそういうのに対処していくために、俺にコンタクトを取ろうとしたのか。じゃあ、何であんなやり口に出たんだ？」

「んー、ちょっと試してみようと思ってね」

試すというには、あまりにもやりすぎな気がした。

確かに、ああして本気で迎撃した金寺も金寺だが、それ以上に彼女のやり口はプロフェッショナルのそれだった。

それほど、ある程度金寺のことを把握していたという事だろうか。

「…まあいい。もう一つ質問だが、どうして俺なんだ？」

「さっき言ったでしょ？私は君の素顔を知っている。だから、ちょっと味方にしておきたくてね」

やや控えめな姿勢でそう言う楯無。

つまり、同じ学園　組織に所属し、その素性に特別な何かがある金寺を、自分の仲間としていたいのだろう。

楯無の口調から考えると、自分の駒にするというよりは、共同戦線を組みたい、といった感じだ。

さてどうするか、と考えるまでもなかった。

第一、楯無の言い分は、かなり筋が通っている。

それに、彼女も亡国機業を忌々しく思っているだろうし、金寺も同様だ。お互いに学園の防衛を図るといふ面では、意見が一致するだろう。

あまり気にならないが、自分の素顔をベラベラ言いふらされるのもそれはそれで癪だ。

「乗った、その話」

「そんな簡単に、いいの？」

「連中が来たら潰す。それだけだ」

楯無の問いただすような一言にも、金寺は極めて短く答えた。そのぶれない真意が、短い一言の中に凝縮されていた。

別に、金寺は積極的になって亡国機業を潰そうとしているわけではない。

自分たちの居城　学園を脅かす存在がこちらに来たら、ただ迎え撃てばいいだけの話。

一学園の一教師となった金寺には、そのような思想が芽生えていた。

「…なるほどね、わかったわ。じゃあ、こっちもこっちで情報を収集していく方針だから……もしものときは、よろしくね」

先ほどまでの真剣な表情はどこへやら、一転して子供っぽい表情

に切り替えると、そのまま楯無はドアのほうへ歩き、部屋から出て行った。

何だあいつ、とでも言いたげな表情を浮かべていた金寺は、気持ちを切り替えると別のことを考え始めた。

「亡国機業……」

連中が何を考えているのかは、さっぱりわからない。

だが、そのうちその毒牙が、ISにかかわる人材を育成するこちらへ向くのは、時間の問題だろう。

大袈裟な話、それが明日という可能性だってゼロではない。

だからこそ、

(来るんだっいたら来い。その時は完膚なきまでに叩きのめしてやる……)

呪詛にも似た言葉を、声に出さず呟く。

何よりも、ISを奪い、そのすべてを我が手に集約しようとする彼らの傲慢さが、金寺にとっては明確な拒絶の対象である。

楯無との今日の会話を忘れないようにし、金寺は意識を別のほうへ移すことにした。

2・更識楯無(前書き)

事の眞実は、何処

2・更識楯無

「ふうー…」

部屋に戻るなり、楯無は上下の制服を無雑作に脱ぎすて、下着のみの姿となった。

ちなみに、彼女の寮部屋は一人部屋である。

主な理由としては、彼女自身がそれを望んだし、対暗部用暗部の当主である以上、何らかの表沙汰にしたくない物事を円滑に進めていくには、一人部屋のほうがいい。

洗面所に向かい、下着もとって一糸纏わぬ姿になった彼女が向かったのは、バスルーム。

なんとなく、としか言いようがないが、とにかくシャワーを浴びたい気分になったのだ。

栓を捻り、シャワーヘッドから程よい温度の湯を噴出させる。素肌当たる心地よいシャワーの水流は、まるで日々の疲れを一掃してくれるかのようだった。

なんとも親父臭い思考かもしれないが、これも仕方がないものだ。

対暗部用暗部の更識家の当主として、IS学園の生徒会長として、それによる彼女の苦勞は一般的な年代のものとはならない。

まだ彼女も所詮、17歳の少女。流石に荷が大きすぎるかもしれない。

だが、楯無はそう思ったことがなかった。

というよりは、楯無の名を授かったその瞬間から、そう思う余裕がなかったのかもしれない。

対暗部用暗部 それすなわち、汚れ仕事だ。

自らの手を血に染めて、世界の秩序を平定させる。そのためには、それ相応のものを身につける必要があった。

幼少期から鍛練を受け、対暗部用暗部の当主として、身につけるべきものはすべて身につけさせられた。

その中でも、年頃の少女としての振る舞いを忘れることはなかったが。

そしてその彼女は、生徒会長となった今年、新たな世界の闇と対峙することになる。

(亡国企業…)

少なくとも、楯無は今回の一学年クラス対抗戦襲撃事件の犯人が、

亡国企業と見ていた。

あのような、大胆かつ確実に、状況による汎用性に富んだ手法。まさに亡国企業の常套手段だ。

それに加え、金寺が言っていた、「一学年全員の個人データが盗まれていた」というのは、間違いなく一夏たちに関することだろう。

そうならば、確実に彼が 彼にかかわる人物が、この一連の事件に巻き込まれていくだろう。

しかし、更識楯無にもプライドがある。

対暗部用暗部の当主として、IS学園の生徒会長として。

(学園は、守り抜く。私の誇りにかけて…)

その誓いだけは、シャワーの湯で一掃されることはなかった。

シャワーを浴び終え、楯無はバスルームを出る。

体をバスタオルで拭き、先ほどまでつけていたブラジャーと下着を、湯上りで若干蒸気が上がっている身につける。

ふと、鏡に映る自分の姿が目に入り、楯無は思わず正面に立ち、それをじっと見た。

話がそれるが、楯無のプロポーションは一般的なモデルなど比べても、かなり抜群なものである。

決して巨乳というわけではないものの、引き締まった体も相まって、女性特有の美しさを感じさせるには十分すぎるほどだ。

その体の、右の二の腕と左太腿に、僅かに黒ずんだ切り傷がある。

更識家の当主として、歴戦の強者というまでではないものの、数多くの修羅場を乗り越えてきた。だがそれもすべてが一筋縄でいくようなものではなく、こつした傷を負うこともあった。

その中で、いまだに残る二つの傷。

この傷がついた理由は、彼女にとって簡単に忘れるような事が出るものではなく、それはあまりいい思い出ではない。

彼女の白い肌にはいささか似合わないが、これは“更識楯無”にとっての“傷痕”なのである。

息を大きく吸い、呼吸を整えた楯無はそのまま洗面所を出ると、愛用の寝間着を着用する。

特徴的な水色の髪の毛を若干乱暴にハンドタオルで拭いて、そのままベッドに仰向けになると、そばの小テーブルの上においてある携帯端末に、電子メールが来ているのを確認した。

「ごろごろと転がって携帯端末を手にとり、その内容を確認すると、部下からの報告だった。」

何でも自分の祖母の命令で、更識家の実働部隊の8割が、今回IS学園で起きた襲撃事件と亡国企業の動きを同時に調査しているらしい。

何か亡国企業に関する事でも発見したのかと思ひ、携帯端末を確認。

そして、絶句する。

「……………やっぱり、そうだったのね」

脳がその情報を正確に認識したのを確認し、あえぐような声を出す。

あの日、楯無は裏で行動していた。

突如一学年の試合中に巨人が侵入し、アリーナのシステムをハッキング。この事態に楯無は、まずこの事態を報告し、その後アリーナのハッキングを解除しようと奮闘する一方で、混乱する生徒たちを落ち着かせつつ、全身装甲を送りつけてきた連中が学園付近にいないかどうか搜索していた。

送りつけてきた連中が亡国企業だという事は、更識家の独自ネット

トワークを駆使した結果すぐに判明したが、その全身装甲を一撃で沈めた熱線の正体は、ある程度の推測が出来ていたものの判明はしなかった。

そして今、その正体が判明。正体は、楯無が予想したとおりのものだった。

…まさかとは思っていたが、本当にそうだったとは。本当に、驚くほか無い。

あのような、大胆な真似をするなんて。

「まあいいわ、それはそれで。今後学園防衛の際の戦力となればいいけど…何も言わなくても動くでしょうね、あの人なら」

適当にそう呟き、携帯端末を小テーブルに置く。

何はともあれ、対抗する準備は整いそうだ。

どんな手段を用いようとも、この学園だけは守りきる。

生徒会長として、更識家の人間として。

一人の、IS学園の生徒として。

3 ・生徒会室（前書き）

生徒会に召集された金寺。楯無の真意とは…？

3・生徒会室

次の日、一組の教室にてHRを終わらせた金寺の元に、一人の生徒が駆け寄ってきた。

「金寺せんせ〜」

「…布仏か、どうした？」

やや外側に向いている髪の一部をピョコピョコ動かしながらやってきた、制服の袖丈が長い彼女の名前は布仏本音。

確か、一夏含めたクラスメートが、「のほほんさん」というあだ名をつけていた。何でも、常に眠たそうにしていて行動がゆったりとしていて、のほほんとした雰囲気醸し出しているところから、そのあだ名が付いたらしい。

まるで幼い子供がお菓子をねだるように、本音は自分より背が高い金寺を見ながら言う。

「えーつとね〜、会長さんが生徒会室に来てほしい、だって〜」

「…アイツか」

言われて思い出したが、本音は生徒会所属となっていた。確か、布仏家が代々更識家の従者であったことが理由らしい。

要はこの学校の生徒会、暗部に関わる人間の集団である。

「…楯無はそれしか言わなかったのか？」

「そのとおりです。それじゃあ生徒会室にレッツゴ〜」

「…分かった」

ゆったりしていてマイペースな本音に若干戸惑いながらも、金寺は鼻歌交じりに歩いてく彼女の後を追う事にした。

生徒会室は、校舎のかなり奥側にあつた。

寮からも職員室からも、ずいぶん離れている。これも、生徒会の実態が故なのか。

「それじゃあドアオープン」

どこか楽しそうに、金寺を先導していた本音がドアを開ける。

なにやら上質そうなそれは、きしんでいる様子が無くゆつくりと開いていった。

軽い足取りで本音が先に入り、それに金寺も続く。

中は意外と広く、中心に会議用と思われる大きい長机と、端にホワイトボードがある。部屋の一角には、冷蔵庫と紅茶を淹れるためのセットがおいてあつた。

「まだ誰も来てないのか…」

無人の生徒会室を見渡しながら、金寺はポツリと言つた。

一方の本音はというと、長机のそばにあるパイプ椅子に座つていた。

「ん〜、ここ来たの久しぶりだなあ〜」

「なんか、まるで長い間来ていなかったみたいなの言いだな」

「私はね〜、いると仕事が増えちゃうから、邪魔にならないようにしてるんですよ〜」

「その書記仕事しろ」

本音はこれでも生徒会の書記だ。仕事をする上で書記は結構重要な役回りだが、そんな彼女がこのような様子で大丈夫なのだろうか、と金寺は真剣に考えた。

本音が机に突っ伏して再び鼻歌を歌い始めたのをよそに、金寺が生徒会室を一瞥していると、後ろのドアが開いた。

「あ、来てたみたいね」

ドアから入ってきたのは、楯無ともう一人、眼鏡を掛けた三年生の女子が入ってきた。

「お姉ちゃんー、先生連れてきたよ〜」

本音がそう言うと、眼鏡を掛けた女子がそれに反応した。

「本音ご苦労様。こんにちは、金寺先生」

そういつつお辞儀をする彼女には、見覚えがあった。

「やはりお前も、か。布仏虚^{うつつほ}」

彼女の名は布仏虚。苗字の通り、本音の姉である。

だがその雰囲気は全然違い、のんびりしている本音と対照的に、虚はしっかり者という印象が強い。

事実、整備士に所属する彼女は学年主席でもあるので、その印象

はあながち間違っていない。

その横で、楯無は長机に沿って置いてあるパイプ椅子の一つに座ると、金寺と虚に声をかける。

「とりあえず、まあその辺りの席に座ってくれろ？」

虚が空いているパイプ椅子に座ったのを見て、金寺も余ったパイプ椅子　　本音の隣に座った。

どこか楽しげだった楯無の表情が、真剣なものへと変わる。かなりオンとオフの切り替えが上手だな、と金寺は率直な感想を抱いた。

「さて、何で私が君をこの生徒会室に呼んだかわかる？」

「…生徒会に関する事、もしくは先日的事件に関する事、だろ？」

それ以外に、自分と呼ぶ理由が見当たらない。第一、それ以外だとしたら昨日のように彼女がじきじき自分の部屋に来ればいいだけの話だ。

それだけ、この会談は重要な意味を含んでいるのだろう。

「正解。何となくわかると思うけど、こつちとしては君を見方にしたくない。だから、出来れば君も生徒会にきてほしいの。…例えば、副顧問みたいな感じで」

「そういえば、せんせーってどこにも所属してなかったね」

横にいる本音が、体を起こしつつ思い出したように言う。

「…つつか、生徒会長権限で出来るのかよ、そんなの」

「出来る可能性があるからいつてるの。例えば織斑先生は茶道部の顧問だし、うちクラスの担任の先生はソフトボール部の顧問。だから、何の顧問にもなっていない君の居場所、って言えば、十分じゃない？」

この学園では、原則として生徒および教師が、何らかの学園内組織に所属する事が義務付けられている。その“組織”の種類は、部活動と生徒会だけなのだが、ともかくそれが決まりなのである。

理由として、集団活動における人間関係の向上や、一集団の下につく上での社会性を身につける、などである。

そんな中で金寺は、今現在どこの部活動にも所属していないのが現状であった。

特別断る理由も見当たらないし、生徒の間で「鬼ババア」などと呼ばれていて評判が悪いあの教頭からクレームが来るよりはいいだろう。

「…別にいいが」

「ありがと じゃあ、…今日はこんな所かしらね」

「…何？」

「あら、もつと重い話があると思ったの？」

いきなりの間が抜けた楯無の一言に、思わず金寺は突拍子抜けになつてしまふ。

どうやら、これで堅苦しい話は終わりらしい。

そんな雰囲気を感じてか、本音が虚に向かって言った。

「お姉ちゃん、食べ物ある？」

「そうね…確か冷蔵庫にショートケーキがあったわね」

「むむっ、ならば私がとってこようっと」

そう言うなり、ニコニコ笑顔の本音は部屋の端にある大き目の冷蔵庫に向かつていった。

そして冷蔵庫を開け、中からケーキの入っているであろう箱を取り出す。

虚はそのそばにあるティーセットを取りに行き、紅茶の準備をする。まるで、放課後のティータイムのようだ。

「…納得していいんだよな？」

「いいと思うけど」

あまりの空気の変わりように、流石の金寺龍輔もついていけなくなってしまうた。

若干戸惑いを覚えていると、本音がケーキの箱を持ってきたところだった。そこから人数分のケーキを出して、それぞれの場所においていく。

「金寺先生、いかがですか？」

声を掛けられて顔を横に向けると、虚が紅茶の入ったティーカップを持ってきたところだった。その一つ一つの動作が優雅に見えるのも、更識家の従者家であるが故なのだろう。

実際のところ、どちらかという和金寺はコーヒーの方が好きなのだが、こうして紅茶を飲んだ事も無いので、拒否する事は無かった。

「おう、どうもありがとう」

「どういたしまして」

ティーカップを受け取り、虚が丁寧にお辞儀したのを確認すると、花の香りが鼻腔をくすぐった。大して紅茶に関する知識が無い金寺でも、なかなかよいものである事は分かる。

「せんせー、ここはねー。このケーキはねー、ちよおちよおちよおちよおちよお〜…おいしーんだよ〜」

幸せそうな声に気付いて反対側を向いてみると、そこでは本音がケーキの側面についているフィルムを取って、それについている生クリームをペロペロと舐め回しているところだった。

「…………マジかよ」

今度こそ、金寺は言葉を失いそうになった。

幸せそうなのは別にいいのだが、その行為自体がかなり食事のマナーに反しているように見える。

別にこういうマナーを大して気にしない金寺すら、その様子に若干引いてしまった。

「やめなさい、本音。布仏家の常識が疑われるわ」

「だいじょうぶ、だいじょうぶ。うまうま」

厳しい虚の注意をもとめせず、引き続き本音はフィルム上のクリームを舐め始める。

軽く嘆息した虚は、本音の後ろに移動すると、右の握り拳を思い切って、本音の脳天に叩き落とした。

「うええっ!?!いたあ〜…」

先ほどと一転して、涙目になってしまった本音。ゴチンツ!という効果音が聞こえてきそうなほど、今の一撃はなかなか強烈なものであった。

「本音、まだ叩かれない？…そう仕方が無いわね」
「まだ何も言っていない、言っていないよお…」

とがめるように妹を見つめる虚と、頭を押さえつつ姉に訴える本音。

「はいはい姉妹仲がいいのは分かったから、ね？」

「失礼しました」

「し、失礼しましたあ…」

苦笑しつつ楯無が両者をなだめると、姉妹は揃って頭を下げて席へ戻った。

どう反応すればよいものか、と思いつつ視線を下げた金寺は、自分の前にも皿の上に乗ったショートケーキが置かれているのに気付いた。

「ケーキ、か…」

一体いつ最後に食べたのか、覚えていない。
そもそも、ケーキというのは金寺にとって、過去にあったとある事件の影響であまり印象が悪くなかったりする。

別に、ケーキそのものに嫌悪感を抱いているわけではないが。というより、どちらかといえば、その事件に関しては自分自身を嫌悪している。

「せんせー？ケーキ食べないの？」

「あら、好みじゃなかったりする？」

今度はまともにケーキを食べている本音と、既にケーキを口に含んでいる楯無にそう言われ、このままでは悪いと思い、食べる事に

した。

「…いただきます」

近くにある小さめのフォークを取り、周りについているフィルムをはがし、細くなっている部分をフォークで取り、口へ運ぶ。

数回咀嚼し、飲み込んでから、

「……うまいな」

「でしょ〜？このケーキはおいし〜んだよ〜」

金寺が短く感想をこぼすと、嬉しそうに本音が反応する。

ケーキにはかなり生クリームが乗っていて、一見するとポリリユーム満点に見えるのだが、実際はしっとりとしておりさわやかな味わいで、飽きそうに無い味だった。

久しく味わっていなかった、甘い、という味覚が感覚を支配する。体全体がリラックサされるようになり、なかなか、癖になりそうだがその様子になっこりし、パクリと可愛らしくケーキを口に含みつつ、楯無は納得したように言った。

「それは良かった。…というわけで、これから宜しくね、生徒会副顧問さん」

「…あいよ」

二口目を口に運びつつ、金寺は短く答えた。

とりあえず、これで迎撃体制はある程度整ったのかもしれない。敵の全容はわからず、いつ襲い来るかも不明だ。それでもこうし

て、この学園を守るための準備は整いつつある。

東が、一夏にツイン・インフィニティシステムを託したのも、これが故なのだろうか。

それはともかく、確実に、この学園に迫る世界の闇を撃つ準備は進んでいる。

「せんせー、イチゴちょうだい？」

「本音、イチゴほしいのか？」

「うん、おねがぁーい……」（上目遣い）

「…はいはい、やるよ」

「わぁーい、ありがとーせんせー！」

ただ、今の生徒会は、平和らしい。

3・生徒会室（後書き）

生徒会副顧問、金寺龍輔誕生の話でした。

こんな感じで、今後金寺は楯無と共同戦線を組んでいきます。
特に何も特筆すべき点がなさそうな金寺ですが、k（以下自重）

4・光と闇（ライトアンド・ダークネス）（前書き）

闇の鼓動は、その鳴りを止めない。

4・光と闇（ライトアンド・ダークネス）

今の日本が昼である事から、今のアメリカは深夜である。

その日本からはるか離れたアメリカ合衆国の、西武海岸沿いに存在する、とある軍事施設。

この軍事施設では、第二世代型のISが開発されており、そのうちのいくつかが、近日中にロールアウトされることになっていた。

本来は静かなはずの、その場所で。

そこでは、警告音と、轟音と、悲鳴が響いていた。

事の発端は、先ほどである。

最初に響いたのは、警告音。それは、高速で接近してくる熱源を、施設のセンサーが補促したものだだった。

続いて、轟音。施設の職員が対応を始める中、そこへグレネード弾が撃ち込まれたのだ。

勘の鋭い人間なら、撃ち込まれたグレネード弾が一体何なのか、分かっていたかもしれない。

本国のクラウス社が開発した、IS専用の五一口径アサルトライフル《レットバレット》の長距離狙撃用にカスタムされたモデルによる一撃だという事を。

つまりこれは、ISによる襲撃である。

こうして、ISの施設が襲撃される事は今までに無かったわけではなかったが、時刻が時刻なため、施設の職員たちはまともな対応が出来ずにいた。

グレネード弾が撃ち込まれ、立て続けに起こる、爆発。
爆破音に感化された、人々の悲鳴。

それらは施設の人々の恐怖心を煽り、暗闇の中で事態を混乱に導いていく。

漆黒の空を二機のISが飛翔していたのは、ほとんどの人が気付かなかった。

無論、その二機が巨大なコンテナを所持し、その場から離れていくのも、である。

亡霊が全てを覆い尽くすのは、そう遠い日ではないのかもしれない。

「…アメリカのウエスト・バージニアファクトリーが？」
「そう、昨夜　　私たちが雑談していた頃ね、襲撃を受けたらしいわ」

次の日、生徒会室にて。

楯無に言われて雑務の手伝いをしていたIS学園生徒会副顧問の金寺は、その楯無からの報告に目を見開いた。

雑務と言っても、各部活動の活動報告の整理や、生徒からの要望の処理などである。

ちなみに、今この部屋には金寺と楯無以外にもう一人、書記の本音がいた。昨日以降、どうやら本音は金寺がお気に入りになっただけでなく、教室や廊下で会うたびにくっついてきたりしていた。

金寺としては、妹やペットにかまわれているような感覚なのだが、何度か鈴音に睨まれたのは、今でも謎である。

本音の姉の虚はというと、何やらISの整備を頼まれているらしく、今は部屋を開けている。

「ふえふふおふあーふいふいふあふふおふふいー？」

昨日と同じパイプ椅子に座りつつ、昨日と同じケーキを食べていた本音が、二人の方を見つつ摩訶不思議な言葉を発した。

「ウエスト・バージニアファクトリー？」と言いたいのだろうが、どうやら、まだ口の中に咀嚼しきれしていない食べ物が入っているらしい。

「……………口の中のもの飲み込みなさい」

「ふあ〜い…ごっくん、ウエスト・バージニアファクトリー？それってアメリカの有名なIS企業でしたっけ？」

「…まあ、そうだな。で、その話は本当なのか？」

「何で嘘を言うのよ。ともかく…これは事実なの」

本音の興味が再びケーキへ移行したのを確認し、二人は密談を再開した。

米国内でも大手のIS関連の施設である、ウエスト・バージニアファクトリーが三機のISの襲撃にあったという情報は、米国に潜伏していた更識家の情報収集部員によって、更識家の手中に入っていた。

しかも、ただ単に襲撃を受けたのではなく、一機のISが強奪されたらしい。

「確か、【アラクネ】って名前だったわ。アメリカ製の第二世代型であること以外は機密事項だから、そこまでわからないけど…」

「襲撃してきたISに関する情報は？」

「詳しくは確認できなかったけど…映像を見た限りでの私の推測だと、あれはイタリア製第二世代型【テンペスタ】ね」

「…どちらにせよ、面倒臭いことになりそうだな…」

両者、そろって嘆息する。

イタリア製の第二世代型【テンペスタ】。日本製第二世代型の【打鉄】やフランス製第二世代型【ラファール・リヴァイヴ】のように、後付武装による対応戦局の拡大を目的とした機体だ。

その【テンペスタ】だが、最近になって何機かが強奪の憂き目にあっている。

イタリア政府はこれを亡国機業の仕業と断定し、この一件に関して陳謝した後、それ以降にその【テンペスタ】を使用した亡国機業による襲撃に備えるよう、各国に警鐘を鳴らしていた。

結果的に、それが現実になったと言える。

これに、米国はどう対応するのだろうか。どこの襲撃かと考えた場合、少なくとも、選択肢は二つある。

一つ目は、亡国機業。二つ目は、イタリア本国。

どちらも、それなりに可能性があるからこそ、この事件は性質が悪いこと極まりない。

「いずれにせよ、その【アラクネ】は人為的にコア・ネットワークを切断されているらしいから、それを見かけたら要注意、ってところから」

コア・ネットワーク。

広大な宇宙空間での位置確認や相互通信を目的とした、IS独自の無線ネットワークシステムだ。

これによってISは互いの位置が把握できたりするのだが、そのコア・ネットワークが切断されている以上、米国もどうもしようがないだろう。

いずれにせよ、この事件は静観するほかないのである。

楯無から今事件の説明を聞き終えた後、まとめ終えた書類をクリアファイルに挟みつつ、金寺は思考を働かせた。

（仮に犯人が亡国機業だとしたら…別方面への襲撃に、使用する可能性はある。なら、アメリカはその【アラクネ】とやらの情報を公開すべきじゃないか？）

現在、アメリカはその【アラクネ】の情報を公開するつもりはないという。これも、国家戦略のうちなのだろうか。

「うーん、終わった」

答えが見つかりそうにない疑問に金寺が入り込んでみると、楯無がクリアファイルを棚にしまいつつ背伸びをしているところだった。

「さうと、ここには優秀な整備士さんがいることだし、私の機体
お願いしちゃおうかな？」

いたずらっぽい笑顔を浮かべつつ、楯無は金寺の方を見ながらそんな事を言ってきた。

「お前もかよ…」

「え、断っちゃおうの？」

「いや、そんなつもりはないけどよ…」

この楯無のお願いに、金寺は思わず溜息をついた。

一夏に関しては、倉持技研と学園から彼の相棒である【白式】の専属整備士としてつくことが決まっているのだが、ここ数日になって、鈴音からも、「自機の整備士になってもらいたい」と言われたのだ。

なぜ来たばかりの時に言わなかったのか聞いたところ、「龍輔は一夏の機体の整備士なんでしょ？クラス対抗までは敵同士だからそれまではちよっとね」という答えが返ってきた。

一応、勝負師としての彼女の態度には感心したが、その後目をキラキラ輝かせながらしつこく迫られたので、仕方なく了承したのだ。

IS関連の仕事が増えるのは別にうれしいが、こつも寄ってこれると、一種の戸惑いを覚えてしまう。

そんな金寺の気持ちを知ってか知らずか、持っていた扇子で扇ぎながら楯無は再度口を開いた。

「でも君、授業の評判なかないんじゃない？虚ちゃんから聞いたけど、『去年から金寺先生に会えてればよかった』って言っている人が結構いるみたいだし」

当人は気にしていないようだが、金寺の評判はなかなかのものである。当初こそ男性だということや、彼の雰囲気もあり浴びせられる視線は微妙なものだったが、授業をこなしていくにつれてその評判は上がっていった。

そんな金寺の評判が上がるきつかけになった、一つの授業がある。ある日、三年生の実習の際、金寺は生徒たちに一つの課題を出した。

内容は、「620番のプレス機を使い、腕部装甲を形成せよ」。

一見するとなんでもないクイズ形式の問題だが、この課題に生徒たちは頭を痛めることとなった。何せ、Iカーボン　ISの装甲を形成する特殊カーボン素材を腕部装甲に加工する際、普通使うプレス機は620番ではなく、840番なのだ。

620番は、基本的に脚部装甲を加工する際に使うプレス機だ。そのようなもので腕部装甲の加工に使用するカーボンをプレスしたところで、どうすればよいのだろうか。

そのように生徒たちが混乱するのもよそに、大量のIカーボンを渡した金寺は、授業終了10分前に来る、とだけ言い残して実習室から去ってしまった。

当然生徒たちは課題に取り組むが、どうやっても腕部装甲を形成することができない。同じことをやってはうまくいかないの繰り返しで、結局授業終了10分前となって金寺が来てしまった。

できたかどうか、金寺は聞く。できるわけがない、と生徒たちはブライングにも近い言葉を飛ばした。

そして、金寺が言った正解に、生徒たちは愕然とした。

『 誰が620番のプレス機を“一つだけ使え”と言った？ 』

実は、Iカーボンのプレス機は簡単に換装が出来るので、同じプレス機でも複数使えば本来の用途以外にも使えるようになっていた。結果的に、生徒たちはまんまと金寺のハツタリにかかったのだ。

再び上がるブーイングの声。苦笑しつつ金寺は「何回ぐらいプレスした？」と聞いた。

それに対し、生徒の一人は「みんな最低でも20回はやりましたよ」と言う。

すると、金寺はフツと笑いつつ、「それでいい。全部同じ形にできたら尚更だ」と言った。

呆氣にとられる生徒たちに対し、金寺は口を開く。

『 今回は、整備及び開発においての基礎の徹底が、第一目標なんだ。この回答なんて二次、答えられたらそいつは俺と同じぐらいひねくれ者だ。なんでも、基礎が徹底されてなきゃ意味がねえ。足し算が出来ない奴が、因数分解なんてできないだろ？それと同じさ。後はそうだな、…俺みたいには、とは言わないが、こつやって時には、既存の思考から逸脱した考え方も必要なんだ。これが、俺がまずお前らに教えられる事の一つだ 』

この妙に説得力がある言葉に、何人もの生徒が影響を受けたらしい。

「なんか、前の年までいた先生は堅苦しい論理を中心にしてたみたいだから、金寺先生みたいに実習と論理を程よいバランスで展開する先生は本当にいい、だって」

「ああそうか、そりゃよかったな」

まるで管轄外、と言わんばかりに言う金寺を見て、思わず楯無は苦笑した。

こういうことに関心がないのだろうか。ミステリアスともいえるそういう態度をとるからこそ、余計にこちらが関心を持つてしまう。赴任早々人気が上がっている金寺に対し、楯無はそのように考察していた。

「他人事みたいね。で、私も一応専用機持ちだから、整備お願いできるか？」

「わかった。断る理由もねえしな」

「本音もついてっていい？」

金寺が楯無の頼みを了承すると、ケーキを食べ終わった本音が意気揚々と立ち上がった。

「本音、これでも整備科志向なのよ」

「お姉ちゃんの後追うんだもん、えっへん！」

小柄な体格に合わない巨乳 更識楯無情報 を張りながら、本音は自慢げに言い切った。

「…まあいい。好きにすればいい」

この際だから、特別見学授業みたいにすればいいか、と思いつつ、金寺は彼女のお願いを聞き入れることにした。

本音が自分の食べたケーキの皿を片づけたのを確認して、楯無の先導で金寺は彼女らとともに生徒会室を後にした。

4・光と闇（ライトアンド・ダークネス）（後書き）

さて、金寺の人間像としては、ガンダム00初期の刹那が一番近いです。

寡黙で、感情をほとんど出さず、さほど馴れ合いを好まないところなどが共通点ですかね。

それに+金寺の場合、不思議と人を惹きつける魅力のようなものもあるのです。本人は何の事やらというような感じですが。

そんな彼も、一夏という自分とはある種対極な位置にいる少年や、鈴という懐かしい少女に再会したことで、『人間として』（ここ重要）少しずつ変わっています（現在進行形）。

個人的に思い入れがあるキャラクターなので、そこに注目していただければ幸いです。

追伸

感想じゃんじゃんほしいです。割とマジで。

5・心（前書き）

筭の心境に、変化が訪れる。

5・心

IS学園には、全部で五つの整備場がある。

校舎内に第一、第二とあり、第一、第二、第四アリーナ内に第三、第四、第五と存在する。

金寺、楯無、本音がやってきたのは、その中の第四整備場だった。基本的に、多くの生徒は第一整備場を利用する。ここならば人が少ないと踏んでやってきたが、生徒は誰一人いなかった。

ちなみに、楯無は特注である、水色のラインが入った濃紺のISスーツを着用している。

「それじゃあ、まず展開するわね」

整備器具の揃っている場所についた楯無は、左中指にはまっているサファイアの指輪を掲げた。

そこから光が弾け、彼女の体を覆う。一秒弱で光は霧散し、そこにいる楯無は自機をその身にまもっていた。

「おお〜！」

「こいつは…確か【モスクワの深い霧】だったよな？」

感動的な声をあげた本音と、確かめるように呟く金寺。

「前は、ね。私が独自に作り上げて、この機体にしたの。名前は【ミステリアス・レイディ霧纏の淑女】」

「ミステリアス・レイディ…まさにお前だな」

【モスクワの深い霧】とは、ロシア製の第二世代型。それを独自に改良し、オリジナル機に作り上げられたのが、この【霧纏の淑女】ミステリアス・レイディなのだ。

何故楯無がロシアの機体を駆っているのかというと、それは彼女の特異性にある。

楯無は、自由国籍権というものを所持している。その名の通りであるこの権利により、楯無は現在日本とロシアの二つの国籍を保持している。

ロシアである理由は、提示された待遇によって決めたらしい。そのロシア国籍を保持している楯無は現在、ロシア連邦の国家代表だ。セシリアや鈴音のような「国家代表候補生」ではなく、れっきとした「国家代表」である。

この学園内でも、国家代表は彼女一人である事から、更識楯無の規格外さが伺えるだろう。

「なんだか、普通のISより装甲が少ない気がしますー」

金寺の横にいる本音が、率直な感想をもらした。

それは金寺も思う。

彼女の【霧纏の淑女】ミステリアス・レイディの装甲は水色と黒色が中心なのだが、ただでさえ普通のISの装甲が最低限にもかかわらず、それ以上に装甲が少ないのだ。

「まあそれは、これがあるからね」

楯無がそう言うと、左右一対の状態で浮遊しているクリスタルパーツから、水のような半透明のヴェールが姿をあらわした。

それはISを覆い、それ自体がバリアのようになっている。

「…ナノマシン？」

金寺が確かめるように呟くと、楯無は嬉しそうに反応した。

「せいかーい、これは《クリア・パッション熱き熱情》。アクア・ナノマシンの製造プラントよ」

楯無曰く、ここから展開されている水のようなヴェールは、操縦者の体をつつむ事で射撃攻撃などを無効に出来るらしい。それだけではなく、ナノマシンで構成された水を霧状にして攻撃対象物へ散布し、ナノマシンを発熱する事で瞬時に気化させ、その熱や衝撃で相手にダメージを与える事が出来るというのだ。

攻防一体型の、高性能な特殊兵装といえよう。

「だから、常時のメンテが欠かせないの。少しでも以上があればアウト、強力な分、構造とかが繊細だからね…」

ISを体から解除してメンテナンス場に置きつつ、楯無は嘆息した。

金寺が確認したところ、この《クリア・パッション熱き熱情》は搭乗者の意思と量子コンピュータによる操作によって制御されているらしい。人間の思考とコンピュータの思考の両方を使う以上、その構造は繊細で、少しでも異常があれば無用の長物となってしまうのだ。

「だろうな…いつもはどういう感じにメンテしてるんだ？」

「基本は簡易的なものを二、三日に一回よ。でも一ヶ月に一度、国家協力のもとで大掛かりに行っているわ」

「じゃ、その大掛かりな奴を終わらせるか」

「せんせ〜できるの〜？」

「出来る可能性があるから言っている。ちょっとばっかしシステム

見れば楽勝さ」

楯無や本音と会話している間に、金寺は《クリア・パッション熱き熱情》含めた【ミス霧纏の淑女】の繊細なスペック等を全て確認していた。

これらを参照した上で、自分の知識の中から最適なメンテナンス方法を考え出し、それを実行に移す。

このようなことに関しては、金寺の右に出るものはいないだろう。

「じゃあ宜しくね 本音ちゃん、しっかり見ておくのよ」

「はあ〜い」

メンテが終わったのは、日没後だった。

「終わったあ〜…」

金寺が【ミス霧纏の淑女】のメンテナンスを終えたのと同じ頃、学生寮の1025室で、一夏は体の重さを開放するように座っていた椅子の背もたれに体重を預けた。

今さっきまで彼が取り組んでいたのは、金寺に出された自習課題。量自体はそれほど多くないものの、これでもかというほど内容が凝縮されているそれは、他の生徒に比べてISに関する知識が欠如している一夏にぴったりのものだった。

ちなみに、隣には筭の姿もある。この課題が出されたのはクラス

対抗戦が終わってから間もない頃だったが、彼女を含めたクラスメートの手助けもあって、こうして迅速に終わらせる事が出来た。

「これで、全部か。よく頑張ったな、一夏」

先ほどから天を仰ぎつつ物思いにふけている一夏の元へ、箒がどこからか持ってきた日本茶を運んでくる。

軽くお礼を言った一夏は、かなり熱いにもかかわらず、一気に飲み干すと再び体から力を抜き、リラックスしながら再び椅子に全体重を預けた。

思わず苦笑する箒だったが、無理も無いと思う。一体何があったのか、一夏の集中力はとてつもなくすさまじかった。それもこれも、入学してからあの全身装甲襲撃事件までが関与しているのは、おおむね事実だろう。

「サンキューな、箒。これで、やっとスタートラインに立てた」
「スタートライン？」

その言葉を不思議に思い箒が聞き返すと、首肯した一夏の目線が鋭くなった。

「そりゃそうだろ、今やつと知識の面で、みんなと同等になれたんだ。みんなを守るようになりたい、って言ってるくせに、そんな奴がISの知識に欠けているなんて、笑えないだろ？」

「冗談めいたような言い回しだったが、その口調はあくまでも本気だった。」

「俺は言ったからな。『今の俺も、今の箒も、今のセシリ

アも、今の千冬姉も…絶対に越えて、もっともつと強くなってみせ
る』、って。そのためなら…努力は惜しまないさ」
「一夏…」

彼の真剣な面持ちに、箒は自分が彼に惹かれていくのを感じた。
昔とは全然違う、決然とした意志を持つ力強さ。今の彼は、箒に
とって十分すぎるほどの魅力を感じさせていた。

瞬時、箒は自覚する。

(私は…一夏が…好きなのか…)

自分は、一夏に惚れたのだと。
離れても、会いたいと思っていた幼馴染。それはほかでもなく、
彼にずっと恋愛感情を抱いていたのだと。ただ、自分がそうだと認
識していなかったただけだったと。

ふと彼の顔を見ていると、連日の勉強のせいなのか、上を向いて
口を少しあけながら熟睡していた。

最近めつたに見なかった彼の間抜け面に、思わず吹き出しそうに
なる。だがそれでも、箒にはその光景すら愛しく見えた。

その少し開かれている口に、視線が行く。

このとき、一体何が箒自身を突き動かしたのか、本人にも良く分
からなかった。

ただ彼女は、何も言わず、一夏の顔に自分の顔を近づけていた。

そして、互いの唇が触れ合いそうになり

「あー、織斑君と篠ノ之さん、いますかー？」

やや気の抜けたような、一学年主任の声が耳に入る。

自分が何をしようとしているかを自覚し、そしてその声の正体を確認し、体中が凍りついたような感覚になる。

「いませんかー？入りますよ？」

そして、開くドア。

途端に、簾は我に帰る。

瞬時に行動した事もあり、幸いにも真耶の眼に、一夏と唇を合わせようとした簾の姿が目に入ることは無かった。

「篠ノ之さん…どうしました？」

「い、いや、なんでもありません…」

必死に呼吸を整えている簾に、真耶が怪訝な表情を向ける。

「あ、そうでした。篠ノ之さんと織斑君に用件があつて来たんですけど…織斑君、寝てますか？」

真耶の指摘を受けて、いまだに熟睡している一夏を起こす事にした。

先ほど本能的に接吻をしようとしてしまったことが原因なのか、

ただ彼の肩をゆるすだけでも顔が赤くなってしまつた。

程なくして一夏は夢の世界から帰還し、それを確認した真耶が二人に用件を伝えた。

その内容とは、

「部屋の移動!？」

「はい!」

反射的に、篤は大声で返してしまつた。

何でも、寮内に空き部屋が出来たというので、そこへ篤が引越す事になったのだ。いつまでも、同じ年頃の男女を同室にするわけにはいかないのだろうが、篤にしてみればこの話は最悪の一言である。

しかも、今すぐに引越しを行うというのだ。

「ま、ま、待って下さい。今すぐですか？」

「そうですよー。残念かもしれませんが、これは決定事項です」

今すぐというのだけでも避けようと思つたが、あっさりと切り捨てられてしまつた。

反論の手段を無くした篤は、今までの同居人に話を回す。

「一夏、お前はどう思つのだ!?!いきなりこのような通告を受けて!」

突如話を向けられ驚いた一夏だったが、少し考え込んだ後、至極真つ当な意見を出してきた。

「うーん、まあ、仕方ないんじゃないか?流石にいつまでも男女が同じ部屋、つてのはなあ……」

こういわれては、最早どうしようもない。
結局、箒はこの話に納得する事しか出来なかった。

箒が引越しを終えた部屋を見渡した一夏は、思わず首を傾げそうになってしまった。

それなりに広い寮部屋。人が一人いなくなっただけで、その面積が倍になったような錯覚にとらわれる。

(それにしても…箒の奴、どうしたんだ?)

課題を終えた後、疲れがどっと出てきたせいかわずあのまま寝てしまったが、次に目を覚ましてからというもの、何故か箒は顔を紅くしたままだった。

何か恥ずかしい事でもあったのか、考えても仕方が無いか、と思いつつ、課題を片付けた一夏の耳に、ドアをノックする音が聞こえてきた。

「はい、どうぞ〜」

誰だろうと思いつつ気軽に返事を返すと、ドアが開く。そこに立っていたのは、先ほど引越しを終えたばかりの箒だった。

「箒…」

「一夏…話がある」

そういう彼女の面持ちは、真剣そのものだった。何か大事な話があるのかと思いつつ、一夏は真剣に聞くことにした。

一方の篤は、何やら言いにくそうに目を泳がせている。そして、何かを決意したように深呼吸をすると、

「一夏っ！」

「お、おう……」

突然大声を出され、思わずたじろいでしまう。廊下でそのような声を出せば、ほぼ全員に聞こえてしまうだろうに。

「こ、今度の学園別個人トーナメント！私が優勝したら……付き合ってもらおう……！」

……………？

付き合う？何を？

それだけ言って走り去った篤のいた場所を見つつ、一夏はそんなことを考えていた。

何を突発的に言い出すのかと思えば、言葉の意味がよくわからない。本当に、女子というのは不思議なものだ。金寺先生なら分かってくれるだろうか。

そう適当に脳内で処理しつつ、とりあえず夕食時まで仮眠をとることにした。

だが残念ながら、彼に突っ込みを入れてくれるような人物は、ここにはいない。

察しの良い方なら分かる方もかもしれないが、篝の言う「付き合っ」というのは、男女交際のことである。

おまけに、この宣言を聞いていたのは、一夏だけではなかった。

「聞いた？」

「聞いたよ聞いた」

「うふふのふ」

「これは物凄いことな予感だよ。ウフフフフ…」

廊下の物陰にて、とある三人の呟きは、誰の耳にも入ることはなかった。

5・心（後書き）

さて、尊が自分の恋心を自覚しました。

一応、こういう描写をもっと上手く書ければいいなと思いついて、もう少しこうしたらいいんじゃないか、とか指摘の声をいただければ嬉しいです。

皆様の声によって、この小説は更に良くなっていきます（多分）。

金寺がいる場合を除き、一夏が出る場面の地の文は、彼の心理描写が多くなります。

人の機敏に疎い（というよりは、若干デリカシーに欠ける）が、何気ない場面でいい奴になる彼の深層心理を、なるべく出していきたいのです。最も、原作の地の文には若干腹が立ちましたけど。

そして、ただ今一夏急成長中。

ツインインフィニティシステム搭載機を授かったり、セシリアの實力を目の当たりにしたり、全身装甲の襲撃があったりした中で、はつきりと「強くなりたい」という意志が、明確な理由をもった上で生まれました。

人って、何にしても明確な「理由」があればそれを目指す事が出来ると思うので。

次の投稿はいつになるやら…自分にもわかりません。

最長でも再来週には投稿するつもりです。

という訳で、【六・日常と迫り来る闇】。これにて終了。

次、第七章【七・疾風と漆黒の雨】、ただ今執筆中。ご期待ください。

1・騎士の日(前書き)

五反田兄妹のもとへ遊びに来た一夏。
だが、この日は特別な日であって…

1・騎士の日

「で？」

「で、って何だよ？」

「だ・か・ら、女の園だよ女の園。いい思いしてんだろ？」

五月下旬の日曜日、久々に学園の外に出た一夏は、中学時代からの親友である五反田弾の自宅にいた。

彼とは中学一年生のときに知り合ってから鈴音とともに三人でつるんできた仲であり、外出許可をもらった一夏は彼の実家に遊びにきていた。

ただ今、二人は格闘ゲームで対戦中である。

「だからしてねえって。何回言えば納得するんだよ」

「んなわけねーだろ阿呆。お前からのメール見てるだけでひしひし伝わってくるわ。何だあの楽園、何だあの天国。招待券とかねえの？」

「ねえよ馬鹿」

何を言っているのかさっぱり分からない弾の言葉をスルーしつつ、一夏は集中のベクトルを格闘ゲーム画面へ戻した。

もはや言うまでも無いだろうが、五反田弾は普通に恋愛に興味を持つ、至って普通の高校一年生である。

鈴音同様、彼も一夏の恋愛に対する鈍感ぶりに呆れに呆れ続けた人物の一人だ。

そんな事は露知らず、一夏は何の気なしに再び呟く。

「つーか、鈴が来てくれて本当に良かった。何せ知り合いがほとんどいなかったからな」

「…ああ、鈴か。伝説の」

「ん、なんか言った？」

「お前は知らなくていい」

こちらも一夏が知る由も無い事なのだが、小学校時代から通算四年間身近で接してきたにもかかわらず、一夏の餌食　弾曰く、「ポケ　ンで言うならば、【おりむらいちか、とくせい・フラグメーカー】」　にならなかつた鈴音は、彼にとって尊敬に値する人物なのだ。

そうしているうちに、

「よっしゃ！また俺の勝ちい！」

「おわきたねえ！最後ハイパーモードで削り取るの無しだろおま…」

勝負は弾の勝利に終わった。これで、一夏の通算173戦51勝122敗である。

彼らがプレイしているゲームの名は、インフィニッツァスセアトスカイ「IS/V.S」という、日本の大手ゲーム会社が開発し記録的セールスとなった、全世界対応の格闘アクションゲームだ。

内容はもちろん、様々な国のISを使用した、一対一からバトルロワイヤルまで可能な対戦型ゲームであり、第二回IS世界選手権「モンド・グロツソ」のデータが反映されている。

「やっぱイタリアの【テンペスタ】、強いな。つつかあれだ、エグいわ」

「お前たまには他の機体使えよ。イングランドの『メールシュトローム』とか」

「あれは無いだろ。コンボ少ないし、持久戦よりだし」

このソフトは発売早々売れに売れ、発売月だけで百万本も売れたのだが、実は発売直後に各国からクレームが来たという。

曰く「我が国の代表はこんな弱くない！」。

国の威信がかかっている以上譲れないのは分かっているのだが、正直な話、一夏にしろ弾にしろ呆れるほか無かった。

これに困り果てたゲーム開発部は、なんと参戦国のIS全てを高性能にチューンしお国別ヴァージョンを販売。当然のごとく、これも売れに売れた。

それもしても、内部を弄るだけでこのようになるとは、ボロくさい稼ぎ方だなあ、と一夏は思ったものだ。

「まあ話を戻そう。学園の事だが」

話題を、学園の話に戻そうとした弾の声は、突如蹴り飛ばされて開いたドアとそこから飛び込んできた勝気な声に遮られた。

「お兄！さっきからお昼出来たって言ってるじゃん！さっさと食べに」

入ってきたのは五反田蘭。弾の一つ下の妹であり、東京都内の私立女子校「聖マリアンヌ女学院」の中等部に通う、弾とは違う優等

生である。

「あ、久しぶり。邪魔してる」

「いつ、一夏…さん!？」

自分の存在に気づき、驚きを禁じえない様子の蘭。

しかし、女子特有のラフな格好にも、だいぶ慣れてきたものだ。

何せ、大体学生寮内では皆このような感じの服装だ。おまけに夏が近づいてきている事もあり、そろいもそろって若干肌の露出が多い格好になってきている。

自称健全な男子

弾や鈴音にしてみれば一笑に過ぎない

である一夏にしてみれば、眼のやり場に困るものだ。

「い、いやっ、あの、き、来てたんですか……？確か全寮制の学園に通ってるって……？」

「ああ、うん。実家見てきたついでに寄ったもんでさ」

極めて普通に返答した一夏は、思わず首を傾げそうになった。

いつも思うのだが、蘭は自分と会話する際、どうも態度がたどたどしくなっている。本人にしてみれば不思議でたまらない。

……無論、彼女が一夏に好意を抱いている事は、本人は全く気づいていない。

「蘭、お前さあ…ノックとかしたら？いんしょ」

そんな弾の一言は、サーベルのごとき鋭さを持つ蘭の視線によっ

て殺された。

こうしてみると、弾は兄としての威厳のかけらも無い。分かりやすいにもほどがある。

「あ、あの、よかつたら一夏さんもお昼どうぞ。まだ、ですよね？」

「あー、うん。いただくよ。ありがとう」

「い、いえ……」

恥ずかしそうにそう言うと、蘭は静かにドアを閉め、この場を後にした。

「しかしなあ…蘭との付き合いもかれこれ三年になるけど、まだ俺に心開いてないのかね」

当人が不在なのを確認し、一夏はそう独語する。

説明するまでも無いだろうが、彼女が一夏に対して妙にたどたどしいのは、純粹に好きな人の前という事もあって恥ずかしいからだ。だが一夏は、「自分に心を開いていないのか」と解釈している。

要するに、史上最強の朴念仁一夏（弾と鈴が非公式に認定）は、そもそもの思考回路が一般的な男子と比べて全然違うのだ。

「は？」

「いや、だって現に今も何かよそよそしかっただろ？今もさっさと部屋出て行ったし」

何の気なしにそう言うと、何故か弾は盛大に溜息をついた。

「お前つて、相も変わらず絶好調だな」

「は？何がだよ」

「自分で考える馬の骨」

「馬の骨つてなんだよ。少なくともお前よりはましだと思っぞ？」

「うるせえ！それともなんだ、お前は女性が魅了されるフェロモンを常時撒き散らす人工人間なのか！？」

「訳わかんねえよ！何の話だフェロモンとか人工人間とか！？」

「ほざきやがれ！　ならば我が最強奥義を喰らえ！超必殺飛

鳥文化アタック！！」

「うおおっ！？危ねえっ！！」

「チイツ、外したか。今度こそその身で喰らいやがれこの天然記念物野郎！！」

「だから何のことだあっ！？そして自分の部屋ん中で暴れるなあー！！」

史上最強の朴念仁一夏。本日も、その鈍感ぶりは絶好調のようである。

弾及び蘭の実家は二階が生活スペースとなっており、一階では彼らの祖父と母親が定食屋を営んでいる。

現在時刻は、12時17分。丁度昼時という事もあり、客も何人

かいる。聞くとところによると、看板娘である蘭を目当てにしてやってくる客も多いそうだ。

弾の自室での一騒動を終え、とりあえずあいているテーブル席に座った二人。すでに蘭はテーブル席に座っている。テーブルにはとても甘い事で知られるカボチャ煮定食が三人前用意されていた。

とここで、一夏があることに気づいた。

「蘭さあ」

「は、はひっ？」

「着替えたの？ どうか出かける予定？」

「あっ、いえ、これは、その、ですねっ」

よく見ると 考え直せば、よく見なくても一目瞭然なのだが、蘭の服装が変わっていた。

先ほど一夏は初見した際は、方まで伸びた長い髪をクリップ一つで無造作に留め、タンクトップにショートパンツという、ラフという言葉をそのまま表したような格好だったのだが、どうやら先ほどスタイルチェンジをしたらしい。

クリップ一つだけでまとめ上げられていた髪は全部下されており、ロングストレートがきれいなキューティクルを放っている。服装も機能性重視の格好ではなく、半そでの白いワンピースを着用している、僅かにフリルが付いたニーソックス履いている。

活発的な格好から一転、名門女子学院に通うおしとやかな女の子という感じになっている。まさに十代女子のおしゃれというべきだろうか、見事なスタイルチェンジである。

そこまでするといふ事は、何か本人にとって特別な理由があるの

だろうか。一夏の頭に、一つの考えがよぎった。

「もしかして……デート？」

「違いますっ！」

本人にしてみれば的を射たであろう答えだったが、当人の蘭に思い切り机を叩かれ、即時否定されてしまった。

思わず、無神経な自分を後悔する。昔からこうして、一夏は不用意な発言で身を滅ぼす、と言われる事が多かった。自分の迂闊さを反省するしかない。

「じ、ごめん」

「あ、いえ……その、とにかく違いますからね」

「違っつっーかなんっーか、寧ろ兄としては違ってほしくもないんだがな。何せお前がそこまで気合の入れたオシヤレをするのは数ヶ月に一回しか」

瞬間、弾の呼吸が、とまった。

その原因は、蘭による口封じという名のアイアンクロー。的確に弾の口元に命中しているそれは、殺傷力を持っていてもおかしくないような鋭さだった。

そして、蘭は弾になにやらアイコンタクトをとる。蛇に睨まれた蛙、ということわざがぴったり合う光景は、いささかシュールなものであった。

と、そんな事を考えていると、食堂備え付けのテレビから、音声が聞こえてきた。

『 本日2017年5月24日は、八年前、初めてインフ
ユニット・ストラトスが、我々の前に姿をあらわした日です。当時
は『第二次世界大戦後最悪の戦争』といわれかけた北欧戦争が開戦
されたばかりで 』

「……ん？」

反射的に意識がそちらへ向き、一夏は視線を五反田兄弟からテレ
ビ画面へ移す。

テレビではお昼のバラエティー番組が流れており、その中の「今
日は何の日」というコーナーが流れていた。

「…ああ、そうだな。今日って北欧戦争終結と白騎士事件の日だっ
たよな」

兄妹のいざごさは終わったようで、後ろから弾の音が聞こえてき
た。

「『戦後最悪の事態』…。当時は色々世界が震撼しましたしね…」

深刻さを含んだ二人の声に、一夏は首肯する。

画面には、北欧の虚空に佇む漆黒のISが映っていた。

八年前の今日、2017年5月24日は、蘭の言うとおりの様々な
意味で世界中が震撼する出来事が起きた。

当時欧州では、冷戦による緊張の糸が張られており、今にも戦争

が置きそうな状態だった。

そんな中で勃発した『北欧戦争』とは、2017年5月21日に開戦したイギリス・スペイン側陣営対ドイツ・フランス側陣営による大規模になると思われた戦争のことである。

きっかけは、イギリス、デンマークらと同盟を結んでいたスペインが、フランスの国防基地に空襲を仕掛けたことから始まる。両陣営の戦力は拮抗状態であり、空襲などで多くの民間人に被害が出、最悪の事態になる、と思われた。

しかし三日後に突如、全軍のミサイルがハッキングされ日本へ向かっていったと同時に、一機の漆黒の人型をしたパワードスーツインフィニット・ストラトスが両陣営の交戦領域に介入した途端、自体は一転する。

両手に光線を迸らせるライフルを持った漆黒のインフィニット・ストラトスの圧倒的性能により、数十分で両陣営が完全に沈黙してしまう。

これと同時に、日本近海では一機の白い人型をしたパワードスーツインフィニット・ストラトスが、ハッキングの憂き目にあつたミサイルを、右手の実体剣と左手に召喚した粒子砲で全て蹴散らした。

更に白いインフィニット・ストラトスは、鹵獲を狙った米軍艦隊を一扫しその姿を消してしまったのだ。

こうして、第二次世界大戦以降最悪の事態、とまで言われた北欧戦争は、双方が停戦協定を結び軍事同盟を完全に破棄した事により終結。日本近海での一件は「白騎士事件」と呼ばれるようになり、

同時にインフィニット・ストラトスを開発した篠ノ之束は、全世界から注目を浴びる事となった。

後に、フランス国防基地への空襲を企てたスペイン軍の過激派は拘束され、極刑を宣告されたという。

そしてその一週間後、突如現れた二機のISが、全世界に公開される。

白いインフィニット・ストラトスの名前は、【白騎士】。

漆黒のインフィニット・ストラトスの名前は、【黒き聖騎士】。
ブラック・パラディン

この二機が、今にまで及ぶインフィニット・ストラトスの歴史を作り上げた先駆者とも言える。

しかし、プライバシーの保護の意味合いから、【白騎士】と【黒き聖騎士】の搭乗者は公表されず、【白騎士】は解体されて第一世代型ISの開発の基盤となり、【黒き聖騎士】は北欧戦争後まもなく完全に封印されたという。

「……この日から変わったんだよな、世界は」

この一件を境にISが様々な方面で認められるようになり、軍事に、宇宙進出に役立つ事となる。その中でも最も活用されたのは、軍事転用だった。

ISが発表された途端、様々な国が自国ISの開発に精を注いでいく。軍用をしても圧倒的な性能を誇るISを開発すれば、それは

核爆弾にも及ぶであろう強大な抑止力へとなる。

おかげで、当初の目的であった宇宙進出など蚊帳の外だ。

そしてそれを抑制するために、北欧戦争及び白騎士事件から一年も経たずに使用規定を定めるアラスカ条約が締結。同時に、ISに関わる人材を育成する専門高等学校のIS学園が創設される事が決まった。

更に、このような軍事転用を控え、本来の用途である多機能パワードスーツとしての役割を果たそう、という目的で、開発から二年後に第一回IS世界選手権「モンド・グロツソ」が定期的開催される事となった。

そして極めつけは、生じた男女の格差問題である。

北欧戦争及び白騎士事件から暫くして発覚した「ISは女性にしか扱えない」という制約によって、ISに携わる人材には当然女性が多く選ばれるようになった。そうなれば、当然男性の重要度は下がり、地位も低くなっていく。

このような光景は軍内では顕著だったが、時を経つにつれてその風潮は一般社会にも浸透しかけており、ついには「女性優位社会」を唱える女性政治家が登場していくこととなる。一部では、女尊男卑を唱える者もあり、それらに関する男女差別が深刻な社会問題となっっているのが現状だ。

今の世界がどうか、と聞かれたら自分はどう答えるのだろうか。実際のところ、現状判明している中では唯一ISを駆る男性である一夏は、答えに困ってしまいそうだった。

満足している、と言う事だつて出来る。ISを動かしてからIS学園に強制的に入れられ納得がいかないと思うところがあつたものの、尊敬する姉、頼れる兄貴分、離れ離れになつた幼馴染、目指すべきである好敵手にめぐり合えた。それはとても恵まれていて、満足しているともいえよう。

だが、躍起になつて「女性優位」どころか、「女尊男卑」を唱えている政治家には納得できない。ただ単に性別だけでそのような差別を受けるのは、極めて不愉快だ。

こう考えると、やはり自分含め世界は、ISによつて大きく変わったものだ。それが果たして幸か不幸か、未熟である一夏には分からない。

「…夏さん」

そんな考え事をしている一夏に、蘭が声をかける。真剣さが垣間見えるその口調に、一夏は彼女のほうへ向き直る事にした。

「私、IS学園を受験します!」

「なっ、お前何言つて　　っ!？」

ある種衝撃的な蘭の宣言に、弾は反射的に声をあげながら立ち上がった。そして、彼の後頭部に何者かが投擲したお玉がクリティカルヒットする。

投擲したのは、この定食屋の主である五反田蔵。長袖の調理服を肩までまくり上げ、剥き出しになっている両腕は見事なまでに筋肉隆々である。これで御年80だといふのだから、驚きである。

「え…でも、何で?蘭の通つてる所つて大学までエスカレーター式

だし、ネームバリューだつて結構あるんだろ？」

一夏の言つとおり、蘭が通っている聖マリアンヌ女学院は、小等部から高等部まであり、成績優秀者（といつても、生徒の半数以上がかなり成績優秀なのだが）は更にそこから学院直結の聖マリアンヌ女子大学へ進級できる。

名門として有名なこの学院を通つても良いはずなのに、何故IS学園を選んだのだろうか。最も、IS学園もそれなりに名門高校ではあるが。

「大丈夫です。私の成績なら余裕です」

「そこ、推薦入試ないぞ……」

蘭が堂々と言い切つた直後、敵のお玉投擲によつて撃沈していた弾が復活した。

「お兄と違つて、私は筆記で一発です」

「い、いや、でもさ……ほらあそこ、実技あるよな!？」

「ん？まあな。IS稼動試験つてのがあつて、簡易的に適正を見て、全く無い人は落とされるみたいだしな」

これは筆記試験とともに、全員がクリアしなければならないものである。適正は主にC、B、A、Sとあり、左から順に適正が高いという事になる。

合格の確定ラインはAであり、Bは筆記試験次第で、Cは筆記試験がよつほど良くない限り厳しい。

ちなみに、適性Sというのは世界を探し回つても両手で数えられるほどしかおらず、モンド・グロツソの総合優勝者である「ブリュンヒュルデ」や、部門別優勝者の「ヴァルキリー」がこれに値する。

そんな弾と一夏の会話を聞いた蘭は、不敵な笑みを浮べつつワンピースのポケットから一枚の紙切れを弾に見せる。

「何々？…IS簡易適正試験…適正Aだとおっ!？」

素っ頓狂な弾の声を聞いた一夏が紙切れを覗き込んでみると、それは国が行っている、無料でISの適性を調べる事が出来る簡易適正試験の結果用紙だった。

判定結果 適正：A .

彼女の頭脳も含めれば、もうIS学園の入試突破はほぼ確実だ。

「で、ですので」

小さく咳払いをした蘭は、改めて一夏に向かい直る。

「い、一夏さんには是非、先輩としてご指導を…」

「ああ、いいぜ。受かったらな」

そう安請け合いました途端に、蘭がいきなり自分に食いついてきた。その勢いにたじろいでしまい、一夏は反射的に飛び上がりそうになる。

「や、約束しましたよ!？絶対に絶対ですからね!」

「あ、ああ…。分かったよ」

弾の心境が理解できた昼過ぎだった。

1・騎士の日（後書き）

という訳で、タイトル名を司る【黒き聖騎士】が名前だけ登場しました。

果たして【黒き聖騎士】は誰なのか。察しがよい人（以下自重）

この章辺りから、色々和金寺の謎が明らかになっていきます。伏線は全て回収するようにしていますので、ご期待ください。

後、某漫画日和ネタがありますが、作者の趣味なのであしからず。

祝、お気に入り登録件数150突破！。

2 乙女の想い（前書き）

最近一夏への態度が少しずつ変わり始めている筈とセシリアに、
鈴
音はふと疑念を抱き……

2・乙女の想い

六月一日、珍しく金寺は暇な夕方を迎えていた。

通常の職務に加え、一夏の補講、訓練機の整備、生徒会副顧問、一年一組副担任としての立ち回りなどで、最近の金寺先生はなかなか多忙であった。

そんな中で、このように特にする事が無いような夕方は珍しい。通常の職務はさくさく終わったし、一夏も補講を始めて以降成績が右肩のぼりだし、訓練機の整備は二日に一回で済むし、一年一組はともかく生徒会は毎日毎日行くわけではない。

そして今、金寺は部屋着姿　青色のＴシャツに、黒のズボンという姿で、ベッドに仰向けになっていた。

このまま寝てしまうのも良いかもしれないが、まだ金寺は夕食をとってなかった。

時計を確認してみると、六時過ぎ。夕食とるには丁度良い時間かもしれない。

そんな風に考えていると、ドアをノックする音が耳に入ってきた。

「龍輔、いる？」

聞こえてきたのは、鈴音の声。

短く返事を返すと、ドアが開かれる。

「これから夕　　ってうわぁ…ここ研究室かなんか？」

入ってきて開口早々、鈴音の口から漏れたのは感嘆の声だった。そういえば、一夏や千冬、楯無にも初見の際に同じような反応をされたような気がする。

「揃いも揃って同じ感想なんだな…で、何か用か？」

「そりゃそうよ、だから来たの！」

「…ああ悪い、入るんならドア閉めてくんね？」

耳を傾けると、他の生徒のざわつき声が入ってきた。騒ぎの中心になるのはあまり好きではない。

それに気づいた鈴音は部屋に入り、ドアを閉めた。

「あ、うん。えつとね…もう、夕食食べちゃった？」

若干頬を赤らめる鈴音に対し、金寺はむくりと起き上がり、鈴音のほうを見ながら言う。

「いいや、これから行くこうかと思ってたところだ」

「ホント？じゃあ一緒に行かない？あたしもこれから行くこうと思っただの」

少し身を乗り出し、笑顔で鈴音は聞いてくる。

基本一人で食事をとる金寺だが、最近鈴音が誘ってくる事が多くなっていた。

そこまで馴れ合いを好むわけではないものの、彼女が自分に概ね好意的に接しようとしてくれている事は分かったため、無碍にするわけにもいかなかった。

「OK、そんじゃあ行くか？」

「うん！早く行こう！」

金寺が立ち上がると、鈴音はその腕を掴んで少々強引に部屋の外へ連れ出す。

「…おいおい、そんな急いだって夕食は逃げるわけじゃないぞ？」

「いいじゃん、あたしは早く　　あ、でも龍輔と長い時間一緒にいるにはゆっくりしたほうが…」

「おいどうした？」

「なんでもないよー」

何かぶつぶつと小声でしゃべり始めた鈴音は、歩く速度を遅くすると金寺の横に立って食堂へ歩んでいく。

「そついや龍輔って、生徒会の副顧問になったんだって？」

「色々成り行きでな。で、お前はどの学園なれたか？」

「うん、龍輔含め一夏もいたし、みんな気兼ねなく接してくれてるから、だいぶね」

そのような会話をしているうちにも、夕食時という事もあり女子生徒たちが寮部屋から出てくる。

その中には、一夏も当然いた。

彼に気づいた鈴音が、気軽に声をかける。

「あ、一夏。篝やセシリアはいないの？」

「いや、ただだけど…でも、食堂入り口で待ってるだろうなあ。それより鈴、お前ってそんなに金寺先生と仲良かったっけ？」

一夏の疑問に、話していなかったかと呟きつつ、鈴音は事情を説

明することにした。

「去年軍にいたとき、龍輔は技術顧問としていたのよ。それで…色々あつて…ね？」

「思わせぶりの発言するなアホ。お前も勘違いするなよ、一夏」

切り捨てるようにピシヤリと言い放った金寺の氷河のごとき冷たい一言に、鈴音は頬を膨らませ、一夏は苦笑を浮べた。

すると、金寺の右ポケットに入っていた携帯端末が、バイヴレーダで着信を伝えた。

それに気づいた金寺は携帯端末の画面を確認し、表情をしぼめる。

「龍輔、どうしたの？」

「召集令状、by千冬。何でこの時間帯に…」

送られてきたメールには、職員室へくるようにと千冬からのメッセージが入っていた。

「え〜…」

「そう言うことだ、悪いな」

少々申し訳なさそうに言いながら携帯端末をしまつと、金寺は職員室へスタスタ歩いていった。

「うう〜…久しぶりに龍輔と一緒に夕食を食べれると思ったのに…」

「ははは…じゃあ鈴、一緒に行くか？」

「一夏ねえ…まあ、いいわよ」

横で苦笑いをしている一夏の顔を確認し、不承不承といった感じで鈴音は了承した。

その一夏が、何か文句を言いたげな表情をしていたが、気にしないことにする。

食堂入り口に着くと、案の定、箒とセシリアが一夏を見つけた。

「やっと来たか一夏　　って、何故鈴という？」

開口一番、箒がそんな疑問をぶつけてきた。横にいるセシリアも疑いをはらんだ視線でこちらを見てくる。

「偶然会ったから一緒に来たただけだけど…」

一夏がそう説明している横で、鈴音は一人考え事をしていた。これはあくまで彼女自身の考察なのだが、どうも目の前にいる二人は、自分が会った頃よりも一夏を男性として意識していそうな気がする。

もしそうなら確かめたいし、何より自分が彼の幼馴染という事もあり、この事情に少し介入してやろうかな、という若干性質の悪い悪戯心もあった。

「　　ねえ、箒、セシリア」

「なんですの？」

「…なんだ？」

「たまにはさ、三人で食事とらない？女子だけで」

鈴音が選んだテーブルは、食堂の隅にある、目立たないところだった。

円形のテーブルに、三人はそれぞれの料理をもってきて座る。

ちなみに、鈴音がオーダーしたのは、本場の味を忠実に再現した四川麻婆豆腐。箸がオーダーしたのは、天ぷらそば。セシリアがオーダーしたのは、マカロニ・アンド・チーズという、茹でたマカロニに塩味の効いたチーズソースを絡めた、米英を代表するグラタン料理の一種である。

こうしてみると、食事風景もなかなか多国籍だ。

本場さながらの四川麻婆豆腐を一口食べてみると、かなり辛かった。一般的に日本で出回っている麻婆豆腐は、本場のものと違って辛みを抑えるためか花椒を抜く事が多いという。

鈴音はそんな中で、このようになり辛口なものは日本では始めて食べたのだ。さすがは多国籍のIS学園。食事に対する配慮も、なかなかきいている。

鈴音がうんうんと頷きつつそのような事を考えていると、セシリアが質問をしてきた。

「鈴さん…どうして今日は、わたくしたちと食事をとろうだなんて言いだしましたの？」

チーズソースが程よく絡んだマカロニを口に含みつつ、セシリアは一番気になっているであろう事を聞いてくる。

それに対し、れんげで一口分の四川麻婆豆腐をすくいつつ、鈴音は短く答えた。

「んー、まあ、端的に言うと、確認したい事があったね」

「確認？ならばこのような機会を作らなくても…」

箒がそういったのを聞いた鈴音は、左手で彼女を制し口の中のもを飲み込むと、ストレートに質問をぶつける事にした。

「二人ともさ、一夏のこと一人の男性として好きなんですよ？」

そう言った途端、二人して一斉に、食事を吹き出してしまった。なんとも分かりやすい反応だな、と呆れていると、必死に呼吸を整えながら、箒が反論を唱えようとした。

「な、何を言うか…！だ、第一あいつは…」

まるで否定するような物言いだ、箒は耳まで顔を真っ赤にしていた。

それはセシリアも同様なのだが、それ以前に彼女は完全に思考回路がショートしているようで、まともに言葉を出す事さえできないようだった。

まさかここまで大げさな反応をするとは思わなかった鈴音は、苦笑しつつ話を戻す事にした。

「いや別に、何も馬鹿にしようなんて思ってないから大丈夫よ…。で、セシリア。沈黙すなわち肯定と受け取っていい？」

「あ、あう…」

すっかり食がとまってしまい、顔を真っ赤にしてうつむいてしまったセシリア。

それがとてつもなく可愛らしく見えて、一瞬鈴音は、彼女を抱きたいという衝動に駆られた。

この状況に、この話題はまずいと思ったのか、篤は無理やり話題の転換を試みた。

「そ、そう言う鈴はどうなのだ、一夏のこと？」

「そうですね！そ、その…なんというか、このままでは不公平ですわ！」

思考回路の一時的破損から回復したセシリアも加勢してきたため、思わず鈴音は二人から距離をとってしまった。話題変更に必死になりすぎて、他の生徒からの注目が集まってきた事も、彼女等は気にしていないらしい。

あまり騒ぎすぎるとアレなので、鈴音は両者をなだめると淡々と話し始めた。

「…一夏ね、確かにいい奴だとは思っけど、あたしの中だと少し、ねえ…」

鈴音の言葉や口調から、彼女が一夏を狙ってないと判断した篤とセシリアは、ほっとしたように一息ついていった。

それを見てクスリと笑いつつ、両手で顔を支えながら鈴音は話を続けた。

「あたしはさ、その…龍輔にガチで惚れてるから、さ」

嘘偽りない、鈴音の本心。

最後のほうは本当に言うのが恥ずかしくて、先の二人のように顔が真っ赤になってしまった。

龍輔、という名前に一瞬心当たりが無かったのか、箒とセシリアは首を傾げたが、すぐにそれが自分たちの副担任である金寺龍輔だと理解した。

「…金寺先生、か」

「うん、去年中国軍にいたときに会ってね。ずっとあたしの心の支えだったんだけど、いつの間にかいなくなつてて…もう二度と会えないと思つてたけど、この学園で会えて、すごく嬉しかった。そのときよ、龍輔に惚れてるって、自覚したのは」

思えば、こうして金寺に対する思いを他人に言ったのは、初めてのよなな気がした。こう言うことが言い合える辺り、既に三人は互いを友人としてみているのかもしれない。

「そうですの…」

「まあ、そういう事。…で、二人とも、まさかこのまま逃れられるとか思つてない？」

鈴音が問い詰めると、途端に二人は飛び上がりそうになった。

残念ながら、鈴音にこのまま追及の手を緩めるといふ選択肢は無い。それに、自分は龍輔に想いを寄せている事をしっかりと言った。このままでは、不公平だ。

「アンタたちが一夏のこと好きなのは確定として、アイツのどこが
いい訳？」

「わ、私は、だな、その…」

落ち着いていないせいか、言葉が途切れ途切れだった筈は、大きく息を吸い、真剣な面持ちで話し始めた。それ故、セシリアと鈴音も真剣な表情になる。

「私と一夏は、小学校一年から四年まで、同じ剣道場のライバルだった。四年生時の終わりに諸事情で転校してからというもの、一切会えなかったが…もしかしたら、その間に私の一夏へ対する思いが大きくなっていったのかもな…」

続いて、セシリア。

「わたくしは…今鈴さんに言われて自覚しましたわ…あのいざというときには堂々とした姿や、いつも気兼ねない人柄などに惹かれたのかも知れませんわね…」

理由は各々だったが、とりあえず織斑一夏という一人の少年に想いを寄せている事は事実のようだ。

全く、どうしてアイツは罪な男なんだろう。

少しでも気を抜いて接すれば、たいていの女子はすぐに惹かれるだろう、と千冬も言っていた気がする。

これも、彼の人間性が故なのか。
だが、となると

「二人さ、恋のライバル、ってことになるわよね…」

何気なく口から漏らしたこの一言を、鈴音はすぐさま後悔する事になった。

そう言った途端に、箒とセシリアが視線をぶつけ合い、そこからスパークのようなものを迸らせ始めたのだ。

「ま、まあまあ！とにかく二人とも同じ男の事好きなんだから、ね？」

無神経だった自分を恨みつつ、必死になって仲裁を試みたところ、とりあえず両者は矛を収めたようだった。

その後、変な沈黙が流れ、食べる音だけが三人の耳に入る。

「だが……」

沈黙を破ったのは、箒。天ぶらを咀嚼し終えた彼女の口調は、どこか重い。

「私達は、越えなければならぬ壁が大きすぎるな……」

箒に注目していたセシリアと鈴音が、あ、と間拔けな声を出す。今考えてみれば、自分たちの恋愛はかなり前途多難かもしれない。一夏に関しては、千冬というとてもなく巨大な壁が立ち塞がっているように見える。

セシリアはともかく、昔から知り合いである箒にとっては、その壁の巨大さと堅固さが手にとるように分かってしまう。

金寺の場合、問題は別なところにあった。

「なんつーか、龍輔って、こういう色沙汰に全然興味ないからね……というか、脳内にそういう概念が存在しないって感じ」

彼は、自分が興味を持たない事にはさほど興味をもつような男ではない。それ故、他人のプライベートトークに入ってくることも無

かったし、気にしている様子も無い。

「それは一夏さんに通じているところがありますわね……」
「やっぱり？セシリアわかってるねー」

極めてぶっきらぼうな鈴音の口調が、すべてを物語っていた。

一夏は言わせてみれば、典型的な鈍感男である。簡単にいえば、色事に疎いということだ。少なくとも、彼女たちの記憶では、彼女が女性の好意に反応している様子をまるで見たことがない。

結論を言うと、三人が恋している男性は、総じて恋愛沙汰に疎いのである。

「……はあ……」

三人そろって溜息。

好きになってしまった以上どうしようもないので、この悩みの種が消えることはまずないだろう。

2 乙女の想い（後書き）

はい、ガールズトークの回でした。

なんというか、一夏ほどじゃないんですけど、自分も恋愛沙汰になり疎いので、書くのに苦労しました。

とりあえず、現状のフラグは主要人物だけで考えると、

一夏：箒、セシリア

金寺：鈴音、本音

こんな具合に。

案外、金寺にも一級フラグ建築士としての才能があったりして…？

3・編入生（前書き）

千冬から職員室に呼び出された金寺が聞いた、衝撃的な要件とは…？

3・編入生

数分前、職員室に来た金寺は、人気の無い室内に千冬の姿を見つけた。

職員室の明かりは付いているものの、外が真っ暗という事もあって明るいのか暗いのか、微妙な雰囲気になっている。

「なんの用だ？」

「ちよっとした急用だ。明日から、私たちのクラスに二人編入する生徒が、今夜来るそうだな」

「……………は？」

一瞬、千冬の言っている事の意味がまるで分からなかった。
編入生？この時期に？二人？

話に付いていけない様子の金寺に怪訝な眼差しをむけつつ、千冬は説明を始めた。

「いや、すまない。何せ伝えられたのが一昨日だったからな…。とにかく、そういうことだ。もうじきこの学園に来る」

やっと全てを理解した金寺は、驚くとともに疑問を露にした。

「どうして今の時期なんだ？先日あんな事があつたばかりなのに…」

あんな事、というのは、もちろんクラス対抗戦中の全身装甲襲撃事件だ。あのような事件があったことを踏まえると、このIS学園は安全が保障されているわけではない。

なのに何故今更、そこへ生徒を預けるような真似をするのだろうか。最も、先日襲撃された米国のウエスト・バージニアファクトリーのような場所よりは幾分かマシかもしれないが。

「ちなみに、一人は国家代表候補生。もう一人は、とある企業のテストパイロットであり、そちらも国家代表候補生だ」

「……………」

どうも、編入してくる生徒は、どちらも国にとって貴重な人材であるようだ。

(まさか…………あの事件が想定内だった…?)

そのような可能性も浮かんだが、**実際**考えにくい。

これが、学園上層部が仕組んだ茶番劇シナリオとしても、下手すれば現在世界唯一の男性IS操縦者と、中国代表候補生を失う危険があったのだ。

そうしているとドアが開き、一学年主任の真耶が職員室に入ってきた。

「織斑先生、編入生を連れてきました」

「そうか。こちらへくるように促してくれ」

「分かりました」

ドアの前で一礼した真耶はきびすを返し、職員室を後にした。恐らくは、外で待っているであろう二人の編入生を迎えに行ったのだろう。

「私とて、この一件を不思議に思っていないわけではない」

ドアが閉まった直後、千冬がそう呟いた。

「だが、今はこれでいいと思っっている」

「今はこれでいい…何故そう言いきれるんだ、お前は」

「あとで話すさ」

今はこれでいいという事は、その二人の編入生が来ることが結果的にプラスになるのだろうか？

しかし、そう考えるにしてもこの学園の上層部が考えている事は読めない。そもそも、一匹狼の研究者及び技術者だった自分に対し、かなりの好待遇を提示してまでこの学園の所属にさせようとした事から、彼は学園上層部に対してある程度の疑念を持っていた。

どこの企業、団体にも所属しない自分をIS学園に所属させるとなれば、各企業、組織からの非難を含んだ追及は逃れられないはずだ。

最もそれに関して幸いだったのは、このIS学園が法律上どこの国にも存在しない場所にある、という事だ。それは各国のデータ採取、試験稼働など大いに適していることであり、各国も「自国の新技術のデータ採取などで彼に協力してもらえばいい」と言う結論に至ったらしい。

結果、IS学園は国際社会からの激しい追及を逃れられる事が出来たのだ。

意味深な言葉を残して千冬が言葉を区切った直後、再び職員室のドアが開いた。先に真耶が入り、その後、二人の編入生徒が入ってくる。

「……着たようだな」
「！」

千冬が独語し、金寺は絶句する。

一人は、後ろで結んだ金髪 of 髪と碧眼が特徴的な西欧人。もう一人は、長い銀髪に左目に眼帯をつけた西欧人。

そしてあろう事が、その二人を金寺は知っている。

一瞬、金髪 of 編入生と目が合った。彼の顔をその眼に収めたその途端に、金髪 of 編入生は、突如吃驚したように表情を引きつらせた。だがすぐに取り繕い、平静を装う。それでも、動揺を完全に隠し切る事はできなかったらしい。

銀髪眼帯 of 編入生とも目が合ったが、こちらは金寺のことを意に介していないようだった。

二人は真耶の先導で、金寺と千冬の前に着く。

「それでは二人とも、担任と副担任の先生に自己紹介をお願いできますか？」

「わ、分かりました」

「……」

いまだに驚きを禁じえない様子 of 金髪 of 編入生に対し、銀髪 of 編入生は、こちらにも意に介していないといった感じだった。

沈黙すなわち肯定と受け取ったのか、真耶は金髪 of 編入生に自己紹介を促す。

「……シャルル・デュノアです。こちらに、僕と同じ境遇の方がいる

と聞いて、フランス本国より転入することになりました。宜しくお願ひします」

「同じ境遇…お前は男性、というわけか」

「は、はい、…そうです」

目の前にいるシャルル・デュノアは男性だというらしい。つまり、一夏に続く世界で二人目の男性IS操縦者、という事になるのだろう。

そんな訳ない。

すぐその発想に思い当たった。

第一に、シャルルが本当に男性というのなら、骨格もとい体格が明らかにおかしい。

一学年のクラスに編入するのなら、間違いなくシャルルは14歳か15歳。成長期にもかかわらず、ここまで華奢な体躯は、まずあり得ないだろう。

本当にシャルルが男性ならば、先天性もしくは後天性の成長障害か何かしか、納得する理由が見当たらない。

第二に、世界で二人目の男性IS操縦者が出たとするならば、何故大々的にならないのだろう。

最も、これに関しては情報統制などがいくらかでも利くため、それなりに隠す事が出来るが。

ともかく、彼には何か秘密がある。

そう結論付けた金寺をよそに、銀髪眼帯の編入生が自己紹介を始めた。

「ラウラ・ボーデヴィツヒ。ドイツ代表候補生で、ドイツ軍特務強

襲部隊「黒ウサギ隊」隊長。階級は少左」

背中まである長い銀髪に、左眼に付けられた黒い眼帯。

肌は驚くほどの白さを保っており、その容姿は一見儂さを感じさせるが、どこか殺伐とした雰囲気をもっている。

それでも、軍内の一部隊の隊長だというのだ。

視線をずらすと、真耶は自分たちにも軽い自己紹介を促していた。軽く嘆息し、金寺が先に自己紹介をする。

「…そうか。俺は金寺龍輔、一組副担任だ」

「私は織斑千冬、一組担任を務めている。…ひとまず、明日からデュノアとボーデヴィツヒは私と金寺のクラスの一員となってもらおう
…明日は早い、今日はゆつくり休め」

「…分かりました」

「はい、教官」

返事を返した二人は、再び真耶の先導を受けて職員室を後にしていく。その途中、何故か名残惜しそうにシャルルの視線が、金寺を捉えていた。

ドアが閉まり、完全に二人きりになったのを確認した金寺は、早速千冬を問い詰めた。

「一体どういう事だ？デュノア社の子息に、ドイツ軍特務強襲部隊長？いくらなんでも冗談がすぎるぞ」

金寺にしては珍しく、荒々しさを含んだ言葉に驚きつつも、軽く息を吐きながら千冬は面倒くさそうに言った。

「分かっているさ。…だがこれは、全身装甲襲撃事件の前から決ま

っていた事だ。私たちが騒いだところでどうしようもない…」

第二世代でありながら第三世代ISにも引けを取らぬ能力を持ち、量産型ISの配備数では第三位を記録している名機、「ラファール・リヴァイヴ」を作り出した一流メーカー。それがデュノア社だ。

そしてドイツ軍の「黒ウサギ隊」は、ドイツ国内に十機存在するISのうちの三機を所有している、最強といっても過言ではない部隊だ。

ただでさえ代表候補生という立場にありながら、それ以上に重要な肩書きを、あの二人は持っている。

「それに、あいつら…」

どこか、苦々しさを含んだ口調で、金寺は言葉を続ける。

それも無理は無い。ラウラは両者とも知っているし、シャルルに至っては、金寺が一時期デュノア社とかかわりを持っていた。

「ああ、そうだな。…ラウラはお前も私も知っている。後は…そうだな。デュノアだが…」

「それ以前に、シャルル・デュノアは男性ではない」

「何故そう思う？」

今度こそはつきりと言い切った金寺に、千冬は当然ともいえる疑問をぶつける。対して金寺は、確信を持ったかのように話をすすめた。

「アイツの体格がおかしい。この年頃の男なら、もつと成長しているはずだ。先天性もしくは後天性の成長障害か何かがあれば話は別だが…」

最もな指摘をされてあきらめたのか、やれやれといった感じで千冬は種明かしをする。

「…お前にはお見通しのようだったな。そう、シャルル・デュノアは男ではない、れっきとした女だ。これには、本社からのとある事情があるらしくてな…」

「事情、か…」

「そつだ、これを見る」

そつ言う千冬が自身の机の引き出しから取り出したのは、端がホッチキスで止められている資料のようなものだった。

千冬にそれを渡された金寺が1ページ目を見ると、そこにはシャルル・デュノアの証明写真が張ってあった。一瞥してみたところ、どうやら学園のデータベースに登録されるものらしい。

他にも、そのページには非公式ながらデュノア社のテストパイロットになった事などが記述されている。

次のページをめくってみると、まず「Charlotte Du nois」という、名前と思われる文字が目に入った。

「…………やはりそういうことが」

予想通り、としか言いようが無い。このページに記載されているのは、明らかに女性のデータ。つまりシャルル・デュノアは、男装した女性、という事になる。

またページをめくる。そこに書かれていたのは、彼 彼女の編入理由。

「所詮、この程度か…」

半分ほど見た金寺は、怒りも通り越して呆れる事しか出来なかつ

た。この辺りは、所詮こういう状況下での企業をする事だな、と心の中で嘆息するほか無い。

（だが…これがアイツにとって本当に結果的にプラスになるのか？）

金寺の疑念は、消えそうに無かった。

3・編入生（後書き）

という訳で、シャルル（シャルロット）とラウラの編入前夜の出来事でした。

もう一人のメインヒロイン（金寺サイド）候補が登場しましたが、これからどうなるのか。

二人の身の設定は、そこまで変わらないかと思えます。

4・一騒動(前書き)

一夏たちの前に現れた二人の編入生。
一人は男で、もう一人は…？

4・一騒動

次の日。

一夏が教室に赴くと、何人かの生徒たちが、手に何かのカタログを持って談笑していた。

「やっぱりハツキ社製のがいいなあ」

「え〜？ハツキのってデザインだけじゃない？」

「そのデザインが良いの！」

「私は性能的にミューレイのがいいかなあ。特にスムーズモデル」

「ああ、あれね。確かに性能いいかもしれないけど、値段高いじゃん」

ここ数ヶ月、ISの訓練と勉強を頑張って両立してきた一夏は、彼女たちがISスーツの相談をしている事をすぐに理解した。

一夏が自分の席に座つたのを確認し、クラスメートにミューレイのモデルを薦めた谷本癒子が話し掛けてきた。

「そういえばさ、織斑君のISスーツって特注品なんだよね？」

「ん？ああ、そうだな。確か……イングリット社のストレートアームモデル、つてのが元になっているらしい。構造自体は一般的なものと変わらない、つてさ」

ちなみに、by金寺である。

通常のISスーツ　　女性向けのものは、基本的に旧型スクール水着のような首下から股関節部まで覆われたワンピース型と、太腿から足首までを覆ったサポーター部をセットにしたものが一般的だ。一夏のものは学園の配慮の賜物であり、通常の構造自体は変

わらず、Tシャツ型と半ズボン型をワンセットにしたものである。

なぜこうして彼女たちがISスーツに関する相談をしているのかというところ、今日から自前のISスーツをオーダーできるようになったのだ。

もともと学園側から一般生徒用のISスーツは支給されているものの、ISが十人十色であるように、ISスーツも十人十色で、着用する人物に合わない、ということもあるらしい。

それゆえ、希望する生徒は本日から、支給されたカタログの中から選んだISスーツをオーダーすることが出来る。その費用は年度初めに払った学費から出される。オーダーしなかった場合は年度末にその分返却される。らしい。

そのような会話をしていると、予鈴が鳴り、金寺が教室に入ってきた。

ここ最近、いろいろと騒動があったせいも職員たちは忙しくなっており、それゆえこうして朝のSHRを副担任の金寺が行うことが多くなってきた。

一夏の指示で全員席から起立し、礼。そして全員が座つたのを確認した金寺が、連絡事項を話し始める。

「一応、今日からISの実習を始めるそうだ。ISといっても訓練機だが、どの道使うものは変わらない。気を引き締めておけ」

今日から、全員がISを使う授業を行うらしい。一部の生徒が「実習」という言葉に反応し、高揚感を露にしていたことから、大半の生徒が実習を楽しみにしていた様子が分かる。

しかし、気を引き締めておけ、という金寺の注意は、決して大袈裟なものではない。自身の初陣にて、【白式】のツインコアがオーバードを起して墜落しかけた時は、本当に恐怖心を抱いたもの

だ。

「後、このクラスに編入する生徒が来た。…それも二人だ」

教室が、一気にざわめきに包まれた。

当然一夏も、驚くほかない。特別な事情があった自分はともかく、この学園に入るためにはかなり難易度の高い入学試験を突破しなくてはならない。簡単に言ってしまうえば、ISという看板を取り除いても、この学園はかなりハイレベルな進学校として機能するのである。

そこへの、途中編入。鈴音は特別な事情があったからさっておき、それはとても難しい。となれば、その二人の編入生にも、何か特別な事情があるのだろうか。

そう考えている間に、金寺は教室前方のドアに向かって声をかけた。どうやら、編入生は教室の外で待機しているらしい。

「失礼します」

「……………」

ドアが開き、編入生が姿を現す。

今度は一転、金寺以外の全員が絶句した。

男性用の制服を着たその内の一人は、後ろで束ねられた黄金色の髪の毛、華奢な体、そして柔らかそうな物腰が印象的な人物。

もう一人は、背中まである長い銀髪に、左眼に付けられた黒い眼帯が特徴的。

肌は驚くほどの白さを保っており、その容姿は一見儂さを感じさ

せるが、どこか殺伐とした雰囲気をもっている。

全員が驚きを禁じえない中、金寺の指示を受け、金髪の編入生が口を開いた。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では色々不慣れな事も多いかと思いますが、皆さんよろしくお願いします」

そんな“彼”の一言に、クラス一同愕然とする。

「お……男？」

「はい！こちらに、僕と同じ境遇の方がいると聞いて、本国より転入を」

シャルルが言い終えないうちに、黄色い歓声が教室に響く。

「男子！二人目の男子！」

「しかもうちのクラス！」

「美形！守ってあげたくなる系の！」

「神様ありがとうございます！」

女子一同大喜び。そりゃ、またしても自分たちのクラスに男

美男子が来たというのだから、当然だろう。

一夏が抱いた第一印象は、「貴公子」。人懐っこそうな笑顔。礼儀の正しい立ち居振る舞いと中世的な整った顔立ちに加え、長い後ろ髪は首の後ろで丁寧に束ねられている。体つきは華奢で、無駄な肉もなくスマート。しゅっと伸びた脚が実に格好いい。同性である

一夏も、彼に対して魅力を感じるほどだ。

「騒ぐのはそこら辺にしる。話が進まないだろうが」

呆れた金寺が一言注意すると、教室が静かになった。別に怒気があるわけではないのだが、彼の声には不思議な威圧感があるのだ。

一転して静寂につつまれた教室内で、金寺は続ける。

「じゃあもう一人、自己紹介しろ」

続いて金寺が、もう一人の編入生に自己紹介を促す。しかしその編入生は、金寺の言葉に耳を貸す様子など無く、つまらなそうに教室を一瞥していた。

銀髪眼帯の少女は、「軍人」という言葉が実に合いそうだった。体格は女子の中でも小柄なのだが、彼女の放っている雰囲気、尋常でない威圧感を生み出している。

「……………俺の言葉が聞こえなかったのか？」

「……………フン」

冷たい怒りが含まれている金寺の一言に、しぶしぶ編入生は前へ一歩出た。

そして、彼女は、

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

それだけ、言った。

嫌な沈黙が数秒間流れ、

「終わりか？」

「以上だ」

金寺の一言に対し、冷たく言い切ったラウラは、目線を滑らせその鋭い目が、一夏を捉らえた。

「貴様が……」

そう言うなり、ラウラは一夏の席の前へ歩み、そして、あらん限りの力で、一夏に平手打ちを放った。

！？

痛みより、混乱が一夏の思考を占める。

一体何故、所見にもかかわらず平手打ちを食らわせられたのか、見当もつかない。

クラスメートも本人も、何が起きたのか理解できていなかった。

「……って、何しやがるテメエ！！」

我に帰った一夏は彼女に向かって吼えるも、平手打ちした当人は相手にしようとしなない。

「……私は認めない。貴様があの人の“特別”であるなど……」

そして、ラウラは、敵対心を向けながら一夏に向かって言い放つ。

「認めるものか!」

混沌とした朝のS H Rを終えた金寺が職員室に戻ると、丁度職員会議を終えたであろう千冬が、一限目の準備をしていた。

担当するのは、一組と二組。今日から合同で、I Sの実習を行うらしい。

「どうした、何かあったか？」

すさまじく疲れた様子の金寺に、心配そうに千冬は聞いてくる。軽く溜息をついた金寺は、端的にS H Rの出来事を説明した。

「まずはシャルルの登場にクラス中大騒ぎで、続いてラウラが一夏を引つ叩いた」

「なんだと？」

「『貴様があの人の“特別”であるなど認めない』だそうだ。…あの人、って、お前だろ？」

金寺から聞いた言葉で大方全てを理解したのだろうか、厄介ごとに遭遇した、といわんばかりに千冬は額を押さえつつ溜息をついた。

「まさかそのような事を……。ドイツ時代に満足な教育を出来なかつた報いか……」

「千冬のせいじゃない、一番悪いのはアイツだ。だがなあ……」

そう言う二人の口調は、とても歯切れが悪かった。

何せ二人とも、ある事情でラウラ・ボーデヴィツヒという人間を良く知っている。軍隊の中でも、孤高の存在であった彼女は、『ドイツの冷水』という二つ名をつけられていたという。人間性に問題があったのは、いうまでも無いだろう。

そして、一夏に対する突然の平手打ち。その対象が彼女にとっての怨敵とはいえ、編入早々、しかもクラスメート大勢の前で、だ。あまりにも非常識すぎる。

「大体、こんなに転校生が集まる事、お前はどう思っているんだ？」

千冬のデスクの近くに座りながら、金寺は昨日聞き損ねた疑問を投げかけてみた。

一教師として彼女の意見を聞いてみたかったのである。

「確かに、これほどの転校生が集まるのは不自然だが……学園上層部にも何らかの意図があるのだろう。少なくとも、ボーデヴィツヒは最初から一組への編入が決まっていたそうだがな」

「お前を追って……という解釈でいいのか？」

金寺の推測に、千冬は首を縦に振る。

ラウラの千冬に対する尊敬の念は、ある種異常でもあった。彼の記憶が正しければ、何を話そうにも教官教官教官……。

尊敬や崇拜というより、実際は執着と言ったほうが正しいのかもしれない。

「とにかく……私もそうするが、出来るだけ一夏とボーデヴィツヒを警戒しておいてくれ。あの馬鹿どもだ。殺し合いを始めても不自然ではない」

千冬の注意喚起は、決して大げさではない。事の重さを改めてかみ締めた金寺は、静かに頷いた。

4・一騒動（後書き）

金髪アンド銀髪の本格的登場の回。
というか原作と何が違うんだ…？

ちなみに、アンケート（活動報告参照）はここいらで終了します。
投票してくれた皆さんありがとうございました。

アンケート内容の中から多いほうを選ぶつもりですが、場合によっ
ては違う可能性もあるので、楽しみにしておいてください。

クラブW杯、メッシすげー。。

5・初実習（前書き）

—夏たちは、初めての合同実習に望む。

5・初実習

「何で、みんな騒いでるの？」

波乱のSHRを終えた後、校舎を出て実習を行う第二アリーナのロッカールームに向かう途中、小走りする一夏に同じく小走りするシャルルが聞いた。

先ほどまで校内の廊下を通る途中、

「あ、噂の転校生発見！」

「しかも織斑君も一緒！」

「何…だと…!？」

「聞いた!?こつちよ!」

「者ども出会え出会え〜！」

「見てみて、二人仲よさそう!」

「織斑君の黒髪もいいけど、金髪もいいわね！」

「しかも瞳はエメラルド!」

「きゃああつ!見て見て!ふたり!手!手繋いでる!」

「是非二人とも私のインタビューを!」

などと、妨害寸前にまで散々声を掛けられる羽目となり、一夏とシャルルはロッカールームへ向かうのに苦労していた。

いつの間にか武家屋敷のような雰囲気になったり、それに便乗した誰かがほら貝を取り出そうとしたり、どこからか新聞部部長の薫子やヴォイスレコーダーを片手に颯爽と登場したり、こちらもち

ちらで混沌としていた。

「今のところ、ISを操縦できる男性は俺たちだけだからな。この学園じゃ俺たち男子は希少生物なんだよ」

「あつ　　ああうん、そ、そうだね」

言葉にするまでに不自然な間があったが、一夏はあまり気にしないことにした。

彼自身、転校初日で戸惑っているところも多いのだろうと思いつつ、無事に第二アリーナのロッカールームに辿り着いた。

「って、時間結構やばいな。とっとと着替えようぜ」

当学園の織斑千冬鬼先生は、遅刻を見逃すほど甘い性格ではない。というかそうなればお得意の出席簿アタックが頭に炸裂する。

授業開始まで、後五分弱。時計を見た一夏はシャルルに声を掛けながら制服の上を脱ぐ。IS学園の制服はどうも脱ぎ着に時間がかかるのだ。

勢いに任せて、制服とともに内側に着ているTシャツもベンチに放ると、

「う、うわあっ!?!」

突如、一夏の後ろでシャルルが素っ頓狂な声をあげた。何事かと思いいてみると、シャルルは両手で顔を覆い、一夏から視線を逸らしていた。

何か変なものでも付いているのかと自分の上半身を確認したが、

その様子は一切無い。

「どうしたんだシャルル、着替えないのか？」

「うっ、うん。着替えるよ？ 着替える、から、あっち向いてて、ね？」

恥ずかしそうに顔を赤らめるシャルルを見て思わず首を傾げた一夏だが、これも特に気にしなかった。

この年齢で同年代の男性の裸を見たことが無いとは考えにくかったが、ちよつとこつという事に対して神経質なんだろうなと思いつつ、着替えに集中する。

それに、先記したとおりここで無駄に時間を使ってしまったのは、鬼教官こと千冬による出席簿アタックの餌食になるのがオチだ。うだうだしてられない。

「……さっきは悪かった。ちよつと無神経だったな俺」

「いつ、いや、気にしないで！ 悪いのは僕だから……！」

こいつはなんだかよく分からないなと思いつつ、着替えを終えた一夏は同じく着替えを終えたシャルルとともにグラウンドへ向かった。

「遅い！」

グラウンドへ出て開口一番、千冬が怒声を飛ばしてきた。どうやら、グラウンドに出てきたのは自分たちが最後のようだ。

しかし、何故だろうか。千冬が腕を組んで佇んでいる様子は、どうも鬼が金棒を持っているかのように錯覚してしまう。

「随分ゆっくりでしたわね」

カナボウ、って英語で書くとか何かのメーカーみたいだな、という、他人からしたら果てしなくどうでも良いことを考えつつもとりあえず列のあいている場所に入ると、偶然隣にいたセシリアが話し掛けてきた。

声音から察するに、どうやら朝の事件を心配してくれているらしい。

「まあ、行く手を妨害されたり、着替えに手間取ったり、色々大変でな」

「つーかさ、またアンタ何かやらかした訳？」

後ろから声が聞こえてきたのを確認して振り返ると、鈴音の姿を確認した。ちなみに、彼女のISスーツはピンク色の特注品である。

「一夏さん、銀髪の転校生に平手打ちをされましたの」

「ふーん。なんかそいつ、はた迷惑な奴ね」

セシリアがSHRの一部始終を説明すると、短くそれだけ言って、鈴音は意識を逸らしてしまった。実際そうなのだろうが、まるで他人事のような感じである。

ふと、前方に向き直った一夏は、自分から離れたところにいるラ

ウラの姿が目に入った。その表情は、まるで授業そのものに興味がないようである。

こうして、全員が何とか授業開始時間に間に合い、横列体系に並ぶ。

「本日から、格闘及び射撃を含んだ実習を開始する」

その先で、千冬がジャージ姿で指導を行おうとしていた。

「まずは戦闘を実演してもらおう。ちょうど活力溢れんばかりの十代女子もいることだしな……鳳、オルコット」

「はい！」

「はいっ！」

「専用機持ちなら、すぐに始められるだろう。前に出ろ」

「……めんどいなあ……なあんであたしが」

「……何と言うか、こう言うのは見世物のようで気が進みませんわね……」

有無を言わず指示を出す千冬に対して、返事をしたときの活力はどこへやら。鈴音とセシリアは2人揃ってやる気がなさそうだった。

「お前ら、少しはやる気を出せ」

代表候補生が二人揃って怒られそうな台詞を言っているにもかかわらず、千冬は怒るどころか呆れた口調だった。

そんな彼女たちを尻目に、一夏は【白式】に関する事とある事を考えていた。

「それで、対戦相手はどちらに？わたくしは鈴さんとの勝負でも構

「いませんが」

金寺が言っていたのだが、何でも、ツインインフィニティシステム搭載機である【白式】は、使いようによってはそれによって生成される余剰エネルギーを、防御に利用できるといふのだ。

「それもいいわね。セシリアとは一度も手合わせした事ないし」

「そう慌てるな。対戦相手だが」

確か、両翼のウイングスラスタを前方に展開し、そこへ意識を集中させる事で

「うひゃあああああああ！どいてっ、どいてくださああああああああい！！」

そんな、千冬の声と、一夏の思考を掻き消すように前触れ無く響いた悲鳴の正体は、一学年主任の山田真耶だった。

灰色のISをまとってはいるが、空中制御が利かなくなったせいか涙目で超高速落下してきたのだ。

予想落下地点は丁度、横列体系のど真ん中。

生徒全員がそこから非難する中、先ほどまで考え事をしていた一夏は、その考え事を元に、条件反射で【白式】を展開した。そして、両翼のウイングスラスターを前方に展開し、そこへ意識を集中させる。

次の瞬間、一夏は吹き飛ばされた。

どうやら、まともに真耶と激突してしまっただらしく、【白式】を展開していたおかげで完全に意識が飛ぶような事は無かったものの、数メートルほど吹っ飛ばされてしまったようだ。

だが、一方の真耶はというと、

「あ…れ？私、織斑君のところに落下したんじゃない…」

元々一夏がいた場所から一メートルほど離れたところで、何が起きたか分からないというような表情をしていた。それは彼女だけではなく、千冬、セシリア、箒、鈴音、シャルル、ラウラなど、その場にいた全員である。

当然かもしれない。何せ、【白式】の両翼のウイングスラスターから展開された光が、まるでトランポリンのように、落下してきた真耶の衝撃を緩和したのだ。

「…ってえ…一体何が…」

「それはこっちの台詞なんだけど、一夏、何をしたの？」

ようやく消えかけていた意識がはっきりし、何とか起き上がったみると、シャルル含めた生徒たちが驚いたような視線を向けていた。

「へ？何が　　って、山田先生大丈夫ですか？」

「は、はい！だ、大丈夫ですよ？」

とりあえず、落下してきた本人に無事かどうか確かめたところ、慌てふためいた返事が返ってきた。いつも思うが、本当にこの人は良かれ悪かれ子供っぽいと思う。

「災難だったな、山田先生……。それで織斑、今お前は何をした？」

千冬は、ある種とんでもない目にあつた真耶に対し軽くねぎらいの言葉を掛けると、真面目な表情で一夏を問いただした。

知らないのだろうか、と思いつつも、丁寧に説明する事にした。

「ああ、多分俺が【白式】でエネルギーフィールドを形成したから、それで山田先生が落ちてきた衝撃が和らいだんだと思います」

「エネルギーフィールドだと？」

「はい、まあ、【白式】はそんな事も出来るらしくて……」

エネルギーフィールドに関しては、金寺から聞いたものである。強度のあるエネルギーフィールドを形成するには、ツインコアの同調率と搭乗者とのシンクロ率が高くなければならないのだが、今回の場合、直前までそのことを考えていた事や、とつさの行動だった事が、成功につながったようだ。

「さて…ハプニングがあつたが、山田先生はこう見えて元日本代表候補だ。さつさと始めるぞ、小娘共」

「え……あ、あの、二対一で？」

「いや、さすがにそれは……」

あくまで淡々と話す千冬だったが、セシリアと鈴音は啞然としていた。

この鬼教官、二対一で戦えというのである。いくら生徒と教師の差があるとはいえ、数の差を覆すのは難しいはずだ。

しかし、

「安心しろ。今のお前達ならすぐ負ける」

千冬の言葉を受けて、逆に二人の闘志が燃え上がったようで。

千冬の合図とともに、三機は青空へと飛翔した。

「さて、せっかくだデユノア。山田先生の使用しているISの説明をしてくれ」

空中で繰り広げられている戦闘に目を通しつつ、千冬の指示を受けたシャルルは丁寧に説明を始めた。

「山田先生が使用しているのは、フランス型第二世代型の【ラファール・リヴァイヴ】、通称「R-V^{アールライ}」です。第二世代型としては比較的最期に開発されたモデルですが、性能自体は高く、安定性と汎用性に優れた機体です。現在

そんなシャルルの説明も、途中からは一夏の耳に入らなくなっていた。

理由は簡単、上空の戦闘に、心を奪われていたからだ。

セシリアと鈴音は、国家代表候補生だ。もちろん、自分や他の生徒と比べてもその技量は圧倒的なもののだが、その二人に対峙する真耶の実力は、それを上回るかに上回っていた。

まずは、回避運動。

鈴音駆る【甲龍】の衝撃砲《龍咆》は、砲身、砲弾ともに目に見えないので、その回避には相当な反射神経が要る。

だが真耶は、丁寧にスラスタを噴かしながら、その本弾を的確によけている。少なくとも、直撃している様子は一切無い。

恐らくは、自身と鈴音の距離を的確に計算し、その上で回避行動を行っているのだろう。

次に、射撃。

真耶が自身の主武装として扱っているのは、全ての【ラファール・リヴァイヴ】共通の基本武装である五一口径アサルトライフル《レットバレット》。アメリカのクラウス社が開発したそれは、実用性と信頼性が高く、多くの国で使われている。

それによる射撃は、直撃こそほとんど無いが、二人の回避運動を予測してその進路を妨げるように銃弾をばら撒いている。次第に鈴音もセシリアも、行動範囲が狭められて思うような動きが出来なくなってきた。

そして、勝負が決する。

真耶の射撃がセシリアを誘導し、鈴音と衝突したところで真耶の持つ《レットバレット》からグレネード弾が放たれる。

二人そろってまともにグレネード弾を被弾した鈴音とセシリアは、千冬の真横に墜落してしまった。

煙が晴れた所にいたのは、互いにISの装甲が複雑に絡み合った格好の鈴音とセシリアだった。

「まさか、この私が……」
「あんたねえ……！何面白いように回避先読まれてんのよ！」
「鈴さんこそ……！無駄にバカスカと撃つからいけないのですわ！」
「こつちの台詞よ！何ですぐにビット出すの！？しかもエネルギー切れ早いし！」

不毛な言い争いだが、何だかんだで二人そろって正論を言い放っているので、一夏は思わず笑いそうになってしまった。

結果を短く言えば、真耶の完全試合。二人が付け入る隙すらないように見えた。

「まあ、当然といえば当然だ。自慢話ではないが、一応私は公式戦で黒星がついた事はない。…しかし、その私に、後もう一息で黒星をつけそうになったのが、この山田先生だ」
「山田先生って、そんなにすごい人なんですか？」
「えへへ、昔の事ですから大した事じゃないですよ…」

思わずそんな事を言ってしまった一夏に対し、真耶は昔、という言葉強調しながら照れていた。

実は、一夏が参考程度に入学試験で模擬戦を行ったとき、その相手が真耶だった。しかし、あの時は突然突っ込んできてさくつとよけたらそのまま壁に突っ込んで終了だったので、その時は思わず呆気にと取られてしまった。

だが、戦闘中の真耶は、いつもの雰囲気とは全然違った。普段は子犬のような可愛らしい雰囲気なのだが、戦闘中の表情は明らかに一人の戦士としてのものだった。

それに加えて、千冬の語ったエピソード。驚くほか無い。

「これで諸君にも、教員の實力が理解できただろう。以後は敬意を持って接するように」

腕を組んだまま、千冬は二人の前まで歩み出ると、ぱんぱんと手を叩いてみんなの意識を戻させる。

「次に、グループになって実習を行う。専用機持ちは織斑、オルコット、デュノア、ボーデヴィツヒ、凰だな。各グループリーダーは専用機持ちがやる事、いいな？では分かれる！」

再び手を叩きながら指示を出したまでは良かったのだが、そう言うや否や、大人数の生徒が、一夏とシャルルによってたかってきた。詰め寄ってきたのは、セシリア、鈴音、ラウラを除いた一組と二組の女子全員。その数や、尋常ではない。

困り果てた一夏が千冬に目線で助けを求めると、この状況を見かねた千冬が、面倒くさそうに額を指で押さえながら低い声で新しい指示を告げる。

「この馬鹿者共が……。出席番号順に一人ずつ各グループに入れ！順番はさっき言った通りだ。次にもたつくようなら今日はISを背負ってグラウンド百周させるからな！」

この鶴の一声が効いたのか、先ほどまで一夏に群がっていた女子たちは散らばり、八つのグループは二分もかからず出来上がった。

「えーと、いいですかーみなさん。これから訓練機を一班一体取りに来て下さい。数は【打鉄】が三機、【ラファール・リヴァイヴ】が二機です。好きな方を班で決めて下さいね。あ、早い者勝ちですよー！」

先の模擬戦で自信がついたのか、しつかりした口調で真耶が指示を出す。それを受けて、早速それぞれの半に分かれた女子が、我先にと取りに行った。

「……………」

それにしても、と一夏は思う。

態度はそうだが、堂々としているのはそれ以外にもあった。具体的に言えば、十代女子には無い豊満な胸のふくらみを、惜しみなくさらしている。彼女には眼鏡を掛けなおすという癖があるのだが、ISをまもっているおかげで、そのたびに乳房が僅かに揺れるのだ。

「……………」

「………」

と、そんな真耶をじっと見ていた一夏の右足の甲を、何者かが力強く踵で踏みつけた。

一体誰が、と思い右側を確認すると、

「何をジロジロ見ている。早く始めるぞ」

「ほ、箒…さん？」

自分の足甲にダメージを与えたのは、箒だった。どうやら、かなりご立腹の様子である。

ちなみに、あの引越し直後の一件以降、箒はほとんど口を利かなくなっていた。一夏としては、何故彼女が自分を避けているのか、

第一彼女の言う「付き合う」というのは一体なんなのか、何も分らないのでどうもしようが無い。

「織斑君、ISの操縦教えてっ」

「ああーん、このIS重ーい。私、箸よりも重いもの持った事ない」

「実戦訓練の基本はツーマンセルよね。じゃあ織斑君、組みましよう」

「ねえねえ、専用機ってやっぱいい感じ？いいなー、羨ましいなー」

とりあえず筭との関係修復を試みようとしたが、ISを持ってきた女子たちにあっという間に囲まれてしまった。この辺りは、十代女子の行動力や恐るべし、といったところだろうか。

そうして、一夏の班のISは、【打鉄】である。

『各班長は訓練機の装着を手伝ってあげてください。全員にやってもらうので、最適化処理と所有者登録は切っております。装着後、歩行などの簡易的な操縦をさせてから交代、という流れで行うようにしてください。時間は午前中いっぱい使っても構いません』

ISの開放回線から来る真耶の指示にも、一夏は頷ける。勉強の成果もあり、まず意味がわからないという事はないし、何よりうだうだしてられない。

「それじゃあ、出席番号順にISの装着と起動、その後歩行までやるわ。一番目は」

「はいはいはいっ！」

順番を確認すると、やけに元気のよい返事が返ってきた。

「一組出席番号一番、相川清香です！ハンドボール部！趣味はスポーツ観戦とジョギングだよ！」

「お、おう。ていうか何故、自己紹介を…？」

あまりにも元気が良すぎる自己紹介に、思わず頬を引き攣らせてしまった。清香としては、一夏を狙っているのは筈とセシリアだけではない、と言いたいのだろうが、当の本人は全くわかっていない。

「……オーケー、わかった。とりあえずさっさとやろう。向こうを見ってみる」

一呼吸して落ち着きながら、一夏はすぐ横の班を指差した。そこはシャルルの班なのだが、どういうわけか全員が全員シャルルに向かって右手を差し出していたところ、突如現れた千冬の姿を確認して飛び上がった。

「やる気があって何よりだ。どれ、私が見てやろう。最初は誰だ？」

「あ、いえ、その…」

「わ、私たちはデュノア君でいいかな…って…」

「せ、先生の手を煩わせるわけには…」

「何、将来有望な奴にはそれ相応の指導が必要だからな、出席番号順で始めるぞ」

続いて、ひいっと息を飲む声。反射的に一夏は合掌した。次に生きて会える事を願って。

その様子を見て清香も納得したらしく、大人しくなっていた。

「…というわけだ。…相川さん　　っていうか、みんなは今まで

「ISは何回ぐらい乗った？」

「うん、まあ授業で二、三回程度だけど」

「じゃあたぶん大丈夫だ、サクサクやっていこう。時間はみ出すと放課後居残りになりかねないし」

「うん、それは嫌だ！」

清香が焦って同意したのを確認し、早速彼女に【打鉄】を装着させる。彼女が装着したのを確認し、起動。この辺りは、慎重に行っていくことにした。清香が操縦に慣れていないのは、歩行動作を見れば一目瞭然である。それは、ほかの生徒も同様だろう。

実際、初心者のが持ちがよくわかる一夏は、そこへ最大限に気遣うことにする。

そうしている間に、清香はぎこちなくも歩行運動を終え、一夏の指示に従ってISから降りる。

そして二人目、三人目、と装着、起動、歩行の順で行っていき、特別困ることもなく午前中の操縦訓練は終わった。

この訓練中嬉しかったのは、篤と一緒に昼食をとることを提案してくれたことである。何せ、互いの関係修復の機会を向こうから提供してくれたのだ。なんとという僥倖だろうか。

「では、午前中の実習はこれまでだ。午後は各人第二アリーナ内の第四整備場に集合すること。金寺の教授のもとで整備の実習を行ってもらおう。遅れるなよ？」

そう指示を受けたあと、一夏は訓練で使用した【打鉄】を、専用カートで格納庫まで運んだ。早くしなければ、昼休みが短くなって

しまう。

ちなみに、片付け作業は一人で行った。女子としては、力仕事は男がするのが当たり前、とでも言わんばかりだったし、大変なのでシャルルに手助けを要請したのだが、女子たち曰く「デュノア君にそんなことさせられない！」。

あまりにも歴然とした扱いの差に、少しショックを受けてしまった。

5・初実習（後書き）

という訳で、午前中の実習終了。

……こいつ（一夏）、ハーレムイベント全部素通りしやがった…
どうしてこうなった…？

次回は昼食。

やっとならぶプロメっぽくなるかもしれません。
あれ？小説のジャンルなんだっけ？

6・食事（前書き）

偶然集った六人の、とある食事風景。

6・食事

この学園の屋上は、普通の高校と違って常時開放されている。様々な種類の花が咲き誇る鮮やかな花壇に、欧州独特の雰囲気がある石畳、円状のテーブルは椅子で囲まれており、いつもは生徒たちの憩いの場である。

しかし今は、誰一人いない。

それもそのはず、今は通常ならば四限目の時間帯なのだ。

といっても、もうすぐそれも終わるだろうし、今ごろアリーナで実戦練習をしている生徒は後始末を始めているであろう時間だ。

その屋上に、金寺はいる。

この日は四限目の授業がなかったため、暇つぶしの感覚でここに来た。

金寺がここに来た理由は、屋上から広がる景色を見たかったからである。

IS学園は、神奈川県藤沢市の沿岸部にある人工島に建てられた。比較的首都圏に近いこの地域が所在地に選ばれたのは、交通の便も関わるのだろう。

事実、ここは東京都の東京国際空港　羽田空港からそれほど離れていないという事もある。他国からの生徒も集まるため、こ

の辺りは割りと重要なのだ。

ゆっくりと、ここに来る前に買った缶コーヒーを口につける。

この時期になると、金寺は決まって思い出す光景がある。

できることならば思い出したくないのだが、記憶にコントロールは効かないらしく、毎年毎年胸がえぐられるような感覚になる。

あの時の行動は正しかったのか。

あのととき行動していなければ、世界はこうならなかったのではないか。

そのようなマイナス思考の渦に入りかけた金寺を現実に呼び戻したのは、校舎に通じるドアが開く音だった。

もう昼休みの時間なのか、と思いつながらこの場所にやってきた人物を確認しようとすると、見覚えの　　というか、この学園で金寺が最も接触している生徒、織斑一夏だった。

「ああ、お前か。実習終わったのか」

「はい、まあ…訓練機を運ぶのが大変で…」

そう言っていると、続くように生徒が屋上にやってきた。箒、セシリア、鈴音、シャルルの四人である。

「りゅ、龍輔!？」

金寺の姿を確認した途端、鈴音が飛び上がったかのように驚いた。その様子に、金寺だけでなく一夏たちも目を丸める。

先ほどまで考えていたことも、頭から離れてしまった。

「……俺は幽霊が何かになったつもりはないぞ？」

「え? いや、なんでもないから、ね?」

思わず取り乱した事を反省したのか、鈴音は極力気にしないで、と一夏たちに言う。とりあえず納得したのか、一夏たちは金寺から近いところにあるテーブルに座った。

「と、ところで、さ。龍輔は…もう昼食食べたの?」

席に座った鈴音が、やや恥ずかしそうに金寺に聞く。一方の金寺は、三限目の授業を終えてからずっとここにいるので、まだ食べていない。

「…まだ食べていないが」

「ホント!? 実はあたしね…」

そう言うなり、鈴音は先ほどまで手にもっていた、やや大きめの

タッパーを開けた。中には何が入っているのか、と金寺含めた五人が空けられたタッパーの中を見てみると、

「…こいつは、酢豚か？」

「そう、あたしの得意料理！」

そこには、日本のみならず欧米でも人気が高い、豚肉を利用した中華料理（広東料理）の一種、酢豚が敷き詰められていた。

「今朝作ったんだけどね、ちょっと量が多すぎちゃって…だから、龍輔も、食べてくれる？」

おねだりをするかのような口調の鈴音。

確かに、この量は一人で食べきるのには無理があるかもしれない。それに、中国にいた時『中華料理は得意なんだから！』と自信满满で言っていたのを思い出した。

本人がそう言うぐらいならば、食べてみる価値はあるのかもしれない。

「了解した」

「わーい、ありがとう！」

金寺が肯定の意を示すと、鈴音は近くに一夏たちがいるにもかかわらず大喜びした。

実際、酢豚を多く作りすぎたことに関しては、鈴音にとって本当に誤算だったのだが、ここで金寺に会えたのが僥倖だった。

「それじゃあ、俺は食堂行って割り箸取ってくる」

彼女の箸を借りるわけにも行かないので、食堂から割り箸をもらってこようとドアに向かおうとした金寺だったが、鈴音がなにやら焦った様子で彼を止めようとした。

「あ、じゃああたしの箸使えば　　あれ、これって間接キスになるんじゃない？」

「？何だ？」
「~~~~~！なんでもない！あたし取りにいく！」

何故か恍惚とした表情を浮べ始めた鈴音に対して金寺が不思議がると、それで覚醒したのか、恥ずかしさを隠すように、鈴音は校舎へ通じるドアへ向かって走り出していった。

「…鳳さん、どうしたんだろ？」
「わからない」

シャルルが首を傾げ、金寺は相手にしていないといった感じでそれに返す。

誰一人、彼女に妄想癖　　対象は主に金寺　　が芽生えてい
るとは、思っていない様子である。

その一方で、

「……………どういう事だ」
「ん？」

一夏の横の席で、包みにくるんだ手作り弁当を持った筈が、不満そうに聞いていた。

「天気がいいから屋上で食べようって話だったろ？」
「そうでなくでな……！」

ちらつと横を見る筈の視線の先には、シャルルとセシリアの二人がいる。

「昼飯なんだからみんなで楽しもうぜ。第一シャルルは今日転校してきたばかりなんだから、右も左も分からないだろうし」
「そ、それはそうだが……」

恨み節とも解釈できるような声でうなる筈を見て、金寺は二人だけで食べたかったのかと想像する。これ以上は彼らの問題なので、考えないようにしたが。

「えっと……本当に僕がいてよかったのかな？」

もう一方では、シャルルが遠慮した様子で言う。当然だろ、といわんばかりに一夏は軽く首を振った。

「だから言っただろ？飯はみんなで食うほうがいいし、同じ男同士なんだから色々面倒を見てやらないとな。それに、俺は一応先生にシャルルの面倒を見てくれ、って言われてんだからさ」

一夏がそう説明すると、屋上の柵に寄りかかっている金寺が小さく頷いた。

「うん、ありがとう」

男にしては柔らかな笑顔で、シャルルが言う。

しかしなんとというか、シャルルが男装している女子だという事を

知っている金寺だからこそ思うが、こうしてみると男子なのか女子なのか分からないほど、中性的である。

そんな事を思っていると、ドアが荒々しい音を立てて開き、鈴音が割り箸片手に戻ってきた。

「…やけに早くないか？」

「まあね…はい、割り箸。後ここ座って」

「ああ、感謝する」

割り箸を渡され、隣の席に座る事を勧められた金寺は、軽く例を言いつつ座る。

こうして、六人の食事が始まった。

「…では、早速頂くが」

「うん、どうぞ！」

早速金寺は割り箸を器用に割り、タッパーの中の酢豚へ、割り箸を伸ばす。器用に一口分つかみ、口の中へ運び、数回咀嚼する。

「…どう、かな？」

「…うん、美味しいな」

端的にそう感想を言うと、鈴音は「そうでしょ？良かった！」と言いながら、再び笑顔の花を顔面に咲かせた。

基本、酢豚の味付けに使うのは酢・砂糖・醤油なのだが、そのどれもがしっかりとしており、尚且つしつこくも無い。料理上手の名に恥じない一品であった。

「へえ、鈴また料理上手になったのか。食ってみていいか？」
「少しだけならね、ほら」

それに反応した一夏に対し、鈴音は彼のほうにも酢豚の入った夕ツパーを差し出す。小さく頭を下げながら、一夏も金寺同様に割り箸で酢豚を一口分つまみ、口へ運ぶ。

ちなみに、一夏とシャルルは、購買で買った昼食を食べている。鈴音も鈴音で、酢豚以外にも同じように購買で買ったらしい暖かい白米を用意していた。

どうやらこの学園の購買は、全領域対応型らしい。

「おおっ 美味しいな、これ」

一夏からも賛辞を受け、鈴音は自分も酢豚を口にしつつ、自慢げに言った。

「そうですね。伊達に中華料理屋の娘やってるわけじゃないのよ」

「鈴さんの実家は、中華料理屋さんなのですか？」

「数年前までね。そのおかげで大分あたしも上手になったわ」

実家が中華料理屋という事もあり、料理上手であることに納得したセシリアは、軽く咳払いをすると一夏の方を向く。

「コホンコホン　　、一夏さん、わたくしも今朝はたまたま偶然何の因果か早く目が覚めました、こういうものを用意してみました。よろしければお一つどうぞ」

そう言いながらセシリアが手元のバスケットを空けると、そこに

はサンドイッチが綺麗に並べてあった。

「お、サンドイッチか」

「正確に言えば、BLTサンドイッチですわ」

「BLTって何？」

「BLTとは、パンに挿む食材であるベーコン(bacon)、レタス(lettuce)、トマト(tomato)の事ですの」

「へえ〜そうなんだ」

シャルルのふとした疑問に、セシリアは的確に答えて見せた。実際サンドイッチの発祥の地は、彼女の故郷であるイギリスである。

「それじゃあ、頂きます」

「はいっ！どうぞ」

一夏は、その中の一つを手にとり、セシリアが食を促す。見た目自体は色とりどりで、なかなか綺麗である。

そのままごく自然な流れで、彼は手にもったBLTサンドを口の中に運ぶ。

次の瞬間、一夏の顔が、青くなった。

事態を察した金寺は、彼の傍に置いておいたペットボトルのお茶を、キャップを外して一夏に手渡す。一夏は咄嗟にそれを受け取って、口内にお茶を流し込んだ。

傍目にもわかるほどの喉の動きが数回繰り返され、何度か咳き込みつつも、一夏はペットボトルから口を離す。

「一夏さん、大丈夫ですか？」

「あっ、ああ…、喉に詰まっちゃったみたいでさ。あは、あは、あ

「ははは……」

無理やり笑いを振りまいて、一夏はこの場を誤魔化そうとする。だが明らかに、セシリアのBLTサンドが原因のようだ。

この場にいる誰も知る由も無いのだが、セシリア・オルコット、料理の腕が壊滅的なのだ。

本人曰く「本と同じようになればいいのでは？」。この時点で色々間違えているのだが。

実際、同じようになっているのは見た目だけ。その外見そのものはよいのだが、中身が死亡レベルという、悪い意味で素敵仕様なのである。

「い、一夏っ」

「ん？なんだ、箒」

表情をやや青くしている一夏に対し、続いて箒が、一夏に手元の弁当箱を見せた。

「今日は私も自信作でな。少しなら分けてやる」

若干頬を赤らめつつ、箒は自身の弁当箱を開ける。そこに入っていたのは、鮭の塩焼き、鶏肉の唐揚げ、こんにやくとごぼうの唐辛子炒め、ほうれん草の胡麻和え。

「…なるほど、栄養バランスがしっかりしてるな」

中身を一見した金寺が、そんな感想をこぼす。確かに、五大栄養素がちゃんと入っている辺り、しっかりと考えた上で作ったのだろ

う。箒もかなりの料理上手であることが窺える。

「どれも手が込んでそうだなあ…じゃあ、早速頂きます、っと」

とりあえずちゃんとしたものを口に含みたいのか、一夏は箸を持ち直し、弁当箱の中の唐揚げを一つ食べる。

「おお、これは美味しいな！かなり手間がかかってるんじゃないか？」

一夏が絶賛したのを確認し、僅かに表情を綻ばせたのを金寺はしっかりと見た。

ちなみに、箒は一夏と同じ寮部屋だった際に、彼に味なしチャールハンを提供してしまった、という黒歴史もののエピソードがある。それを踏まえたくうえで、今回はかなり上達していた。

そのようにして、各自が昼食を楽しんでいく中、鈴音がとある疑問を提唱した。

「そういえば実習前にセシリアが言ってたけどさ、一夏、銀髪眼帯の編入生に引つ叩かれたんだって？」

鈴音が一夏からの昼食の誘いに乗ったのも、これが聞きたかったからだ。流石に、自身の友人が訳も無く引つ叩かれたとなれば、無視できない。

金寺以外の視線が集まる中、当人の一夏は、箸を止めつつ視線を下げると、テーブルに両肘をつきながら重たい溜息をついた。

「それがさ…俺もよくわかんないんだよ」

「わからない？」

「いや、何せアイツとは初対面だし…銀髪の女の子に会った記憶もないし…」

一夏はどうやら、心当たりが無いらしい。四人が総じて首を傾げる中、金寺は割り箸を自分の手前に置きながら、口を開いた。

「ラウラ・ボーデヴィツヒ。ドイツ代表候補生で、ドイツ軍特務強襲部隊「黒ウサギ隊」隊長。階級は少左…」

「え？」

「ドイツ…？」

一通りラウラ・ボーデヴィツヒの簡易プロフィールを話してみたところ、何を言っているのか分からないといった感じの鈴音たちとは違い、一夏は何か心当たりを見つけたらしい。

「事の発端は、二年前に及ぶ。第二回モンド・グロツソ格闘部門決勝戦…。結果は覚えているか？」

「確か、千冬さんの棄権による不戦敗でしたよね？」

若干天を仰ぎながら、箒が記憶を探るように言った。

織斑千冬の不戦敗。第一回大会同様に優勝候補として、他者を寄せ付けられない強さを発揮し決勝戦に進んだにもかかわらず、決勝戦を棄権し不戦敗となった事には、全世界が驚いたという。

だが、彼女が決勝戦を棄権した理由については、「一身上の都合」というだけの説明にとどまり、当人もそれに関しては一切口を開くうとしなかった。

おまけに、その後千冬は引退を表明し、IS操縦者としての第一

線から退いたのだ。これほどまでに世界が驚かされた一連の出来事の真相は、ほとんど知られていない。

「その理由だが…あの日、千冬はとある事件に巻き込まれ、試合に出る事が出来なかった。その際、ドイツ軍が独自の情報網を元に、千冬の手助けをした…。そこからは、お前が良く知ってるはずだ、一夏」

金寺が話のバトンを渡すと、一夏は小さく首肯して、箒たちを見つつ話を引き継いだ。

「それでさ、その借りを返すため…だったな。とにかく、そんな理由で千冬姉はその後一年間、ドイツ軍でISの教官を務めていて…、それが、何か？」

箒たちに後事情を話した一夏は、答えを求めるように金寺へ視線を向ける。金寺は一息つき、席を立ち上がりながら話を再開した。

「ラウラ・ボーデヴィツヒは、そのときの千冬の教え子だ。当時部隊内でスランプに陥っていたラウラ・ボーデヴィツヒを、千冬はその手腕で部隊内の最強の座に君臨させた…。それからだ。ラウラ・ボーデヴィツヒは、千冬を「教官」と呼ぶようになり、心底尊敬するようになった」

金寺が連盟推薦の民間人協力者として、ドイツ軍に臨時で在籍していた頃が、丁度千冬がISの教官としてドイツに赴いたときだった。

それゆえ、あの二人の関係性を、金寺はこの学園の誰よりもよく把握している。

「でも、それが一夏さんをはたくのと、どのような関係が？」
「流石に俺も詳しくは分からない。…だが、『貴様があの人の“特別”であるなど認めない』…この台詞から察するに、少なくともお前に憎悪や敵意といった感情が向いている…。俺もそうするが、気をつける。アイツは体格こそ小柄だが、正真正銘のプロフェッショナルの軍人だ」

生憎、金寺はラウラ・ボーデヴィツヒとまともに会話したことがなかった。ただ、千冬と一緒にいるのを時々目にしていただけで、後はせいぜい個人データ　金寺にしてみれば、とてつもなく汚らしいものだが　に目を通しただけだ。

重い話は終わりだ、といわんばかりに金寺はポケットの中の懐中時計を確認する。

「それじゃ、俺は授業の準備に行く。…午後はお前ら一組二組だったな。第四整備場、遅れるなよ」

短く言ってドアを開け、金寺は校舎の中に入っていく。

薄暗い階段を通る中、ふと金寺は心の中で呟いた。

(…ああして大人数で食事とったの、いつぶりだったか?)

今考えてみれば、金寺は大人数で食事をとった記憶がなかった。最近は一夏や鈴音と食事をとる機会が増えていたものの、その場合でもだいたい二人ぐらいだ。先ほどのように五、六人一緒に食事をとった記憶は、ない。

記憶がないというのは、本当にそういうことがなかったのか、はたまた金寺の記憶から抜け落ちていただけなのか、それは定かではない。

こういうのも悪くはない、と思う。しかし、自分のような人間がそのようなものを甘受していいのだろうか、とも思う。

いずれにせよ、相反する二つの感情が反発しあい、金寺は自分でも感情のつかない状態に陥りかけた。

首を小さく振って、歯を強く喰いしぼる。

(…今考えても仕方がない)

表情をかすかに歪めながら、金寺は授業の準備のために第四整備場へ向かう。

それらの感情が、無意識のうちに彼ら彼女らを自分から遠ざけようとしていく証拠であることを全く自覚せずに。

6・食事（後書き）

金寺の存在感が薄くなりかけている今日この頃。

彼がISを駆っていない以上、ヒロインと接触しない限りどうもその傾向が…

実際のところ、この物語が本格的に始まっていくのはこの辺りからなんで、どうか気長に見ていってください。

というか、本当に書いていきたいのは二（ry

書いてて思った。伏線の出し過ぎは良くないね、うん。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3531y/>

IS インフィニット・ストラトス 黒き聖騎士の物語(ブラック・パラディンス)

2011年12月21日23時49分発行